

---

# あの青い空のように

大希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの青い空のように

### 【Nコード】

N4115M

### 【作者名】

大希

### 【あらすじ】

『とおい日のうた』と『あの青い空のように』は

二人が過ごした時間と二人の想いを綴っています。

いつも見上げていた空

何も言ってはくれなかったけれど

何も教えてくれはしなかったけれど

それでも見ていた

あの青い空を

空の下できみと過ごした時間を・・・

ただ、それだけのこと

## 1・僕の空（前書き）

1.

小学四年の夏に描いたポスターで、賞を取った。

行ったこともない所、写真で見た所の風景画。

僕の家にはお母さんがいなかった。

僕はお祖母ちゃんに育ててもらった。

担任の先生が、絵画コンクールの会場に連れて行ってくれた。

小学生の部、中学生の部、高校生の部と賞を取った絵が飾ってあった。

子供、保護者、先生、市の偉い人、カメラを持った人、そういう人達が来ていた。

僕の絵には、金色の色紙が貼ってあった。

ただ、それだけのこと。

家に帰るとお祖母ちゃんが待っていた。

兄ちゃん達が待っていた。

お祖母ちゃんは何故か寂しそうな顔をしていた。

兄ちゃん達には怒られた。

父ちゃんは仕事で遅かった。

誰も僕の絵を誉めてはくれなかった。

ただ、それだけのこと。

学校へ行くと、クラスの皆が待っていた。

女の子達にすごいと言われた。

絵描きさんになれるねと言われた。

女の子から特別な待遇をされると、男の子達には睨まれた。

調子に乗るな、いい気になるなと言われた。  
僕は立場を悪くした。

誰も絵のことをわかってくれなかった。  
ただ、それだけのこと。

先生のところへ行った。

僕は先生に言った。

もう絵をコンクールには出さないでくださいと。

先生は困った顔をしていた。

誰も僕のことをわかってくれなかった。

ただ、それだけのこと。

誰も見てくれなかったわけではない。

一人だけ、コンクールの会場で、出会った子。

その子は僕の絵の前にしばらく立ち止まっていた。

「あなたもこの絵に感動したの？」

「え？」

「すごいよね、この絵。お空があっちまで続いて見えるの。」

知らない子。

僕が描いた絵を、すごいと言った子。

絵のことを、空のことをわかってくれた子。

僕は絵の中に、ずっと奥まで広がる空を描いた。

遠近法。

先生も、クラスの皆も、家族も、誰にも伝わらなかった空の絵。  
誰もわかってくれなかったわけではない。

「私ね、今度この絵の蓮田小に転入するんだ。」

「転校生なんてよそ者だから、今から怖いんだけど、この絵を描いた人に会えるんだって思ったら、なんだか楽しみになってきた。」

「あ、ママだ。行かなきゃ。」  
その子は母親の元へ駆けていった。  
僕はその子に、僕が描いたことを言わなかった。  
ただ、それだけのこと。

僕の母親は、僕を生んで亡くなった。  
と、聞かされている。

だから兄ちゃん達は僕が嫌いだ。  
僕のせいで、母親が死んだ。

僕が生まれてこなければ良かった。  
僕は生まれてはいけない子だった。

兄ちゃん達にいじめられると、ばあちゃんは決まって哀しそうな  
顔をする。

だから僕は我慢した。  
ばあちゃんの前ではなんでもないふりをしていた。  
ただ、それだけのこと。

昔から人より少しだけ絵が上手く描けた。

三つの時、ばあちゃんがクレヨンを買ってくれた。

広告の裏に描く絵を上手だね、と誉めてくれた。

幼稚園で描く絵は、先生からも、友達からも、誉められた。

小学校に入ると、絵の具を使えるようになった。

遠足で行った動物園で写生をした。

夏休みの課題、絵日記、絵を描くことが好きになった。

絵を描くと、アニメのキャラクターを真似て描くと、皆が誉めて  
くれた。

皆が喜んでくれるから、笑ってくれるから、夢中になって描いて  
いた。

でも、それは、お絵かきだったから許された。  
ただ、それだけのこと。

その年、転校生は来なかった。  
次の年も、転校生は男だった。  
ただ、それだけのこと。

子供ながらにわかっていたこと。  
僕の家は皆の家とは違うこと。

保護者プリントの母親の欄が開いていると決まって聞かれた。  
「あきらくんのママは？」  
もう慣れた。

「病気でいないの。」  
そう答えなさい。と、父親から教わったこと。

父親は仕事が忙しく、出張も多く、家で顔を合わせることはほとんどいない。

父親が居なくても、母親が亡くても、ばあちゃんがいた。  
兄ちゃん達にはいじめられたけど。  
それでも生活に不自由はなかった。  
ただ、それだけのこと。

母親も絵を描く人だった。  
別宅にアトリエを持っていて、僕がお腹にいる時も絵を描いていた。

早産。  
急な破水で僕は生まれた。  
しばらくは保育器に入り、入院をしていた。  
発見されるのが遅かった。

母親は、僕と引き換えに命を落とした。  
だから皆、僕が絵を描くことをよく思っていない。

あの日、あの時から、僕は人前で絵を描くのを辞めた。

小学四年の夏休みの課題で描いた絵。

ただのお絵かきが、賞を取ってしまった。

この一枚から、僕は絵を描くことを認めてもらえなくなった。  
ただ、それだけのこと。



## 1・僕の間

2・

中学生になった。

何も変わらないと思っていた。

制服を着て、通う校舎が変わる、クラスが変わる、そんな程度。クラス発表の掲示を見に行った。

「おっす、晃君、一緒のクラスだったぜー。」

後ろから肩をたたかれ、話しかけられた。

「幼稚園から八年目だねーよろしくつ。」

彼は桐谷 泉。

不思議と幼稚園から小学校六年間、ずっと同じクラスになっていた。

それだけ一緒にいるから、うちの事情も知っている。

いちいち最初から話さなくていい関係。

それが楽で、俺はここにいる。

一年は三階の教室だった。

毎日この階段を上るのかと考えただけでダルい。

蓮田中学は、蓮田小学校と蓮田第二小学校が合併した全六クラスうち、蓮田小出身者が三分の二を占めているので、クラスに数人第二小出身者が混じっているが、別に友達には困らなかった。

男子の中にも色々ある人間関係。

クラスを仕切りたがる、目立ちたがりタイプ。  
真面目、優等生、学級委員タイプ。

お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。  
静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのどこにも属さず、属せず、属す機会を失った、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

俺もどこにも属さない感じだが、裏番長的存在、泉くんに入られていた。

どうでもいいが、気に入られ、目をかけてもらっているの、俺の周りには自然に男子も女子も集まって来る。

「泉君、次の理科、実験室に移動だつてー。」

「おー、りょーかい。」

「ねえねえ、桐谷君、第二出身の女子も泉君って呼んでもいい？」

「もちろん。じゃあ、女子の名前も教えてよ。」

「あたし、みつこー。」

「佳織。」

「私、咲良。」

俺は何も言わなくても、何もしなくても、学校生活を送ることが出来た。

「ねえ、泉君、穂高君とおとなしい？」

「あんましゃべんないよねー。」

「ああ、晃君はオレ一筋だから。」

「えーっ、えー、えー。」

「え、じゃあ泉君も？」

「・・・・・・。」

「ショックー、泉君女子にモテるのにー。」

「うつそ〜ん。びっくりした？」

「なーんだ。」

「きゃははー。びっくりー。」

俺は何も言わないけど、何もしないけど、泉くんのおかげで静かな生活を送ることが出来た。

何らかの部活動に属さなければいけなかったので、俺はバレエ部に入った。

放課後と土曜の午後は部活の時間で埋まった。

しかし、テスト期間に入ると部活動は原則禁止となる。

自主練は認められているものの、俺には無縁とっていいだろう。本気で何かに夢中になれる奴らが羨ましいとは思わないけど。

テスト期間中、俺は図書室で過ごす時間が好きだった。

それほど広いわけでもなく、綺麗なわけでもないが、図書室は落ち着いた。

最も、利用する生徒が少ないから、静かに一人の時間を過ごすことが出来る。

テスト勉強もしたけれど、ここで過ごす大半は本を読んだり画集を開いて眺めたりしていた。

あれから、絵に夢中になることはなかったけれど、嫌いになることもなかった。

人前で絵を描かなくなっってから、俺は人の描いたものを眺めるようになった。

美術の教科書に載っているようなものではなく、有名な画家の画集でもなく、図書室にある誰も借りていないような、人気のないものを見ていた。

絵や写真を眺めている時間は好きだ。

何も考えなくてすむ。  
ただ、それだけのこと。

五月。

中学生になって初めての定期試験が終った。  
結果。

成績上位三十名が掲示板に貼り出された。  
小学生との違い。

出来る奴、出来ない奴の差。

「すげー、晃君九位だー。」

泉くんに声をかけられた。

「ねー、びっくりだよー。晃君って頭いいんだねー。」

「あれ、うちのクラスもう一人いるね。」

「あ、ほんとだー。」

「竹田・・・だって。誰？」

「おいおい、夏帆ちゃん、そりやないだろー？」

「えー、だって知らないもん。そんな人いた？」

「あのメガネくんだろ。」

「ああ、いつも本読んでる人。」

「だから頭いいのかー。」

「七位だってー。すごいねー。」

「オレも次はがんばろーっと。」

「無理無理、いきなり三十位以内なんて。」

「なにおおー、本気を出せばオレだって！」

「あはははー。」

一人の時間はたくさんあったので、勉強に困ることはなかった。  
二番目の兄ちゃんは塾へ行っていた。

ばあちゃんは、俺にも塾へ通うように勧めたが、断った。  
人と勉強するより、一人でやる方が俺には合っていた。  
ただ、それだけのこと。

六月になって、休む奴が出た。  
一週間……。

出てきては、また数日休む。  
その繰り返し。

これはいじめというやつだろう。  
どこにでもある。

竹田 雅史。蓮田第二小の出身で、頭は良いが、どうやら発言に  
問題があったようだ。

常に本を持ち歩いていて、物知りで、それを知らせがり屋タイプ。

いじめているのは……

ああ、クラスを仕切りたがるタイプの奴か。

まっとうなクラス絵図だろう。

この世からいじめが無くなるなんてことはない。

女子だって、男子だって、二年生だって、三年生だって、クラス  
だって、部活だって。

どこにでもあること。

仕方ないさ。

皆、見て見ぬふり。知らんふり。

それが一番良い方法だと誰もが知っている。

自分に目を向けられないよう、自分の身は自分で守る。  
ただ、それだけのこと。

中学は授業参観がないから楽になった。

それまでは、母親の代わりにばあちゃんが来ていた。

母親が生きていてくれたら・・・と考えなかったわけではない。

でも、物心ついた時からいなかったし、兄ちゃん達には嫌われていた。

母親が恋しいと思うことはなかったし、ばあちゃんには良く育ててもらった。

そうゆうものだと思ってきた。

そういう意味で俺は冷めた育ち方をしてしまった。

近所に歳の近い女の子はいなかったし、親戚にもいなかった。

女に・・・というか人に興味をもたなかった。

幸い、自分の部屋というものを与えられていたので、一人で過ごす時間の方が長かった。

兄ちゃん達とは、顔を合わせれば嫌味を言われるだけだし、友達を家に呼ぶこともなかった。

人とのかわりには関心がなかった。

初恋。

なのだろうか。

正直、そんなのがいつだったかなんてわからない。

ただ、年頃なのか、男子の中でもそういう話が多くなった。

面倒くさいけど、周りに合わせるのも、それなりに話題に入るのも、身の安全の為。

「でさ、この前手、つないで帰つてるとこ見ちゃって。」

「まじでーっ。」

「あいつら付き合ってたー。」

「いいなー、俺も彼女欲しー。真奈ちゃん。」

「真奈ちゃん？無理無理、お前じゃー。」

「ひっでー。」

「はははー。」

「そういえば、晃君って誰好きなの？」

「あー、聞いてなかったな。」

「オレも知らないや。教えて。」

「誰？」

「・・・咲良。」

「へー。そーだったんだー。」

「あ、なんかわかるかも。晃君で女子とあんま喋んねーけど、咲良とは喋ってるかも。」

「なるほどー。」

咲良。

面倒くさくて適当に、思い浮かんだ名前が咲良だった。あれは、美術の時間、隣の席の咲良に話しかけられた。

「あれ？穂高君のパレット三色しか出てないよ？」

「絵の具無いなら貸そうか？」

アホか。

と思っただけど、面倒くさいしかかわりたくなかったので、適当に返事をした。

その後も彼女は俺の方を見ていたらしく、こっ言った。

「あ、そっか。色は出すものじゃなくて、作るものなんだねー。」

そして、絵を覗き込んで、こっ言った。

「すごいじゃん。上手いね。」

誉めても何もでねーよ。

だいたい、赤、青、黄色の三色が基本だろ。

咲良はそれ以来、話しかけてくるようになった。

俺が女子と喋らないのは全体周知になっていた。

でも、泉くんがいるから、俺の周りに自然と女子は集まってきた。俺一人喋ろうが、喋らまいが、泉くんがいればそれは関係のないことになっていた。

だけど、別に理由もないけど、咲良とは喋るようになった。

ただなんとなく、合づちを打つだけ。

ただ、それだけのこと。

中学に、クラスに、馴染むようになった頃。

クラスの男女で日曜日、遊ぶようになった。

部活のない日曜ぐらい、家でのおんびり過ごしたいものだ。ばかじゃねーの、お前等。

そんな本音も言うわけにはいかず、親戚の家に行くとか、家族と出かけるとか、絶対に在り得ないような嘘を言って断った。

でも、せっかく誘ってくれる泉くんの手前、断りきれずに月に一回は参加するようにした。

七月はカラオケ。

八月は夏祭り。

九月はボーリングに行った。

他の奴らと喋るのが面倒くさいから、隣の咲良と喋っていた。手をつないだわけでも、二人で出かけたわけでも、付き合っているわけでもない。

恋愛の話が好きな年頃なのだろう。



他人の話で盛り上がりたいたけなのだろう。  
面白おかしく噂を立てただけなのだろう。

別に俺は否定も肯定もしなかった。

そんなこと、俺に面と向かって聞いてくる奴もいなかったが。  
ただ、それだけのこと。

秋になった。

体育祭、合唱コンクール、日帰り旅行と行事が続いた。  
そして、写生大会。

これは小学生も中学生も変わらない行事。

中学では、校内の好きな場所を選べた。

サッカーゴール、グラウンドが見渡せる階段の上、校門の木、校

舎、そんな人気の場所には当然人が群がっていた。

俺は事前に人気の少ない場所を選んでいた。

美術の時間にあらかじめ下絵を済ませている。

今日は色を塗り完成させるだけ。

しかも午前で終わるから楽。

といっても、午後は部活だが。

「晃君。」

呼ばれても振り返らなかった。

「ここに居たのね。探しちゃった。」

いちいち返事をしなくても、

相手の顔を見なくても、

話しかけてくる咲良は楽だった。

「美術の時は、どこを描いているのかわからなかったけど。」  
「いいね、ここ静かで。」

そう言うと、覗き込むようにして隣に座った。  
肩上の、邪魔する髪を耳へとかける。細くて真っ直ぐな柔らかい髪。

「ああ、やっぱり色がつくと落ち着くね。」

美術の席が隣の咲良。

授業が終ると、必ず俺の作品を覗き込んできた。

すごいとか、上手いとか、そういう言葉は昔から言われ慣れていた俺には、誉め言葉はうんざりする。

誰も誉めてくれなかった絵。

誰にもわかってもらえなかった絵。

咲良はそんな在り来たりな誉め言葉は使わなかった。

俺も何も言わなかった。

それでも咲良は美術の授業が終るたび、俺のところへ来た。

「空の色。」

俺は一瞬、咲良の言葉に耳を疑った。

「空の色を塗っているのね。ずっと奥まで続いている。」

思わず、絵筆を止め、咲良の顔を見る。

色白で、小顔。いつもより、ずっと近くに咲良の顔がある。

「ん？」

どうかしたと言う表情の咲良。  
何も言わない俺。

咲良は再び視線を絵へと戻した。

空の色……か。

俺は急にあの日のことを思い出した。

空があっちまで続いていると言ったあの子。

遠近法を見抜いたあの子。

僕の絵をわかってくれたあの子。

小学四年の夏に描いた一枚の絵。

この絵から、描くのを辞めた一枚の絵。

その年転校生は来なかった。

その翌年、転校生は男だった。

どうせ蓮田小と蓮田第二小を勘違いしたのだろう。

ただ、それだけのこと。

ふと、咲良が第二小の出身であることを思い出す。

忘れていたし、思い出すこともなかったこと。

探そうだなんてそんな面倒くさいこと、どうして俺がするだろう。

でも……

そつえば、この学校のどこかにいるんだよな。

どこかに……

翌週、写生大会の絵は、優秀作品として選ばれた数名が、美術室の前に展示された。

どれも校舎やグラウンドを描いた、模範的な絵。  
当然、俺の絵が飾られることはなかった。  
それでいい。  
俺は、好きな場所で、好きな時間を過ごし、好きな絵を描けた。  
それでいい。  
賞を取るために描いた絵ではなく。  
それでいい。  
ただ、それだけのこと。

3 .

十一月。

席替えをした。

一年に何度が行われるこの席替え。

こんな面倒くさいことはない。

なにが良くて席替えなんかするのだろうか。

騒がしくなるだけだ。

新しい友達？

何を今更……

三階から中庭の見下ろせる窓際、ベランダ席。後ろから二列目。

良い席になれたと思った。

席は。

隣が……

竹田だった。

その日の放課後、部活を終え、忘れ物に気がついた。

図書室で借りた画集。

別に明日でも良かったのだが、教室へ取りに戻ることにした。

席替えをしたことを忘れ、元の自分の席へ足が向いていることに

気づいて方向を変える。

と、

窓際、ベランダ席に人が立っていた。

まさに俺の席。

当たり前か。

その隣は竹田の席でもあるのだから。

でも、気づく。

まさに俺の画集。

竹田が手に取っていた。

「あ、ご、ごめん。勝手に……」

竹田は教室に入ってきた俺に気づくと、慌てて画集を机に戻した。

俺は何も言わずにその画集を鞆へ閉まった。

視界に入ったのは、奴の制服に付いた土埃。

かわりたくない。

まさに今さっきまで、呼び出されてシメられました感のある、

ズボンに、腰に、肩に、土埃のついた制服。

かわりたくない。

最近まで休みがちだった竹田。

久しぶりに出てきたと思ったら、まだいじめに合っているらしい。

夏前からずっと……。

かわらないように、帰ろうと思ったその時、

「雅画伯とかって好き？」

「え？」

思わず聞き返してしまった。

「これ、おれも借りたことあるんだ。」

「もしかして、KEIGOとかも好きかなって。」

緊張と興奮の入り混じったような、か細い声で、間を空けずに、必死に喋りかけてきた竹田。

俺はというと、驚いて声が出なかった。

竹田の、泣きそうな位の声に、ではなく、竹田の言った画集の話に驚いて。

「か、勝手にごめん。」

「いや・・・」

そうというのが精一杯だった。

「お、おれと話すところ見られたら大変だもんな。」

「話しかけたりしてごめん。」

申し訳なさそうに、でもどことなく表情に安堵の色が窺えたのがわかった。

俺は重い口を開いた。

それは久しぶりだった。

「いや、違うんだ。意外で・・・」

下を向いていた竹田の表情が変わった。

「その・・・この学校にこんな話が出る奴がいるとは思ってなくて・・・」

俺だって同じだった。

他人とのかかわりが苦手で。

面倒くさくて、どうでもよくて。

自分のことを話すことなんて滅多に無かった。  
だから・・・

「雅画伯のはあっても、図書館にKEIGOは無いよな。」

そう言うと、竹田は慌てて口を開いた。

「け、KEIGOならうちに最新号あるけど見る？」

「あんの？」

「うん。あ、でもおれなんかと喋ると・・・」

再び竹田は不安の表情に戻っていた。

「じゃあさ、明日の放課後見に行かせてよ。」

「えっ？」

「都合悪いか？」

「う、ううん。でも、部活は？」

「サボる。」

「いいのか？」

「いい。KEIGOの方が見たい。」

「じゃあ明日。」

「おう、明日な。」

竹田は、殴られ、蹴られ、痛むであろう体を、軽く弾ませるよう  
にして帰って行った。

うれしかったんだ。

たぶん、俺、嬉しかったんだ。

中学に入って、面白くなかった。

勉強は元々つまらなかつたし、部活も好きで始めたわけではない。周りに人は集まってきたけど、別に俺が居ても居なくても、俺が何を言おうと言うまいと、関係の無いところで時間は過ぎていく。

別にそれで良かった。

そうして過ごすことを望んでいたのだから。

別にそれで良かった。

誰ともかかわりたくなかつたのだから。

他人とかかわるより、自分一人の方が楽だから。

でも……

初めて自分の好きなもの、好きな時間と合う奴を見つけた。

見つけて、出会った。

それが嬉しかったのだろう。

ただ、それだけのこと。

翌日の放課後、俺は部活をさぼって竹田の家へ行った。

「誰にも見られなかつたか？」

「ああ。」

竹田は変なところに気をつかう。

根は真面目で良い奴なんだとつくづく思う。

「どうぞ、上がって。」

「あらまあ。まーくんにお友達なんて久しぶり。お茶出すわね。」

玄関で迎えてくれたのは、一目見てわかる優しそうなおばさん。体格の良さも、この家の穏やかさ、豊かさを語っているだろう。そして何よりこの家の広さ、大きさ、豪華さが、竹田家そのもの



を表している。

何の苦勞も知らない、幸せ金持ち一人お坊ちゃまってところか。これはいじめの対象になるわけだ。

竹田の部屋に通される。

十畳はあるだろう、これまた広い個室に、大型テレビ、その横にはゲーム機、パソコン、冷蔵庫まで完備の部屋だった。

「すごいな。」

思わず口に出てしまった言葉。

「親が会社の社長なんだ。」

少しだけ、竹田の表情が曇ったのがわかった。  
なぜだろう。

親が社長で、こんな大きな家、広い自室を与えられ、優しそうな母親に、豊かな暮らし。

幸せでないはずが無いのに。

そう思った時、部屋にノックの音が響いて、さっきのおばさんがお茶を運んで来た。

「さあさあ、どうぞ。」

「いただきます。」

「ほんとまーくん、久しぶりだね。お友達が来るならそうと云ってくればよかったのに。急だとお菓子も揃わないわよ。まあまあ・嬉しいわね、まーくんにこんなお友達が・・・」

「あー、もういいから。いったいいった。」

まだまだ喋り足りないという感じのおばさんに、竹田が話を止め

た。

「あらあら、じゃあ、ゆっくりしていつて下さいね。」

「はいはい、お茶ありがとう。じゃあね。」

おばさんは、名残惜しそうに部屋を後にして行った。

「悪かったな、騒がしくて。」

「いや。」

「お手伝いさんなんだ。」

「そうなんだ。」

母親だと思ったおばさんは、お手伝いさんだった。

どれだけ金持ちなんだ、この家は。

改めて部屋を見渡すと、ベットの置かれている壁と、机の脇に、大きなポスターが貼られていた。

「KEIGO?」

「そう。東京で個展開いた時の。」

「すげーっ。」

「あっちは雅画伯の。」

「おおー。」

感嘆の声。というのはこういう時に使うのだろう。

どう見ても一般的な中学生には手に入らない、高そうなポスターが貼られている。

「で、これがKEIGOの載ってる創刊誌。」

「おおー、本屋で立ち読みできないんだよねー、これ。」

「良かったら毎月見においでよ。定期購読してるからさ。」

すっげ。

今度は言葉にならなかった言葉。

定期購読っていくら払ってんだよ。

これがただの雑誌だったら、俺もこいつの言い方にイラっときてんのかな。

確かに金持ちで、物持ちで、物知りでは、自慢気に聞こえてしまふところもあるかもしれない。

こいつの、そういうところがいじめの原因なのかもしれないな。本人悪気はないのだと思うけれど。

「あ、良かったらポスターもあげようか？」

「え？」

「同じの二枚あるから気にしないでいいよ、持ってたて。」

「いや、でも・・・」

「KEIIGOの良さがわかる奴にあげたいんだ。」

そう言った竹田の表情には笑みが浮かんでいた。

本人悪気はないのだと思うけれど。

こんなでかいポスターを、自室に飾るわけにはいかないだろう。兄ちゃん達が見つけたらうるさいだろうし、絵にまだ興味があると思われるだろうし。

面倒くさいことは御免だ。

「あ、そうだ。パソコンの中にも入ってるから見てよ。」

そう言つと、今度はパソコンを開き始める竹田。

やっぱり嬉しそうである。

「すげーな、パソコン使えるなんて。つーか、パソコンが部屋にあ

る自体すげーよ。」

また少し、竹田の表情が曇った。

「これ、CADで作ったやつ。で、こっちがおれの最新作。」

「すげー、これ竹田が作ったのか？」

「趣味なんだ。パソコン使って絵描くの。」

ますます、感嘆の声は続いた。

「こーゆーの、別世界の話だと思ってた。こんな身近に、使いこなしている奴がいたなんて。」

「親がIT関係の会社やってるから知識はそこから。」

「なるほどね。」

やっぱり持つべきものは親、金、権力ってところか。

筆しか持ったことの無い俺にとって、パソコンを使って絵を描くなんぞ考えられないことだった。

絵の具しか混ぜたことの無い俺にとって、パソコンでカラーを作るなんぞ考えられないことだった。

表現方法の違いに、俺はしばし見入っていた。

「将来はイラストレーターってところか？」

俺は当たり前のようなことを当たり前に発したつもりだった。

だが、竹田の表情がいつそう曇った。

なんだ、先から冴えねー表情するな。

こんな恵まれた環境で、裕福な生活をしているのに、何が不満なんだ？

「おれの将来は決められているから。」  
「は？」

テーブルに戻り、お手伝いさんの運んでくれたジュースを口に入  
れると話し始めた。

「選べないんだ。おれは。」

「選べないって？」

「おれがこうして自由に趣味を続けていられるのも高校まで。そし  
たらお絵かきなんて辞めさせられる。高校を卒業したら、親の決め  
た大学へ行つて、親の決めた勉強をして、親の会社を継ぐ。」

「これがおれの決められた将来。」

「えっ……せつかくこんな技術持つてんのに？何も辞めなくて  
も……」

「両立は無理なんだ。わかつてる。」

「……」

「ＩＴ会社つて言っても専門分野があるからさ。おれがやってるこ  
となんて、ただのお絵かきとしか見られてないんだ。グラフィック  
デザイナーなんてカッコいい言葉だけどさ。そんなの認めてもらえ  
るはずが無いんだ。」

「そっか……」

何の苦労も知らない、金持ち坊ちゃん。

幸せでないはずが無いのに……

そんな風に思っていた自分に嫌悪した。

お手伝いさんが言つてたが、お友達が来るのが久しぶりだと。

俺も人のことは言えないが、中学に入ってからこいつと遊ぶ奴は  
いなかったのだろうか。

久しぶりに誰かを家に呼ぶ。

久しぶりに話す会話。  
久しぶりに話す友達。

わざわざお手伝いさんがいるってことは、両親ともに仕事で遅いのだろう。

おそらく、このお手伝いさんが竹田の生活の世話をしてきたのだろう。

両親も、兄弟もいない一人の時間。

竹田も長い時間を一人で過ごしてきたのだろうか。

物持ちなのは一人っ子だから。

物知りなのは本を読んでいるから。

知らせたがりやなのは話し相手がいないから。

兄弟揃っていても一人で過ごしてきた俺。

なんだ、一緒じゃないか

幸せだなんて誰が決める？

一人っ子でも、兄弟がいても、金持ちでも、金持ちでなくても、

母親がいても、いなくても、そんなのなんの関係も無い。

「おれの話はいいからさ。えっと……穂高のこと聞かせてよ。」

「晃でいいよ。」

「じゃあ、おれはタケで。」

「タケな。ていうかさ、なんでタケは俺がKEIGOが好きだって知ってるの？」

「晃の絵を見たらわかるよ。」

「絵で？」

「うん。」

「写生大会？授業の時のか？でもタケ学校にあんま来てないし……」

「空の絵だよ。」

絶句してしまった。

「小学生の時描かなかった？空の絵。確か・・・小4か5の時。同じコンクールでおれも賞取って、会場で見たんだよ。晃の絵。確か、当時の新聞切り抜きして取ってある。」

「それで名前覚えてて。でも次の年のコンクールには出てなかったから、中学入ったらまた会えるかと思つてて。」

「そしたらさ、なんと同じクラスじゃん。話しかけようか迷つてるうちに、おれ目つけられちゃって。学校行くのもダルくなって。家で一人でパソコンしてる方が楽じゃん。」

「でも、図書館で見見かけた時にさ、雅画伯の画集借りてて、あー、やっぱりこいつ空の絵を描いた奴だーって思った。雅画伯は風景画の中でも空専門だし、その雅画伯唯一の弟子がKEIGO。ほら、つながるだろ。」

一人で喋って、一人で納得。雅史お坊ちゃまはジュースを一気に飲み干しました。

一方、俺はというと、突然の展開についていかれず思考回路しばらく中断。

そんなこんなで、竹田家第一回訪問を終了した。

十二月に入った日曜日。

一足早いクリスマス会というのをやることになって。

泉くんを中心にクラスの男女でパーティー。

はじめは断るつもりだった。でも。

俺は一つの決心をして、クリスマス会に行った。

「じゃー、皆狭いけど適当にくつろいで。」

「クリスマス会はじめまーすっ。」

「全員ジュース持った？」

「ではでは、乾杯。」

「乾杯ー。」

「メリークリスマスー。」

重なるグラスの音。

部屋中に響き渡るクラツカーの合図。

CDプレイヤーから流れるクリスマスソング。

お調子者で笑いをとるのがうまい奴のモノマネ披露会。

フライドチキンにケーキ。

女子の焼いてきたクッキー。

男子の持ってきた酒類。

部屋には溢れんばかりの笑い声。

盛り上がっている中、俺は一人で泉くんの隣へ行った。

「楽しんでる？晃君。」

「泉くんさ、ちょっといいかな。」

「んー？」

二人で話せる窓際へと移動した。

「頼みがあるんだけど。」

「へー、珍しい。いいよー、晃君の頼みなら、なーんでも。あ、告白はなしね。オレ女の子がいいから。」

いつも通りの泉くん。

幼稚園からずっと一緒のクラスの泉くん。



明るくて、スポーツも出来て、面白くて、女子に人気があつて。同性からも人気を得ている。

そんな泉くんが、どうして俺なんかに目をかけてくれているのか、ずっと不思議だった。

泉くんの存在には何度も助けられた。

鳴り止まないクリスマスソング。

メロディーに合わせて歌っている奴。

赤い帽子に白い髭でコスプレを楽しむ奴。

盛り上がるお喋りに、かき消されそうな声で言った。

「竹田を何とかできないか。」

泉くんはこつちを見ずに一度だけ目を閉じた。

その横顔が、少しだけ悲しそうに見えたのは気のせいだろうか。

「いいよ。」

時間が止まったかと思った。

「ただし、一つだけ条件がある。」

ごくつと唾を飲む音が聞こえた。

どうやら俺は緊張していたらしい。

タケのこと、泉くんならなんとかしてくれるのではないか。

あれから一ヶ月、隣の席とはいえ、タケと話すようになった俺には何も起こらない。

普通、いじめているターゲットと話したり、助けようとした奴なんかは一緒にやられる。

でも、俺には泉くんがいるから手を出せないのだろう。

そう考えた時、泉くんなら、タケを、あいつらのいじめを止めさせることができるのではないかと思った。

「条件？」

「そう。」

なんとなく、予想はしていたこと。

条件。

泉くんの言う条件とは、俺もこのグループから抜けさせられる・・  
・だろう。

いくら裏番長的存在の泉くんでも、いじめを止めることはできても、辞めさせることはできないだろう。

いつの時代にも、どこにも、いじめはある。

どんなクラスにも、女子にも、男子にも。

だから、ターゲットを変えることくらいしかできないだろう。

タケから俺へ。

そうしたらもう、泉くんとは居られない。

ここにはもう、居られない。

それでもいいと思った。

タケと出会って、初めて友達と呼べる、共感できる奴に会った。

人とかかわるのを避けて、面倒くさそうに他人と接するこんな俺の、これまでの中学生生活を支えてくれた泉くんには感謝。

俺は抜けるよ・・・・・

「咲良のこと好きなんだ。」

「へっ？」

気の抜けた声を出してしまった。

条件・・・

条件？

「そんな変な顔するなよ。それでも悪りーと思ってんだからよ。」

どんな顔してたのだろうか、俺。

自分でも予想外の展開に驚いていた。

「誰にも言っていなかったんだけどさ、そーゆーことなんだ。」

そーゆーこと。

そーゆーこと？

っ、つまり、

つまり、泉くんという条件って……  
条件って……

「え？そんなんでいいの？」

「そ、そんなんで、晃君？意味わかってる？」

「全然OKだよ。」

「えっ、マジで？えっ？っていうか、ちゃんとわかってる？」

「わかってるよー。」

「マジで？えっ、だって晃君、咲良のこと好きなんじゃ……？」

「いや。」

きつぱり即答した俺に、泉くんは本気で焦っていた。

そんな普段見られない、意外な泉くんを見られるのも貴重だ。

「えっ……と……、晃君咲良としか話してねーし、つき合っ  
てるっていう噂もあったし……」

「いや、好きでもなんでもないけど。」

「そ、そうなの？」

「おう。」

「なーんだ、マジ焦ったー。」

「そうかー、そうならそうと……ってか、晃君が俺に隠し事するなんてことないか。そうだよな。付き合ってるならそう言うよな。頼みごとも珍しいけど、隠し事もしないもんなっ。」

そう言うのと、泉くんはニコニコしながら俺の背中をバンバン叩いてきた。

なんだかいつも強く見える泉くんが、今は子供っぽくて可愛らしい、なんて言ったら怒られそうだけど。

とにかく、突っ張った顔ではなく、微笑ましい、明るい笑顔の似合う泉くんだった。

そんな泉くんが人気者で、ちょっと不良っぽいけど、喧嘩も強いけど、皆から好かれるのもよくわかる。

そしてそんな友達がここにいてくれたことを誇りに思う。

「じゃあ、今度は竹田も誘ってやれ。」

「えっ？」

「入れんだろ？俺らのグループに。」

「え、でも……」

「なんとかなるんじゃない。」

そう言った泉くんの顔からは、さっきまでのあどけなさは消え、何かを企んでいるかのような悪戯な笑みを浮かべていた。

「俺、泉くんが好きだよ。」

「なぬっ！」

自分で言つて、自分で笑えた言葉。

泉くんは俺に冗談は似合わない、焦って付け加えていたが、ど肝を抜かれたかのような、顔をしていた。

「泉くん、一緒にゲームやろーよ。」  
「おうっ。」

女子に呼ばれ、泉君はテーブル席へと戻っていった。  
まだ鳴り止まないクリスマスソング。  
隣に咲良がやってきた。

「何二人で話してたの？」  
「べつに。」

咲良は隣に腰を下ろした。

私服の茶色いワンピースからは、色白の肌が見えている。

背が高く、細身の体型の咲良とは、座ると目の高さが一緒になる。

泉くんが好きな子は咲良だった。

泉くんは俺の好きな子が咲良だと思っていた。

確かに咲良はかわいい、というか美人だろう。

性格も悪くは無い。

他の女子とより咲良と話す方が楽だったし、一緒に居て別に嫌だったことはない。

確かに、噂が立ったこともあった。

でも……

「なあゝに？ 嬉しそうな顔してる。」

「晃君のそんな顔、初めて見たわ。良い事でもあったの？」

相変わらず、俺が何も言わなくても咲良は話しかけてくる。  
俺が何を言おうが、言うまいが、泉くんがいてこそ俺。  
そんな俺は楽だったよ。

「あたしさ、泉君と晃君好きだよ。二人が一緒に居るところ、良いなっていつも見てた。」

「おまえは転校生か？」

少し間が空いた。

咲良は、自分の質問と全く意に反したことが返ってきたことに笑って言った。

「違うよー。」

意味のある言葉。

意図のある絵。

人と人との関係にも、意味はあって意図がある。

後日、俺は一度だけタケを誘って皆と遊びに行った。

なんとなく違和感の、でも穏やかに流れていく時間は、人と人との関係を修復に導くには十分だった。

それから俺達は二人で遊ぶようになった。

タケの家へ行くのが大半を占め、時々買い物にも付き合った。

はじめに話してくれたタケの、家のこと、将来のこと、自分のこと。

ふと、思う。

タケが聞いてこない、俺のこと、母親のこと、家のこと。

少しずつ……

少しずつ話そう、自分のこと。

はじめて友達と呼べる奴に出会った、タケになら。

俺のこと、絵のこと、母親のこと、兄貴達のこと。

きつとタケになら、話せるだろう。

話してみよう。

ただ、それだけのこと。

年明けて、出席日数が危ないと、タケが毎日学校に来るようになった。

もつとも、もう学校に来られない理由も無い。

泉くんのお陰で、タケはだいぶ明るさも取り戻した。

知ってることを、自分目線でなく、教える立場になって考えるようになった。

元々頭の良いタケ。

休んでいても、定期試験だけは受けに来ていた。

その試験で毎回十位以内に入っている程。

そんなタケが、試験前になると皆にノートを貸したり、泉くんに勉強を教えたりするようになった。

いつの間にか、タケの周りにも、人が集まるようになっていた。

「タケやーん、英和辞書貸して。」

「またか？」

「だって家に無いから毎日持ち帰ってるんだもん。」

「今日うちのクラス英語ないぞ。」

「知ってるよー。でもタケやんなら学校にも家にもあるでしょー。」

「二個。」

「おまえ、それが人に借りる態度か？」

「きゃー、ごめんなさーいっ。ははは。」

最近、タケのところに出入りしている女がいる。

第二小の出身だろう。

大抵、辞書だのノートだの、借り物の用事で来る女。

「しょーがねーな。ほらっ。」

「ありがとー。」

「授業中寝てヨダレつけんなよ。」

「だーいじょーぶっ。ありがとねっ。」

そう言つと、パタパタと足音を立てて帰って行く女。

いつもへらへら笑っていて、頭悪そうな感じの女。

でも、その女の後ろ姿を、いつも見えなくなるまで見ているタケ。好きなのか？なんて思つたことも。

あのクリスマス会の後、泉くんは咲良に告白をしたらしい。

咲良の返事は・・・

オツケーをもらつたと嬉しそうに泉くんが話してくれた。

泉くんが笑ってくれるなら、泉くんの役に立てたなら、今まで泉くんに助けられてきた俺は救われる。

そう思つた。

恋に恋する年頃でもある。

噂話は楽しいひと時。

誰かが誰かを好きだなんて。

俺にはそんな気持ち、あるのだろうか。

俺にはそんな想い、あるのだろうか。

「晃、KEIGOの三月号届いたぜー。」

「おう、じゃー、放課後タケんちなー。」

まだ要らない。

タケの家から帰る途中、大きな夕焼けを見た。  
水色とオレンジの入り混じつた空。



空を見ると思い出す。

あの日のこと、あの絵のこと。

母親のこと、父親のこと、ばあちゃんのこと、兄貴達のこと。

空はどこまでも続いていて。

追いかけても追いつけない苦しい道。

でも、そんな空へと続く道は、もうとっくに見つけているのかも  
しれない。

## 2・俺の空

1・

中学二年になった。

何も変わらないと思っていた。  
でも、またクラス替え。

二年三組。

タケと同じクラスになった。

泉くんとは別のクラスだった。  
ただ、それだけのこと。

二年は二階の教室に、一つ階を下げた。

出席番号順で座る席。

前の席に、健太という幼稚園からの顔馴染みが座った。

一列離れた席に、タケがいた。

タケは、二宮という奴を連れて、俺と健太のところへ来た。

「どおーもっ、二宮英明、にのって呼んで。よろしくつ。」

「にの、俺健太。よろしく。で、こっちが晃。」

「おっ、晃君の噂は聞いてるよ。」

どんな噂だよ。

見るからに、軽そうで、うるさそうで、お調子者タイプの二宮。  
タケと同じ蓮田第二小の出身なのであろう。

タケにこんな友達がいるとは意外だった。

男子の中にも色々ある人間関係。

クラスを仕切りたがる、目立ちたがりタイプ。

真面目、優等生、学級委員タイプ。

静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのどこにも属さず、属せず、属す機会を失った、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。

まさに二宮英明。

「あ、舞ちゃん同じクラスだね。よろしくつ。」

「おつ、木村君。今年もよろしくつ。」

「美樹ちゃん、隣のかわいい子、お友達？オレのことはにのって呼んでねー。」

次々クラス中を挨拶してまわる二宮。

タケの連れてきた二宮という奴は、わかりやすいくらいお調子者タイプだった。

新しい教室、新しいクラス、新しい担任、新しい教科書。

そんな新しづくめの新学期も、友達には別に困らなかった。

ただ、それだけのこと。

面倒くさいが、委員会というものがあって、何らかの委員に属さなければならなくて。

先日、その委員決めを行った時のこと。

大抵、学級委員という大役はすぐに決まる。

どこにでも、クラスに一人か二人はいる、真面目、優等生、学級委員タイプ。

ましてや去年学級委員をやっていたました的な奴はすぐに目をつけ

られる。

松岡 聡一。同じ蓮田小出身で、小学校の頃から学級委員タイプ。まさに去年も一年間学級委員を務めたお墨付き。

次に、生活委員という、風紀問題や、生徒の学校生活に携わる仕事をやらされる、副学級委員的な存在の役。

これもすぐに決まって、いかにもという感じの奴が選ばれていた。ここまでの二委員は推薦で決めるのだが、あとの委員は立候補だったり、残り物に自然に属すといった感じ。

もちろん、委員会によって活動の差があり、はっきり言えば楽な委員と損な委員がある。

損と感ずるかどうかは人によりけりだとは思うが。

この後の委員決めは、早速選ばれた男女学級委員が司会進行をし、生活委員の男女が黒板と記録帳に書記をする。

適材適所。

何も言わなくても、何もしなくても、なんとなく、それなりの人で決まって行く。

明るく元気なお調子者、二宮は体育祭委員。

そこに便乗して健太も一緒に体育祭委員。

タケは文化委員に入り、俺は理科委員になった。

なんてことない、ただの雑用係りだ。

そして今日が、委員会の初顔合わせとなった。

新学期が始まり、二週間が経っていたが、俺はクラスの奴らの名前と顔を覚えることはしなかったし、いちいち覚える必要も無かった。

クラスの大半が同じ蓮田小出身の奴だから、こいつらの顔はだいたいわかる。

残り数人、第二小出身者がいるが、別に努力して覚える気はない。委員会も同じ。

理科室に集まった、二年の大抵の顔はわかる。ただ、同じクラスから、同じ委員になった奴が、知らない顔だった。

「穂高君、去年は何委員だったの？」

在り来たりな質問が、隣の席からやってきた。

相手の顔も見ず、適当に答える。

それ以上、話が広がらないことに、相手も焦っていることだろう。それでいい。

俺は人とかかわりが面倒くさいんだ。

だから、これ以上話しかけてくるなよ的なオーラも出す。

配られたプリントに名前を記入する欄があった。

ふと、横目で隣のプリントを除く。

瀬戸 由利。

綺麗な字でそう書かれていた。

蓮田第二小出身の奴だった。

委員会は一年から三年までの、各クラス二名、計三十六名が集まった。

そこから、委員長というのをまた選ぶのだが、これは三年がなるので関係はない。

次いで、副委員長も三年、書記の二名が一年と二年から一人ずつ決められた。

あーだのこーだの、面倒くさい。

もう役決めは飽きたぜ。

自分には関係が無いので、大抵別のことを考えていた。

「あ、あの、今日の会議録、私書いておくね。」

さつきとは違い、躊躇した、か細い声で話しかけられた。

「ああ。」

一言だけ返事をする。

すると、瀬戸由利は黒板と記録紙を往復するだけの目線に落ち着いた。

横目に見る。

綺麗な字。

可哀想だなんて思ったことはない。

俺はこういう奴だから。

ただ、俺は人とかかわるのが面倒くさいだけ。

女と話すのなんて、特に面倒くさいだけ。

ただ、それだけのこと。

委員会が終わり、教室へ戻るとタケがいた。

他にもクラスには数人、委員会を終えた奴、終る友達を待っている奴、部活動へ行こうと準備している奴等がいた。

「おう、晃、もうすぐ終るから待つて。」

「あつ！ちよつ、タケやん、ちゃんと抑えててっばー。」

「あ、悪い。斉藤さん。」

俺の返事も聞かぬまま、タケは慌てて前に向き直った。

どうやら、同じ委員会になった斉藤さん、という奴と、のり付け作業をしているらしかった。

この斉藤さん、とやらも、第二小出身だろう。

そういえば……

二年になって、タケはまた明るくなった気がする。

クラスが変わって、一年の時のタケを知る奴も少ない。

去年、タケのいじめを見て見ぬふり、知らぬふりをしていた奴もいない。

泉くんのおかげで、三学期は毎日学校へ来ていたタケ。

クラスの奴らとも馴染んだ頃の二年のクラス替え。

タケにとっては良かったのだろうか。

日に日に表情が良くなっている。

それは……

「たっだいまー、おつかえりー。」

そう大声で一人、叫びながら教室へ入ってきたこの男、二宮の影響もあるのだろうか。

「にの、うるさいっ。」

「なーんだよ、恵子は冷たいな。」

「あ、にの。健太。おかえりー。」

「だからタケちゃん、ちゃんと押さえてて。」

「はいはい。」

登場した二宮と健太の方を振り返ろうとして、タケはまた、斉藤さん、とやらの厳しい一言をもらっていた。

この、二宮の無駄に明るい、お調子者タイプ、はつきり言っている俺にはどうにも合わないタイプなのだが。

でも、もし。

もし、二宮が去年、同じクラスにいて、タケのそばにいたなら……

いじめは起こらなかっただろうか。

こういうタイプのやつが、そばにいたら……

「それから、にの、恵子って呼ぶなって言ってるでしょ。」

「いいじゃん、恵子も英明って呼んでいいんだよ？」

「そういう意味じゃない。」

「なんだよー、幼稚園の頃は呼んでくれただろ、英明ちゃんってな  
っ。」

「ばーかつ。そんな昔の話は忘れた。」

「忘れただってー。ひどくなーい？」

「にの、頼むから邪魔をするな。おれが斉藤さんに怒られる。」

そう言っで間に入る、タケ。

どうやら、斉藤恵子と二宮英明は幼稚園からの付き合いらしい。

「別に怒ってないわよ。」

「十分怖いよねー、由利ちゃんっ。」

「にの……またけいちゃんに何か言ったの？」

その後教室に入ってきた、俺と同じ委員の瀬戸由利に話をふる二宮。

「由利、委員会大丈夫だった？」

「うん。大丈夫。」

「そう。」

斉藤は瀬戸由利に心配そうに話しかけた。

なんだ？こいつ、ずいぶん二宮の時と態度が違っじゃねーか。

「由利ちゃん、恵子みたく怖い顔なんかしないもんねー。由利ちゃ



んはかわいいもんねー。」

そう言うつと笑顔で瀬戸由利に話しかける二宮。  
対応に困る瀬戸由利。

それを見た斉藤の表情が変わる。

「にの、いい加減にしないとほんとに怒るわよ。」

「はいはい。じゃあ、部活にでも行きますか。」

「それがいいわね。」

「じゃあ皆、まったねー。」

「おー。」

笑顔で手をふり去って行く二宮に、タケと健太だけが答えていた。  
タケ、二宮、斉藤、瀬戸は同じ第二小出身か。

タケもこいつらといる時はリラックスしている雰囲気だな。

穏やかじゃなさそうなのは斉藤恵子か。

女子の中でも最もかわりたくないタイプだな。

面倒くさい、かわらないようにしよう。

ただ、それだけのこと。

五月になった。

二年生最初の定期試験が終わり、その結果が掲示板に貼られた。  
成績上位三十名の名前が載っている。

タケと見に行った。

「おつ、晃九位、おれ六位。」

「タケ、また順位上げたな。」

「やっぱ授業出てるのと、出てないとは違うつしょ。」

そう言ったタケは笑顔だった。

去年、学校を休みがちだったタケも、定期試験だけは受けに来ていた。

そして、その全試験の結果で、十位以内に入っていた。

学校に来なくても、授業に出なくても、タケは頭のいい奴だった。そんな学校に来ていなかった頃の、苦しい経験も、笑って話せるようになったのだろうか。

「おつ、頭いい二人だなー。触つとこつ。」

二宮が後ろからやってきて、俺とタケの頭を撫で回す。

二宮は背が高いので、俺達よりも頭一個分、出ている。

「俺らよりもっとすげーのがいるじゃん。」

タケが指差したところには、クラスの学級委員になった松岡の名前があった。

第一位。

「マジで！聡一くんとか行って拝ませてもらおうと。」

そう言つと、二宮は足取り軽く、教室に戻って行った。

クラスも落ち着いてきて、いくつかのグループが出来上がっていた。

俺はタケと健太と過ごしていた。

タケの連れてきた二宮はというと。

あいつは落ち着かない奴だった。

俺達のところへ来たと思うと、ふらーっとまた別のところに行つて、一日に一度は必ず話したけれど、あいつは色々なグループに顔

を出していた。

クラス絵図。

真面目、優等生、学級委員タイプの奴ら、学級委員の松岡を中心に、六人のグループが出来ていた。

最も、ここに入ったら無難に学校生活が送れるだろう。

ここにいる奴らがいじめをするようなタイプではないし、学級委員の松岡は、成績も良いし全クラスの先生からも信頼されている。

こつという奴をわざわざ敵に回す馬鹿はいない。

だが、その松岡グループを良い風には思っていない奴らもいる。クラスを仕切りたがるタイプの奴ら。

当然、面白くは無いだろう。

先生も、女子も、松岡グループには一目置いている。

そんな反、松岡派の奴らも、頭は悪くないから下手な動きはしない。

影で悪口を言う程度。

静かに一人でいるタイプも、どこにも属せず、属す機会を失った、おどおどした奴もいじめの対象にはならなかった。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプはただ一人、

二宮英明。

二宮は、松岡グループにも顔を出す。松岡も二宮を受け入れている。

反松岡派のグループにも顔を出し、冗談言って笑っている日もある。反松岡派グループからも気に入られていた。

それから驚いたことに、静かに一人でいるタイプの奴にも話しかけているし、どこにも属さずおどおどしている奴とも、二人きりで笑って話しているのを見かけた。

俺にはそんな二宮が、全く信じられなかったし、理解できなかった

た。

いつもニコニコ、明るくにぎやか。

どこにも属さず、女子のところにも男子のところにも、ふらつとやって来ては、また居なくなる。

そんな風のような奴が二宮。

だからこのクラスにはいじめがなかった。

ただ、それだけのこと。

その夏は暑かった。

夏休みに入ったが、部活動は続いていた。

宿題もあるし、夏休み明けには試験もある。

お盆を過ぎてても一向に涼しくならない暑さ。

照りつける太陽が憎い。

宿題を片付けていたが、暑さが邪魔して思うようにはかどらない。

気分転換に、市立図書館へ行こうと居間へ降りると、ばあちゃん  
がいた。

「晃、麦茶入れたよ。」

八畳間に、ばあちゃんと二人で座った。

縁側には、まだ強い日差しが入り込んでいる。

「クーラーつけないの？」

「扇風機で十分だな。」

ばあちゃんはそう言うと、麦茶を口につけた。

「今年は例年にない猛暑だったよ。」

「毎年そう言うじゃろ。」

ばあちゃんの淹れてくれた麦茶は冷たかった。  
やかんで沸かし、冷蔵庫で冷ます。  
グラスも一緒に冷蔵庫で冷やしてくれる。

「ごちそうさま。」

「図書館かい？」

「うん。夕方には帰るよ。」

そう言つて、家を出た。

外もまた、アスファルトの照り返しが強く、むっとする暑さ。  
呼吸が苦しくなる。

さつきまで飲んでいた冷たい麦茶を体が思い出す。

麦茶はばあちゃんの味がした。

夏休み、タケの家へ遊びに行くと、お手伝いのおばさんが麦茶を  
出してくれる。

部活の合間、図書館の帰り、自動販売機で買う麦茶。

どれも、ばあちゃんの麦茶とは違うと感じた麦茶。

幼い頃からのばあちゃんの味。

その日、図書館から帰るとばあちゃんと一緒に夕食を食べた。

焼き魚に、大根とがんもの煮物、暑いのに味噌汁。

前に一度、タケんちであのお手伝いさんに昼食をご馳走になった  
ことがある。

オムライスにサンドイッチ。オレンジジュース。

いかにも洋食派という感じの食卓。

タケが少し体格いいのも、お手伝いのおばさんの体格も、わから  
なくもない。

子供ながらにわかっていたこと。

俺の家は皆の家とは違うこと。

父親は相変わらず仕事が忙しい人だし、兄貴達とも顔を合わせれば嫌味を言われるだけ。

中学に入り、部活に入り、だいぶ家に居る時間は少なくなったが、それでも生活動作が重なることもあるわけで。

「晁とご飯を食べるのも久しぶりだねえ。」

「そう？」

「中学は忙しいかい？」

「まあまあね。」

「夏休みなのにゆっくり出来ないねえ。」

「全部が部活じゃないよ。遊びにも行ってる。」

「そうかい。」

ばあちゃんはゆっくり食べているので、気がつくと俺の皿は空になっていた。

「勝もないし、もっとゆっくりしーや。」

「ただいま。」

玄関の扉が閉まり、居間へと続く廊下に足音が鳴る。

「ごちそうさま。」

俺はそう言いつと、席を立ち、食器を台所へ下げる。

ちょうど背中を向けた時に、兄貴が居間に入ってきた。

「おかえりー、亘。今日は早いだね。」

「あちー、ばあちゃん、クーラーは？」

「扇風機で十分だな。」

「昭和何年だよ、ったく……これだから」

年寄りには。

そう言いたかったのであろう。

が、その言葉は焼き魚と共に口へと飲み込まれた。

「魚は頭にいいそうじゃよ。でー、しーしー？」

「DHA。」

「そうじゃ、それ。」

「もう何十回目だよ、ばあちゃん。」

やれやれといった表情の兄貴。

二人のやりとりの間に、俺はさっと台所から姿を消す。

生活動作の重なる時間。

もう何年も、食卓に全員が揃って座ることは無かった。

ばあちゃんは決まって六時までには夕食を済ますし、部活を終えて帰る俺は七時過ぎる。

塾へ通う兄貴は夕食が夜食代わりになっていた。父親が家で食事を食べることは滅多に無い。

俺には二人の兄貴が居る。

一番上の勝兄は、この春から東北の大学に進学し、寮に入った。

二番目の亘兄は、高校三年。

勝兄がいなくなっただけからは、だいぶ家の雰囲気が変わった。

男三人兄弟、年寄り一名。

ただでさえ、男三人が家の中、同じ部屋にいただけでも暑苦しいだろう。

ばあちゃんをはるかに超える長身の兄二人。  
育ち盛りの俺。

年々腰の曲がっていくばあちゃんにとって、孫達の顔を見上げるのに一苦勞。

立派に育ててくれた男三人兄弟。  
ただ、それだけのこと。

2 .

二学期が始まった。  
席替えをした。

一年に何度か行われるこの席替え。  
相変わらず、こんな面倒くさいことはない。  
なにが良くて席替えなんかするのだろうか。  
騒がしくなるだけだ。

予感的中。

隣の席は瀬戸由利。

かわらないようにしていたが、同じ委員なので、月に一度は一緒に会議に出る。

そして、二週に一度は当番で、理科室か化学実験室の清掃及び点検を行うのが仕事。

それだけ。

かわりはそれだけのはずだった。  
だが……

夏休み前、男子達の恋愛話に付き合っていた時のこと。

クラスの奴らの一番人気は瀬戸由利だった。

クラス内だけでなく、他のクラスにも由利を好きだという奴がい



るとか。

どこがいいんだ？あんな奴。  
そう思っ  
て聞いていた。

「やっぱ由利ちゃんでしょ。」

「なんだおまえもかよー」

「そうゆーおまえも一年時から由利ちゃんかわい  
いって言ってたよな。」

「あ、覚えてた？」

「やっぱまだ好きなのか？」

「とーぜん。」

「でもさー、かわいいよな、由利ちゃん。」

「俺この間さー、落とした消しゴム拾ってあげたらありがと。って  
言われたー。」

「なにー！それは羨ましい。」

「お前らそんな由利ちゃん好きなの？」

「なんだよ、悪いか？」

「いや、悪くは無いけど、由利ちゃんって確かに顔かわいいけど、  
おとなしくない？喋らないし。」

「バカだなー、そこがかわいいんだろつ。おとなしくて、静かで、  
その辺の女子とは違うさー。」

「そうそう、由利ちゃんの良さがわからないなんて。」

「ばかはおまえらだろ。」

「そんな本音はもちろん言えず。」

「おとなしいのがかわいい？」

「なんだそりゃ。」

「ばかな男の恋愛話を大人しく聞いていた。」

「とにかく、由利ちゃん好きな奴、抜け駆けは禁止だからな。」

「おお。そうだな。」

「自分だけいいとこ持つてくのはなしなっ。」

「俺、まじで今年由利ちゃんと同じクラスで良かったー。」

「体育ん時の由利ちゃんとか超かわいくね？」

「かわいいー。」

「だなっ、だなっ。」

「他のクラスの奴らには味わえねー、かわいさだよなー。」

「俺、由利ちゃんの困った顔がすげー好き。」

「あ、それわかるかも！顔赤くして、下向いてるのとか。」

「ちよっときつい言い方するとなるよな。」

「そうそう、泣きそうな顔もかわいよなー。」

「なんだ、おまえわざときつい言い方してんのか？」

「だってー。」

「やめるよなー。そういうの。」

「そういうお前だって。」

「お互い様だろー。」

「かわいいと思うのは一緒。」

「だなーっ。ははははー。」

やっぱりばかだ、こいつら。

困らせてかわいいって、それっていじめてるだけじゃん。

どいつもこいつもアホだな。

女の話なんて面倒くせーな。

早く終わんねーかな。

「そーいや晃君で、由利ちゃんと同じ委員じゃん。」

「あ！いいなー、由利ちゃんと一緒に委員会。」

「由利ちゃんと一緒に理科室で仕事。」

「ずりー。」

すっかり人事に聞いていた話が、ひょんなところから自分に降り注がれていた。

「なー、晃くんも由利ちゃん狙い？」

「まじで？」

「それ、聞いたかないとー。」

男共の視線が集まる。

面倒くさい。

いちいち、面倒くさい。

「いや、別に。」

「なーんだ、そっかあー。」

「良かった良かった。」

「それならそーと言えよなー。」

「でも、あんま近づくなよ。」

「そうそう、由利ちゃんのかawaiiさを知ったら好きになっちゃうかもだし。」

付き合いきれなくて、その場を離れた。

それはちよっとした時間だった。

タケと、健太のいない時に、話に付き合っただけ。

反松岡派で、クラスを仕切りたいタイプを含む、松岡派に入っていない男子のグループ。

どうやら今は、松岡よりも由利への執着が強いようだった。ただ、それだけのこと。

席替えて由利の隣になって一週間が過ぎた。

評判通り、由利はおとなしくあまり喋らない。

必要にに応じて、授業で使うものなど、隣の席同士の協力が不可欠となることがあるのだが、由利は消極的だった。むしろ、躊躇したような、困っているような。

視界に入ってくる由利の字。

綺麗な字。

だから書き物なんかは由利が書いた方が適材だと思つのに。そういう時でさえ、由利は消極的で、躊躇つて、どうしようと常に誰かに助けを求めているような態度。

そんな態度に、俺はだんだん不快感を感じるようになった。

それに加えて、休み時間になると集まってくる由利を好きだという男達。

由利の席まで来ては、さり気無く机にぶつかって物を落としたり、それを拾って由利にお礼を言わせてみたり。

最初はこの程度のいたずら、気にもならなかったが、だんだんとエスカレートしてくると、さすがに目に留まる。

わざとらしさが目に見えている。

由利の背中にこっそり紙を貼り付けたり、消しゴムを隠したり、由利が困ることをまるでゲーム感覚のように仕掛けてくる。

それを、少し離れた所から見物してる男達。

笑いながら、プレイヤーの様子をジャッジしているのはまるで遊び感覚。

当の本人は、困ったあげく、泣き出すこともしばしば。

泣いたら百円なんて、賭けの標的にもされている始末。

十分の休み時間でこんなことをする奴らも大したもんだ。

「あんたたち、いい加減にしなよ！」

「おっ、斉藤さん登場。」

「おー、こわこわ。」

見るに見かねて斉藤が由利を助けること、しばしば。

「由利も。あんたも自分でちゃんと言わなきゃダメよ。」  
「でも・・・けいちゃん・・・。」

泣きつく由利に、斉藤は最もなことを言っていると、その時俺は思っていた。

おとなしくて、はつきりしない、かわいさ。

そんなのあるのか？

男が男をいじめることはなかったけれど、このクラスは男が女を標的にしていた。

いじめとはまた違うと思うけど。

意地悪・・・

確かにしたくなる、そんな気持ちにさせる奴だった。由利は。

ただ、それだけのこと。

「にーのっ。辞書貸して。」

「もえっ。」

「今日英語あつたでしょ？もう使わない？」

「んー、残念だけどオレの辞書は貸し出し中！」

「えー、そんなあ。」

「タケやーん。」

休み時間、タケと健太と喋っていたら、にのに連れられあの女が来た。

「英和辞書貸して。」

「また忘れたのか？家か？」

「はずれー。今度は塾。」

「塾に忘れるか？普通。」

「あー、もうこんな時間。タケちゃん、ありがとっ。」

「おい、まだ貸すとは言っていない……」

「今度ジューズおごるからー。」

そう言うのと去っていった。

全く騒がしい女。

去年から、タケのところにノートや辞書を借りに来ていた女。今年になってもそれは続いていた。

むしろ、今年の方が頻繁だ。

どうやらタケではなく、二宮の方に来ているらしいが。

廊下ですれ違う時とか、二宮に話しかけている。

そこにタケも同乗して話している。

完全に顔は覚えたが、そういえばこの女の名前は知らなかった。

別に、知る必要もない。

ただ、それだけのこと。

かわりたくないと思っているのに、隣の席だと日直を組んでやらなければならぬ。

まったく面倒くさい。

ただでさえ、日直なんて面倒くさいのに、その上、組む相手が由利。

「ごみ捨て行ってくるから、日誌書いておいて。」

「あ、あ、はい……」

日頃から女子と喋るのが面倒くさいが、由利には喋らないと伝わらないことが多過ぎる。

それなのにあの返事。

当たり前のことを、当たり前に言っているだけなのに、なんであんな躊躇して、困った顔をするのだろう。

今までにも男達からちやほやされ、何も言わなくても、何もしなくても、許されてきたのだろうか。

おとなしいから、喋らないから、誰かがやってくれるから、皆が助けてくれるから。

かわいいという、だけで。

それだけで何もかも手に入れた女。

そっこの、不快に思う。

焼却場のゴミ山に、持ってきたごみ袋を思いっきり投げつけた。

「　　っつ！」

膝に痛みを感じた。

最近、夜中に痛みで目を覚ますことがある。

腕の関節、膝の関節に突然走る痛み。

成長期、なのだろうか。

中学に入って毎年四月に行われる身体検査では、身長だけが大きく数字を伸ばしていた。

一年生で百五十五センチだった身長は、この四月に測った時には百六十六センチになっていた。

教室へ戻ると部活へ行く支度をはじめた。

当然、由利に任せた日誌は終わっているものだと思い。

だが・・・

「あ、あの、ここ・・・」

そっこの日誌を持ってきた由利。

それを見た俺は啞然とした。

全くもって空欄の方が多いであろう。

こいつは俺がごみ捨てに行っている間、いつたい何をしていたのだ。

何をしていたら、ここまで終われていないんだ？  
込み上げてくる不快感。

「なんて書いたらいいのか・・・」

「適当でいいんじゃない。」

「えっと・・・でも・・・」

下を向き、困った顔の由利。  
ため息をつく俺。

「書くから。」

そう言って、由利から日誌を取り上げた。  
すると、

「きゃっ・・・」

え？

なんだ？

こいつ・・・

日誌を半ば強引に取り上げたかもしれない。

由利の手に、触れたかもしれない。

それだけのことなのに、なんだ？

こいつのこの反応・・・

下を向くのはいつものこと。

泣き出すのはいつものこと。

怯えているのはなぜ？



「あー！」

「何由利ちゃん泣かせてんだよー。」

そう言つて二人の男子が教室に入ってきた。

「由利ちゃん大丈夫？」

「おまえ由利ちゃんに何したんだよ？」

由利のことを好きだという浅野、小田切だった。

おまえらこそ、なんだんだ。

面倒くさいことになった。

「別に。」

「別につて、なんだその言い方。」

「おまえが何かしなかったら由利ちゃんが泣くわけないだろ？」

何もしなくてもそいつは泣くさ。

何も言わなくても、何もしなくても、泣けば誰かが助けてくれるのだから。

泣けば皆が助けてくれるのだから。

「つてか、マジなに泣かせてんだよ。」

「おまえ調子のもつてんじゃないよ。」

睨み付けてくる。

だから睨み返してやった。

「なんだよその目。」

大変気分を損ねたようだった。  
だが、俺も気分が悪かった。  
また関節が痛む。

何も言わない由利がムカつく。  
その由利を庇う奴らがムカつく。

「おまえさー、ちょっと頭いいからって調子のんじゃねーよ。」  
「由利ちゃんと隣の席だからって目立つことすんなよ。」

頭がいいのも、席が隣なのも関係の無いことだろ。

単に、おまえらのおもちゃを横取りされたのが気に入らないんだ  
ろ。

そんな単純なこと、わかんねーのか。

そんな単純なこと、わかんねーのか、俺は。

相手にすることない。

かわることない。

かわらなくていい。

ただ、それだけのこと。

それなのに、なんで俺はこんなにイライラしてるんだ？

翌日。

昨日の放課後は散々だった。

部活をサボって家へ帰った。

不快なことというのは連鎖するようで。

珍しく塾の無い亘兄と帰りの時間が重なってしまった。

亘兄と目が合う。

「部活も勉強も中途半端か？」

ふつと鼻で笑いながらそう言い残し、二階へ上がった。  
俺は何も言わなかったし、何もしなかった。  
ただ、それだけのこと。

四時間目が体育だった。

男子は体育館でバスケット、女子はグラウンドでマラソンだった。  
体育の授業は男女別、二クラス合同で行われる。

三組と四組が同じ授業。

スポーツは嫌いではないが、好きでもなかった。

「ピピ　　っ、交代。次、CとDグループ、コートに入れー。」

体育教師が笛を吹く。

休憩が終わり、俺のいるCグループが試合をする番になった。

「晃君、見てくれたー？オレのスペシャルシュートっ！」

さっきまでの試合で疲れているはずが、

いつも通り陽気な声の主、二宮。

「もうちょいでダンク行けると思うんだけどなあー。」

確かに、百八十近い長身の二宮なら、できなくもなさそうだ。

「やっぱオレ、陸上辞めてバスケットにすっかなー。」

相変わらずおめでたい奴だ。

俺だけでなく、あっちこっちに言って話しかけている。

あれだけ動いたのに喋りは止まらない。

元氣な奴だ。

タケも、健太も、さっきの試合に出ていたグループなので、二人とも床に転がり込むようにして座っている。

運動部でない二人にとってはきつい時間だったのだろう。

「ピ。。」

再び笛が鳴り、試合がはじまる。

嫌いじゃないが、好きでもない。

授業であるから適当に。

無難な動きをしているつもりだった。

バシッ！

味方からパスがくる。

受け取る。

バシッ！

またパス。

バシッ！

おいおい、俺はそんなに頑張るつもりはないから、現役バスケット部員栗山の方へまわした方が利口だぞ。

そんな風に思っていた。

ところが……

その同じチームの、現役バスケット部員栗山からパスがまわってくる。

しかも頻繁に。

そしてだんだんと速くなる。

おいおい。

パスというより、俺目掛けて投げてないか？

しかも強い球……

ベシッ！

「　　っつ！」

今度は背後から、球が飛んできて首辺りに当たった。  
痛みが残る。

おいおい、ちゃんとコントロールしろよな。  
いくらなんでも背後のコースは読めねーよ。  
今度は真横から。

受け取りきれずに、耳の辺りをかすめた。

「ピッピッ。」

ボールが外へ出る。

「ピッ。」

笛の合図でスローイン。

試合再開と共に、またも次々と激しいボールが飛んでくる。

肩に、背中に、腹に、膝に……

おいおい、これじゃあバスケじゃなくてドッジボールだろうがッ。  
バシッッ!!

「いって!!」

受け取れず、避けきれず、もろに顔面に当たった。

「わりー。」

「せんせー、穂高君と交代させて下さいー。」

待機していた交代枠の一人が、コートに入る時、俺に言った。

「調子に乗ってんじゃねーよ、バーかつ。」

コート内に響き渡るかすかな笑い声。

どの表情も笑みがある。

ああ。なるほどな。

俺は何も言わないけれど、何もしないけれど、その時初めて全てを理解した。

ただ、それだけのこと。

体育館から出ると、同じく体育を終えた女子がグラウンドから戻るところだった。

「由利ちゃん。」

「女子はマラソンだったの？男子はバスケットだよー。」

「由利ちゃんに見て欲しかったなー、俺のシュート。」

「おれもーおれも。」

バカな男達が由利を囲む。

困って下を向く由利。

その男達を睨み付けている斉藤。

いつものことだ。

いつもの光景。

「おっ、もーえーっ。」

「にのっ！」

「男子はバスケット？いいなー。」

「女子はマラソン？」

「千五、タイム計測だったよー。もーいや。」

「ははは。もえは短距離派だもんなー。」

「あ、タケちゃん。」

「なんだ？辞書なら持つてないぞ。」  
「ちがうよー。」

いつもの辞書女。  
いつもの光景。

いつもと違うのは……

そういえば、辞書女、体育が一緒ってことは四組ってことか。  
隣のクラスだったのか。

まあ、クラスなんて知ったところで俺には関係ねーか。

次は教室で授業か。

由利の隣の席で。

由利にはもうかかわりたくない。

ただ、それだけのこと。

それから体育祭があつて、合唱コンクール、日帰り旅行と行事が続いた。

理科、化学、体育、美術、技術、音楽、これらの授業は移動教室なので隣の席に由利が座ることはない。

朝と帰りのHR、一日の授業の中で三つか四つ、隣の席に座る由利との時間。

常に誰かに見られているような、見張られているようで、睨まれているようで、苦痛。

相変わらず由利は下を向いているし、少しきついことを言つと泣き出す。

俺にはそれが理解できない。

だから余計に不快。

由利を見ていると苛々する。

そんな由利を庇うバカな男達を見ると苛々する。

だからつい、由利への態度が悪くなる。  
だから余計に男達から睨まれる。  
そんな悪循環。

痛む関節。

成長期なのだろうか。  
幼稚な考えの男達も、成長してはくれないだろうか……  
抜け出せない悪循環の輪。  
ただ、それだけのこと。

「あははははー。」

「笑うな。」

「だって……あははっ……」

「タケ、笑い過ぎ。」

「わ、わりー……だー、笑える。」

まだ笑っているタケ。

笑いをこらえようとしているのだったが、肩が笑っている。

「そんな事で苛々するとは、晃も人間ばいってことじゃん。」

日曜日、タケの家に遊びに来た俺は、由利の事を話してみた。

「しかも、晃マジな顔で話すからさ、それがまた笑える……くっく……」

再び笑いのつぼにはまったタケ。  
真面目な話しのつもりだが。



「晃が人のこと気になるなんてな。」

「気にしちゃいねーよ。」

「そういうの、気になるって言うんだぞ。」

「わかんねー。」

「そしてそれを人は恋と呼ぶ。」

「ありえねーよ。」

「気にする？」

「気になる？」

「俺が？」

「由利を？」

「まさか。」

「気にするどころか、見ているだけで苛々すんだぞ。」

「隣に居る時間は苦痛なんだぞ。」

「それが恋なわけねーだろ。」

「タケに話した俺が間違っていたのか？」

「いや、タケなら話せると思ったし、タケになら話してもいいと思った。」

「タケしか話せる友達なんていないけど。」

「おれもあるぞ。」

「え？」

「笑いがおさまったタケが言った。」

「なんつーか、気を引きたくていじわるしちゃう？」

「それはあいつ等のやってることだろ。幼稚ないじめ。」

「確かに。晃の言う通りだな。」

「俺は別に由利の気を引きたくて苛々しているわけでもないし、き

ついことを言っただけ泣かせているわけでもない。

ただ……

どうにもならない、無性に苛々するこの気持ち。  
なんなんだ？

「じゃあさ、なんで晃は由利ちゃんのこと完全無視、できないの？」  
「え？」

「かわらないって決めたらさ、今までの晃ならとことんかわらないじゃん。相手が困ろうが、泣こうが、関係なく自分のスタイルを貫いてた。」

そうだな。

確かにタケの言う通り。

女子に何を言われようが、言われなくても、関係なかった。  
基本、人とかかわりが面倒くさいし、まして女子なんて面倒くさい。

だから俺が居ようが居まいが関係のなかった……

そう、去年の俺は泉くんを守られた、泉くんの作ってくれた人間関係の中にいたから、それで許された。

それが許された。

でも、今は違う。

泉くんはいない。

代わりに、友達というタケを見つけた。

俺はそれで満足だった。

俺はそれで良いと思った。

タケがいれば、それでいい……と。

でも、タケは違う。

俺とは違う。

タケと出会ってから、俺は自分のこと、家のこと、母親のこと、兄貴達のこと、少しずつ話せるようになった。

でも、まだ話していない事の方が多い。

タケは自分についてのほとんどを話してくれている。

タケは、裕福な生活を手に入れながら、いずれ自分の好きなことを諦めなければいけない。

そういう境遇に立ち、見た目よりもお金よりも、中身を大事にする、そんなタケだから、俺はここにいます。

「まあ、恋じゃないとしてもだ、周りが自然に晁のこと、わかってくれると思うぜ。」

「別に俺は・・・」

去年、タケが変わったのは晁くんがいたから。

裏番長的存在の晁くんが、クラスのやつらにタケを受け入れさせてくれた。

俺は何もしていない。

俺は何もできなかった。

二年になって、晁くんがいなくても、タケが変わったのは自分の力。

俺は何もしていない。

それでもタケはうまくやっている。

タケ、健太、二宮、クラスの奴ら。

俺は今度こそ、自分で人間関係というのを築かなければならないのか。

そんな面倒くさいこと、しなければならぬのか。

俺が一番面倒くさいとしている、人とかかわること。

そしてそれは一番苦手なことでもある。

ただ、それだけのこと。

十一月になった。

毎年恒例の写生大会。

去年と同じ、人気の無い、静かなあの場所を選んだ。

タケと健太はグラウンドの方で描くと言っていた。

サッカーゴール、グラウンドが見渡せる階段の上、校門の木、校

舎、これら定番人気の場所には毎年たくさんの人が群がっていた。

そんな所で落ち着いて絵なんか描けるかよ。

俺は来年もこの場所で描こう。

そんなことを思って過ごした。

静かな中庭。

空を背景に、緑の芝に色を落とす。

絵の具の匂いは落ち着く。

まだ家で絵を描いていた頃、縁側に座って描くのが好きだった。  
ばあちゃんに買ってもらった絵の具を、縁側に並べて、眺めてい  
るだけでも幸せな気分になった。

そんなので幸せを感じられるなんて、幼稚だろう。

でも、あの頃は、それで良かった。

それが良かった。

お絵かきは、楽しかった。

今日は午前で終わり。

午後は部活。

行事続きの二学期も、終わってしまえばなんてことはない。

俺は静かに、学校生活を送りたいだけ。

ただ、それだけのこと。

その日、家に帰るとばあちゃんが言った。

「あら。絵の具の匂いだが。」

年をとっても、嗅覚は衰えないようだ。

「写生大会だったんだ、今日。」

「制服脱いだらよこしー。干しとかんと匂い消えんで。」

俺は制服を脱ぐとばあちゃんに渡した。

ばあちゃんが制服をハンガーに掛けながら言った。

「懐かしー匂いばする。」

「そう？」

「晃がちつちえ頃は家人中、よう絵の具の匂いしてたが。」

消臭スプレーを吹きかけると、外へ干しに行った。

「縁側が好きでなあ。ようここで描いottaが。」

俺も今日同じことを思い出していたので驚いた。  
ばあちゃんも覚えていたのか。

絵の話。

小四の時に描いた一枚の絵で賞を取った。

家族の誰もいい顔をしなかった。

それだけはよく覚えている。

だから俺はその日から、家で絵を描かなくなった。  
絵の具も、絵筆も、画板も、全て学校に置いたまま。

ばあちゃんの横顔を見る。

絵の話をして思い出すのは母親のことだろう。

アトリエで、絵を描いていて、早産で、発見が遅れた母親。  
俺が生まれたことと引き換えに、命を落とした母親。

絵の話は、決まって家族を苦しめる。

絵の話は、俺の立場も悪くする。

でも……

その日見たばあちゃんの横顔は、それほど悲しそうではなかった。  
ただ、それだけのこと。

二学期も終わろうとしている十二月。

先日行われた期末試験の結果が掲示板に貼り出された。  
健太に付き合っ見て行った。

「だー、やっぱり入っているわけがないか、俺なんて。」

貼り出されたばかりの掲示には、人だかりができていた。

「晃君は十三位だし、タケは五位。そして一位は聡一君。うちのクラスどうなってんだよー。」

少し順位を落とした。

由利の隣になってからだ。

と、そう決め付けるのは俺も小さい奴だなと自分で思う。  
他にも要因はあるだろうに。

部活は皆入っているし、塾にだって通ってる奴もいる。

勉強の時間なんて、取ろうと思えば自分次第。

勉強するのもしないのも、自己責任。

今までは特にすることもなくて、一人で過ごす時間は無駄にあつたから、勉強には困らなかった。

タケと遊ぶ時間が増えたからといって、タケは順位を落とすどころかむしろ上がり続けている。

そんなのは皆同じ。

自己管理。

ちよつと自分が情けねー。

「あー、負けたあ。」

「よっしゃ、帰りのジューズは萌ちゃんのおごりなー。」

「くやしい。」

「二勝一敗。」

ふと、聞き覚えのある声の方に目を向ける。

辞書女。

と、同じ蓮田小出身の笠原 祐也。

相変わらず辞書女は元気に喋り、跳ね回っている。

ジューズ一本の賭け事位で、一喜一憂できるとは幸せな奴だ。何の悩みもなさそうに。

「もー、次こそは負けないからねっ。」

「受けてたとうー。ははは。」

笠原祐也の順位を探した。

十二位。

おいおい、俺より上だったんじゃないか。

ってことは、辞書女、祐也に負けたものの……三十位内に入

ってたつてことか？

二勝一敗、って言ってたか。

祐也が一敗は負けているということは……

おいおい、そんな変わんねー位置に、いつもいたつてことか？  
頭悪そうに見えたのに。

人は見かけによらねーのか。

ただ、無駄にうるさい奴だと思っていた。

ただ、それだけのこと。

また日直当番が回ってきた。

当然、隣の席、由利と。

おそらく、由利と組むのはこれで最後になるであろう。

三学期に入ればまた席替えがある。

そう思えば多少の苛立ちは抑えることが出来た。

「ほ、穂高君、ここの記入はこれでいいかな？」

「いーんじゃね。」

相変わらず消極的で、自分で進められず、いちいち人に確認を求める由利に、苛立ちを覚えながらも、俺は俺で確認もせず、適当に返答する。

それがまた、由利にとってはつらいようで、また下を向いてしま  
う。

そろそろ泣くか？

由利のパターンは単純だ。

まず相手に話しかけるまでに、躊躇、緊張があるから、話しかけて冷たい態度を取られると、すぐに困る。

次に話しが進まないものなら、困っておどおど。

そこにきつい一言または態度が入ろうものなら、泣き出すである



う。

かわりのパターンを決めてしまえばどうにでもなるものだ。  
困るのも、下を向くのも勝手だが、泣き出すのだけは勘弁して  
もらいたい。

俺だって好きで女を泣かせているわけではないし。  
そういうことをわざとする誰かさんとは違うし。  
そう、違うと思っていた。  
でも……

由利の日誌の速度に合わせてやることにした。  
隣ではなく、前の席に座ることにして。  
相変わらず綺麗な字。

由利が書く字には、ついつい目を奪われる。  
気がつくと、由利は見られていることに緊張して、シャーペンが  
進まなくなるようだが。  
そしてこうなる。

「あつ。」

消しゴムを落とす由利。

俺も拾おうとして、二人の手が重なる。

次の瞬間

この顔だ。

この顔が、たまらなくイライラする。  
今にも泣きそうな、悲しみいっぱいその表情。  
涙をこらえるのに必死です的な、表情。  
こらえているから、泣かせてみたくなる。  
こらえているから、泣かせたくなる。

次の一言

「男嫌い？」

この一言で決まる。

「そんなかわいいとさ、大変じゃない？」

命中。

外したことは無い。

単純明解。

こんな簡単な答え、テストにも出ないぜ。

「なんか言ったら？」

零れ落ちる涙。

まったく簡単でつまらねー。

試合をしてもいないのに、勝った気分だな。

後悔も罪悪感もない。

俺はこういう奴なんだ。

由利を泣かせてなんになる？

俺はいつたい何をしたい？

俺のやってることはあいつらと変わらないじゃないか。

俺が嫌ってるあいつらと。

結局同じ、俺も幼稚なまま。

体は成長期かもしれないけれど、中身は全然変わってない。  
むしろ、幼稚園児の方がもっと純粹だろう。

幼稚な考えを持ったまま、大人の考えも知ってしまった。

小さい頃から自分がどういう立場にあって、どうすればいいかを  
悟るのが得意だった。

母親が亡ないのも、父親が居ないのも、ばあちゃんに育てられても、それは関係ない。

ただ、それだけのこと。

「てめー、いい加減にしろよ。」

「由利ちゃん平気？」

また出た。

浅野、小田切、由利好き二人組。

「前にも言ったよな？調子のんなつて。」

「おまえ由利ちゃんに何したんだよ？」

「・・・・・・・・・・」

「黙ってねーで、何とか言えよ？」

別に。って言っても前みたいに納得はしないだろ。

だから黙ってたのに、何か言えって・・・・・・・・

学習能力の無い奴らだな。

「由利ちゃん泣かせたらどうなるか位わかってんだろっつな？」

「ム力つくんだよ、おまえ。」

おまえらだつて、似たようなことやってんじゃん。

由利が泣こうが泣かなかりうが、どっちにしろ由利に近づくだけで面白くないんだろ。

もうこんな面倒くさいこと、終わらせろよ。

俺にどうしろって・・・・

「あつれえー？何してんのー？」

気が抜けるほど、陽気な声。

こんな声を出す奴は一人しか知らない。

「あら。また由利ちゃんいじめてー。男三人だなんて卑怯だよねー、由利ちゃん。」

二宮が教室に入ってきた。

「ちげーよ、にの。」

「そうそう、由利ちゃんいじめてんのはこいつ。」

「えー、晃君？」

「そう。俺らは由利ちゃんを助けたの。」

「そうそう。」

「ふーん。」

この状況下においても、相変わらず意気揚々と、笑顔をふりまく二宮。

「でもさっ、やっぱり俺には由利ちゃんを三人がいじめているようにしか見えないけどな。」

「あ？にの、何言ってるの？」

浅野の表情が変わる。

「だってさあー、浅野つちと、小田切くんが由利ちゃんを助けているにしては、由利ちゃん泣いてるし。」

「あ？意味わかんねー。」

浅野の陰しい視線が二宮に向けられた。

「ふつつ、助けてもらったら泣き止むもんじゃない？」

二宮は怯むことなく明るいつ調子で話し続けている。

「ねー、由利ちゃん。」

確かに。

二宮が入ってきてから、由利は泣き止んだ。

浅野と小田切と俺との言い合いがはじまった時には、大粒の涙をこぼしていた由利。

そんな由利の顔を見て、浅野が一步怯む。

「そ、そんなことないよねー。由利ちゃん。」

「由利ちゃんもしかして、俺達のこと怖かった？」

小田切が笑顔を作って尋ねる。

コクン。

由利が小さく頷く。

「ほらねー。由利ちゃんをいじめてたのは君達三人。はい、全員由利ちゃんに謝るー。」

そう言つと、手で俺達三人の頭を押して下げさせる二宮。

何で俺が謝るんだと、不服ながらも二宮の長身から出る手の力には逆らえなかった。

「由利ちゃん、ごめんね。」

まず小田切が謝る。

「ごめんな、そんなつもりじゃ・・・」

「はい、浅野っち、やり直し。」

「えー、なんでえ？」

「言い訳はしない。謝るだけ。」

再び二宮に頭を押される浅野。

「だって、もとは穂高が・・・」

「はい、浅野っち、やり直し！」

「おいおい、なんでだよー！」

「潔く、謝りましょうー！」

鋭い二宮のツツコミに、浅野はムツとした様だが、そのツツコミを見た由利が少し笑ったので、浅野はとうとう諦めたようだった。

「ごめん。由利ちゃん。」

「合格。」

二宮が満足そうに言う。

「はい、次、晃君も。」

「・・・悪かった。」

「ダメっ！全然だめ！」

「は？」

「気持ちが悪くもってない。」

「気持ち悪く・・・」

「はい、やり直し！。言い訳無用。」

「悪い。」

「ダメっ！」

「悪かった。」

「ぜんぜん、ダメーっ。」

「悪い・・・と思ってます。」

「却下！」

ダメって何がだ？

気持ちが悪くもってないって何だよ？

何なんだいったい・・・

「ご、ごめん。」

「ブー、言葉変えてもダメです。」

「・・・ごめん・・・なさい。」

「晃君、女の子に謝ったことないの？そんなのじゃ全然伝わらな  
せーん。」

「ぶはっはははっ。」

「あはは、おもしれー。」

それまで黙っていた浅野、小田切が突然吹きだして笑い出した。  
それを見た由利も笑っている。

「穂高、それはマジで笑えるわ。」

「謝り方、棒読みだもんなー。ははは。」

まだ笑っている浅野、小田切。

「はい、もう一回。真面目にやってよ、晃君。」

「・・・俺はどうすれば？」

「はい、やり直しー。ちゃんと謝る！」

「だからどうすれば・・・」

「悪いことをしたら謝る！そんなことも知らないのー？お子ちゃま

だねー、晃君は。」

さらに笑い出す浅野、小田切。

「だから、悪かったって。」

「うーん、微妙に違うんだよねー。」

首を傾げる二宮。

「にの、おまえの微妙って・・・」

笑いの止まらない浅野が言う。

「まあ、仮合格ってとこですかね。」

「か、仮合格って・・・そんなんあんの？」

今度は小田切がツツこむ。

男子達のやりとりを、由利はもうすっかり笑って見ていた。

「どうする？由利ちゃん。」

「え、えっと・・・大丈夫。」

「だって。良かったね、晃君。」

「よ、良かったな、穂高。ぐははは。」

まだ笑っている浅野。

「おもしれー、謝るのにこんなにやり直しさせられた奴、初めて見たー。」

「あははは、マジ笑える。」

「穂高、おまえおもしれーな。」



「なつ。なんか穂高つて喋んねーし、何考えてるかわかんなかったからつい突っかつちやっただけ。」

「そうそう、静かなガリ勉野郎かと思つてた。」

「女子と話さないのに、由利ちゃんにだけはちよっかい出すしさ。」

「でも、謝ったことがないなんて、笑えるよなー。」

「ほんと。あれは笑えたー。棒読みー。由利ちゃんもびっくり？」

思い出し笑いに入つた小田切。

「やっぱ由利ちゃんは笑顔もかわいいつ。」

「結局それかよー。」

「由利ちゃん、また困つた時には呼んでねつ。謝らせ屋ニ宮参上！てねつ。」

「だははははー。」

「にの、それいい！」

俺は面白くもなんともねーよ。

面白くしたのがいるからそう見えるだけ。

そう、面白くした奴が。

そいつは、最後にこう言つた。

「由利ちゃんも、泣く前に、ちゃんと自分の気持ち言わなきゃだめだよ。」

その後で、由利の見せた顔は、ちよつとかわいいと思つた。

可愛いと、可愛そうは似ている気がした。

ただ、それだけのこと。

その日、いつもより遅く登校すると、玄関からあの騒がしい声がしていた。

「やっぱ今川焼きは小倉でしょ。」

「えー、カスタードだよー。」

「小倉。」

「カスタード。」

「小倉。」

「カスタードだってばー。」

「じゃあ、今度の練習試合にどう?」

「いいねっ！祐也が負けたら私にカスタードだからねー。」

「小倉は二倍返しで。」

「負けないもん。」

こいつら、朝練を終えて玄関に入ってきたところらしい。  
手に持っているのはラケット。

テニス部だったのか。辞書女。

「あ、予鈴鳴る。」

「やべっ、俺担任に呼ばれてたんだっただ。」

「祐也のドージッ。」

走り出す祐也。

「生活委員の笠原くん、廊下を走ってはいけませんよー。」

「萌ちゃん・・・覚えてろよー。」

「いやですよーっだ。きやは・・・。」

そう言つと、たちまち静かになった。

そして、職員室へ続く廊下を、彼の姿が見えなくなるまで、見ていた。

「はよー。」

「おつす、晃君。」

「おお。」

教室へ入ると、浅野、小田切に話しかけられた。  
俺も挨拶を返す。

「おつはー、晃君珍しいねー、時間ギリギリ。寝坊？夜更かし？それともごめんなさいの練習？」

「ぶははっ。まだ練習してんの？」

「にの、面白すぎ。」

盛り上がる三人を通り、自分の席へ座った。

「ごめんなさいの練習って？」

「タケ、聞いてたのか？」

「聞こえたのー。」

タケの顔には笑みが浮かんでいた。

「あいつらと仲良くなったんだ。」

「別に。」

挨拶する程度にはなったが。

「ふーん。」

笑みを込めた返事を打つタケ。

「ほ、穂高君、おはよう。」

隣の席から由利がつぶやく。

「ああ。」

小さな声だったけど、下を向いていない分、ちゃんと聞こえてくる。

由利は相変わらず躊躇して、消極的で、泣きそうになる奴だけど、そんな由利にイラっとくることもあったけど、そんな時、すかさず飛んでくる奴がいる。

「謝らせ屋二宮、ただいま参上！」

それだけで、周りの男子が笑う。

それだけで、睨んでいた斉藤がため息をつく。

それだけで、由利が笑う。

そしてそこには……

いつの間にか、人が集まってくる。

泉くんのように。

お調子子者タイプであり、裏番長的存在でもあったってことか。

泉君くんのように。

認めるよ。

俺が嫌いとしていたタイプに、自分が救われた存在だったなんて笑える話だ。

もし、二宮が去年、同じクラスにいて、タケのそばにいたなら・

・

いじめは起こらなかっただろうか。

こういうタイプのやつが、そばにいたら・・・  
これだけは言えること。

俺は二宮みたいにはなれない。

だから、タケには俺がいて、健太がいて、二宮がいる。  
それでいいじゃないか。

それで。

ただ、それだけのこと。

雪が降りそうなくらい寒かったその日。

放課後、図書室へ行くのに美術室の前を通った。

辞書女。

勝手にそう呼んでいたが、正確な名前は知らない。

美術室の前にいた。

完全に足をとめて。

見つめる先には・・・

「めぐちゃん、行くよー。」

呼ばれてもなお、名残惜しそうに、視線を向けたまま、去っていった。

俺とすれ違う。

もう視線は友達へと戻っていた。

辞書女が立っていた位置に、俺も立つ。

一瞬、言葉を失った。

そこに飾られていたのは……

先月の写生大会で優秀作品として選ばれた八名の絵。

その中に……

サッカーゴール、グラウンド、校門の木、校舎、どれも人気の定番場所を描いた絵の中に、一枚だけ……

どこともわからない風景画が一枚。

俺の絵だった。

どうして。

当然、賞を取るために描いたものではない。

どうして。

俺の絵が、選ばれていようが、飾られていようが、誰も何も言わないじゃないか。

どうして。

あの辞書女が俺の絵を見ていたとは限らない。

どうして選ばれた。

ただ、それだけのこと。

二学期の終業式。

なんだかんだ長かった二学期も終わる。

体育館での終業式が終わると、教室へ戻ってHRとなった。

冬休みの諸注意等、担任の話がある。

最後に通知表。

まあまあ……か。

全九教科、五段階評価。

一応、五教科はオール五。残り四教科は四。

HRが終わると、教室をはじめ、廊下からも賑やかな声が聞こえてくる。

明日から冬休みか。

部活へ行く者、帰る準備をする者、待ち合わせをする者、人々のざわめき。

「由利ちゃん転校生なんだよね。」

「は？」

思わず変な声を返してしまった。

タケは気づいていないようで、話を続けた。

「訳有りで。母子家庭。噂によると父親に暴力を振るわれたとかで、男が苦手なんだって。」

「へ、へー。」

そう言うのが精一杯だった。

転校生という言葉を久しぶりに聞いたからなのか、由利がその転校生だったからなのか、俺は動揺を隠せなかった。

「どうした？ 晁、そんなに驚くことか？」

「い、いや。」

自分のこと、家のこと、母親のこと、少しずつ、タケには話すようになっていたが、絵のことを話したことはなかった。

「転校してきたのって……小五か？」

「いや、小三。」

答えを聞いて、ホツとしたのはなぜだろう。

「でさ、そんな時にも由利ちゃんいじめはあったわけだ。」

「ふーん。」

「まあ、いじめって言うてもかわいいもんだけどな。転校生なんて珍しかったからさ。まあ、おれもその一味だったわけだけど。」

前に、タケが。「おれもある」と言っていたのを思い出す。

由利をいじめたことがあるということだったのか。

転校生……か。

確かに、転校生は珍しいよな。

「オレもわかるなー、その気持ち。」

「にの。」

「タケやん、晃君、由利ちゃんの内緒話しはダメだよー?」

「聞いてたのか。」

「聞こえたのん。」

ハイテンションで答える二宮。

こいつの元気はどこから来るのか不思議な位だ。

「うんうん。オレもあるなー。つい、かわいくてな。どう接したらいいのかわからなくて気がついたら意地悪してる?みたいなっ。オレって悪い子。」

「でも、そんな昔の若気の至りってやつ?そのお陰で俺はこうしてクラスの皆を守る立場にあるわけだ。うんうん。女の子には優しく男の子には親切につてねー。これ、オレのモットー!」

よくこれだけ一気に喋れるものだ。しかもジェスチャー付で。



「にーのっ。」

「おー、もえーっ。」

廊下から呼ばれると、すぐに反応してこの場から去って行く二宮。こいつの目と耳はいくつあるんだ？全く活動的な奴である。そしてその二宮を呼んでいたのは、あの辞書女だった。

「にのも由利をいじめてたのか？」

「いんや。にのはその時違うクラス。にのがいじめた転校生はあっち。」

そう言っ、タケが視線を送るその先にいたのは……  
なんと、あの辞書女。

「あいつ、転校生なのか？」

「そう。小五ん時の。で、にのがいじめまくってた。信じられない  
だろ？」

「……………」

言葉が出なかった。

「にのもあーみえて、昔はけっこう威張ってる奴でさ。あいつのこ  
と大事にしてんのは、そんなにのを変えたのがあいつだから。」

「あいつって？」

俺はそう言い、タケの次の言葉を待った。

早く、聞きたいような、聞いてしまいたいような……  
聞きたくないような、聞いてはいけないような……

「あれ？知らなかったっけ？」

俺は首を縦に振った。

「椎名 萌。」

忘れていたし、思い出すこともなかったこと。

探そうだなんてそんな面倒くさいこと、どうして俺がするだろう。  
でも……

そういえば、この学校のどこかにいるんだよな。

どこかに……

ただ、それだけのこと。

冬休みに入った日曜日。

タケの家でクリスマスパーティーをした。

クリスマス……なんて雰囲気は一つもないが。

「やっぱケーキ位買えばよかったか？」

「いんじゃない？別に食べねーし。」

「そうそう。こうしてゲームがし放題なだけで幸せ。」

「タケんち広くていいーよなー。」

「お手伝いさんも優しいしー。」

「今日はいないよ。」

「え？そうなの？」

男六人、クリスマスパーティーのわけないだろう。

今日がクリスマスだから。

二十五日に集まったから。

ただ、それだけのこと。

「おい、焼けたぞ。」

「おー、すげー。」

「いー匂い。」

「なんだなんだ？ケーキじゃん！」

「マジで？ケーキだ、ケーキだ！」

「すっげー。こんなん作ったの？」

「晃君が？」

タケの家がいくら広くても、野郎六人も入ればうざいだけだ。

それなりに、人とかかわりから遠ざかっていた俺にとっては、例え男であろうが、一度に六人も集まれば面倒くさい。

ゲームは対戦四人までしか出来ないし。

ゲームの順番が空いた時間に、お手伝いのおばさんがいないという台所を借りただけ。

小麦粉と、卵と、牛乳と、苺があれば簡単だ。

「晃君、いいお嫁さんになれるぜ。」

「嫁さんっておいっ。」

「あはははー。」

「晃君にこんな特技があるとは。」

「ただのガリ勉くんではなかったんだなー。」

「あー、でもなぜ男の作ったケーキを食べるクリスマス……」

「彼女欲しい。」

「オレも欲しいー！」

「由利ちゃんとクリスマス。」

「おまえ由利ちゃん由利ちゃんってしつこ過ぎー。」

「謝れー。」

「あははははー。」

タケ、健太、浅野、小田切、栗山。

ここに二宮の姿がないというのもいつも通りだ。  
あいつはどこかでふらふらしているのだろう。

声はかけたが、一つのグループに入らないのが二宮だから。  
あいつのそういうところ、すげーと思うけど。

俺にはできない。

「タケ、第二小の卒アル見たーい。」

「おお、いいよ。」

「あ、俺も見たいー。」

「おまえはどうせ由利ちゃん探すんだろ。」

「バレたー？」

「バレバレー。」

集まった中で、タケ以外の奴は蓮田小出身だった。

「あー由利ちゃん見つけ！」

「どこどこー？」

「おっ、ほんとだー。かわいいーな。」

「由利ちゃんこん時からかわいかったんだー。」

「いーな、タケは同じ学校で。しかも同じクラス。」

「なんで由利ちゃんは第二小だったんだ？転入するなら蓮田小でも  
よかったのにー。」

本気で悔しがっている浅野の表情。

小田切と栗山も由利ファンだけあって、アルバムの中の由利に見  
入っている。

「なに？由利ちゃんて転校生なの？」

「なんだ、健太、そんなことも知らないのかー？」

「そんな基本情報はとつくに入手済み！」

「いや、だって俺、別に由利ちゃん好きじゃないし。」

「あつそ。ライバルが一人減ったというのはラッキーだ。」

「そうそう。」

「あ、そういえば晃君、由利ちゃんのこと好きになっちゃったか？  
「は？」

急に話を振られたこともそうだが、あまりに情けない質問だ。

「だってさ、後期の委員会は別々になったものの、席は隣のままだ  
つたじゃん。」

「だよな。由利ちゃんの隣、やっぱ羨ましーぜ。つーか憎い。」

「三学期の席替えは、俺が隣になれますよーに。」

「オレもなりてー。」

浅野の両手は祈りポーズをとっていた。

「で、晃君、由利ちゃんのことどう思ってたんの？」

「別に。」

「でたっ！別に。」

「それ、どっちの意味でも捉えられるからさー。よくないぜ。」

「晃君って、ああ。とか、別に。とか、多くね？」

「あ、それ俺も思ったー。」

面倒くさい。

やっぱり面倒くさい。

男とはいえ、かわるのが面倒くさい。

こんな時、あいつがいれば、一人で五人分は喋るのに。

あいつがここに居たら、俺は何も言わなくても、何もしなくても、  
関係なかったのに。

そうやって、人に人間関係を築いてもらって、任せているのがよくないんだよな。

それはわかったけど、

それはわかってるのだけど……

やっぱり面倒いと思ってしまうのが本音。

「くくくつ。」

それまで黙って聞いていたタケが笑い出した。

「晃はそんなだよ。一年時からずっと。」

「そうなの？」

「そう。あんま喋らない。」

「ふーん。」

「でも、ちゃんと話は聞いてるから、道理に合わないことはしない奴だぜ。」

「タケ、それまじで？」

「マジで。それは俺が保障する。」

タケは俺の方を見ながらそう言った。

「じゃあ、俺らが由利ちゃんのこと好きなの聞いてるってことは、晃君は好きになんない？」

「そりゃー……好きになるかならないかは自由だろー。」

「えーっ、じゃあやっぱ晃君はライバル。」

「決定だな。」

「なんだよそれ……」

俺の言葉も虚しく、浅野はうんうんと、首を縦に振って納得しているようだった。

「じゃあ、次、タケは？」

「おれ？」

「そう。タケの好きな奴は？」

「誰？誰？」

「ははっ、安心しろ、由利ちゃんじゃねーよ。」

「よおっし。健太とタケはライバルではないな。」

「そうだ、タケの知ってる由利ちゃんの話し聞かせてよー。」

「小学校の話とか、由利ちゃんの好きな奴とかの話。」

浅野に頼まれ、思い出すように由利のことを話し始めるタケ。

由利……か。

由利は転校生だった。

それは、小三の時。

蓮田第二小の転校生か。

ふと、思い出す。

小四の夏、賞を取った絵のコンクール会場で会った子。

蓮田小に転入すると言っていた子。

その年、転校生は来なかった。

次の年も、転校生は男だった。

転校生……か。

第二小の卒アルに目を落とす。

タケと同じクラスに……

見つけるその名は……

椎名 萌。

この間、こいつも転校生だと知った。

顔を見る。

かわんねーな、今と。

あの時会った子の、顔はもう思い出せない。  
ただ、それだけのこと。

5 .

三学期になった。

席替えをした。

由利とは離れた。

一年に何度が行われるこの席替え。

やっぱりこんな面倒くさいことはない。

騒がしくなるだけだ。

予感的中。

隣は二宮。

「あつきらくーん。隣の席だなんて。にの感激！」

騒がしい三学期のはじまりだった。

「あれ？にの、席替えしたのー？」

「もえーっ。廊下から見えにくい席になったから寂しいでしょ？」

「いや、見てないって。」

「えー、もえ、オレのこと見てくれてないのー？」

「あははは。」

早速、やって来た辞書女、椎名萌。

早速、うるさくなる休み時間、二宮の隣の席。



「オレはもえのこといつも見てるよ。今日は二つに縛ってるねっ。かわいいー。」

「ほんと？一つに縛るのと、二つに縛るのどっちが似合うかな？」  
「んー、もえならどっちもかわいいーっ。」

そう言つと二宮は椎名萌の頭を撫でた。

正直、どっちでもいい話だろ。

一つに縛ろうが二つに縛ろうが、関係ない。

「おまえら怪しいぞ。」

タケがやって来た。

「椎名、今日も辞書か？」

「ちがうよー。今日は借りないよー。」

「今日は。か。」

「もー、タケやんのいじわるーっ。」

「なにい？タケやんだろぅが、オレのかわいいもえをいじめるやつは許さーん。謝らせ屋二宮、参上！」

「あはははー、なにそれー」

「いつものことだ。」

にのを冷たくあしらうタケ。

「めぐちゃーん、まだ？」

「千夏っー。」

廊下からの声に反応した二宮は、一目散に走っていった。

「もう、にのつてば。ちなっちゃんへの態度わかりやすすぎっ。」

そう言つと、後を追う椎名萌。

そして、その後姿を目で追うのはタケ。

この間、タケの好きな奴の話になった時……

由利ちゃんじゃねーよ。そう言っていたタケ。

タケの好きな奴は……こいつか？

廊下からは引き続き喋り声が聞こえてくる。

二宮、椎名萌の姿も見える。

やたらと二宮に懐いていて。

二宮も、女子とは常に話しているが、他の女とは違う扱いをしている。

タケも目で追つてる女……

あいつの先には……

ああ。

ほら。

そう。

あいつが見ている先にいたのは笠原祐也。

部活のない休日。

珍しく、父親が家に居るのに気がついた。

何となく嫌な予感はしていたが、トイレに行きたいので一階へ降りないわけにはいかなかった。

足音を立てないように階段を下りる。

予感的中。

居間にいたのは、父親と、ばあちゃんと、三兄。

「だからなんでダメなんだよー。」

「亘、駄目とは言っていないだろ。話を聞きなさい。」

なにやらもめている気配。

「亘、おまえの気持ちもよくわかる。でもな、うちにはまだ晃もいるんだ。」

「あんな奴のことなんかしらねーよ。」

「こりやつ、亘。」

「あいつがどうしようが俺には関係ないし、あいつのせいで俺が被害を被るなんて御免だ。」

「亘、いい加減にしーやつ。」

ばあちゃんの怒鳴り声が聞こえてくる。

タイミング悪く……

水を流す音と共に、トイレから出てきた俺。

当然、ばあちゃんに気づかれ、声をかけられる。

「ちょーどよかった。晃もきんしゃい。」

開けたままの襖からは、畳に向かい合って座る父親と、亘兄の姿が見えた。

ばあちゃんに言われるがまま、俺は襖の近くに座ることにした。

「晃。母さんから学校のことは聞いている。成績も安定しているよ。うだな。」

久しぶりに見る父親。

久しぶりに聞く声。

それなのに、今更何の話をしようというんだ。

亘兄には睨みつけられた。

余計なこと言っなよと。

わかってる。

面倒くさいことは御免だ。

「今年は晃も受験だろう。高校はもう決めているのか？」

「まだ。」

「こいつに決めることなんてできねーよ。」

「こりゃっ、亘。」

「父さん、こいつはまだ絵を描いてるんだぜ。まさかとは思つが、美大に行きたいと言わないよな？」

美大。

絵。

そのワードに家族全員が反応する。

俺も、ばあちゃんも、父親も、その言葉を口にした本人亘兄でさえも。

「そうなのか？ 晃。」

絵の話。

小四の時に描いた一枚の絵で賞を取った。

家族の誰もいい顔をしなかった。

絵の話をして思い出すのは母親のことだろう。

アトリエで、絵を描いていて、早産で、発見が遅れた母親。俺が生まれたことと引き換えに、命を落とした母親。

絵の話は、決まって家族を苦しめる。

絵の話は、俺の立場も悪くする。

「高校はM校を受ける。」

それだけ言うと、俺は席を立った。  
そうしないと、誰も動けないから。  
そうしないと、ばあちゃんが悲しむから。  
そうしないと、俺がもたないから。  
ただ、それだけのこと。

三月の朝の校庭はまだ冷え込む。  
朝早く目が覚めてしまったので、学校へ行くことにした。

いつもより早い登校時間。  
校庭には朝練に励む奴らが数人。  
そのほとんどが、ランニングをしている。  
基礎体力メニューというところか。  
基本的に朝練は自主性なので、よほど好きでない限り、早起きなんてしないだろう。

三月に入ったとはいえ、寒い朝に。  
部活動によって熱心なところは全員が参加しているようだが。

その中に、あいつを見つける。  
校庭でランニングをしている、椎名萌。  
隣で走っているのは河野ヒロアキか。  
あいつら二人、テニス部だったのか。  
走ってる時まで笑ってたのか。無駄だな。  
走ってる時まで喋ってたのか。無駄だな。  
いつもニコニコ、うるさい位に喋って騒いで。  
無駄な奴。

「おつす、晃。」

誰もいないと思っていた教室に入ると、タケが来ていた。

「珍しいな。早くね？」

「タケこそ。」

「おれはプリント探してて。」

「プリント？」

「そつ。選択授業のプリント。提出今日までだろー？昨日の夜気づいてさ、焦ったー。家に無いから学校だろうとは思ってたけど。それで早く来たってわけ。」

「ふーん。」

「晃は？選択授業何にした？」

「まだ決めてない。」

「まじ？じゃあ一緒にしよーぜつ。どうせ成績評価には関係ねー時間だし。」

二週に一度、選択授業が設けられている。

音楽、書道、美術、家庭科、英会話、体操、社会調査、パソコン、ボランティアから選ぶことになっている。

一選択が二十名前後の定員での活動となり、同学年の生徒がクラスに関係なく少人数で同じ授業を行う機会となっている。

例年人気は、音楽やパソコンに集中している。

人気のないところを選べば、十人以下の少人数で授業ができるので、静かに過ごせる。

今年はパソコンを選び、騒がしかったので、来年こそは静かに過ごしたいと思っている。

「なー、美術は？」

「え？」

「晃、美術にしねー？」

タケに、美術と言われ、自分でもよくない顔をしたのはわかる。

「晃？」

タケと出会い、自分のこと、家のこと、母親のこと、少しずつ、タケには話すようになっていたが、絵のことを話したことはなかった。

タケの表情は落ち着いていた。

だから、話せる気がした。

だから、話そうと思った。

だから、話すことにした。

タケになら……

タケなら……

わかってくれるだろうか。

恵まれた環境、裕福な生活を手に入れながら、いずれ自分の好きなことを諦めなければいけないタケなら……

「タケ、俺さ、絵は……もう……」

「晃が絵を描かなくなったのって、親父さんとか、兄さん達のこと関係あんの？」

俺の言う前に、見事に俺の代弁をしたタケ。

やっぱりこいつになら話せる。

「やっぱりね。そんな気がしてた。」

俺が何も言わなくても、ここに居るだけで、タケとは話せる。

「もったいねーな。雅画伯やKEIGOの味を知ってる晃の描く絵、俺すげー好きだったんだけどな。」

俺が何も言わなくても、タケは話を続けてくれるし、俺の言いたいことが伝わっている。

俺が何も言わなくても。

「晃さ、やっぱり美術にしねえ？そうすれば俺らの好きな時間に使えるじゃん。」

「いい案だと思うね？」

俺らの好きな時間。

その言葉で、十分だった。

「そうだな。」

「おっし、決まり。プリントも見つけたことだし、書いて提出だ  
ー。」

それ以上は深く聞いてこないタケ。

俺たちの距離感。

俺たちの時間。

タケと出会って、二年目の春が訪れようとしていた。

その日は二宮と日直だった。

ごみ捨て、戸締り、備品チェック、日誌記入。

全てが終わったところで、聞き覚えのある声がしてきた。

「ご苦労さまでーす。」



「もえーっ。」

「にのっ。日直だったんだー。」

「もえに会えるなんてラッキー。ねー、ねー・・・」

「はい、二宮君、日直の業務が終わってからにしてね。」

そう言っ、椎名萌と二宮の間に入ったのは笠原祐也。

「ぶーだっ。業務ならもう終わってるもんねー。」

「えー、にの早 いっ。このクラスが一番早いねー。」

「なんだ。」

どうだと言わんばかりの態度を見せる二宮。

祐也は苦笑いで日誌にチェックを入れている。

どうやら祐也と椎名萌は生活委員らしい。

生活委員は、日直の業務を終えた各クラスを回って、戸締り等の最終チェックを仕事としている委員会。

「そっいえば、小耳に挟みましたぞ。笠原君。」

二宮が邪魔をするように祐也に話しかけている。

気の毒に。

二宮の話につかまると長いぞ。

俺は荷物をまとめ、帰る準備を始めた。

「なんだ？」

「とっばけちゃってー。うしし。いいねー、彼女とラブラブでえー。」

「

祐也の表情が硬くなる。

少しの間が空く。変な空気が教室に流れたのを感じたのは俺だけ

だろうか。

「もーにの、からわうのやめなよー。」

いつもうるさいお喋り女も、気を遣ったような声を出していた。  
なんだ？

遠慮がちな会話。

相変わらず明るい二宮。

笑顔が陰しい祐也。

ただ、それだけのことだが。

祐也、彼女いんのか。

へえー。

じゃあ・・・

こいつは・・・

「あっきらくん帰るのー？おつかれー。」

鞆を持って教室を出ようとすると二宮に言われた。  
まるで、その言葉が合図のように。

祐也は日誌の記入に戻った。

椎名萌はうるさい位の声で喋り始めた。

俺は、一度だけ振り返り、教室を見た。

椎名萌。

蓮田第二小の転校生。

二宮が可愛がっていて、タケも目で追う女。

うるさい位いつも喋っていて、元気に駆け回って、さわがしい女。  
借り物が多い辞書女。

休み時間、二宮のところへ来ると、騒ぐだけ騒いで帰っていく。

騒いでいても、喋っていても、笑っていても、俺は関係ない。  
俺には関係が無い。

お互い様。

だって、こいつは俺を見ることがなかったから。  
そいつの見ている先には笠原祐也がいるから。

だから俺はこいつが転校生だろうが、なかるうが、  
もう関係ない。

もう関係が無い。

ただ、それだけのこと。

中学二年の春もさりげなく、でも確実に時を重ねて過ぎていった。  
なんだか周りがいつもより少しだけ賑やか。

自分には関係が無いと言い聞かせてしまえば済むことだ。

楽に過ごして何が悪い。

楽に考えて何が悪い。

いつも通り、俺は俺の描いた道を歩くだけだ。  
ほら。

夕日はもうとつくに落ちていた。

### 3・君の空

#### 三・君の空

1・

「ねー、あきらくんのママどこにいるの?」

「こらっ、しーちゃん、それは聞いちゃダメでしょ。」

「えー、なんでえ?」

「す、すみません。」

そう言つと母親は子供の手を引き、足早に去って行く。

「ねー、なんでえ?」

「ママーなんでえ?」

子供の質問は続く。

「晃、お団子買つて帰ろうか。」

「ばあちゃんが言う。」

僕はばあちゃんと手をつないで、夕日が照らす、オレンジ色の道を帰った。

幼稚園の記憶。

「やーい、おまえの母さんいーないっ。」

「はははー。おつかしーの。母さんいないなんてー。」

「きやははー。」

「こらっ。意地悪なこと言っているのは誰?」

「やべーせんせーだ。」

「言つて良い事と悪い事があるつて、この間の国語の時間で習つたでしょ。穂高くんに謝りなさい。」

謝られても、何にも感じなかった小学校の記憶。

俺には母親がない。  
ただ、それだけのこと。

兄ちゃん達から嫌われている。  
ただ、それだけのこと。

親も、家族も、兄弟も、友達も・・・  
別に困らなかった。  
別に要らなかった。  
ただ、それだけのこと。

人とかかわるのが面倒くさくなった。  
いちいち説明しなければいけないのが面倒くさくなった。  
初めましての挨拶が一番嫌い。  
自己紹介なんてもつと最悪。  
だから、俺は最低限のことしか言わなかった。  
ただ、それだけのこと。

中学三年になった。

何も変わらないと思っていた。  
でも、またクラス替え。  
三年四組。

健太と同じクラスになった。  
タケとは別のクラスだった。  
「穂高です。」

ただ、それだけの自己紹介。  
十分だろう。

一分以上、くだらなく自分の好きな物の話や、部活動のこと、好きな芸能人のこと、バカみたいに一発芸なんかを取り入れる奴もいる。

出席番号順に座った席で、順番にはじまる自己紹介。

面倒くさい。

今更知らない奴もいないだろう。

面倒くさい。

この無駄な時間が面倒くさい。

三年は一階の教室になった。

やっと下がった一階。

ここは中庭が見渡せる。

静かに、過ごしたい一年。

今年こそは。

ホームルームが終わり、タケに貸しものの約束をしていたので、隣の五組へ行った。

教室を覗く。

タケは奥の窓際にいた。

ここから呼んでも気づかない位置だ。

すると、聞き覚えのある賑やかな声。

二宮だ。

女子を集めてのトークを展開中らしい。

相変わらず。

どこのグループにも属さず、皆と仲良くなるタイプの二宮。

一学期初日にして、このクラスのムードメーカー的存在になっている。

タケと二宮は一緒のクラスか。

タケはまだ気づかない様子。

どうしようかと思っていると、すぐ手前に見覚えのある顔がいた。

「タケ呼んで」

初めて、目が合った。

椎名萌が俺を見たのが初めてだったから。

ただ、それだけのこと。

翌日は、良く晴れて四月にしては暖かい日だった。

面倒くさいことに、三年になると、最高学年だけあって、部活に、委員会にと任されることが多くなる。

中でも面倒くさい、部活の新入生歓迎。

二週間の勧誘期間と、一ヶ月の仮入部期間がある。

今日はその活動について、ミーティングが行われる。

別に本気で部活をやるうなんて思っていないので、俺は適当にサボっていたし、適当に活動していた。

「晃君。四組になったんだねー。」

「ああ。」

「今日のミーティング四時に変更になったから。」

「わかった。」

「あ、関君に伝えといてくれる？隣の五組だから。」

「わかった。」

バレー部部長の奥居に言われ、五組へ行くことになった。タケにもちょうど用事があったし。教室を出て、隣の五組へ向かった。

相変わらず賑やかな二宮の声が聞こえてくる。  
すっかり、このクラスの雰囲気を自分のものになっている。  
クラスの雰囲気は、教室へ入る前と、入った瞬間に感じることができる。

クラス絵図。

クラスを仕切りたがる、目立ちたがりタイプ。

真面目、優等生、学級委員タイプ。

静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのどこにも属さず、属せず、属す機会を失った、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。

まさに、二宮。

そしてこいつは、色々な意味で、世話を焼くのが好きというか、周りをよく見ている裏番長的な存在でもある奴。

そんな二宮がいるクラスには、不思議といじめは起こらない。

でも、このクラスにはどこか今までとは違った雰囲気を感じた。

蓮田小出身の奴らはもちろん知っている。

蓮田第二小出身が数名。

目立ちたい、クラスを仕切りたいタイプがいないな。  
そんな印象を受けた。

二宮、タケ、そして、同じ部活動の関君がいる五組。

「関君。」

「四時からミーティングになったから。」

「おお、わかったー。」



「おつす、晃。」

「タケ。今週の日曜は塾か？」

「いや。ないよ。」

「じゃあ、日曜遊びに行つていいか？」

「オッケー。」

「じゃあな。」

「おうつ。」

ふと、帰り際、二宮の横にいる椎名萌が視界に入った。そうか。こいつも五組なのか。

二宮、タケ、関君、そして、椎名萌のいるクラスか。ただ、それだけのこと。

新学期が始まり、三週間が経った。

恒例の委員会決めも終わり、授業にも慣れた頃、選択授業が始まった。

二年の終わりに、タケと決めた選択授業は美術。

一選択が二十名前後の定員での活動となり、成績評価に反映されないこの時間は、割と自由に過ごすことができる。

美術に集まったのは十六人。そのうちの半数が顔見知りだった。

「では、このプリントをまわしてください。」

担当の先生からプリントが渡される。

適当に座っている生徒達がプリントを受け取ると、他の人へと順次渡していく。

手に渡ったプリントを見ると、授業の進め方のようなものが記されている。

？興味のあること

？その中からやってみたいことを課題に設定  
？必要な道具  
？一年の目標

目標・・・ねえ！。

今更・・・

別に絵が描きたくて美術を選んだわけではないし。

タケと、好きな時間に使おうと思ったただだし。

予想通り、人気のない選択だったから静かに過ごせそうだし。

「あつ！」

上がった声と共に俺の足元に、プリントが散らばってきた。

「ご、ごめんなさい。」

「なにやってんだよー。」

「めぐちゃん大丈夫？」

面倒くさいことをしてくれたものだ。  
まったく。

「ごめんね、拾う。」

聞き覚えのある声。

足元のプリントを拾って渡してやった。

「あ、ありがとう。」

顔を見ると、椎名萌だった。  
なんだ。

こいつも選択授業美術なのか。

騒がしい女。

「しーな、プリント。」

「あ、ごめん、今配る。」

「しーなはおっちょこちよいだな。」

笑っているのは、河野ヒロアキ。

隣に居るのは、北川千夏。

なんだ、こいつらも同じ選択にしたのか。

二年の時に同じクラスだった三人。

ヒロアキは三年の今、俺と同じ四組。

改めて美術室を見回すと、意外と知っている顔が並んでいた。

それもそれで面倒くさい。

静かに過ごせる時間にしたいものだ。

プリントの記入をし、担当の先生に提出をした者からそれぞれの課題に取り組み始めた。

外へスケッチに出掛ける者、粘土を捏ね始める者、絵の具を出す者、バケツに水を用意する者等。

あの騒がしい三人組は教室から出て行った。

これで少しは静かになるだろう。

「兎も早く出してこいよ。」

「ああ。」

先に提出してきたタケが戻ってきた。

俺もプリントを提出に行くことにした。

「お願いします。」

「あ、穂高君。」

前の奴と同様、提出するだけだと思っていたのだが、先生に呼び止められた。

プリントに目を落としている先生。

なぜ、俺のだけ。

なんか変なこと書いたか？

適当に・・・でも、不真面目な要素を含むことは書いていないはず。

「穂高君絵は描かないの？」

なんだ、この先生。

何が言いたい？

「まあ、いいわ。これ、返すわね。」

俺は何も言わなかった。

返されたのは、二年の写生大会で描いた絵だった。

この間まで、美術室の前に貼られていた絵。

今更・・・

「晃、資料室、行こうぜ。」

タケと美術室の隣の資料室へ向かった。

「なんだ？それ。」

「去年の絵。」

「ああ、返却か。」

「そう。」

俺は、資料室の隅にそいつを放り投げた。

傷んだ画板や、書き損じの油絵、スケッチブック等が乱雑に積み  
れている廃棄の山へ。

タケは何も言わなかった。

「やっぱ面白そうな本はねーか。」

資料室といっても、図書館に置かれているのとジャンルも冊数も  
そう変わりはない。

「おっ、パソコンあんじゃーん。」

そう言うのと、タケは一台だけ置かれたパソコンの前に座り、手を  
動かした。

俺は、資料棚の中から、古い画集を取り出し眺めることにした。

しばらくの間、お互い何も喋らなかった。

何も言わなくても、わかっているから。

何も言わなくても、わかってくれるから。

そんなタケとの関係が楽だから。

そんなタケとの時間が心地良いから。

穏やかに流れる。

マウスをクリックする音だけが室内に響く。

「そっぴやさ、」

タケが口を開いた。

「雅画伯が講師やる話って知ってる？」

思いがけない言葉に、一瞬言葉に詰まった。

「え？」

「あ、やっぱり知らなかった？」

「ああ。」

器用にマウスを動かすタケの手。  
それは止まることなく、話は続く。

「この間ネットで見たのだけど、代々木の美大の付属の高校で講師するんだって。」

「まじで？」

「マジ。この四月からだってさ。」

思考が停止するような話。

慎重にタケの話に耳を傾ける。

「雅画伯に会えるとかの話じゃなくて、雅画伯に教えてもらえんだぜ。すごくね？」

「す、すげー。」

「しかも美大でならわかるけど、高校でだぜ？確かに代々木の美大は有名だし、数ある美大の中でも難関だよな。付属の高校に入ればそのままエスカレーター式で上がれんじゃない。でも、まずはその付属校に入るってのが更に難関な話だ。」

タケの手は止まらなかった。

それはまるでマジックのように・・・

一枚のデザイン画を仕上げる。

マウスは筆。

色彩は鮮やかに塗られていく。

「おれはさ、大学はもう選べねーじゃん。でも、ま。もしな、もし……」

そう言ったタケは、マウスから手を離れた。

「もし……なんて考えねーけどなっ。」

少しの間が空いて、タケは人差し指で強くENTERキーを押した。

決定キー。

まるで、タケの意思も決定されたかのように。

決定キーは、画面上に、素晴らしいデザインを完成させていた。

その日の夜は眠れなかった。

自分でもわかってる。

今日の選択美術でのこと。

タケとの会話を思い出していた。

タケがあの時言いかけた言葉。

言いたかった言葉。

その言葉の続き。

俺にはわかる。

俺ならわかる。

美大……か。

叶わぬ夢。

叶えぬ夢。

どっちも同じじゃないか。

ただ、それだけのこと。

五月に入った。

連休といえど、部活はあるが、塾に行っていない俺にとっては自由な時間は多かった。

もちろん、家族で出掛けるなんてことは嘘をつくまでもなく、無かった。

一日だけ、タケと遊ぶことができた。

「晃、待たせたな。」

タケが大きく手を振っている。

「悪かったな。塾まで来てもらっちゃって。」

「いや。」

「ふー、肩こったー。」

そう言いつと、タケは眼鏡を外し、そのまま伸びをした。

「塾って大変？」

「まーな。それぞれにもよるけど、おれんとこのは金持ちぼっちゃんばっかで退屈。」

タケは、二年の秋から塾に通い始めた。

元々、頭の良い奴だったが、親が選んだ塾へ通うことになったのだと言っていた。



「ここは高くても有名だもんな。」

「そう。冷暖房完備、自習室、休憩室が使い放題っていう施設設備と、有名な大学出身の講師ばかり集めましたってだけで高い授業料。」

「へー。授業料ねー。」

「この授業料あったら、毎月ゲーム買い放題だぜつ。」

「そうだな。」

「まっ、その塾に親の金で入れてもらってるおれもおれだけだな。」

「

タケが笑う。

笑顔ではなく、失笑。

そんな塾でも、行かなければならないのが現実。

受け入れなければならないのがタケ。

「晃は行かないの？塾。」

「んー、今のところは。」

「行かなくても十分圈内か。」

「そんなことはねーけど。あんま家の金使いたくねーし、そもそも面倒くさい。」

「出た！晃の面倒くさい。」

タケが笑う。

今度は笑顔で。

「晃ってさ、塾に行くつーより、塾で過ごす時間が面倒くさいんだろ？講師とか、生徒とか、また何で学校みたいなところにまたもう一つ行かなきゃならねーんだって。しかも金を払って面倒くささを買うなんて馬鹿らしいと。」

ああ。

何も言わなくても、わかっているから。  
何も言わなくても、わかってくれるから。  
そんなタケとの関係が楽だから。  
そんなタケとの時間が心地良いから。  
だから俺はここに居る。

「あれ？」

タケの足が止まりそうになった。  
タケの視線の先を見る。

「智美ちゃんと……」

「ああ。」

「生徒会の笠原か？」

笠原祐也に彼女がいるという話を思い出した。  
その彼女とは、今すれ違った智美ちゃんとやらのこと。  
タケが知っているということは、蓮田第二小出身の女が。

「へー、あいつら付き合ってたんだー。」

タケは知らなかったようだ。

「テニス部男女部長同士かぁー。」  
「へえー。」

それで話題は変わった。  
そつえば、タケは知らないのだろうか。

椎名萌の好きな奴が笠原祐也ということ。  
そしてその笠原祐也には彼女がいたわけで。  
まあ・・・

どうでもいい。

面倒くさいのにはかわりたくない。  
ただ、それだけのこと。

連休が明けると、中間試験があった。  
試験が終わると部活再開。  
五月から新入部員を迎えた。

日直の当番が回ってきた。

面倒くさいが、クラスの奴らが帰った後、戸締りやごみ捨て、日誌の記入をしていた。  
すると、他のクラスの女子がやって来た。

「ねー、みつこ、聞いた？」

「五組の椎名萌って、松岡君のこと好きなんだって。」

おいおい。

聞こえてるんだけど。

「えーっ！なにそれーっ。」

「あ、やっぱ知らなかった？」

「聞いてないよー。」

おいおい。

だから聞こえてるって。

「私もさつき、アヤちゃんから聞いたんだけど。なんか、手紙とか渡してるって。」

「マジでー、むかつくー。」

「でしょー。一緒に帰るのを見たって子もいるんだってー。」

「そんなの許さないー。」

おいおい。

どうでもいい話は、日直の仕事、終わらせてからにしろよな。

「だからね、この話、皆にも伝えて！」

「了解！」

「じゃあ、私、会長のところに行ってくるから。」

「うん。また何かあったら教えてねー。」

全部聞こえてるんだけど。

聞こえてもいい話し・・・ってどこか。

鞆を持って帰ろうとした。

「あ、穂高君。」

今度はなんだよ。

顔だけ振り返ってみた。

「ああ、日誌全部書いてくれたのね。」

あんたが書くのを待ってたら、いつになるかわからんし。

「じゃあ、ごみ捨て・・・は終わってるか。」

あんたは何もしなくてももう終わっているし。

「あ、じゃあお疲れさま。ばいばい。」

日直を組んだ、隣の席の女子が手を振っている。  
俺は何も言わずに教室を出た。

「なによ、挨拶くらい……。」

悪いけど俺は人とかかわりが面倒くさいから、挨拶もしない奴だし。

おいおい。

だから聞こえてるってば。

聞こえてもいい話し……か。

翌朝だった。

「おはよう。」

下駄箱で、声をかけられた。

どう見ても、俺しかない。

面倒くさい。

挨拶も人とかかわりも、面倒くさい。

特に、女子なんて。

特に、椎名萌なんて。

ただ、それだけのこと。

だが。

あの挨拶以来、面倒くさいかわりが始まった。

タケに用事があつて、五組へ行くと、視線を感じるようになった。廊下で、教室の前で、タケの席で。

タケと話していると、椎名萌の視線を感じる。なんなんだ。

おいおい。

面倒くさい。

挨拶無視したことまだ根に持ってるのか。

面倒くさい。

たかが挨拶くらいで。

面倒くさい。

放課後、先日の中間試験の結果を見に行つた。成績上位三十名が掲示板に貼り出されている。

「晃君、五位かあゝすげーなつ。」

いつの間にか、同じバレー部の関くんが隣に来ていた。

「オレ一度も入ったことねーし。おつ、タケやん発見。」

そういえば、関くんは五組だった。

タケとも仲良くなつたようだ。

「タケやんも六位じゃん、頭いんだー。あとは・・・」

一年からずっと超えられなかったタケを、今回初めて一つ上回れた。

まあ・・・

連休暇だったしな。

勉強する時間なんて腐る程。

「おっと！五組、椎名さん入ってるじゃーん。」

椎名萌。

かわりたくないが、掲示板に目を戻すと、十一位にその名があった。

「ほえー、あの子頭良いんだー。けっこうおつちよこちよいなになー。」

人は見かけによらず。

確かに……

うるさいし、騒がしいし、借り物多いし。

頭良さそうには見えなかったよな。

十一位とは。

「晃君も知ってるよね？椎名さん。」

「ああ。」

「おもしろい子だよねー。」

「ああ。」

「にのがすんげー、可愛がつてんだけど、それもまた面白いんだ。二人を見ててさ。つか、にのみたいな奴に会ったのも初めてだなにの面白い奴だよなー。」

関くんは笑いながら話している。

俺達は掲示板を後にして、部活に行く為体育館に足を向けた。

「来月の修学旅行、オレ、にのと椎名さんと同じ班なんだー。晃君は？」

「健太と一緒に。」

「そっか、楽しみだよー。京都。八ツ橋買わなきゃー。」

五組の関君。

タケ、二宮、そして・・・

椎名萌のいる五組か。

ただ、それだけのこと。

その日は部活をさぼって図書室で過ごした。

放課後、時々部活には出ず、こつやって図書室で過ごす時間をとる。

それほど広いわけでもなく、綺麗なわけでもないが、図書室は落ち着いた。

最も、利用する生徒が少ないから、静かに一人の時間を過ごすことが出来る。

テスト期間中も図書室で過ごすことが多かった。

勉強もしたけれど、ここで過ごす大半は本を読んだり画集を開いて眺めたりしていた。

絵や写真を眺めている時間は好きだ。

何も考えなくてすむ。

だが・・・

目に入る。

美術関係の雑誌に、雅画伯の記事。

雅画伯がこの春からS美大の付属高校で特別講師をしていると。以前、タケから聞いたこと。

現実には・・・記事になっている。



雅画伯の描く空の絵。

小さい頃から好きだった。

家に一冊だけあった、雅画伯の画集。

その中の空を、いつも描いていた。

今は眺めるだけのこの空を・・・

今更・・・

頭の中を過ぎる文字。

今更。

もう決めたこと。

もう決まったこと。

もう戻らない。

もう戻れない。

ただ、それだけのこと。

下校のチャイムが鳴ったので、図書室を後にした。

そのまま帰るつもりだったが、教室に寄ろうと足を向けた。

誰もいない廊下。

戸締りの終わった教室。

校舎に響いている声は、外のもの。

校庭で、部活終了の挨拶の声が響いてくる。

元気な声は一年生。

三年になって、一階になった教室。

中庭に差し込む光は夕日に変わっている。

五組の前を通ると、数センチ程扉が開いているのに気がついた。  
数センチの隙間から零れるのは溢れんばかりの夕日の色。

オレンジに輝く……

隙間を覗いた先にあったもの。

まるで放課後を切り取った一枚の絵が描けそうだった。

「おい。」

夕陽の中に一人。

「おいつ。」

机に顔を伏せている。

「おい。」

話しかけるが返事がない。

「椎名。」

“ガタンッ”

返事の変わりに、椅子が倒れた。

「な、なに？」

なんだ。

立てるのか。

「いや。」

「何か用？」

何か用って・・・  
椅子、起こせよ。

「べつに。」

「べつにつて・・・」

べつに用はないけど。

どうでもいいけど、なんかいつもと違わねーか？

違う？

違うっつーか・・・

なんだ？

椎名萌がこっちを見た。

目が合う。

すぐに逸らされた。

ああ。

なんだ。

泣いてたのか。

どうでもいいけど。

っーか、かわりたくない。

面倒くさい。

教室から出ようとした時、

「ちょっと、あきらくん。」

おいおい。

思わず振り返ってしまった。

「あきらくん、だよな？」

おいおい。

「そうだけど、晃くんって・・・」

いきなり名前で呼ぶかよ。

この間から、挨拶されたり、視線を感じたり、変だとは思ってたけど。

そもそも、騒がしいし、うるさいし、借り物多いし、変な女だとは思っていたけど。

だからかわりたくないんだけど。  
面倒くさい。

「だって私あなたの苗字知らないもの。皆があきらくんて呼んでいるから・・・」

「穂高。」

「えっ？」

「穂高晃。」

自己紹介をするなんで御免だ。

なんでこいつの為にわざわざ。

誰か教えてなかったのかよ、俺の名前。

おいおい。

ああ、そうか。

なんだ。

簡単なことじゃないか。

椎名萌が俺の名前を知らなくて当然。

だって椎名萌は俺を知らないのだから。

だって椎名萌は俺に気づいていないのだから。

だから椎名萌が俺を知ったのは今。  
だから椎名萌が俺に気づいたのは、初めて目が合った日。  
椎名萌が、うるさくて、騒がしくて、よく笑って、よく喋って、  
借り物が多いのは、俺が見ていたから。  
ただ、それだけのこと。

3 .

学校行事なんてどうでもいいけど、修学旅行。  
二泊三日で京都・奈良へ旅行。

出発の朝。

「お土産はいーかね。」

定番のばあちゃんの見送り。

三日間、この家に帰って来ないと思うと嬉しさもあり、複雑な気持ちになる。

父親も、兄弟も、別に何も変わらない。

一日居ようが、居まいが、何も変わらない。

ただ、学校行事も面倒くさい。

三日間、四六時中誰かと一緒に過ごすだなんて。

一人の時間を長く過ごしてきた俺にとっては、それなりの苦痛かもしれない。

ただ、それだけのこと。

朝七時集合。

最寄り駅から新幹線が走る駅まで出て、さらに新幹線で東京駅へ

向かう。

それだけ奥まった田舎。

東京なんてそう簡単に行ける距離ではない。

昼前、東京駅に到着。

新幹線を乗り換え、京都行き的車内で昼食。  
弁当だった。

「あ、めぐつ、トマト食べなさいよ。」

「やーだあゝ。」

聞き覚えのある賑やかな声。

後ろを向くと、二列後ろの座席に椎名萌が座っているのが見える。

「トマト嫌い、まだ直ってないの？」

「トマトはズーっと食べません。」

「あんたねー、」

旅行中は、クラス行動と班行動がある。

一班男女五人の編成。

班毎に座っている新幹線の中で、どうやら俺の四組六班は、五組  
一班と続きの座席に座っていた。

「ほら、もえつ、俺の卵焼きと交換してやるから。」

「わーい。」

「にのっ、甘やかさないで。」

同じく五組一班であろう、椎名萌に続き、二宮、斉藤恵子もいる。

「にの、だーいすきつ。卵大好き。」

「オレは卵と同位かあ？」

「あはははー。おもしれー。」

笑い声は関君。

「馬鹿なだけだ。」

ため息混じりなのはタケ。

そういえば、関君が言ってたな。修学旅行の班が一緒だと。

「めぐはね、小学校の時から給食でトマト出ると食べなかったのよ。それで、にのが代わりに食べてた。」

「けいちゃん。」

「はははー。そんなに嫌い？トマト。」

「嫌い。」

「ほら、そんなに嫌いなトマトだ。食べ。」

「ああああー、タケちゃん、ひどーいつ。せっかく居なくなったのにいー。」

「あははっー、おもしれー、タケちゃん。」

大きくなる関の笑い声。

見なくても、聞こえてくる声だけでわかる。

そもそも、二宮がいる班ってだけでだいたい想像はできる。

そしてさわがしい女、椎名萌のいる班なんて。

昼食が終わった。

初日の観光地、奈良に着くのはまだ一時間先。

暇すぎるので寝ようと思った時。

背後から足跡が聞こえてきた。

「おう、晃。健太。」

「タケ。」

「席、近かったんだな。」

「タケどこにいた？」

隣に座る健太が聞いている。

「三列後ろ。」

「おっ、近いじゃん。」

「だろ。」

あれだけ騒いでいればわかるだろう。

健太は気づいていなかったのか。

「夜さ、おれらの部屋来いよ。」

「おう、行くいく。」

「にのもいるし。」

「タケー、いい誘い？」

「いい誘い。」

「ラジャッー。楽しみにしてるわ。竹田君。」

ご機嫌な健太。

おそらく、男子の喜びそうな話題があるのだろう。

修学旅行の夜なんて、そんなもんだろう。

男子の好きな話なんて、そんなもんだろう。

観光地、奈良。

五重塔、興福寺、東大寺、奈良公園。

クラス写真の撮影が終わると班毎の自由行動になった。

鹿と写真を撮る者、お土産を買う者、ソフトクリームを食べている者、皆それぞれ過ごしていた。



健太と公園のベンチに座っていると、同じ班の女子三人が買い物から戻ってきた。

「健太君、穂高君、写真撮ろー。」

「おおー。」

健太がベンチを立った。

「晃君、写真だぜー。」

健太に急かされる。

「俺押すよ。」

「え？穂高君入らないの？」

「ああ。」

「えー、班の皆でって思ったのだけだな。」

「いいじゃん、とりあえず。まだ明日も明後日もあるんだから。」

「そうだね。」

「撮ろっ、撮ろっ。」

「じゃあ、穂高君よろしくー。」

旅行の中で、面倒くさいのは写真。

いちいち場所が変わる毎に撮りたがる。

特に女子は、誰ちゃんと、とか、皆で。と、特定の奴等と撮りたがるから面倒くさい。

写真なんて……

その時、本当に撮りたいもの撮るべきだろう。

だから写真は嫌いだ。

ただ、それだけのこと。

旅館へ戻ると、部屋割りはクラス毎、六人部屋だった。  
健太とは部屋が別れた。

「晃君、ジュース買ってくるけどいる？」  
「いいや。」

三年になって三ヶ月。

このクラスにも慣れた。

別に俺は健太がいれば問題はなかった。

でも、このクラスも悪くはなかった。

一年、二年と、何かとかかわりの面倒くさかった時期もあったが、  
この一年はこのクラスで静かに過ごせそうだ。

クラス絵図。

色々なクラスを見てきたけれど。

このクラスにはしつかりとしたグループが無かった。

割と誰とでも話すタイプが多く、グループへの所属意識が低い。

クラスを仕切りたい奴や、目立ちたい奴もいない。

学級委員になった奴も、優等生でもなく、真面目でもなく、学級  
委員タイプではなかった。

一人で過ごす奴はいないが、皆周りの誰とでも話し、その日、そ  
の日が過ぎて行く。

逆を反せば、誰ともそこまで仲も良くないということか。

三年にもなると皆落ち着くってことなのか。

有難いことに俺には楽なクラスだった。

風呂に入り終わると、健太からタケの部屋に行こうと誘われた。  
風呂上りにジュースが飲みたかったので、健太には先に行っても

らうことにした。

館内の見取り図を思い出す。

この旅館は本館と別館がある。

別館を後から付け足したということが、見ればすぐにわかるような作りになっている。

本館に客室、別館に大浴場。

別館から本館へは面倒くさいが専用の階段を使わないと移動できないようだ。

大浴場の近くの自販機で買っておけばよかったと後悔したが、遅かった。

人が多いのも面倒くさかったし。

本館の自販機に行くことにした。

ところが。

お茶やスポーツ系ドリンクは全て売り切れ。

残っているのは炭酸飲料かコーヒー飲料。

風呂上りに飲みたい種類は皆同じか。

仕方なく、コーラを買ってその場で飲み干した。

缶を捨て、階段を下りはじめた時、下から上がってくる人と目が合った。

「あ。」

そう言ったのは椎名萌。

「なに？」

珍しい、一人か。

「い、いえ。別に。」

珍しく、控えめに返してきた。

いつもはうるさい位喋る奴なのに。

一人だと静かなのか？

いや、違うか。

どうせ、二宮のところへでも行くのだろう。

「どこ行くんだ？」

「に、にののところ。」

はい、当たり前。

そして、はい、外れ。

「そっちじゃないぞ。」

「えっ？」

珍しく、慌てている顔。

本気で間違えていたらしい。

「上は自販機しかないぜ。にのの部屋ならこっち。」

椎名萌が通り過ぎてきた方向を指で指してやった。

「じ、ジュース買ってから行こうと思ったの。」

そういうと、椎名萌は階段を上がっていった。

おもしれー。

こいつ、慌てて訂正したって感じで。

ほんとにばかだな。

なぜだろう・・・

興味が勝った。

かわりよりも、興味が勝った。

ただ、それだけのこと。

俺は、椎名萌の後に付いて行った。

自動販売機の前に立っている。

金を投入する様子はない。

やはり。

ジュースを買いに来たというのは後から付けた理由。

俺に部屋の間違いを指摘され、とっさの行動に出たのだろう。

おもしれー。

旅館で迷うのか、こいつ。

「買わないのか？」

「・・・・・・コーヒーと炭酸飲めないの。」

笑いそうになるのを抑えた。

おもしれー。

とんだ災難というのはこのことか。

旅館で迷ったことを隠すために繕った嘘が、自分の好き嫌いによ  
って自滅するとは。

こういう場合、嘘でも買えばいいのに。

おもしれー奴。

そしてばかな女。

笑いそうな顔を隠すため、俺は先に階段を下りた。

椎名萌が付いてくるかどうかを試す為でもあった。

本当に付いて来ている。

本気で二宮の部屋がわからなかったのか。  
ばかだな。

「にーのっ。」

「おっ、もえ。どうした？あれ、晃君も一緒？」

「た、たまたま会ったのよ。そこで。」

そこで。

どこで？

おもしれー。

やっぱりばかな女。

「そうか。まあ、入って、入って。」

部屋の奥にタケ達がいた。

タケと話していると、聞こえてくる会話。

「もえ、よく一人で来れたな。迷わなかったか？」

「こ、来れるわよ。」

「え？旅館で迷うの？」

不思議そうに聞いたのは関。

笑いそうになってしまった。

なんだ。

やっぱり迷うのか。

「もえは昔からよく迷う奴だな。」

「にーのっ。」

「そうそう、小学校の時の修学旅行でも迷っていたよな。」

「亮ちゃん！」

「ほんとのことだろー。」

「へー、椎名さんてすっかりしていると思ったのに。」

「関くん、もえは意外とおっちょこちよいだぞ。」

「もー、二人とも変なこと言うのやめてー。」

ばか女決定だな。

こいつらの会話に、周りにいた男子達も笑っていた。

俺は笑うのを抑えていたが。

再び、タケと話していると、視線を感じた。

そして、そいつはぶつぶつと一人言を言っているように聞こえた。  
が。

いきなり指を向けられた。

「あ！あきちゃん。」

「あきちゃんにしよう。」

「なんだよ、あきちゃんって。」

ばか女に突っ込んでやった。

「私がつけたの。今からあきちゃんて呼ぶことにしたの。」

さっきまでの強がりは無く。

いつも通りのうるさい、お喋り女になっていた。

「ははは。あきちゃんか。いいね、それ。椎名さん良いよー！」

おいおい。

良いわけねーだろ。

「あきちゃんね。うん、いいんじゃない。」

おいおい。

だから、いいわけねーだろ。

周りの男子が笑っている。

男にちゃん付けして何が楽しんだ。

おいおい。

「あ、もえ髪濡れたまま。ちゃんと乾かしたのか？」

そう言つと、持っていたタオルを椎名萌の頭にのせ、拭きはじめる二宮。

その様子を見ていた、同室の男子達が声をかけた。

「おまえらつて仲良いな、付き合つてんの？」

どのクラスでも、こういう話、あるんだな。

男子達の、恋愛の話。

好きだよなー。

面倒くさいだけ。

「まさか。」

「それはない。」

慌てる様子も無く、きつぱりと答えた二人に男子達は期待はずれといった感じであつた。

「こいつらは小学校の時からこんな感じ。」

そう言ったのはタケ。



「へー、そうなんだ。」

「確かに、にのお父さんみたいなものな。」

「おいっ、父はないだろ。せめて兄にして。」

二宮の答えに笑いが起こる。

相変わらず雰囲気を掴むのが上手い二宮。

こいつがそばにいたら、どんな奴でも楽しめるのだろう。

「じゃあ椎名さんの好きな人って誰？」

「誰？」

「俺も聞きたいー。」

「えっ、何でそんな話に・・・」

次に、男子達の話は、椎名萌の好きな奴の話で盛り上がっていた。

笠原祐也だろう。

答えを知っている問題なんて全くつまらない。

俺は黙って聞いていた。

椎名萌は困っていた。

こんなところで自分の好きな奴の名前を正直に答えたりしたら、

またそれはそれで面白いというか、頭の悪い奴というか、ばかだな。

そう思って聞いていた。

が。

意外にも、男子達からは松岡が好きな奴だと言われはじめていた。

「えー、まじで?! 松岡聡ー?」

「っっていう噂聞いたよ。」

「なにそれ? ほんとか?」

「ち、違うよ。」

本人は否定したが、どうやら男子達は全く聞いていないようである。

その後も松岡の話題を押し付け、椎名萌をからかい、困らせ、それを見て喜んでいる・・・

「その噂なら俺も聞いたことあるー。」

「マジ？」

「じゃあ、ほんとなのか？」

「そっか、椎名さんは聡君が好きなのかー。」

「女って結局顔のいい奴が好きなのかよ。」

「おまけにやつは頭もいい！」

「生徒会長だしなつ。」

「椎名も面食いなんだな。」

「ちょ、ちよつと待ってよ。みんな勝手にそんなこと・・・」

もはや椎名萌の話など聞かずにその場は絶好調に盛り上がっていた。

「で、告ったのか？」

「告ったのか？」

「まだならオレ言つてやろうか？」

「松岡君、あなたのことが・・・ずっと・・・」

「ヒューッー」

幼稚な男の考え。

意地悪ないじめ。

どこかで。

そう、どこかで俺も経験のあること。

目の前で繰り広げられているのは、男子が女子をいじめている図。本人達にその自覚はないのだろうか。

こうやって、端から見ているとよくわかる。  
観客側に立っている俺。

でも、前は俺も当事者だった。

今思えば簡単なこと。

今思えばくだらないこと。

ただ、それだけのこと。

困らせて泣かせて、楽しむのはまるでゲーム感覚。

そんな男子達から椎名萌を救ったのは、間違いなくあの男。

「おいっ、いい加減にしろ！」

一瞬で静かになった。

一言で十分だった。

「そんなん噂だろ、もえが違うって言うてんだからやめろよ。」

二宮の低い声が静かな部屋に重く響いた。

皆の表情が変わった。

「に、にの。わかったよ。」

「わ、悪かったよ。」

「ごめんな、椎名さん。」

「違うんだよな。」

「にのも、そんな怒んなくてもな。」

「だって俺は“お父さん”だからなっ。」

相変わらず、雰囲気を変えるのが上手いな。

二宮の笑顔に、男子達に安堵の表情が浮かんでいた。

「もー、にの驚かせんなよ。」

「あせったー、まじキレさせたかと思ったー。」

「ははは、俺はいつでもマジだぜ。よろしく。」

いつの間にか、またいつもの空気が流れていた。  
そう、いつもの。

まるで何事もなかったかのような。

ただ、それだけのこと。

修学旅行二日目の朝。

今日は一日班別行動になっている。

京都市内をバスや地下鉄を使って観光。

班毎に先生から注意事項を聞いてからの出発となる。

「おはよう。」

隣の列から声をかけられた。

椎名萌と目が合う。

俺は何も言わなかった。

「おはよう、あきちゃん。最初どこ行くの？」

次に、ふざけた声で話しかけてきたのは関君だった。

「金閣寺。……あのな、関君。」

「やめて、あきちゃん。」

続けてからかおうとする関君に、返す言葉が見つからなかった。

「おい、うちの班出発するぞー。」

「はい。」

二宮が呼んでいる。

これでやっと二人から解放される。

「じゃあね、あきちゃん。」

最後も関君。

「あきちゃんて何？」

聞いていたのは健太。

「つけられた。」

「え？あだ名？あきちゃんって？」

驚くのもわかる。

ふざけたあだ名だろう。

そんなの付けられたのは俺だって初めてだ。

驚いた後の健太は笑っていた。

おいおい。

笑えねーよ。

京都、一日観光。

京都駅はにぎやかだった。

複雑に走るバス。

マス目上を几帳面に走るのは地下鉄。  
路線図は面白いように入り組んでいた。

金閣寺、銀閣寺。

祇園や南禅寺。

嵐山、嵯峨野。

清水寺、二年坂、三年坂、清水の舞台。

今日最後の観光地、清水寺のバス停を降りて気づいた。

「何？」

「落し物？」

健太も気づいた。

「いや。」

足元に落ちていたテレホンカードを拾い、自分のポケットへと閉  
まった。

「ねえねえ、抹茶ソフト買ってくるー。」

「おお。」

女子三人が売店へと向かった。

「晃君も食う？」

「いい。」

「オレも食べよ。あちー。」

健太も抹茶ソフトを買いに行った。  
確かに暑い。

京都は盆地というだけあって、六月だというのに真夏のように照り付ける太陽が熱い。

そして、夕方になっても蒸し暑い。

日陰のベンチを探して腰掛けた。

ポケットから、さっき拾ったテレカを出す。

今朝、ばか女椎名萌が関君に貸していたテレカ。

たぶん、そう。

見間違えるはずがない。

だって。

カードの右下にはKEIGOのサイン。

青い空。

カードいっぱい広がる青い空。

なぜあのばか女椎名萌がこれを持っている？

「穂高君、抹茶ソフトと撮ってー。」

「あ、あたしのカメラもお願い！」

嬉しそうに笑っている女子三人。

なにが楽しくてそんなに笑えるんだ？

なにが楽しくて抹茶ソフトとなんか撮りたいんだ？

女はわからん。

昨日から今日一日で、すっかりカメラ係りになった。

最も、一緒に撮ろうと言われるよりはましたが。

空気を読んだか、女子達は班全員での写真を諦めたようだ。

それでいい。

それがいい。

ただ、それだけのこと。

旅館へ戻ると、同室の男子が皆寝そべっていた。

「あ、晃君、おかえりー。」

暑い中、一日中歩き回っていたのだから、疲れも出るだろう。荷物を置いて、タケのところへ行くことにした。

階段を下がっていると、下から上がってくる椎名萌が見えた。

おいおい。

また迷っているのか？

にのの客室は一個下だって。  
ばかな女だな。

「いたっ！」

階段の踊り場ですれ違い際、髪をひっぱってやった。

「な、なに？いきなり。」

「にのの部屋なら下だぞ。」

「し、知ってるわよ。ジュース買いに行くの。」

「ふーん。」

昨日とは違い、慌てる素振りはなかった。

どうやら本当にジュースを買いに行くらしい。

つまらん。

別にこいつとかかわりたいわけではないので、先に進むことにした。

「あ！それ。」



突然指を指されて、行く手を阻まれた。  
指の先にあるのはシャツのポケット。  
ああ、なるほど。

「これ？拾った。」

「私のだ。今日の朝使った後、無くしたと思って……」  
「拾ってくれてありがとう。」

ポケットから出したテレカを受け取ろうとした。  
だからそれを上へと上げてやった。

「え?!」

不思議そうな顔。

「返してくれないの?」

再び受け取ろうとしていたので、更にその手を上へと上げてやった。

「?!」

変な顔をしている。  
おもしれー、こいつ。

「返して……」  
「返してよー。」

ジャンプをしている。

「ちょっと、返してよ。届かないよ。」

ジャンプをしても届かない。

それでも跳ねているのが可笑的い。

「ずるいよ、身長差があるのだから、届かないよ。」

そりゃ、当たり前だ。

チビのお前がいくらジャンプしても届くわけはないだろう。  
届かないようにしているのだから。

ばかな女。

「もー、返してよ。」

「返してよー。」

表情が変わる。

怒ってきたようだ。

「ねえってば。」

真剣に飛び跳ねているのに届かないのが面白い。  
ばかだ。

「ねえ、返してー。」

「返して、あきちゃん。」

「あきちゃん。」

「あきちゃん。」

何度も呼びながら、何度も飛び跳ねながら、諦めようとしな  
い  
の  
を  
見  
て  
い  
る  
と  
、  
届  
か  
な  
け  
れ  
ば  
い  
い  
の  
に  
、  
届  
く  
わ  
け  
が  
な  
い  
の  
に  
、  
と  
思

う。

こんな簡単なこと如きに、真剣になるなんてばかだ。

真剣になるなんて、夢中になるなんて。

真剣になっても、夢中になっても、手に入らないものだってある。  
ばか女にはわからないだろうな。

いつだって、笑っていて、

いつだって、楽しそうで、

いつだって、真剣に、

いつだって・・・

何かに真剣になるなんて。

何かに夢中になるなんて。

俺にはできないこと。

こいつは・・・

ほら、笑っている。

「あつ、タケやん。」

指差された方を見る。

誰も居ない。

その隙にテレホンカードを取られた。  
騙されたか。

「嘘つき。」

そう言ってやった。

「いじわる。」

即答で返されたのも、なんだか面白くなかった。

こんなばか女を相手にしていたことさえ、どうかしていた。  
当然、KEIGOのテレカを何故持っていたのかを聞くこともな  
かった。

「じゃあな。」

先に目を反らしてその場を後にした。

「あ、待つて。」

おいおい。

まだ何かあるのかよ。

「あの……」

今度は顔を上げず、言い難そうに話し始めた。

「この間のこと、誰かに話した？」

おいおい。

この間って……

思い当たるわけがない。

「いつのこと？」

「前に、放課後教室にいた時の事。」

さらに声が小さくなって。

言い難い上に気まずさそうである。

気まずいことなのか？

あれは。

「覚えてない。」

単に、面倒くさいだけだった。  
かわりたくなかったこと。  
ただ、それだけのこと。

「そ、そっか。」

届くことなんてわかっていたこと。  
はじめから。

最後は届くとわかっていた。  
届かないものなんてないのかもしれないな。  
こいつには。

その夜は静かだった。

二日目の夜、男子の部屋なんて、まったくだらしない話で盛り上がる  
のかと思っていた。

面倒くさいが付き合わないわけにはいかないだろうと、思っ  
てい

た。  
でも、この部屋は静かだった。

楽な奴ら。

楽な付き合いは大歓迎。

まだ早い就寝時間に、俺は目だけ閉じて起きていた。  
隣の部屋から聞こえてくるのは陽気な声。

昂揚が空気の中に漂う。

この部屋のまだ起きている奴の気配も感じる。  
その中で、俺は最後に眠りに付く。

三日目の朝。

最終日の今日は、京都半日クラス観光。

バスでの移動。

二条城に到着した。

高さを誇る石垣と、雄大な緑の敷地が続いている。

クラス毎にガイドの説明を受けながら観光していると、

「みつこー、松岡君と写真撮りたいから会長に頼んでももらえない？」

「えー、無理だよそれは。」

「お願い。そこを何とか。」

他のクラスの女子がやって来て、頼みごとをしているようだ。

「無理だって。」

「だってー、撮りたいもん。記念に。」

「今日はうちの番じゃないから無理。諦めて。」

「えー、いいじゃんちよつと位。」

「そうだよ、こんなに頼んでるのにねー。」

おいおい。

会話、まる聞こえなんだけど。

「うるさいなー。あんた達のこと会長に言っよー!」

「わ、わかったわよ。」

「ご、ごめん。またにするよ。」

「そうして。」

おいおい。

そんなキレるようなことなのか？

「こえーな。」

そう言ったのは健太。

「健太君、聞こえちゃうって。」

止めたのは同じ班の女子。

「なんだ？」

「晃君知らねーの？」

「ああ。」

「松岡ファンクラブ。」

「なんだそれ？」

健太に続き、同じ班の女子が説明に入った。

「松岡君と写真撮りたい女子はいっぱいいるからねー。ファンクラブの役員達が、クラス毎に撮影日を決めたらしいよ。」

「さ、撮影日。すげーなー。」

健太が驚いている。

俺だってびつくりだ。

おいおい。

聞こえてくる話。

聞こえてもいい話。

聞こえた方が都合が良いってことか……

面倒くさい話だ。

庭園にかかる石橋を渡っていると、下の池を覗き込んでいる奴等を見つけた。

背中を軽く叩いてやった。

「うわあっ！」

奇怪な声を出して振り返った。

「あきちゃん。」

椎名萌と、同じクラスの河野ヒロアキ。

「落ちるぞ。」

二人して焦った顔をしている。  
おもしれー。

「押したのはあきちゃんですよ。」

「あっ！」

続けて大きな声をあげた。  
表情はもう変わっていた。

「写真、写真撮ってない。あきちゃんと撮ろっ。」

なにかと思えば。  
そんなこと。



「やだよ。」

勿論、即答で答える。

「えー、撮ろうよ。」

「やだ。」

当然却下。

「撮ろうよ、ねっ、いいでしょ。」

「いやだ。」

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

「写真の一枚くらいいいじゃない。あきちゃんのけちーっ。」

「あのなー。」

けちという言葉に反応してしまった。

「わかった。じゃあヒロアキも入れて三人で撮ろうよ。それならいいでしょ。」

わずかに反応してしまったことを後悔したが、遅かった。  
三人とか人数の問題ではないと言いたところだが、それも遅かった。

「二条城バックに撮ってもらおう。はい、入って入って。」

既にクラスの奴にカメラは渡っていて。

「はい、あきちゃん撮るよ。」

「チーズ。」

不覚にも、写ってしまった。

「ありがとう。あきちゃん。」

そう言つと、満足そうな笑みを浮かべて五組の列に戻って行つた。  
おいおい。

おまえは満足かもしれないが。

俺は不満足だぞ。

笑えねー。

「写真、二日間あれほど嫌がっていたのに今日は撮るんだな。」

健太がやって来て言つた。

「椎名萌か。そういえばあいつ、松岡聡一のこと好きらしいぜ。  
晃君知つてた？」

「へー。」

それ以上何も言わなかった。

健太も何も言わないし、何も聞かなかったから。

あいつが誰を好きであろうと、

俺には関係の無いこと。

俺には関係が無いこと。

ただ、それだけのこと。

帰りの新幹線も静かだった。

旅の疲れからか、満足感からか、車内のほとんどで寝息を立てていた。

喋るつもりで座席をボックス席に変えた奴らも、爆睡している。

進行方向を向いて座っている俺の席からは、駆け抜ける新幹線のスピードを感じることができる。

後ろの席には五組が座っていた。

その、ボックス席に変えた奴ら、二宮の班と背中合わせに座っていた。

ふと、通路側から後ろを覗くと、真後ろに座っているのが椎名萌だった。

だから額を叩いてやった。

“バシッ”

そんな鈍い音がした。

「あきちゃん。」

なんだ。

起きていたのか。

「前の席だったのだね。タケちゃんなら寝ちゃったよ。」

寝てたら面白かったのに。

普通の反応でつまらん。

「お前は寝ないのか？」

「うん。昨日そんなに遅くなかったしね。」

「寝たの何時？」

「一時くらいかな。」

「勝った、二時。」

「あきちゃんは眠くないの？」

「全然。いつもそんくらい。」

「えっ、二時?! あ、もしかして勉強？」

「は？」

「だって、あきちゃん頭良いでしょ、見たよ中間テストの順位。」

なにを言つかと思えば。

勉強って。

そんなやらねーだろ。

「起きてるのはゲーム。」

「えっ? ゲーム? 勉強じゃなくて? それで五位？」

おいおい。

五位は関係ないだろ。

「おまえもいつも入ってるじゃん。」

「えっ？」

表情が変わる。

おもしれー。

勉強じゃなく、ゲームってだけでこの反応は面白い。

「ねえ? あきちゃんて私のこといつから知っていた？」

「は？」

「ねえ、いつから？」

「いつからって、おまえずっとタケんとこ来てたじゃん。」

「ずっとって？」

「一年の時から。」

「い、一年?!」

声が裏返った。

なんだ?

その反応は。

「ちょ、ちょっと待って。一年の時って・・・もしかしてあきちやん、一年生もタケヤンと同じクラス?」

「ああ。」

「一年も、二年も、タケヤンと同じクラス・・・」

それきり、黙ってしまった椎名萌。  
なんなんだ?

「何で?」

「い、いえ、べつに。」

また声が裏返っている。

なんだ、その反応。

当たり前のことを、当たり前に答えただけ。

そんなこと知って何か得なのか?

わかんねー女。

変な女。

ただ、それだけのこと。

「おかえりー。」

「ハツ橋買ってきた。」

「何もいらんてゆーたじゃろ。」

と、言いつつ、さっそく土産の八ッ橋に手を伸ばしているのはばあちゃん。

旅行鞆から洗濯物を出していると、玄関の扉が閉まる音がした。

「おかえりー、亘。八ッ橋食べるかい？ 晃が買ってきたんよ。」  
「いらねーよ。」

そのまま二階へ上がっていった。

「美味しいのに。」

ばあちゃんはお茶を煎れて一人で八ッ橋を食べていた。

数日、居ても居なくても変わらない、この家。

俺が旅行へ行こうが、行きまいが、変わらない。

何も変わらない。

何も変わっていない。

ただ、それだけのこと。

4 .

修学旅行から帰ると梅雨入りをした。

毎日シトシトと降り続ける雨。

外の部活は雨が降ると中止になるが、残念ながら体育館競技の俺らの活動が中止になることはない。

晴れでも雨でもやる気の無さは変わらないが。

基礎トレのメニューをこなす為、トレーニング室へ入った。

ちょうど前に使っていた奴等と交代の時間だった。

「椎名さんだ。」

関君が声をかけた。

椎名萌がこつちを見る。

「椎名さん、今終わり？」

「うん。今日も雨だからね。」

「いーなー、オレらこれからだもん。」

「頑張つてね。」

「うん、また明日。」

一度だけ目が合った。

俺は何も言わなかった。

いつもの光景。

そう。

いつもの。

一年の時も、二年の時も、こうして椎名萌はいつも笑って挨拶をしていた。

誰にでも愛想良く笑って、よく喋って、うるさいくらい、騒がしい女。

違うのは、視線を感じるようになったこと。

違うのは、今日はうるさくなかったな。

珍しく静かだった。

ただ、それだけのこと。

翌日。

休み時間、タケに用事があつて五組へ行つた。

「あ、あつきらくんだー。」

相変わらず元気に声をかけてくる二宮。  
タケも、関君もいる。

「ねーねー、」

いつも笑顔の二宮の隣に、あいつがいない。  
珍しいな。

あのうるさい女がいないなんて。

そう思つて教室を見渡すと、ちよこんと自分の席に座っているではないか。

珍しいこともあるもんだ。

「次の理科、実験室に移動だつてー。」

係りの生徒が大きな声で伝えている。

「実験室かー。遠くてめんどいなー、移動。」

「校舎の一番奥だもんなーっ。」

「よーし、じゃあ一着の者には、特別奉仕！給食の牛乳をあげちやうよ！」

「ぜってーいらねーよ。」

「っーか走らないって。」

「走つてにのに勝てる奴いねーって。」

そんな事を言つて盛り上がる二宮の周り。



それでも会話に入ってこない椎名萌。  
珍しい。

そう思っただけで見てみると、椎名萌は教科書で顔を隠すように教室を出て行った。

なんだ？

明らかに不自然な行動。

ぎこちない仕草。

変な女。

やっぱり変な女だ。

次の週の朝だった。

「おはよう。」

下駄箱で、椎名萌と会った。

一瞬、目が合ったが、先に逸らしたのは椎名萌の方だった。  
なんだ。

なんか違う・・・

また違う・・・

ああ。

顔。

泣いた跡って感じが。

また泣いたのか。

変な奴。

変な女はそのまま俺のクラスに入ってきた。

「おはよん、めぐちゃん。」

「オーッス。」

四組には河野ヒロアキと北川千夏がいた。

「おはよう。」

クラスが離れても仲の良い三人つてとこか。  
よく続くよな。

俺は自分の席に座ると小説を開いた。

「おおー！すっげーな。強烈な文字。」

「これね。」

「やつぱり？ちなっちゃんもそう思う？」

おいおい。

聞こえてくる三人の会話。

「めぐちゃんに嫌がらせをしているのは、聡一君と話すのがダメとかじゃなく、本当の目的は塾を辞めさせること。」

「塾？しーな、聡一君と塾一緒だったのか？」

「うん。」

おいおい。

だから聞こえてるって。

「そんなあまり知られていないところまで調べるとは熱狂的なファンね。」

「ってことはいじめは続くのか？」

おいおい。

そういう話は聞こえないように話せよな。  
ばか女。

どうやらばかでも気づいたようで、それからは聞こえて来なくな  
った。

小説を読む手が止まった。

そういえば、椎名萌の好きな男は松岡聡一だという噂があったな。  
噂か。

そういうの、楽しい年頃なんだろう。  
人の恋愛で盛り上がって何が楽しいのだろう。  
まったくわからん。

小説のページを一枚めくった。

ん？

まてよ。

熱狂的なファンとかいじめとか言ってたな。  
松岡ファンクラブとかあるんだっけ。

ああ。

あいつ目を付けられたってことか。

ばかだな。

ばかな女。

それで……

泣いたのか？

いじめられて？

俺には関係の無いこと。

俺には関係が無いこと。

かわりたくない。

面倒くさい。

ただ、それだけのこと。

「めぐーっ、めぐ、来てる？」  
「けいちゃん。」

廊下から椎名萌を呼んだのは斉藤恵子だった。  
登校時間が近づき、教室も廊下も賑やかになってきた。

小説を閉じる。

顔を上げると何故か北川千夏と目が合った。

そのまま教室を出て行く北川。  
なんだ？今の。

「おはよ、晃君。」

健太が登校してきた。

廊下がいつもより騒がしい気がした。  
気のせいかな。

「おいつ、なんかすげーぞ。」

廊下から声がした。

「なにになに？」

「どうした？」

「ケンカ？」

おいおい。

喧嘩って……

すっかり野次馬の一人になっているのは健太。

興味は無い。

登校して来た生徒であつという間に廊下には黒い影ができていた。

「めぐちゃんいじめにあっているらしいよ。」

興味は無い。

「おい、五組の斉藤と椎名がもめてんぞー。」

興味は無い。

河野ヒロアキが慌てて廊下に駆けつけていくのを見た。

「椎名さんってほら、松岡君の事。」

「ああ、なるほど。会長に目付けられたのね。」

「松岡君を好きになるなんて度胸あるよねー。」

おいおい。

今朝の話かよ。

興味は無い。

が、聞こえてくるのだから。

聞こえてもいい話してことか。

「めぐ、黙っていてもわからないでしょ。」

斉藤恵子の厳しい声が聞こえてきた。

「わかるから……どんなにつらいか、わかるから。」

椎名萌の声ははっきりとは聞き取れない。

それくらい、立場が悪いつてことか。

見なくても、なんとなく状況はわかる。

興味は無い。

「だからってこんな事して言い訳ないでしょ。」

斉藤の声は更に大きくなっている。

変わらないな。

あいつはいつだって正しいことを声を大にして言う。

由利の時もそうだった。

斉藤は、自分の立場を悪くしてでも、椎名萌をフォローしているのがわかる。

あいつはそういう奴だ。

そしてもう一人……

「松岡のこと好きだって、言っちゃえよ。」

「そうだそうだ！」

面白可笑しく盛り上げようとする、周りの野次。人事のようにただ、見ているだけの野次馬。

「そんな訳ないだろ、デタラメだよ、デタラメ。」

「おつ、椎名の父、登場か。」

「その噂ならもう古いぜ。もえの好きな人は聡一君じゃないよ。それに聡一君がもえを相手にするわけないだろ。相手にされないって。無理、無理。」

笑いながら話す二宮に、周囲の雰囲気が変わっていく。徐々に。

そう、徐々に。

でも、確実に。

周りの雰囲気を変えていく二宮の存在。相変わらず。

見事。

「相手にされないのは言えてるな。」

「だな。」

「確かに椎名さんって松岡って感じじゃないよな。」

「言われてみれば。にのとうの方がお似合いじゃん。」

「にのは父だけだな。」

「あははー。」

簡単なことだ。

人が人をいじめるなんて。

今日は当事者かもしれない。

明日は傍観者かもしれない。

紙一重。

そんなまるでゲーム感覚のような幼稚な事。

それを上手く操れるのが二宮。

「じゃああの噂は嘘か？」

「そうそう。信じた奴残念だったなー。」

「ダッセー。」

「誰だよこんな噂流したのー。」

「ガセネタじゃん。」

「あははー。」

周囲は笑いに包まれていた。  
いつものように。

「チャイム鳴ってるぞー、教室へ入れー。」

HR開始のチャイムが鳴り、廊下に先生達の姿が見えた。

さつきまでの人山があつという間に無くなった。  
そしてはじまる。  
いつものHRが。  
ただ、それだけのこと。

その翌週からは一学期最後の期末試験がはじまった。  
あれだけ騒いだあの朝の事も。  
試験が終わった頃には、誰も噂のことを言う者はいなかった。

またいつもの朝に戻った。

「おつす、晃。」

「ああ。」

「KEIGOの八月号、いつ見に来る？」

「日曜は？」

「オツケーじゃあ昼頃。」

「わかった。」

毎月タケの家に届く雑誌を見せてもらいに行っている。  
変わらない事。

次の休み時間だった。

「見たか？」

「見た見たー。」

クラスの男子の話し声が聞こえてきた。



特に興味は無い。

「椎名だろっ。」

「すっげー、バツサリいってたよな。」

バツサリ？

特に興味は無い。

「晃君、行こーぜっ。」

健太に呼ばれた。

次の授業は技術室へ移動だった。

五組の前を通った。

ふと、教室の中を覗く。

相変わらず元気に騒いでいるのは二宮。

そしてその横に

変わっていた事。

椎名萌が髪を切っていた。

ただ、それだけのこと。

技術室に入ると、前の授業だった三組がまだ数人残っていた。

「見た？椎名の髪。」

「見た見たー。かなり短かったよなー。」

聞こえてきた会話はテニス部の男子達。

髪を切っただけでそんな盛り上がる話なのか？

「俺まだ見てない。」

「あれ？祐也見てないの？」

聞こえてきた声は笠原祐也。

「見てない。」

「朝練は？」

「来てなかった。」

「へー、珍しい。」

「なんで俺だけ見てないんだ？」

「五組行けばいるだろ。」

「あれは失恋とみたな。」

「まじでえ？」

「あんなバツサリ切ったらそうっしょ。」

おいおい。

だいたい、なんで女はわかりやすく髪を切るかね。

なんかありましたって言ってるようなもんだろ。

ばかだな。

ばかな女。

失恋で髪切る女なんてもつとばかだな。

あれ。

あいつの好きな奴って・・・

松岡のことは片付いたし。

そういえば、あいつが好きなのは祐也で・・・

祐也に彼女がいるのは前から。

今更なぜ髪を切る？

ってか、失恋で切るのか？

わかんねーな、女って。

わかりたくもないけど。

関係ないけど。

放課後、うちのクラスに椎名萌が来た。

「あきちゃん。」

目が合う。

少しの間が空く。

俺から逸らした。

「しーな、お待たせ。部活行こうぜ。」

「あ、うん。行こう。」

ヒロアキと教室を出て行く。

その後姿を見送った。

肩よりも上で揺れる髪。

おそらく、三十センチは切ったのだろう。

別にお前が髪を切ろうと、切らなくても。

俺には関係ない。

俺には関係が無い。

ただ、それだけのこと。

5 .

七月も中旬を迎えた。

中学生最後の夏。

部活動の集大成、引退試合の中体連。

そして受験生となる。

俺は相変わらず適当に部活に参加。

六時間の授業をこなし、適当に委員会に出席して、適当に学校生活を送っていた。

今年の夏も暑いけれど、一階の教室はそれでも風が通る。

「それでは今日はここまで。夏休みは七月いっぱい美術室を開けておくので各自課題を終わらせるように。」

「礼。」

「ありがとうございました。」

選択授業が終わり、皆次の授業に向けてそれぞれ移動し始める。資料を片付けていると、奇怪な声が聞こえてきた。  
なんだ？

声の主はお騒がせ女、椎名萌だった。

またかよ。

うるさい女。

「ははは。もえ、昔の癖直ってなかったんだ。」

「え？癖？」

「もえはね、こうすると」

再び言葉にならない声を出して首をすくめていた。

「首が人一倍くすぐったいらしいよ。小学生の時、よくこうやってからかわれてたよね。」

「もえー、行くぞー。」

「はい。」

「ひゃあああー @ @ @」

ほんとだ。

やってみたら、本当だった。

「あきちゃん。やめてよ@ @」

変な弱点。

変な女。

「もー、ほんとにやめて首弱いの。」

変な弱点。

おもしろい女。

だから。

次の日も、やってみた。

昼休み、タケと関君と話していたら、椎名萌が来たから、後ろを向いていたから、やってみた。

「ひゃあああー@ @」

声を上げ、首をすくめる。

おもしろい。

「あきちゃん、もーやめてよ。」

「はは。椎名さん、すっかりあきちゃんにやられているね。」  
「もー。」

予鈴が鳴る。

「じゃな、あきちゃん。」

関君が教室へ戻る。

タケも後に続く。

教室へ戻る者、移動教室へ向かう者、廊下がざわつく。

しばらくすると静けさを取り戻した廊下に、残っているのは二人。

「入らないの？」

「入れば。」

沈黙が流れる。

「じゃあね。」

そう言うのと椎名萌が教室へ戻った。

本鈴が鳴り、授業が始まった。

ただ、それだけのこと。

期末試験の結果が貼り出されていた。

成績上位三十名。

相変わらず一位を独占し続けているのは松岡聡一。

タケは六位。

調子は良かった。

順調に。

俺は四位に座った。

そして視界に入ってくる。

椎名萌が後ろを向くから、やりたくなる。

「ひゃあああー @ @」

奇声と共に首をすくめる。

「もー、あきちゃん。やめてっばー……あ！あきちゃんすいね！4位だなん……」

「ひゃあああー @ @」

再び奇声と共に首をすくめる。

椎名萌の順位は俺にとってはどうでもよかった。

反応がもしろい。

ただそれだけのことだが、しばらく飽きなかった。

「晃君。」

帰宅途中で声をかけられた。

「今帰り？途中まで一緒帰ろー。」

「ああ。」

後ろから走ってきたのは市井里美だった。

市井は近所に住んでいる。

短髪にハスキーな声の持ち主は、昔から男友達のような感覚でいた。

「晃君試合、どこでやんの？」

「第四中。」

「そっかー、また遠征かー。」

市井とは、別に特別親しいわけでもなく、家が近いからといって交流も無い。

健太と遠い親戚にあたる関係らしく、たまに一緒に遊んだりもしている。

「あ、そうだ、晃君も行くよな、にのに誘われた日。」

「ああ。」

「と、まずは中体連か。終わったら思いっきり遊ばーっと。」

家の前まで歩いた。

「じゃあね。晃君。」

「ああ。」

そう言って別れた。

家に帰るとばあちゃんが蚊取り線香に火をつけていた。

「おかえりー。」

「ただいま。」

縁側に置かれた蚊取り線香の匂いが漂っている。

「昨日トイレに起きたら、晃の部屋まだ明かり点いとってなー。」

「そう。」

「勉強かい？」

「まあ。」



俺は無難な返事をしておいた。  
ばあちゃんが何を言いたいのか、なんとなく感じ取れるから。

「無理せんと。」

「わかってるよ。」

すかさず次の言葉を投げた。

これ以上聞かれないように。

これ以上話し込まれないように。

わかつている。

わかつているから。

大丈夫。

大丈夫だよ。

調子は良いから。

勉強は、好きではないけれど嫌いでもなかった。

時間はたくさんあった。

だから困ったことは無かった。

塾へは行かなかった。

困ったことは無かった。

俺には二人の兄貴がいる。

一番上の勝兄は東北の大学へ行っている。

二番目の亘兄は私立の高校の三年。

亘兄は勉強のできる奴だった。

高校受験の時、俺は小学六年生だった。

今でも覚えている。

悔し涙を流していた亘兄の背中を。

なんでそんなことで泣けるのだろうか。

そう思っていた。

亘兄は第一志望の高校に不合格。

滑り止めで合格していた私立の学校に通うことになった。

「おまえのせいだ。」

春休み、亘兄にそう言われた。

俺が居なければ、俺なんか居なければ。

合格したのか？

ただの八つ当たり。

そんなのわかっていた。

ただ、それだけのこと。

中学に入学すると、担任の先生から、穂高兄弟の三番目か。と言われた。

兄貴達がそれだけ優秀だったということだろう。

別に俺には関係ない。

俺には関係がない。

そう思っていた。

だが。

こつも考えるようになった。

亘兄が出来なかったこと。

亘兄の第一志望の高校に、俺が合格したら・・・

そんなことを考えなくも無かった。

ただ、それだけのこと。

今日は一学期の終業式。

校長先生の長い話に続き、夏休みの諸注意等が話される。

前に並んだ健太に話しかけられた。

「晃君、あれほんとに行くの？」

「ああ。」

「カラオケ好きじゃないのに？」

「べつに。」

「椎名萌がいるから？」

「は？」

健太から出た言葉の意外さに驚いた。

「だって、晃君最近椎名とよくいるし。」

「にのの金魚のフンだろ。」

「ぶつ、そ、それは確かに。」

噴出しそうになるのを抑えた健太。

終業式中なのでふざけていてはまずいだろう。

前を向いたが、肩が小刻みに震えているのがわかる。

笑いをこらえているのだろう。

先日、二宮から皆でカラオケに行かないかと誘われた。

タケが居るなら別にいいし。

塾があるわけでもない俺は暇だし。

確かにカラオケは面倒くさいが、べつに断る理由も無かったから。  
ただ、それだけのこと。

終業式が終わると、壮行会が始まった。

壮行会は、中体連に出場する選手を応援する会のようなもの。  
三年にとっては引退試合ともなる、記念式典のようなもの。  
面倒くさい。

そんなのに俺が出るわけがない。

だから、バレー部は部長の奥居と副部長の梶原に任せた。

俺は一般生徒席からそれを見ていただけ。

「晃君。」

教室を覗く奥居と梶原。

「いないのかー。あ、椎名ちゃん。」

「あきちゃ・・・じゃない、穂高くんいないけど鞆あるから戻ってくるのじゃないかな？」

「おっけー、椎名ちゃん、元気してた？」

「はははー。元気だよー。」

教室へ戻るところで、廊下からの賑やかな声に気づいた。

奥居と梶原・・・と椎名萌。

知り合いだったのか？あいつら。

しかし椎名萌は相変わらずうるさい。

「晃君、今日は一時半になったから。」

「わかった。」

「そういや椎名ちゃん髪ばつさり切ったね。」

「おっくん、その話古くない？」

「あはは。確かに。」

いつもの笑顔。

いつもの喋り。

いつものばか女。

「じゃあ、椎名ちゃんまたね。」

「うん、ばいばいー。」

ああ。

奥居と梶原と椎名萌は同じ第二小の出身か。

「ひゃあああー @ @ @」

奇怪な声を上げ、首をすくめる。

「あきちゃん。もー、やめてよー。」

おまえが後ろを向くからだろ。

「おっくんと仲いんだ。」

「あ、うん。おっくんとかじくんね、小学校の時にけっこう話していたよ。中学に入ってからは今久しぶりにあんなに話したかな。」

「ふーん。」

教室に入り、席へ戻った。

椎名萌も付いてくる。

「めぐちゃん、トマト食べてあげるから、卵焼きちようだい？」

「椎名、通知表見せるから春巻きくれ。」

「あのねー。通知表はいいよ別に。」

ヒロアキと北川。

三人で弁当を食べていたのか。

相変わらず仲の良い、騒がしい三人組。

「あきちゃんは通知表どうだった？良かった？」  
「見るか？」

「え？いいの？」

「おまえのも見せろよ。」

「え？だってあきちゃんの方が頭いいし」

互いの通知表を交換した。

「あれ？・・・あれ？」

椎名萌の表情が固まった。

そして、手に持った通知表と、俺の顔を交互に見て、驚きを隠せない様子。

椎名萌の通知表は思った通りだった。

ほとんどオール五に近い。

通知表は絶対評価じゃないからな。

定期試験の結果が全てではない。

授業態度、積極的に取り組む姿勢、周りとの協調性。

そんな要素が含まれての評価が通知表。

だから、こいつみたいに愛想良くいつも笑っている奴の方が通知表の評価は高いさ。

だから、そう言ってやった。

「絶対評価じゃないからな。おまえみたいに愛想のいい奴の方が得をするってこと。」

ありのままを伝えただけ。

ありのままに伝えただけ。

ただ、それだけのこと。

そして翌日から中体連がはじまった。

大抵の運動部は、市営競技場の中で試合を行う。

陸上部、野球部、サッカー部、テニス部、卓球部、バスケットボール部、剣道部、柔道部。

各校の応援も盛り上がってまるで祭りのような大歓声の中、試合が行われる。

バレー部は決勝戦を除く試合を、会場となるそれぞれの中学で行っていた。

だから、そんな祭りのようなめでたい感覚ではなかった。

もちろん、決勝戦にまで残ったことなど一度も無い。

そう。

これが引退試合となる。

会場となった第四中学校の体育館は蒸し暑さと人の熱気で汗が止まらない程。

当然アウエーなのだけけど、こんなに観客がいなければもっと気温が下がるのではないかと思う程。

「あれ？椎名ちゃんじゃない？」

暑くて集中力が鈍る上に、奥居の話もまた暑苦しく感じた。

「見間違いないじゃない？こんな所まで来ないでしょ。」

「かじくん、よく見てよ。あそこ、ほら。」

奥居が指をさす方を見る。

「あ！ほんとだ、椎名さんだ！」

関が先に気づいたようで、駆け寄って行った。

「珍しい組み合わせだ。」

そう言って奥居も向かった。

ここからは、そうも見えるが、そうも見えない。  
どっちでもいい。

別に椎名萌が来ようが、来まいが。

別に椎名萌が居ようが、居まいが。

俺には関係ない。

俺には関係がない。

ただ、それだけのこと。

暑い。

体育館の気温はどんどん上昇している。

こんな中で試合をやるのか？

集中どころではないだろう。

暑い。

「いやー、びつくりだね。」

「こんな所までわざわざ見に来るなんて。」

「物好きもいるもんだー。」

「しかも変な組み合わせ。」

「椎名さんと市井だろ？」

「完全アウエーからは抜けたな。」

「同じようなものだろ。」

「ははは。そうだな。」

「おっしやー、俺らはいつも通り。最後の試合、やんぞー。」

「おおーっ。」

第四中選手と挨拶を交わし、コートへ入る。



いよいよはじまる。

隣に奥居がやって来て言った。

「晃君を見に来たんじゃない？」

それだけ言うと、笑みを浮かべて自分のポジションに就く奥居。  
おいおい。

偉い余裕　だな。おっくん。

緊張感もありやしねー。

おいおい。

関係ないね。

椎名萌が俺を見に来ようが、来まいが。

椎名萌が居ようが、居まいが。

俺は自分のことをやるだけ。

そう。

自分のことを。

追いつけるボールの先に、眩しいライトの火が射していた。  
ただ、それだけのこと。

暑い。

どれくらい経ったのだろうか。

暑い。

どれくらい動いたのだろうか。

暑い。

どれくらい・・・

試合は負けた。

負けたら終わり。

今日は終わり。

明日も終わり。

もう、終わり。

ただ、それだけのこと。

試合は負けた。

別に部活なんて本気じゃなかった。

本気になれなかった。

夢中になることなんてなかった。

夢中になれなかった。

結果なんてどうでも良かった。

どうせ運動で叶わないことぐらい知っているから。

あいつに叶わないことはわかってるから。

そう、あいつ。

俺には二人の兄貴がいる。

一番上の勝兄は、昔からスポーツが得意で、中学では陸上部に入っていた。

百メートルハードルで、県の大会記録を持っている。

東北の大学へはスポーツ特待生として入学。

だから、俺は陸上部へは入らなかった。

中学に入学すると、部活動の勧誘期間が二週間あった。

あの兄貴の弟なのだから、ぜひ陸上部にと。

先輩だけでなく、顧問の先生からも勧誘を受けた。

あの兄貴の弟なのだから。

皆、そうやって決め付けた。

俺は別に走るのが嫌いなわけでも、苦手なわけでもなかった。

遅いわけでもなく、タイムは速い方だっただろう。

でも・・・

必要なのは俺じゃない。

俺じゃなくて、勝兄。

俺じゃなくて、勝兄を見ている。

勝兄を通して、俺を見ている。

例え、勝兄を超えても超えなくても。

勝兄を超えられても、超えられなくても。

答えは同じ。

皆、勝兄を見ているのだから。

当然。

超えても、勝兄の弟なのだから。

超えなければ、勝兄の弟なのに。

そう言われるだけ。

答えは同じ。

勝兄いての俺。

ただ、それだけのこと。

そんなこと、わかっていて、居られるわけがない。

その後、陸上部が駄目ならサッカー部、テニス部と、走りを見込まれ勧誘を受けたが、どれも断った。

どれも同じことだから。

もう運動部に入るのはやめようと思った。

美術部に入ろうかとも考えたが、絵を描き続けることは、家族の中で、俺の立場を悪くするだけ。

わかっていたこと。

絵だって、好きな時に好きな場所で好きな絵を描くのが好きなだけ。

決められた課題を描くのが好きなわけではなかった。

部活を決める、仮入部期間の一ヶ月は俺を悩ませた。

そもそも。

なんで部活に入らなきゃいけないんだ。

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

ただ、それだけのこと。

仮入部期間が終わろうとしていた時、二人の生徒に声をかけられた。

「バレー部、入らない？」

最初は先輩の勧誘だと思った。

それ位、二人とも身長が高かったから。

当時、俺はまだクラスの女子より背が低かった。

「今年人気無くてさ、部員集まないと試合できないんだよ。って訳で見学レッツゴー。」

「オーッ。」

俺の返事も待たず、両脇を奥居、梶原という二人に挟まれ、体育館へ連れて行かれた。

なんなんだこいつらは。

体育着のカラーで、先輩ではなく、同じ一年だということを知った。

面識が無いということは、第二小出身の奴ら。

抵抗する力も虚しく、長身の二人に両脇を抱えられて足を踏み入れたのがバレー部だった。

「先輩　っ、仮入部希望者一名です。」

「おい、俺はちがつ・・・」

「いいから、いいから。」

「おー、ありがとなー。」

「おまえら一年に勧誘やらせて悪いなー。」

「いえいえ。暇があったら練習しましょうよ。」

「それに、おっくんかじくんコンビなら先輩より新入生に人気ありますから。」

「なにぃー?!」

「あははー、確かに。」

「おいっ、笑い事じゃなぞ。」

「あははー。」

なにやら和やかな雰囲気。

見たところ、先輩は六人。一年が四人。

確かに少ない部員数。

バレーが何人でやるものなのか、知らない俺でさえ、この部員数では存続の難しさを感じた。

「で、何君？」

笑いが収まった時、先輩の一人が口にした。

連れて来られたままだった俺。

「知らないっす。」

「ええっ?!」

「そういえば、何君？」

「おいおい、マジかよ。」

「おっくん、名前も知らない子、勧誘してきちゃったの？」

「あはははー。」

「おもしれー。」

再び笑いの渦が起こった。

「で、何君？」

改めて、聞く奥居に、先輩達は肩を震わせ、笑いをこらえていた。

「穂高です。」

「穂高君です。」

「ぶはははー。」

「あはは、皆聞いてたし。」

名乗った俺のすぐ後に、梶原が先輩達に紹介したのがウケたらしい。

再び笑い声に包まれた。

「やっぱおもしれーわ。おっくんかじくん。」

「一緒にしないで下さい。」

「いいセツトプレーを期待しているよ。」

「よっ、相棒!」

「で、何君だっけ？」

その後、笑いが収まるのに時間がかかったのは言うまでもない。

五月に入り、仮入部期間が終了した。

俺はバレー部に入部した。

理由は一つ。

誰も兄貴を知らなかったから。

ただ、それだけのこと。

だから、俺が本気で何かに夢中になるなんてことない。

だから、俺が本気で部活をするなんてことない。

本気で・・・

試合に負けた。

ただ、それだけのこと。

なのに。

なのに・・・

なのに・・・

なんで、泣いてるんだ？

負けたから？

終わったから？

部活から解放されたから？

あれ？

あれ・・・

なんで。

なんだこれ。

穂高と名乗っても、兄貴の事を聞かれなかった。

出身小学校が違う奴等は知らなかった。

決して活躍している部活ではなかったから適度な活動だった。  
少人数だけど、属すには適切だった。

部活なんて、たかが所属。

試合なんて、たかがゲーム。

ルールやプレーは身に付けていったけど。

試合をこなす毎に動けるようになったけれど。

身長も伸びていったけれど。

ただ、それだけのこと。

ただ、それだけのこと。

なのに。

なのに。

だから。

いつの間にか。

知らない間に。

好きになっていたのか。

バレ！。

いつの間にか。

知らない間に。

好きに……

顔を上げた。

泣き崩れる仲間達を見る。

体育館の蒸し暑い熱気。

外を見る。

照りつける太陽の光が、眩しかった。

ただ、ただ、眩しかった。

目が合った。

日差しが照り返すアスファルトからは熱気が溢れていて。

歪む視界の中に。

椎名萌が立っていた。

ただ、それだけのこと。

## 4・夏の空

1.

「これ、誰が描いたの。」

「ぼくだよ。」

「そう。上手ね。」

夢を見た。

まだ小さい頃の俺。

何処か知らないが、でっかい草原が広がってて

小高い丘の上に座り、一人で絵を描いていた。

空の絵。

すると知らない人がやって来て、誰が描いた絵かと聞かれた。

知らない人は女性だった。

白い帽子を深く被って、白い洋服を着た、女性。

それが誰かなんてわからないけれど。

それが誰であつても関係がないのだけれど。

なんだか遠く、惹きつけられる夢だった。

上手ね。

その言葉が耳に残った。

誰の声かなんてわからないけれど。

それが誰の声であつても・・・

「晃。」

カーテンが開けられる音がした。

体が重かった。

まだ瞼も重い。



「朝じゃよ、晁。」

差し込む光で目を開けた。  
眩しい。

「珍しく起きてこんから。」

体を起こした。

眩しい。

明るい。

というより、暑い。

「あれ。」

時計を見ると昼を過ぎていた。  
太陽はまさにてんぺんに上り詰め、誇らしそくに照り付けている。

「部活はもうないんじやろ。」

「たまには遅起きでも良かろう。」

何年振りだろう。

ばあちゃんに起こされるだなんて。

何年振りだろう。

朝方、一度も目が覚めず眠り続けただなんて。  
何年振りだろう。

夢を見て目が覚めただなんて。

「着替えて昼飯にしょーや。」  
「うん。」

着替えを済ませて居間に下りた。  
扇風機に扇子。

「ばあちゃんは新聞を読んでいた。」

「そうめんにしたよ。」

「うん。」

「今日も暑いのに。」

「クーラーつけないの？」

「扇風機で十分だな。」

毎年。

何も変わらない。

今年もばあちゃんの煎れた麦茶を飲む。

また、夏が来た。

ただ、それだけのこと。

「ご馳走様。」

そうめんを食べ終えて、思い出した。

今日は午前中学校に行く予定だった事を。

今日から始まった夏期講習。

塾に通っていない俺でも、学校で開かれる夏期講習くらいは参加しようと思っていた。

が、終わってしまったのだから仕方ない。

明日から行けばいいだろう。

長い夏休みのはじまり。

まだまだ時間はあるのだから。

「出掛けてくる。」

「帽子被つてくんよ。」

次に思い出したのは、午後遊ぶ予定だった事。確かタケんちに行く約束。

の前に、二宮達と遊ぶんだったか。

面倒くさい。

大人数で遊ぶのは久しぶりだ。

一年の時、泉くんに誘われて、時々顔を出していたこともあったが。

タケと仲良くなつてからは、二人で遊ぶことが殆どになった。

今更・・・

面相くさい。

ただ、それだけのこと。

「おつ、講習サボったな。」

タケが笑つて言った。

「おつす、晃君。」

「あきちゃん、昨日はお疲れー。」

関君も来ていた。

なんだ、この大人数は。

聞いていたよりも増えている。

面倒くさい。

更に面倒くさい。

カラオケなんて、もっと面倒くさい。

この後タケとの約束が無ければ、帰っていたな。確実に。

騒ぎたい奴らで勝手に騒げばいいだろう。

それほど広くも無い一部屋に、十数人が一緒にいるだけで気分が悪  
い。

外へ出ることにした。

カラオケの室内もそれほど涼しくはなかったが、外の暑さは比べ  
ものにならない。

三時を過ぎたというのに、七月の太陽は容赦なく照らし続けてい  
る。

少し離れた階段の所に、暇つぶしを見つけた。

「ひゃあああー @ @」

声を上げ、首をすくめる。

「あきちゃん？」

振り返り驚いた表情を見せる。

「びつくりしたあー。」

後ろを向けているから、やりたくなる。

「戻らないのか？」

「あ、うん。ちょっと暑くなって・・・外で涼もうかと。」

暑い？

外で涼む？

やっぱりばかな女だ。

そのほか女の隣に腰を下ろした。

「あきちゃんは何か歌わないの？」

「聴きたいな、あきちゃんの歌。どんな曲歌うの？」

「別に。カラオケ好きじゃないし。」

しばらく、下を向いて黙っているばかり女。

うるさくて、騒がしいのはどこへ行った？

そういえば。

今日はうるさくないな。

今日は騒がないのか？

こんな所に一人でいることも珍しいよな。

おバカ騒ぎ、好きそうなのに。

隣に座る横顔に視線を向けた。

あれ。

こいつ、こんなんだっけ？

こんな顔してたっけ？

こんな顔？

どんな顔？

いつも笑っていて、うるさくて、騒がしくて。

何の悩みもなさそうに見えた、変な女。

だよな？

なんだ、この顔。

そういえば・・・

昨日こいつに会ってるんだっけ。

わざわざ試合見になんて来てたんだっけ。

「晃君を見に来たんじゃない？」

奥居に言われたことを思い出した。

まさか。

有り得ないだろう。

だって。

だって、こいつの好きな奴は・・・

あれ。

誰だ？

誰だっけ。

笠原祐也。

松岡聡一。

どれも解決したんだっけ。

じゃあ・・・

「好きな奴いんの？」

聞いてみた。

「えっ？」

「今いるのか？」

「い、いる。」

予想外に小さい声。

あれ。

なんだ。

こいつ、こんな顔もするのか。

こんな顔。

どんな顔？

「ふーん。」

再び、椎名萌は下を向いた。

やっぱり変な女だ。

「歌、楽しいか？」

「え？あ、カラオケ？」

「楽しいよ。テストとか終わるとストレス解消によく来るよ。部活では大会とか終わると皆で来て、勝ったら歌う歌、負けたら歌う歌があつて」

一気に喋るその姿は、いつものうるさく騒がしいばかり女に見えた。  
変な女。

変と言えば。

さっきもにのが言ってたっけ。

二宮父。

「名前、なんでもえなの？」

「めぐみだよ。」

「知ってる。」

「あ、そっか。」

思わずつつ込みたくなる程、ばかな答えが返ってきた。

「ずっとか？」

「ううん。小学校の時にね、私転入生だったのだけど、先生が黒板に名前を書いたのをね、当時にのが、“しーなもえ”って読んだのほら、萌って、もえとも読むでしょ。それからだよ。」

「ふーん。」

「今でもそう呼ぶ人は少ないけどね。にのと亮ちゃんくらい？」

なんだ。

こいつ、ちゃんと喋れるんじゃないか。

転入生というワードも引っかけたが。

そつえば。

二宮が昔こいつをいじめてたとかいう話、聞いたことがあったな。

だから余計に今大事にしているとか。  
なるほどな。

「あ、あきちゃんは？何て呼ばれていたの？」

「とくになし。」

「え？そうなの？」

「おまえに付けられたのが初めて。」

「あら。じゃあうちでは？」

「あだ名なんてねーよ。男三人兄弟だし。」

「あ、そうなんだ。三人兄弟なんだ。真ん中？」

「一番下。」

「兄弟多いといいね。私お兄ちゃんが欲しかったんだ。」

「別に。仲良くねーし。」

沈没。

撃沈。

そんな台詞が似合うだろうか。

ばか女のわかり易い表情。

読むのは簡単だ。

あだ名なんていうのがつくのは、周りからかわいがられている証。  
周りから注目を浴びている証。

二宮がなにより証明しているじゃないか。

適材適所の人間。

さすがのばか女も、兄弟の話はまずかったと思ったのだろう。  
口を噤めているのがわかる。

「じゃあ、あきちゃんのお兄さんだったのだね。」

おいおい。

まだ続けるのか？



「校長室の前の、名誉賞。陸上部にお兄さんの名前が。」

おいおい。

懲りなていのか？

「穂高つて、同じ名字だとは思っていたけれど。」

おいおい。

空気読めねー奴だな。

「やっぱりあきちゃんのお兄さんだったのだね。」

やっぱりばか女決定だな。

うんざりだよ。

その話はうんざり。

もう慣れたけど。

勝兄の活躍は、今後記録が塗り替えられることがない限り、ずっと光を浴び続ける。

そして、俺はずっとその光の下にいないといけない。

光の下。

それは当然明るいところではなく、光の下は暗闇だ。

ばか女も、光がすごいというのだろう。

そのすごい勝兄の弟だと。

「私はあきちゃんの描く絵がすごいと思うけど。」

「は？」

「去年の写生大会の絵、飾られていたでしょ？美術室の前に。」

「ああ。」

「穂高晃って名前の人が描いた事知った時、どんな人かなって思

っていたら、タケさんの友達だった。あはは。」

そう言うのと、ばか女は笑った。  
いつもの。

そう、いつも笑っているばか女の顔とは違った。  
そして。

違うのはそれだけじゃなかった。  
兄貴のことを。

あの兄貴のことを、聞いたのに。

何も言わないのか？

何も聞かないのか？

比べないのか？

すごいと言ったのは兄貴ではなく、俺の絵。

俺の描いた絵。

俺の・・・

去年描いた絵。

誰にも気付かれなかった絵。

誰にも誉められなかった絵。

誰にもわかってもらえなかった絵。

まさか。

まさか・・・

「あ、晃君こんなところにいたー。」

やって来たのは市井だった。

「めぐちゃんの曲、もうすぐまわってくるよ。」

「あ、うん。じゃあ、戻るね。」

そう言うそばか女は立ち上がった。

転入生だと言った椎名萌。

俺の絵をすごいと言った椎名萌。

いつもと違う顔をしている椎名萌。

なんだ。

よくわかんねー。

わかんねー、女。

とりあえず。

今日も変な女だということだ。

ただ、それだけのこと。

その後、カラオケが終わり、タケんちに行った。

「お邪魔します。」

「あら、晃君いらっしゃーい。」

相変わらず健康そうで元気そうなお手伝いのおばさんに挨拶をする。

タケと仲良くなってから、俺達は遊ぶ時間の大半をタケの家で過ごすしてきた。

この家の使い勝手も覚える位に。

「何か飲む物貰って来るから、好きにしておう。」

「おう。」

タケが部屋を出て行った。

俺はテーブルの上に置かれた雑誌を開いた。  
ふと。

テーブルの隅に置かれたアルバムが目に入った。

見慣れない物。

美術やゲーム関連雑誌以外の物が置かれているのは珍しかった。手に取り、開いてみる。

一面四枚が収納された、フォトブック。

修学旅行の写真だった。

奈良公園、鹿、五重塔、清水寺、金閣寺、銀閣寺、太秦、嵐山、二条城。

風景写真の中に、人物写真。

同じ班だった、二宮、関、斉藤恵子、椎名萌。

相変わらず二宮はふざけて写っているが、彼本来の活発さがよく映し出されている。

そして隣で笑っているのが椎名萌。

こいつもいつも笑っているな。

うるさくて騒がしくてばか女。

あれ。

一枚の写真に目が留まった。

なんだ。

こいつの顔。

こんな顔もするのか。

こんな風に写真に写るのか。

こいつはこれが一番自然に見えるな。

うるさくて騒がしくてばか女に見えるけれど。

この写真はあいつらしい。

「気に入った？」

飲み物を持ってタケが戻ってきた。

「この写真はな。」

「ふーん。」

このに、アクセントを置いて言っ たつもりだったが、タケの表情は緩んでいた。

「二百円。」

「バーカ。」

その後、雑誌を読んで、ゲームをしていつも通りタケと過ごしていたのに。そう。

いつも通り。

なのに。

頭から離れなかった。

一枚の写真が。

帰り際。

「気になった。」

その一言と、百円玉を二枚置いて帰って来た。タケは笑顔だった。ただ、それだけのこと。

2 .

翌朝は登校日だった。いつも通り。

そう、何も変わらない。ただ、夏は暑いだけ。

そして、部活がないだけ。

教室に入ると、にぎやかな声が聞こえた。  
いつも通り。

そう、何も変わらない。

ただ、うるさいだけの、三人組。

「あきちゃん、おはよう。」

そのうちの一人、ばか女が声をかけてきた。

「はよ。」

そして、返事をしただけ。

ただ、それだけのこと。

ばか女は再びにぎやか三人組へと戻っていった。  
こいつら毎朝毎朝、よく話に尽きないな。

鞆から小説を取り出し、ページをめくった。  
いつも通り。

話している内容もまる聞こえだ。

ばかな奴ら。

そして、ばか女が自分の教室へと戻った。

一人抜けても尚、話し続けているのは北川千夏と河野ヒロアキ。

「めぐちゃんに新しい好きな人ができたらどうするの?」

おいおい。

聞こえてるって。

「だからオレは別にそんな気はないって言ってるんだろ。」

おいおい。

だから、聞こえてるって。

「晃君はどう思う？」

「おいっ、なんで晃君に話を振るんだよ。」

慌てて千夏を止めたのはヒロアキ。

おいおい・・・って。

おいおい、マジですか。

「おいっ、オレは別について言ってるんだからな。」

「面白くなりそうね。」

「面白くねーよ、北川あんま暴走するな。頼むから。」

「晃君悪かったな、北川が変な事言っただけ。」

「いや。」

おいおい。

聞こえてもいい話だったのか？

ばか女も変な女なら、その友達も変わることか？

ばか三人組。

そして、ばか女の新しい好きな奴か。

別に。

どうでもいいけど。

放課後になり、タケを迎えに五組へ行った。

蒸し暑い教室も、放課後となると少しは風が通る。

扉と窓が開いている教室からは、にぎやかな声が聞こえてくる。

二宮の声。

いつも通り。

そう、二宮の明るい声が響く五組。

そして重なる複数の声は、まるで合唱のよう。

教室の中に目を向ける。

廊下側に椎名萌とタケが座っているのが見えた。

聞こえてくる二人の会話。

「あと、カラオケは好きじゃないって言っていたから、ボーリングは来てくれるかなって思ってた。」

「彼はボーリング得意だよ。」

「ほんと？良かった。」

おいおい。

今日は周りの会話がよく聞こえてくる日だな。

世の中、人に聞かれてもいい話ばかりなのか？

タケもタケだ。

俺に聞こえてるってわかってて、話してやがる。

「晃がお前のこと気にしてる。」

おいおい。

だから、聞こえてるって。

「えっ？」

驚いた声を出したのは椎名萌。

次に、俺に気づいた二人。

「八月三日、夏祭りだって。」



タケは俺に向かつてそう言つと、鞆を持って教室を出た。  
俺も後に続いた。  
ただ、それだけのこと。

気にしてる・・・か。

俺が？

俺が？

まさか。

まさか？

タケのあの意味深な笑み。

前にもあつたな。

ああ。

由利の時か。

気になるのが恋とかなんとか。

ありえねー。

ありえねー。

気になるなんてどうってことない。

恋だなんて。

恋なわけがねえ。

ない。

無い。

引き出しから一枚の写真を出す。

気になる。

気になったのは写真。

そう、写真。

この写真が。

俺の生まれた日。

母親は亡くなった。

だから、俺と母親と一緒に写っている写真はない。  
写真でしか見たことのない母親。

これが母親。

それが母親。

どれが母親？

そこから出てくることはない。

そんなところに閉じ込めておくなんて、写真ってなんだ？  
生きる人を写したもの。

亡き人が写されたもの。

何を写す為のもの。

何が写る為のもの。

だから俺は写真が嫌いになった。

風景写真を見るのは好きだった。

風景画を書くのに、写真を模写したこともある。

そこに写る風景に。

行ったこともない風景に。

見たこともない風景に。

見ているだけで時間は流れた。

ただ、ただ、見ているだけで。

知らない場所の、知らない写真。

だから人物写真に興味を持つことなんてなかったのに。

タケの撮ったあいつ。

背景さえはつきりしない。

でも。

こんな風に写るのは悪くない。

ただ、それだけのこと。

翌日、学校へ行くと同じ講習に椎名萌がいた。  
自由参加の講習だが、自分の塾の夏期講習に出ている者が多く、  
一クラス分になる程度の生徒数しか集まっていなかった。  
文系、理系の二つのコースに分かれ行われている。  
いつものうるさい三人組は揃っていなかったが、それでも十分椎  
名萌は元気だった。

こいつがあの時何を考えていたかは知らない。  
タケがどんな風にこいつを撮ったのかも知らない。  
偶然かもしれない。

ただ、気になる一枚ではあった。

あの表情。

あの顔。

あんな表情、するのか？

あんな顔、するのか？

そう思ったから、見てみただけ。

ただ、それだけのこと。

改めて椎名萌を見ると。

やっぱり変な奴だった。

朝からよく喋り、よく笑う。

よく動き、よく笑う。

疲れないのか？

午前の講習が始まった。

同じ列に座った椎名萌の横顔が見える。

勉強中は真剣な顔……

でもないか。

真剣な表情でもなく、黒板を見つめる表情でもなく。  
なんだろう。

あの顔。

どの顔。

その顔。

こいつの表情はくるくる変わるな。

常に一定ではない。

やっぱり賑やかな奴だ。

そして、変な女だ。

休憩時間になった。

トイレに行く者、席を立つ者、教室内が騒がしくなる。

休憩中も、あいつの表情は忙しいくらい変わっていた。

外を見たり、人を追いかけたりと視線がぶつかる。

特に二宮の姿を目で追っているのは・・・

金魚のフンだな。

二宮父がいないと不安そうな表情をするのか？

隣の奴が席を立つと、椎名萌の目線がこっちに向けられた。

「あ、あのね、あきちゃん。」

少し表情が変わる。

写真の顔・・・とは違う、

「き、昨日のことなのだけど」

そう言うと、うつむいたまま、顔を上げようとしない。  
なんだ？

その顔。

なんだ。

「な、なんでもない。」

おいおい。

なんでもないって・・・

おいおい。

なんだ、その顔。

俺は何も言っていないし、何もしていないぞ。

それなのに、くるくる変わる表情。

変な奴。

変な女。

やっぱり変な女。

午前の講習が終わった。

片付けをしていると。

あの奇怪な声が聞こえてきた。

「ひゃあああー @ @ @」

声をあげ、首をすくめている。

「あきちゃんやめ」

おいおい。

やったのは俺じゃないぞ。

「椎名ちゃん首弱いって本当だったんだ。」

笑顔で立っていたのは北山。

「あ、うん。」

「この間あきちゃんがやっているの見てさ、おれもやってみようか

なーなんて。」

おいおい。

どうでもいいけど、落とした物くらい拾えよ。

「これ。」

二人の間にプリントを差し出す。  
わざわざ拾ってやった。

「ありがとう。」

この時の顔も、写真と違った。

そう、写真と。

今日も変な女だった。

ただ、それだけのこと。

3 .

七月末。

今日は校外模試。

県内から受験生が集まるといって、面倒くさいが受験生には付き物だ。

前回の定期試験は順調だったが、所詮校内試験。

これで県内の自分の位置がわかる。

面倒くさいが会場までは電車移動。

当然、見慣れない制服を着た他校の生徒も乗っている。

受験生・・・か。

午前三教科、昼休みを挟んで午後二教科。

昼休み、別の教室で受験していたタケがやって来た。

「楽勝〜?」

タケは笑っていた。

「まあ、あれだね。終わりがいいね〜。受験も。俺等も。」

俺等も。

そう言った、タケの気持ちはよくわかる。

高校受験。

たかが受験。

でも、タケにとっては、俺にとっても、十分意味深い。

だから、わかる。

だから、わかるお互いが。

だから、一緒に居る。

その時が来るまで。

試験を全て終え、最寄り駅に着く頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

同時にお腹が空いてきたと男子達で駅の立ち食いそば屋に駆け込んだ。

ふと、顔を上げると。

視界に入る。

ばか女が一人でふらふらしている。

今日はばか女を観察しなかったな。

それだけ俺に余裕がなかったってことか。

なんだか笑えてしまう。

たかが校外試験に。

自分が囚われていただなんて。

認めたくないけれど。

事実。

今日は余裕がなかった。

どんな結果が出るのか。

一人でふらふらしているばか女。

二宮父はそばに夢中らしかった。

変な女。

どんな顔をしているのか。

暗くてここからはよく見えない。

だが、

「ねえー見てー」

そう言っただけ振り返った顔。

笑顔が見えた。

いつもの、笑顔。

そして、目が合う。

距離はあるけれど、確かにあいつも俺を見ていた。

俺はあいつを見ていた。

二宮父が見てくれないことに気づいたのか。

ばか女はそのまま固まっていた。

とぼとぼと、ゆっくり歩いてきたばか女。

顔は下に向けているのでわからなかった。

どんな表情をしているのか。

どんな顔をしているのか。

暗くてよく見えない。

あの写真の顔とは違う。

そして、二宮の後ろに隠れるようにして帰って行く。



「あきちゃん、俺らも帰ろうよ。」  
「ああ。」

同じ方向に帰る関君に声をかけられた。  
最後。

方向が分かれる曲がり角のところで、一度だけ。  
一度だけ振り返った。

そして、目が合った。

そして、外された。

視線を逸らした。

あいつも俺を見ていた。

俺はあいつを見ていた。

どんな表情をしているのか。

どんな顔をしているのか。

ここからではよく見えなかった。

騒いだり、笑ったり、静かだったり、ふらふらしていたり。

下を向いたり、目を逸らしたり。

やっぱり最後も変な女だった。

ただ、それだけのこと。

それから五日が過ぎた。

八月に入ると相も変わらず、夏はただただ、暑かった。

部活のない長い夏休み。

特別、何をするわけでもなく。

俺はゆつくりとたくさんの時間を過ごしていた。

「おはよう。」

居間に下りると、ばあちゃんがスイカを食べていた。

「晃、おはよう。今日も学校かい？」

「うん。」

「暑いのに大変じゃのう。」

一応俺も受験生なんだけど。

ばあちゃんに塾へ通うことを勧められたことはあったけれど。

それ以外、ばあちゃんから勉強の事とやかく言われることはなかった。

いや。

言わせないように、聞かれないようにしていたのかもしれない。

「今日は夏祭りじゃて。」

「うん。」

「晃は行くん？」

「うん。」

「ほお。珍しい。」

そうか？

去年もタケ達と行った覚えがあるぞ。  
ボケたか？ばあちゃん。

「じゃ夕食はいらんね。」

「うん。」

別に。

祭りが好きなわけでも、嫌いなわけでもないけど。

祭りとか、クリスマスとか、行事が好きな奴らが一般的なようで、別にそれに合わせる位はするわけで。

特別、何かあるわけでもないけれど。

なんとなく、誰かに誘われるので、毎年行っていた。  
今年は二宮達と行くんだった。

また大人数。

でもタケもいるから仕方ない。  
ただ、それだけのこと。

午前は学校へ行った。

講習を受ける教室で、あいつと顔を会わせた。

「お、おはよう。」

いつもの挨拶。

にしては、何かおかしい。

おかしいのはいつもか。

変な女、椎名萌。

「ひゃあ@@@」

「椎名ちゃん、おっはよー。」

挨拶に加え、首をくすぐったのは北山。

「北山くん、やめてって言っているでしょ。」

「今日楽しみだねー。祭り。椎名ちゃんの私服姿も楽しみだ。」

「椎名さんの私服ってどんな感じなの？」

北山の声に前回参加していなかった男子が会話に加わる。

「今日もスカート？」

「えっ、ミニスカ？」

「ミミなの？」

「お前ら変なこと考えてんじゃねーの。」

「それは北山だろー。」

「はははー。」

おいおい。

どうでもいいが、騒ぐならあっちでやってくれ。

朝からうるさいのは勘弁。

次々会話が飛んでくる。  
と。

周りの奴等から、あいつはどう思われているのか。

少なくとも北山は椎名萌に興味有りだな。

ちよっかい出すのも、わざとらしい行動も。

見ていてわかる。

見てればわかる。

まるで以前に見た光景。

あの時と同じ。

こんな時、あいつはどんな表情なのか。

男子達にからかわれ。

北山にちよっかいを出され。

黙るか？

困るか？

泣くか？

いや。

泣かない・・・か。

こいつは由利ほど弱くはないか。

こんな時、いつもだったら助け舟を出す二宮が今はいない。

「北山。」

「なにー？」

「前にお前が欲しいっていつていたやつ、タケが持ってるって。」  
「まじで？」

「今日持つてきてるってよ。」

「見る見るー！」

そう言うのと嬉しそうにタケの方に駆け寄る北山。

俺も後に続くことにした。

視界の隅に入ってきたのは、教室から小走りで行く姿。  
泣いてない・・・か。

あいつは強いのか？

教室では北山が抜けた後も男子達の会話が続いていた。

「椎名さんて下ネタ系苦手？」

「あ、おれもそう思ったー。」

おいおい。

聞こえてるってば。

「可哀想なことしたか？」

「純情ぶっているだけだろ。」

「案外やり手だともうぜ。」

おいおい。

だから、聞こえてるってば。

いくら本人がいないからって・・・

「だってあいつ松岡のこと好きだったろ？」

「あー、そーいやそんな噂あったな。」

「でもあれはデマだったんだろ？」

「でもキタは椎名狙いかな。」

「おもしれーじゃん。」

「下向いて顔真っ赤だったじゃん。」

「まんざらでもないってことか？」

「誰が顔真っ赤だったってえ？」

盛り上がっている男子達の輪に、教室に入ってきた千夏が駆け寄った。

「めぐちゃんがなんだって？」

「椎名が顔真っ赤だったって話？」

笑いながら尚も会話が盛り上がっている男子達。

「へえー。それはどんな楽しい話をしていたのかしらあ？」

「違うだろ。やり手だって話？」

「おいおい、直接だなー。」

さらに笑いが起こる。

「ふーん、それでえ？」

千夏表情に怒りが込められていくのに気づいた男子が慌ててフオローにまわる。

「いや、別に俺達は下ネタ系の話が椎名さんは苦手なのかと・・・」

「な、なあ。」

「そ、そうそう。」

全員頷き、苦笑いをしている。

どうやら北川を怒らせてしまったことに気が付いた男子達。

「あのねー、めぐちゃんにそんな話持ち掛けないでよね。するなら私が相手するから。」

「そ、そうだな。」

「ははは、北川さんには勝てないな。」

自分達が言い過ぎたことに非を認め始めた男子達。

「こ、講習そろそろ始まるかな。」

「そうだな。」

苦し紛れな言い訳をして散っていった。

「まったく。」

バカな男子にうんざりといった表情の北川。  
ここにもいたか。  
ばか女の親友？が。

そして、もう一人。

「ちーなつつ。」

後ろから二宮がニコニコしてやってくる。

「あんたどこフラフラしてたのよバカっ。」

「わお。いきなり怒んなくてもいいじゃん。」

二宮父、登場。

今回はだいぶ出遅れたな、二宮。

おまえの出る、お得意場面だったのにな。

北川に怒鳴られている二宮。

俺は二宮のようにはなれないけれど。

一言言っただけ。

ただ、一言。

ただ、それだけのこと。

そして夜から、夏祭りへ行った。

「おーい！」

「あ、関君だー。」

夏祭り会場へ向かう途中で、健太と市井、関君と合流した。

「いやー、まいった。探すの苦労したよ。」

そして二宮達とも合流。

相変わらず背の高い二宮はよく目立つ。

待ち合わせの目印には最適だ。

「じゃあ、とりあえず中心の神輿会場まで行くか。」

「そうだな。」

「そこで飯くおーぜ。」

「しーなちゃんはぐれないようにねー。」

「う、うん。」

北山は椎名萌の隣を歩いている。



それにしても人だらけ。  
それだけ祭りが好きな奴が多いということか。

夜になり、少しは涼しくなるはずが、人混みにいると蒸し暑ささえ感じる。

すれ違う人。

交差する人。

同じ方向を向いている人。

立ち止まっている人。

走っている人。

皆、どこへ向かうのか。

これらの人、どこから来て、どこへ行くのか・・・  
そんなことを考えてしまう。

人の多さに、隣の奴との会話も聞き取りにくく。  
スピーカー放送からは祭りの音楽が流れ続ける。  
的屋の呼び込み。

飛び交う人々の会話。

泣き叫ぶ赤ん坊。

歩行者天国の道は、まるで果てしなく続く異空間のようだ。  
そんな通りをしばらく歩いて行く。

冷め止まぬざわめきの中

ばか女の姿が消えた。

おいおい。

こんな人混みの中、迷子になる気かよ。  
前に修学旅行で迷子になったレベルじゃねーぞ。  
ったく、ばかだなー！

ばかな女。

こんな所で。

こんな時に。  
ばかだなー。

やっぱりばかな女だ。  
それ以上でも、それ以下でもない。  
ただの、ばかな女。  
変な女。

振り返った視界の中に、見つける。

その姿。

その顔。

おいおい。

仲良く喋ってる場合じゃねーぞ。

自分の置かれている状況にさえ、気づいていないばか女だな。  
ばーか。

おっ、気づいたか。

慌てた表情。

慌てた動き。

ばーか。

無闇に動くんじゃないよ。

余計に迷っただけだぜ。

ばーか。

おもしれー。

やっぱりおもしれー奴。

変な奴。

そしてばかな奴。

どんな顔？

そんな顔。

困って。

焦って。

戸惑って。

慌てて。

ばーか。

そっちじゃねーよ。

「やつ・・・」

掴まえようとした腕は、勢いよく振り払われた。  
こんな力、どこから出してんだ？

「あきちゃん・・・」

顔を上げた。

おい。

おいおい。

おいおいおい・・・

なんだ。

なんだ、その顔。

「ごめん、はぐれちゃった。」

震えているのは声。

震えているのは体。

震えているのは表情・・・

なんだその顔。

泣きそうな・・・

「私・・・皆と・・・どうしよう、皆に迷惑かけちゃ」

今度は力を入れて腕を掴み、道の端へと連れて行った。  
人混みはさらに像を増していた。

「友達？」

露店から離れた所まで来ると掴んでいた腕を離した。

「え？」

「さっきの。」

「あ、うん。前の小学校の友達なの。私転校生だって話したかな？」

「ああ、聞いた。」

「懐かしくてつい……ごめんね。みんなに迷惑かけているよね、私。」

まだ震えている声。

まだ震えている体。

いつもよりも早口に喋っている。

そして……

その顔。

その表情。

「前の小学校ってどこ中になんの？」

「え？」

「もし転校してなかったらどこの中学だった？」

「第二中。」

「ふーん。」

少し、会話が戻っている。

声も出てきた。

少しは落ち着いていたか。

表情は……

さっきとは違う。

なんだ。

なんだ、その顔。

今度はなんだ。

なんだ、この感情・・・

「あきちゃん、知っている人いる？」

「部活で顔見知りは何人か。」

「そっかあ。」

転入生というワード。

何回か、聞いたことがある。

こいつの口からも。

転入生。

こいつは転入生。

小五の時の転入生。

俺が探してた・・・

「一本道だから、にの達はこの先で待っているだろ。」

「あ、そっか。そうだよな、御神輿見るって。それまで一本道だね。」

転入生。

お前は、転入生なのか？

あの時の・・・

コンクールの会場にいたのか？

聞きたい。

聞いてしまいたい。

いや。

関係ない。

関係が無い。

こいつか転入生であろうと、無かろうと。

俺にはもう。  
今更・・・

「ごめんね、あきちゃん、迷惑かけて。」

「私バカだねー、真っ直ぐ歩いていけば着いたのにね。」

そう言うと、笑ってみせた。

ばか女が笑う。

いつもの顔。

いつものうるさくて、騒がしくて、ばかな顔。

それだけなのに。

それだけのことなのに。

ただ・・・

「でも・・・あきちゃん私がいなくなったのに気づいてくれたのだね。」

「

おまえがその顔をするから。

おまえがそんな顔をするから。

俺は・・・

なんだ、この気分。

「見てたから。」

目が合う。

こいつが俺を見ている。

俺がこいつを見ている。

それだけのこと。

それだけのことなのに。

おまえがその顔をするから。

おまえがそんな顔をするから。

俺は・・・

なんだ、この気持ち。

「あきちゃん、」

「この間ね、タケちゃんが…あきちゃんが私のこと気にしているって  
言っていたの。」

なんで。

なんで、その顔。

なんで、そんな顔。

なんで・・・

俺は・・・

「その話、ほんと？」

「さあ？」

「ほんと？」

なんで。

なんでおまえはそんな顔をしている？

何を考えている？

何を思っている？

何を・・・

俺は・・・

「おまえは、俺のことどう思っているの？」

俺は・・・

何を・・・

何を考えている？

何を思っている？

何を・・・

これは何だ？

この感情は何だ？

「き、気になるよ。」

「ふーん。」

気になる？

気になるっていつのか？

気になるって・・・

「じゃあ、この前好きな奴いるって、誰？」

答えを言ってくれ。

この感情の。

この気持ちの。

この想いの。

答えを・・・

「・・・あきちゃん。」

「ふーん。」

「俺もおまえのこと気になる。」

「ほ、ほんと？」

驚いた表情で聞き返してくる。

「あきちゃん、ほんと？」

「ああ。」

「ほんと？」



「ああ。」

「ほんと？」

「本当。」

「ほんとねっ。」

表情が明るくなり、笑顔がこぼれる。

ああ。

この表情。

この顔。

こいつは、この表情が良い。

俺が見たかったのはこれ。

俺が見たかったのはこいつ。

「しつこいぞ。」

「本当なんだね。」

「もう行くぞ。」

「うん！」

先を歩いていると、小走りで隣に追いついてきた。

「あ、あきちゃん。」

「ん？」

「手…つないでもいい？」

さつきとは違う表情。

下を向いているけれど。

薄暗いけれど。

それはわかる。

「あ、ほら人多いし、またはぐれると・・・ご、ごめんね。嫌なら

「ほら。」

手を差し出した。

「もう行くぞ。」

そう言って歩き出した。

それから、手に触れるとついて来た。  
さつき掴んだ腕とは違う感触。

あの表情とあの顔と。

あの感情と手の感触。

なんだ。

なんだ。

答えは簡単じゃないか。

答えは簡単だったんじゃないか。

俺が見ていたのはこいつで。

俺が見ているのはこいつで。

表情が気になるのは。

顔が見たいから。

何でとわからなかったのは。

顔が見たかったから。

わからない感情は。

こいつを見ていればわかる。

手の感触は。

こいつが教えてくれた。

だから俺はここに来た。

だから俺はここに居る。

こいつを見ていたから。  
ずっと見ていたから。  
だから。

だから俺はこいつが気になるんだ。  
だから俺はこいつを気にするんだ。  
ただ、それだけのこと。

「あ、来た来たー。」

「おーい、椎名さん、あきちゃんー。」

神輿会場に着くと皆が待っていた。

「ごめんねー。」

「びつくりだよ、いつの間にかいなくなっただもん。」

「しーなちゃんかき氷食べる？」

「わ、みんな買ってるんだ。私も何か買って来ようかな。」

「一人で行くなよー、迷子になるから。」

「あははー、言ってるー。」

「も、もう大丈夫だよお。」

「あははー。」

屋台の方へ向かっていく表情は、さっきまでの顔とはもう違っていた。  
皆と会って安心したのか。

またいつもの賑やかな椎名萌に戻っていた。

「あきちゃん、もえの事ありがとな。もえ、方向音痴だから毎年のようにはぐれてさ。」

「ああ。」

毎年・・・か。

不思議だな。

毎年来ていたはずの夏祭り。

この人混みのどこかに、二宮とあいつも来ていた夏祭り。

これだけの人の中で、何も見ず、何も感じず、毎年過ぎていた夏祭り。

見ようとしていなかったのは俺。

感じようとしていなかったのは俺。

何も見なくても良かった。

何も感じなくても良かった。

別に困ることなど無い。

別に必要も無い。

そう思っていた。

でも・・・

「にのーっ、見てみてー、りんご飴。」

「おー、もえ、買えたかー？」

嬉しそうに。

そう、嬉しそうにはしゃぐあいつを見ている。

あいつを見ている俺。

さっきまでの表情とは違う。

泣いたり、笑ったり、困ったり、騒いだり。

くるくる表情が変わる。

そんな変な奴だけど・・・

そんなあいつを見て何かを感じたのは俺。

あいつが気になると感じたのは俺。

気になるのは・・・

白いワンピースから日焼けした腕が伸びている。

その手が、あっちこっちに動き回る。  
忙しそうに。

しっかり掴まないとどこかへ行ってしまう。  
そう。

捕まえられないくらい、あいつはいつだって元気だ。

「あきちゃん、はい。」

手渡されたのはチョコバナナ。

おいおい。

甘いだろ。

それでも隣で美味しそうに食べているのを見ると。  
それもありかと思ってしまう。

暑くて、うるさくて。

ただ、ただ、面倒くさいはずの夏祭りも。  
こいつが見せる表情には合っている。  
そう思った。

「じゃー、解散。」

「気をつけてねー。」

「バイバイー。」

「またなー。」

それぞれの岐路に着く分岐点。

明かりの少ない道端で。

あいつの顔がまた違って見えた。

さっきまでの祭りの会場の明るさよりも。

薄暗い今の方が落ち着いて見えた。

涼しい風吹く帰り道。

夏の夜空は星がぼやけて見える。

霧がかかったような空。

あの青い空のように、澄み切った空はまだ見えない。  
いつか・・・

また見えるだろうか。

また見ることができるだろうか。

夜空に向かって手をかざしてみた。

指の間をすり抜ける風。

指の間から見える夜空。

指の間から見えるのは・・・

暗闇。

手の感覚を思い出す。

あいつの手・・・

小さくて。

女の手。

小さくて。

温かい手。

女の手。

母親も、

小さい手で絵を描いていたのだろうか。

さつきまでの賑やかな祭りの音はもうとつくに消え。

うるさいくらいに鳴いているのは虫の声。

夜の空。

それもいいかもしれない。

暗闇に照らす光。

それは月明り。

それは街灯。

それでもいい。

夏の空、夏の風、夏の音。  
感じたくなつた。

手を・・・

動かしてみたくなつた。

手で・・・

描いてみたくなつた。

急に。

絵を。

見上げたのは夏の空。

## 5・秋の空

1.

何処か知らないが、でっかい草原が広がっていて。  
心地良い風が吹いていて。

上を見上げれば俺の好きな空。

青空。

なんだこれ。

夢か？

夢の中か？

人影。

後姿が見える。

誰だ？

わからない。

だんだんと近付いてくる人影。

俺が近付いているのか？

影の方が近付いてくるのか？

わからない。

そして振り向かない。

誰だ？

誰なんだ？

別に誰だとしてもいいじゃないか。

誰だとしても関係が無いじゃないか。

そう、関係ない。

でも・・・

なんだこれ。



この気持ち。  
どこかで・・・

ああ。

そう。

気になる。

気になるだ。

この感情は。

気になる。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

いつもの音で目が覚めた。

そう、いつもの。

聞きなれた音。

見慣れない夢を見たせいかな。

夢・・・

夢か。

二学期が始まった。

九月といえど、まだまだ暑い。

夏休みボケが抜けない奴ら。

部活ボケが抜けない奴ら。

微妙な空気の流れる教室で。

放課後、タケを待っていると椎名萌に話しかけられた。

少し、日焼けの残る肌が半袖の制服から見えている。

「髪切ったね。」

「切ってない。」

「うそ、切ったよね。」

「見間違え。」

「切ったよね。わかるもん。」

「暑いからな。」

「私も切ろうかな。そろそろ肩についてきた。」

そう言つて、頭を傾げるから。

視界に飛び込んできた髪に、手を伸ばしたくなる。

「伸びたな。」

そう言つて髪に触れると、表情が変わっていくのがわかる。

これはこれでおもしろい反応。

最初は首をくすぐつてやろうかと思ったが。

「俺、長い髪つて好きなんだ。」

「そ、そうなんだ。」

「それがショート。」

「長いか短いかどっちかがいいってことね。」

少し残念そうな表情をして笑っているのがわかる。

が、次の瞬間にはもう違う表情をしている。

ほんとにこいつの表情は忙しくくると変わる。

「あ、私も去年まではもう少し長かったよ。」

「知ってる。」

「そっか。残念だな。私は去年のあきちゃんを覚えていないもの。」

だろうな。

おまえは俺のことを知らなかったのだから。

おまえは俺のことを知ろうとしなかったのだから。

俺はタケや二宮の周りをウロウロしていた変な女と気付いていたが。

「よく見かけた。」

「その時の私はどんなだったの？」

「変な奴。」

「えっ？変？」

「ぎゃあぎゃあうるさかったな。」

「変でうるさくて……って私良い所ないじゃない。」

「いつも笑ってるから変な奴だと思ってた。」

「楽しかったのかな、毎日が。」

「悩みもなさそうで、バカっぽく見えてた。」

「そうなの？私印象悪いね。」

「でも、悩んでそうなのも見て、ああ、別に変な奴ではないなと思った。」

「そっかあ。」

そう。

いつも笑っている、いつも騒いでいる、唯のうるさい女だと思っていた。

でも、いつの間にか色々な表情を見ているうちに……

そう、こいつを見ている俺に気付いた。

俺が、こいつを見ていた。

「お前は？」

「えっ？」

「俺のこと。」

少しの間が空いた。

「えっと、印象ね。」

そう言って、話し始めたこいつの表情は、見ていて飽きないくらいくるくると変わる。

ただのうるさい女だと思っていた椎名萌と普通に会話をする日が来るなんて、去年までの俺には考えられないことだった。

人とかかわりが面倒くさかった。

女子と話すなんてもっと面倒くさかった。

返事をしないと倍返しで騒がれる女、

大人しくてちょっときついことを言われるとすぐに泣き出す女、自己主張が強く変な正義感を持っている女、

かわるのが面倒くさい女子ばかりが周りにいた。

「はじめは怖かったかな。」

「ふーん。」

「話しかけても無視するし、笑ってくれないし。」

「でも、他の人としやべっている時は楽しそうにしている、もしかして私嫌われているのかなって悩んだりもした。」

「へー。」

「絵をね、あきちゃんが描いた絵を、あきちゃんが描いてると思わなくて、同一人物だと知って驚いたよ。」

「なんだそれ。」

「だんだん話すようになって、優しいところや笑顔とか見られるようになって、印象変わったよ。」

「ふーん。」

絵か。

こいつが見ていた絵は去年の写生大会で描いた絵。  
誰にも気付かれなかった絵。  
誰にも誉められなかった絵。  
誰にもわかってもらえなかった絵。  
俺にはもう一つ、  
もう一つ抱えている絵がある。

目の前で笑う椎名萌。

俺と向き合って話す女。

こいつの表情を見ていたいと思った。  
うるさい声も、いつの間にか聞かない日は無くなった。  
気になっていた表情も、  
気になっていた感情も、  
こいつを見ているといつの間にか答えが出ている。  
不思議な女。

「お待たせ、晃。」

タケが教室に入ってきた。

椎名萌はヒロアキと千夏としゃべり始めた。  
いつものうるさい三人組。

「KEIGO10月号、さっそく見に帰りますか。」  
「おう。」

始業式が終わると午前で学校は終わり。

下級生達が部活動に励む校庭を横目に、タケの家へと向かった。

「晃、それ筆ダコ？」

さすが長い付き合いなだけある。

小さな変化に気付くタケも俺の事を見ている唯一の友達だ。

「ああ。」

「え、じゃあ・・・描いたのか？」

「夏休み暇だったからな。」

「ふん・・・」

意味深な声。

だが、それ以上何も聞いてこないタケ。

わかってきているから、タケとの付き合いは楽だ。

「ペンだかとも思っただけどさ、勉強じゃあそんなところにはつかないよな。」

「タケは夏休み、塾大変だったのか？」

「おうよ。ほとんど毎日夏期講習詰めで死ぬかと思った。」

タケは親から決められた進路を進む為に、親の決めた塾へ通わされている。

なんでも有名な教師のいる塾らしく、入塾するのにも大変なのだとか。

授業料も高くて有名ならしい。

「晃は？学校の夏期講習出てたのか？」

「気が向いた時だけ。」

「はは。晃らしいな」

「絵、どこで描いてたんだ？家じゃ描きづらいんだろ？」

「美術室。」

「あ、そっか。課題やっていって、夏休み美術室開いてたんだっけか。」

「そう。」

「誰か来た？」

「誰も。」

「だよな。はは。選択授業の課題に誰も真面目に取り組まんよな。」

夏の空。

あの夜、急に描きたくなった。

暗闇の中に射したものの。

それは月明りだったのか、

それは街灯だったのか、

光だったのかさえわからなかった。

それでも・・・

夏の空、夏の風、夏の音。

感じたくなった。

手を・・・

動かしてみたくなった。

何年振りだろうか。

授業でも、課題でもなく、  
自分の意思で絵を描いた。

その夜だった。

まただ。

またあの夢・・・

続きか？

いや、違う。

広い草原のような景色が一面に広がっている。  
心地良い位の風が吹いている。

そこに立つ一人の女性。

俺が近づいていつているのか、

相手が近づいてきているのかはわからない。

誰なのか。

誰であろうと関係はないのだが、

気になってしまう。

誰なのか。

その後姿は・・・

白い壁。

白い天井。

どうやら目が覚めてしまったようだ。

最近、同じような夢を見て目覚めることが多い。

覚えている時もあれば、覚えていない時もある。

いったい何なんだ。

何なんだ、この夢は。

始業式の翌日から試験が始まった。

部活動も引退し、いよいよ受験生となる二学期。

まだ蒸し暑く夏は終わっていないのに、もう秋になったから受験  
生だと決め付けるかのように試験が押し寄せてくる。

もう今までとこれからは違うのだからと強引に先へ進めようと。

当たり前の事だが、受験対策の試験であつて。

出題範囲は中学3年間分。

今までの定期試験とは違い、範囲は全て。



限られた範囲さえ勉強しておけば解ける試験とは人縄ではいかな  
い。

今更気付いた訳ではないが、今回の試験の手応えは正直言つとあ  
まり無い。

塾の夏期講習詰めに遭って死ぬかと思った位勉強したタケ。

俺は・・・

夏休み後半、穏やかな気持ちで過ごしていた。

まるで受験生ということは頭から離れてしまっていた。

穏やかに。

そつ、静かに一人で絵を描いていたんだ。

「ただいま。」

玄関に見慣れない男物の靴があることに気が付いた。

巨兄の物ではなかったし、巨兄がこんな時間に帰ってくるはずも  
ないだろう。

その答えは意外なところにあつた。

「おかえりー、晁。手ー洗つといで。」

言われるまま、洗面所へ入ると、台所からはあちゃんの声が続い  
て聞こえてきた。

「勝が帰って来とんよー。大学はまだ夏休みじゃて。」

「東北の有名なせんべい買ってきてくれたとよー。」

勝兄は長男で大学3年。

東北の大学にスポーツ特待生として入学し、寮に入っている。

去年も一昨年も正月にしか帰ってこなかったが、  
大学は9月になってもまだ夏休みなのか。

「よう。でかくなつたな。」

「ほら、晃、座って食べんしゃい。」

久しぶりに見る勝兄。

相変わらず体格が良い。

中学で陸上を始め、県の中学生記録を持っている。

未だその記録が破られていない為、今でも校長室の前には立派な成績が称えられている。

その穂高の名に、俺がどれだけ悩まされたことか。

「勝は来年教育実習さ受けるとよ。」

嬉しそうにお茶を啜りながら話すばあちゃん。

三人兄弟の一番上。

昔からばあちゃんは勝兄を頼りにしていた。

明るい性格で社交性もあり、近所の人からも勝兄は人気があった。  
スポーツ推薦で東北の大学へ特待入学。

学費免除に寮生活、家計にとっても出来の良い兄。  
ばあちゃんの自慢の孫だろう。

「それで帰ってきて学校さ挨拶行つて来たんで。」

別に興味の無かった俺は、一応お茶の場に付き合つたが勝兄と話すことはなかった。

物心付いた頃から、兄達に嫌われていたから。

6つ歳が離れた勝兄は小学校に上がる年に母親を亡くした。

6年分の母親との思い出。

小学生になったのに母親が居なかった事、授業参観にはあちゃんが来ていた事、色々と思うことはあっただろう。

頼りのばあちゃんは俺の育児にかかりつきりだった頃でもあったし。

生まれた時から母親を知らない俺にとっては、母親が居ないことが当たり前だったから、学校でも授業参観でもばあちゃんが居るのが当たり前だった。

ただ、それだけのこと。

弟を可愛がれ無かった。

ただ、それだけのこと。

“コンコン”

部屋に戻るとノックをされた。

一応教科書を開いたが、勉強しているフリと思われただろう。不自然さが残ってしまった。

「ちよつといいか。」

意外な訪問者は勝兄だった。  
お互い顔は見なかった。

「受験校は決めたのか？」

「一応。」

「ふーん。」

沈黙と同時に、勝兄の視線が部屋中に向けられていることに気が付いた。

いや、気付くのが遅かったのだろう。  
既に。

「今日おまえの学校行って来たんだけど、」

そういえば。

さっきばあちゃんが、教育実習の挨拶とか話してたか。それってうちの中学の事だったのか。

教育実習ってことは、勝兄教師になるつもりなのか。べつに、どうだっていいけど。

今年卒業する俺にとって、教育実習なんて関係が無いのだけれど。

「おまえさ、絵まだ描いてるんだって？」

緊張感。

いや、違う。

血の気が引くというのはこういう時に使う言葉なのか。と、冷静にも自分を分析している俺がいた。

「美術の先生、俺の元担任だからさ。おまえが絵を描いてること嬉しそうに話してくれたよ。」

「まあ・・・亘には見つからねーようにな。」

「受験勉強頑張れな。」

最後の方は勝兄が何を言っていたのかさえ、覚えていない。

覚えているのは・・・

絵をまだ描いているのか の台詞。

この台詞が頭から消えなかった。

絵を・・・

知られた。

絵を描いていたことを・・・  
知られた。

絵に興味があることを・・・  
気付かれた。  
絵に未練があることを・・・  
気付かれた。  
ただ、それだけのこと。

またか。

あの夢だ。

またいる。

あの女性。

後姿だが、髪が長い。

いつも俺は声をかけない。

いつも俺は触れようとしない。

でも・・・

徐々に近づいている。

相手が近づいて来ているのかはわからない。

誰だ。

誰なんだ。

いったい・・・

何で俺の夢に出てくる？

何で俺の夢に・・・

手を伸ばしてみる。

届く距離に腕がある。

細い腕。

女の腕。

掴んで・・・

振り返えらせたその姿は・・・

“ガバツ！！”

勢い良く体を起こしたせいで、枕元に置いてあった参考書の山が床に崩れ落ちた。

その音で、現実に。  
一気に目が覚めた。

目覚まし時計を見ると6時半。

まだ起床時間の針まで辿り着いていなかった。

8時に家を出れば間に合う距離。

だが、早く家を出ることにした。

勝兄と朝食の時間に顔を合わせなくなかった。

学校へ着くと7時半。

校庭には朝練に励む運動部の下級生達が見える。

九月一週目の朝はまだ蒸し暑さが残っている。

それでも、誰もいない校舎の中はひんやりしていた。

教室へは行かず、図書室へ向かった。

静かな廊下に響く、自分の足音だけを聞くとなんだか安堵を覚えた。

誰もいない図書室。

本の匂い。

木の長机。

そこに彫られた様々な落書き。

きつと何年も前から彫られてきたのだろう。

好きな芸能人の名前、卒業年月日、誰かと誰かの相合傘・・・

勝兄も、亘兄も、

ここに座っていたのかもしれない。

今朝見た夢を思い出す。

慌てて起きたせいで、普段使わない筋肉を使ったのだろう。  
背中に少し違和感を感じる。

慌てて起きたのは、目を覚ましたかったから。

目を覚ます必要があったから。

早く現実には。

一刻も早く夢を終わらせたかったから。

夢の中でずっと立っていた女性。

青空の日もあれば、無着色の空の日もあった。

背景は違えど、女性はいつも立っていた。

俺は話しかけようともしなかったし、

振り向かせようだなんて思わなかった。

でも……

近づいて、手を伸ばせば届く距離になってしまった。

振り向かせてしまった。

あいつだった。

振り向いた顔、あいつだった。

振り向かせた女、あいつだった。

そう。

椎名萌。

夢。

そう、ただの夢。

ただ、それだけのこと。

図書室に人が入ってきた。

気がつくと登校時間になっていた。

図書委員だろう。

本棚の整理を始めていた。

俺は静かに図書室を後にした。

教室までの道、避けて通ることもできたのだが、美術室の前を通った。

今はもう飾られていない絵。

去年までは飾られていた俺の絵。

賞を取るつもりで描いたわけではないのに。

選ばれてしまった俺の絵。

誰にも気付かれなかった俺の絵。

誰にも誉められなかった俺の絵。

誰にもわかってもらえなかった俺の絵。

もう、いいじゃないか。

十分じゃないか。

「まだ絵を描いているのか」

勝兄の台詞が頭の中で繰り返される。

エンドレスリピート。

まるで、俺の生き方そのものだ。

勝兄に知られてしまった。

絵を描いていること。

勝兄に知られてしまった。

絵に興味があることを。

勝兄に知られてしまった。

絵に未練があることを。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。

俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。



わかつていることではないか。  
わかつていたことではないか。

なのに・・・

なんで・・・

こんな大事なことを忘れていたなんて。  
こんな大事なことを忘れていたんだ。

「あきちゃん、おはよー。」

いつもの声。

いつものうるさい女。

そう、いつもの。

でも、顔を上げることができなかった。  
あいつの顔を見ることができなかった。  
振り向かせてしまったあいつの顔は。

ただ、それだけのこと。

家に帰ると、男物の靴は無くなっていた。

勝兄、出かけているのか。

「おかえりー、昇。」

和室から聞こえてくるいつものばあちゃんの声。

「勝、高校の友達に呼ばれたとて、今夜は遅くなるそうや。」  
「そう。」

「せつかくこつち帰つと、家でゆつくりする時間も無いがや。」  
「勝は昔から友達ぎよーさんおったからね。母親おらんで寂しいのを友達と遊んで紛らわしとったんかねー。」

俺は何も言わずにはあちゃんの煎れてくれた麦茶を一気に飲み干した。

何も言えない。

俺には何も言えない。

「勝な、卒業したらうちに帰って来ると。」

「こつちで教員試験さ受けると。」

「勝が教師ば・・・なんか信じられんねー。」

ばあちゃんの嬉しそうな声。

勝兄が家に戻ってくる事、教師という立派な職業に就く事、どちらもばあちゃんにとっては幸せな報告だったのだろう。

「晃は？」

ばあちゃんの惚気話から、一気に現実に戻されたので焦った。

「晃は進路どうするん？来月にはほら、あるじゃろ、三者面談。」

「ああ。」

「晃はなりたい職業とかあるん？」

「べつに。」

「べつに。で、無いんかいな。勝みたいに教師とか、亘みたいに医者とか。」

い、医者？

おいおい。

亘兄が医者を目指しているだなんて話、初耳だぞ。

「晃は……」

そう言つてばあちゃんが言葉を選ぶように話し始めたのがわかった。

勝、亘、晃。

それぞれに対する思いがばあちゃんにはあるのだろう。  
男三人兄弟をばあちゃん一人で育ててくれたのだから。

「晃は自分のやりたい事をやればいいんよ。勝もそう言つてたがや。」

「あんまり無理せんと、頑張りすぎんようにな。」

そう言つと、先に席を立つたのはばあちゃんの方だった。

麦茶のポットを持って。

ばあちゃんの煎れる麦茶。

夏の味。

毎年当たり前のように飲んできた味。

九月に入つてもまだまだ暑い日が続いている。

ばあちゃんが何を言いたかつたのか。

勝兄はばあちゃんと何を話したのか。

勝兄は、ばあちゃんに俺の話をしたのだろうか。

ばあちゃんは勝兄から俺の話を聞いたのだろうか。

「まだ絵を描いているのか」

止まることのないリピート中の台詞。

ばあちゃんは知っているのだろうか。

ばあちゃんもそう思っているのだろうか。

ばあちゃんを悲しませただろうか。

「あきちゃん、おはよう。」

翌朝も、いつものように朝が始まった。

下駄箱で声をかけられたが、返事はしなかった。  
いつものこと。

教室まで隣を歩くこいつの顔が見れなかった。  
隣にいるこいつの顔が見れなかった。  
隣で話す椎名萌の声が耳に入ってこなかった。  
ただ、それだけのこと。

教室に入るといつものようにうるさい三人組が喋り始めた。  
いつものこと。

でも、うるさく感じなかった。

あいつらの声が耳に入ってこなかった。

あいつの顔が見れないのも、

あいつの顔を見なくてもべつにいい。

あいつの顔を見たいと思わないから。

あいつの事が気にならないのも、

あいつの事を気にしなくてもべつにいい。

あいつの事を気にかけたいと思わないから。

俺は・・・

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。  
俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかっていないことではないか。  
わかっていないことではないか。

こんな大事なことを忘れていたなんて。

人とかかわりが面倒くさかった。

女子と話すなんて、もつと面倒くさかった。

かわるのが面倒くさい女子ばかりが周りにいた。

椎名萌は最初からうるさくて騒がしい女だった。

借り物が多く、度々やってきては騒いで去っていく。

いつも笑っていて、いつも喋っていて、無駄に明るくて元気で。

ばかな女だと思った。

何の悩みもないばかな女だと思っていた。

かわりたくないと思っていたのに。

面倒くさいと思っていたのに。

なにあいつはどんどん俺の中に入ってきた。

気付くと・・・

俺があいつを目で追っていた。

俺があいつを見てしまった。

もういいじゃないか。

俺は大事なことを思い出した。

もういいじゃないか。

俺は自分の道を進む。

あいつとかかわるのはもうやめよう。

数日後、勝兄は寮へ帰った。

ばあちゃんに、勝兄が何を話したのかはわからない。  
勝兄がばあちゃんに俺の話をしたのかはわからない。  
あれからばあちゃんも何も言っではこない。

それでいい。

それでいいじゃないか。

ただ、それだけのこと。

2 .

休日。

タケの家へ遊びに行った。

インターホンを鳴らすと、いつものお手伝いさん……の明るい声ではなく、明らかに不機嫌な声の持ち主だった。

「何か？」

「穂高です。」

「ああ。雅史は今勉強中だからまたにしてもらえるかしら。」

「はい。失礼しま……。」

こちらの声を最後まで聞かずにインターホンは切られたようだ。

休みの日にお手伝いさんが居ないのは珍しいことではないが。社長と副社長のタケの両親が家に居るといふは珍しかった。

何かあったか。タケ。

いや、今の感じだと俺も相当気に入られていない感じだったな。タケと友達になってから二年が経とうとしている。

頭が良く、成績は常に十位以内。

親が会社の社長だというお金持ちの一人おぼっちゃん。

一年の時に同じクラスになったタケは、出身小学校の違いもあり、クラスでいじめの対象になっていた。

偶然、席替えて隣の席になり、雅画伯の写真集、KEIGOの雑誌と共通の趣味を見つけ友達になった。

中学で同じ美術感覚を得ている奴に出会えるとは思っていてもいなかった。

物持ちなのは家が裕福だから。

物知りなのはそれだけ本を読んでいるから。

金持ちなのも、一人っ子なのも、タケが悪いわけではない。

子供は親を選ぶことができないのだから。

そして、タケの将来は親の会社を継ぐと決められている。

親の決めた大学に入る。その為に親の決めた塾へ行かされている。高校までは自由にやっていいと言われていたはずだが。

受験シーズンの始まった日曜に、友達と遊んでる時間は無い。そんなところか。

市立図書館に寄って画集でも眺めようかと思ったが、館内に入る前に気付いた。

明らかに、いつもより停まっている自転車の台数が多い。

自転車置き場から溢れている。

塾の帰りに図書館で勉強か。

そんなところだろう。

こんなところで学校の奴と顔を合わせるなんて面倒くさい。

もはや秋の図書館は静かに過ごせる場所では無くなったようだ。

足取り重く、家に帰ると珍しく父親が居た。

こんな田舎から都内の大企業に勤めている父。

主要都市に支店を構える企業らしく、父は日本全国を飛び回っている。

出張、出張、また出張。

たまに家に帰ってきたかと思えば、半日も居ないで出かけていくこともある。

ばあちゃんに三人息子の世話を預けたまま。

べつに、今更。

父親が家に居ようが、居まいが、どうでもいいことだが。

何となく嫌な予感はしていたが。

やはり父親が居るということは、単なる休日ではなかった。

玄関で靴を脱いでいるとばあちゃんに肩をたたかれた。

「晃、父さんが話があるて。」

居間に入ると、父親と、ばあちゃんと、亘兄。

何故、亘兄まで？

と、思ったが、

三人の表情を見てわかった。

なんとなく、大体、わかった。



「俺は絶対嫌だからな。こいつの為に俺が被害を被るなんて。」

「亘、いいかげんにしなさい。」

「晃、座りなさい。」

久しぶりに見る父親。

久しぶりに聞く声。

正月にちらつと顔を見たきり。

その後は・・・

そういえば、前回もこんな感じでもめてたことあったっけか。

亘兄が俺を睨んでたっけな。

余計なこと言つなよ的な目で。

今回は・・・

「晃、来月の三者面談、父さん出るから。」

「うん。」

「高校はもう決めたのか？」

「うん。」

「そうか。塾へは行っていないようだが？」

「フラフラ遊び歩いてるような奴に塾なんて行かせることねーよ。」

「こりゃっ、亘。」

「だから、父さん、俺にもう一つ塾行かせてくれよ。俺絶対、医大に合格してみせるから。」

「亘、今は晃と話してるんだから待ちんしゃい。」

「だって、医大目指す奴らはもっと有名な塾を掛け持ちしてるんだぜ。そりゃ、俺が私立の高校通ってるってだけで金かかってんのはわかってるけど、それでも勉強しないでフラフラ遊んでおまけにまだ絵を描いているような奴にかける金があるなら、もっと俺にかけてくれたっていいだろ！」

これにはばあちゃんも亘兄を止めることをしなかった。

父親は、展開についていけないという表情をあからさまに出していた。

ばあちゃんはどこまで知っていたのか、混乱ではなく困った顔をしていた。

最後まで言い切った亘兄だけが、すっきりした顔をしていた。

「亘がもう一つ塾に通いたい話はわかった。うん。検討しよう。それで・・・」

父親は一つ一つ整理するかのように、自分に納得させながら喋っているのがわかった。

ばあちゃんも隣で一生懸命頷いていた。

亘兄の表情にはすっかり余裕が出ていた。

次の攻撃に備えて準備を始めているかのよう。

「晃は・・・オホン。」

「つまり・・・晃は、塾へは行かない。絵を描いていた・・・というのか？」

父親の口から絵という言葉。

描くという言葉。

ばあちゃんの顔から、悲しみという表情。

それだけで十分だった。

充分だったよ。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。

俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかっていることではないか。

わかっていたことではないか。

こんな大事なことを忘れていただなんて。

俺はどうかしていた。

俺はどうかしていたんだ。

「高校はM校を受ける。」

「は！見ものだね。俺が落ちたM校とはずいぶん生意気なこと  
言ってくれるね。」

「こりゃ、亘、辞めんしゃい。」

「だってそうだろ、塾にも行かず、勉強も中途半端な奴に簡単に  
M校の名前を出されちゃさー。」

「もう、亘は終わりにしんしゃい。」

攻撃の準備はどうやら間に合ったようだ。

そうくると踏んでいたのか。

その割りには普通の嫌味だったな。

もっと痛いところを突かれるかと思っていたが。

まあ、

お陰ではつきりしたけどね。

俺も。

目が覚めた。

高校受験、亘兄は第一志望のM校に不合格。

滑り止めで合格していた私立の学校に通うことになった。

「おまえのせいだ。」

亘兄にそう言われた。

俺が居なければ、俺なんかが居なければ。

合格したのか？

ただの八つ当たり。

そんなのわかっていた。

中学に入学すると、担任の先生から、穂高兄弟の三番目か。と言われた。

兄貴達がそれだけ優秀だったということだろう。

勝兄がスポーツ推薦だろうが、

亘兄が成績優秀者だろうが、

別に俺には関係ない。

そう思っていた。

だが。

こうも考えるようになった。

亘兄が出来なかったこと。

亘兄の落ちたM校に、俺が合格したら・・・

そんなことを考えなくも無かった。

それが今、現実になっただけ。

ただ、それだけのこと。

「じゃあ、晁、来月の三者面談で。」

最後に父親らしい台詞が言えて終われることができたか。

翌日。

先日の試験の結果が出た。

廊下の掲示板に上位三十名の名前が張り出される。

いつものことだ。

そう、いつもの・・・

廊下にざわめきが広がる。

なんだ？

そのざわめきと、この結果がつかっていたのかなんてわからない。

誰も俺の順位を気にする奴なんていないだろう。

順位を落した。

十位内に名前が無かった。

ただ、それだけのこと。

「晃、どうした？」

教室にタケが入ってきたことさえ気付いていなかった。  
慌てて時計を見る。

昼休み中だった。

一瞬、今自分の位置がわからなくなっていた。

「昨日、悪かったな。」

「ああ。」

「塾で全国模試受けたんだけどさ、運悪く、昨日結果持ち帰っちゃって。母親にバレて大変だった。」

全国模試か。

俺が夏に一度だけ受けた校外模試は県内模試だった。

その時は適当に合格圏内の高校名を書いたつけ。

M校を意識してなかった頃だからな。

確か、書いた三校の合格率は合格圏内で良い結果だった。

M校、今の俺には何パーセントの合格率なのだろうか。

夏休み、勉強した奴らとしなかった奴の差があきらかに出ていた。  
掲示板の校内順位、記載された名前に変動が現れていた。

相変わらず首位を独占し続ける松岡。  
十位圏内を外れたことのないタケ。  
十位圏外に出された俺。

「タケは高校決めた？」

「それがさ、うち大学は親の決めたところって言うてたじゃん。」  
「ああ。」

「高校までは自由にしていって言うてたのにさ、昨日母親が県内で一番の高校を受けなさい。とか言い出しちゃってさー。」

「M校か？」

「そう。おれには絶対無理だって言ったんだけど。」

「無理なのか？」

「おいおい、晃ー。M校って言えば超がつく公立の進学校だぞ。私立より金かからんし、有名大学への進学率も高いしさ。親孝行だつて。」

「タケ四位じゃん。」

「いやいや、今回の校内模試で四位つつても当てにならないよ。」

県内模試とか全国模試で他の中学の奴らと戦ってみたいと。」

「その全国模試何位？」

「聞いて驚けよー。なんと、五百八十八位！」

「……………」

「微妙でしょー。」

全国模試を受けたことのない俺にとっては、五百八十八位が良いのか悪いのかはわかるはずもなかった。

単純計算で……

全国都道府県四十七で割ったとして……

四百七十位くらいの位置だと、県内で十番に入るってことか??  
そんな単純計算が通用するはずがないか。

「まあ、万年一位の松岡聡一なら受かるんじゃない。おれはせいぜい頑張つて次のランクのT校かな。そもそもさ、担任からM校の受験許可下りないって。」

M校。

タケで無理なのか。

校内一位の松岡か。

県内、各中学校の一位の奴を集めたら・・・

定員分の百八十名なんて簡単に集まるか。

校内一位か・・・

巨兄も一位、とったことあつたんだよな。

一位とっても、M校不合格。

悔しかったんだろうな。

でも、まあ。

そんなの誰だって同じだ。

M校か。

まずは受験できる範囲、校内試験で二、三位までに入らないとだな。

「ただいま。」

家に帰るとばあちゃんのいつもの返事が無い。

ついに耳が遠くなつたか。

そんな風に思いながらも、もしもの事を考えて、一応居間を覗いてみる。

なんだ。

いるんじゃないか。

居間の先の縁側に座って外を見ているようだった。

聞こえなかったのか。

やっぱり耳が遠くなったのか。

俺が居間に入った気配にも気付いていないようだった。

「ただいま。」

今度は聞こえたようで、慌てて振り返っていた。

着替えに二階へ上がろうとすると、ばあちゃんに止められた。

「晃、昨日の話かて・・・」

「なに？」

「父さんも、ばあちゃんも、同じ気持ちじゃって。」

「うん。」

「晃、昨日はああ言ってたけど、本当は別のことあるんじゃないかと。」

縁側に腰を下ろしたまま、ばあちゃんは俺の方を振り返らずに続けた。

空はちょうどオレンジ色に染まっでいて。

きれいな夕日が縁側の床板をオレンジ色に染めていて。

昔、縁側でしていたお絵かきの事を思い出させた。

こんな時に。

「晃、自分のやりとう事あるんだったら・・・」

「べつにないよ。」

「父さんも、ばあちゃんも、反対したりせんよ。」

「ないよ。」



「晃は、晃の好きな道を進めばいいんよ。」

自分の好きな道……

昔、縁側でクレヨンを使っていた。

夢中になって描いていたら紙をはみ出して床板に描いてたことがあった。

絵の具を使っていた頃は、

バケツの水を取替えに行くのが面倒くさくて縁側から庭に撒くところを見つかった。

どんな時も、ばあちゃんが見てたつけ。

俺が絵を描いていた時、ばあちゃんがいつも側にいた。

そのばあちゃんを悲しませたのは俺。

そのばあちゃんを悲しませたのが俺。

お絵かきだったから良かった。

ただの、お絵かきだったなら良かった。

絵を描くと、上手く描けるようになると、ばあちゃんが喜んでくれた。

絵を描くと、上手に描けるようになると、学校の皆が誉めてくれた。

小四の時、絵で賞を貰うまでは。

賞を貰うと、学校の先生が喜んでくれた。

賞を貰うと、クラスの女子が誉めてくれた。

賞を貰うと、クラスの男子に生意気と言われた。

賞を貰うと、ばあちゃんは喜ばなかった。

賞を貰うと、父さんは誉めてくれなかった。

賞を貰うと、兄さん達は余計に冷たくなった。

幼少の俺、小学生の俺、中学生の俺、  
母親は居なかったけれど、母親に対しての考え方も感情も芽生えていった。

歳を重ねる毎に母親の存在を意識している。

母親を知らないから、俺はまだ救われている方なのかもしれない。  
母親を知らないから、平気で絵が描けたのかもしれない。

兄達は・・・

母親を知っているから。

絵を描く母親を知っているから。

辛いかもしれない。

父親も、ばあちゃんも。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。

俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかっていることではないか。

わかっていたことではないか。

こんな大事なことを忘れていただなんて。

俺はどうかしていた。

俺はどうかしていたんだ。

だから、もう辞めよう。

だから、もう終わりにしよう。

絵のことは、忘れよう。

大事なことを思い出したのだから。

空の色。

何色？

薄暗い色。

でも地面は緑色。

心地良い風も吹いている。

広い草原。

どこまでも続く空。

佇む人影。

またか。

あの夢。

もう見ないと思っていたのに。

なんで俺の夢に出てくる？

なんで俺の前に現れる？

徐々に近づいてくる人影。

髪の長い女性。

手を伸ばせば届く距離。

掴めば振り向かせることができる。

振り向かせたところで・・・

俺は何もできないのに。

俺はもう、何もしないのに。

あいつとかかわるのは辞めたんだ。

だからもう、振り向かせても・・・

あの日見た顔。

あの夏の日、俺が見たあいつ。

あの夏祭りの夜、腕を掴んで振り向かせたあいつそのものだった。

一週間が過ぎただろうか。

椎名萌と目を合わせなくなって。

椎名萌を見なくなって。

朝、いつものように挨拶をされたけど、  
会話をしなくなってどれくらい経つだろうか。

ばか女でもいい加減気付いただろうに。

少しは静かになったということか。

俺にあいつを見る余裕もここ数日なかった。

だから、今日は久しぶりに見た。

移動教室だった。

廊下で偶然すれ違った。

いや、毎週同じ移動経路なのだから、毎週廊下で会ってはいたの  
だろう。

気付くか、気付かないか。

見てるか、見ていないか。

ただ、それだけのこと。

最初は下を向いていた。

だから表情はわからなかった。

相変わらず二宮の後ろを歩く、金魚のフン。

相変わらず歩くラジオ中継のような二宮の声。

いつもは負けなくらいの周波数で喋る椎名萌が、今日は静かだった。

すれ違う時、一瞬顔を上げた。  
目が合った。

確かに目が合った。

泣きそうな顔をしていた。  
それだけはわかった。

今朝の夢。

振り向かせたあいつ。

あの日見た顔。

あの夏の日、俺が見たあいつ。

あの夏祭りの夜、腕を掴んで振り向かせたあいつそのものだった。

友達とはぐれ、祭りの人ごみの中、迷子になっていたあいつを見つけたのは俺。

恐怖心と警戒心の塊で掴んだ腕を振り払われた。

あの時、振り向かせたあいつを・・・

俺はこの手で突き放す。

人ごみの中へ・・・

もう、はぐれて見えない。

これでいい。

振り向かせてはいけなかった。

俺が振り向かせてはいけなかった。

これでいい。

もう、あの夢は見ないだろう。

俺は、俺の決めた道を進む。

「すごい顔してるぞ。」

急に話しかけられ、ハッとした。

最近自分でもこんなことが多いと自覚はしている。

「タケか。」

「どうした？何かあったのか？」

「いや、大丈夫。」

「そっか。」

こんな時、表情を読み取れるのもタケだけだろう。

読み取った上で、無理に話そうとしなくてもいいと言ってくれるのが楽である。

「いや、俺はいいんだけどさ。うん。」

「あのさ、椎名と何かあったか？」

珍しく、ここで引かなかったタケ。

そんなに俺は変だったのか。

タケがこれ以上突っ込んでくるのは珍しい。

「べつに。」

「そっか。」

父親の事、ばあちゃんの事、兄達の事、

忘れかけていた大事な事  
今の俺には進む道がある。  
だから・・・

「椎名はさ、おれには何も言わないんだけど。」  
「まあ、おれも人の心配しているような余裕も無いしな。うん、  
べつにいいんだ。」

そう言うと、帰っていくタケ。  
悪いなタケ。  
今は話せないことが多くて。  
でもいつか、話せる時が来たら、  
間違いなく、一番にタケに話すから。  
タケならわかってくれる。  
俺が進もうとしている道を。

放課後、珍しく関くんと帰り道が一緒になった。

「久しぶりだねー、あきちゃんと帰んの。」

部活をしていた頃はよく一緒に帰っていたものだ。  
部活。

バレー部を引退して二ヶ月か。  
過ぎてみるとあつという間だな。

二年以上続けてきた活動をぴったり辞めるというのも変なものだ  
が。

部活動が無くなり、放課後は自由になった。  
拘束されるものがまた一つ減った。

「コーチがさ、受験勉強ばっかしていると体鈍るからたまには動かしに來いって。」

「へー。」

「あきちゃんも行こうよ。おっくんかじくんも誘ってさ。」

「ああ。」

「あとねー、今日授業で・・・」

適当に返事をした。

関君には悪いが、今はバレーどころではなかった。

受験勉強で体が鈍るよりも、今まで鈍っていた頭を動かさなければならぬのだから。

「そしたらさー、椎名さんがねー、もう俺可笑しくって！」

適当に相槌を打ちながら歩いていたらつもりだったが、その会話だけ鮮明に聞こえてきてしまった。

上手くやっているつもりだったのに。

上手くかわしていたつもりだったのに。

なんだか自分が情けなくなってきた。

別に、関君から椎名萌の話が出たっていいじゃないか。同じクラスで仲良いのは前から。

帰り道、椎名萌の話題が出る事だって前からあった。

ただ、それだけのこと。

翌朝、下駄箱で会ってしまった。

「おはよう。」



まっすぐに見つめてくる。

思わず目を逸らすを忘れてしまった。

先に視線を外したのは椎名萌だった。

先に歩き出したのは椎名萌だった。

俺は外しそびれた視線のやり場に困った。  
仕方ないから、先を歩く後姿を見ていた。  
髪、伸びたか。

肩まで伸びた後ろ髪を見て思った。

この間見た時は泣きそうな表情だったわけ。  
今日は普通だったな。

いつもの顔。

そして、いつものテンション。

いつものうるさい三人組。

教室に入るところまで見てしまった。

目で追いかけてしまった。

目が逸らせなかった。

目が離せなかった。

あいつから。

もつかかわらないと決めたのに。

あいつとかかわるのは辞めようと。

俺は忘れかけていた大事な事を思い出した。  
俺は俺の道を進まなければいけない。

絵から離れて

M校に受かって兄達を・・・

巨兄の叶わなかったM校合格を・・・

俺が・・・

巨兄を越える為にはM校に合格しなければ。

なのに・・・

何故こんなにも簡単に揺れてしまう。

あいつを見なければいいのに。

あいつを気にしなければいいのに。

今までだってそうしてきた。

人とのかわりを避けてきた。

気にしないこと、見ないフリをすること、

今までそうしてきたじゃないか。

あいつにもそうすればいい。

見なければいい。

気にしなければいい。

かわらなければいい。

ただ、それだけのこと。

なのに・・・

何故出来ない。

気がつくと目で追っている。

気がつくと視線を探している。

気がつくときあいつを気にかけている自分がある。

苛々する。

こんな自分に。

苛々する。

あいつの泣きそうな顔を見ると、  
苛々する。

俺の前に現れないでくれ。

俺の視界に入ってこないでくれ。  
いつそのこと・・・

俺の前から消えてくれ。

翌朝の朝食は箸が進まなかった。

「ご馳走様。」

「晃、もう食べんのかい。」

「うん。」

「ちゃんと食べんと体壊すよ。」

「平気。」

「昨夜も遅くまで電気ついとつたし。無理せんでな。」

ばあちゃんはそれ以上何も言わなかったし、  
俺も何も言うことは無かった。

部活辞めて体動かさなくなった分、食べる量も減った。  
それだけのことだろう。  
いつも通り学校へ行った。

いつも通りじゃないことが待っていた。

「晃くん、ちょっといいかな。」

下駄箱で男に待たれる趣味無いんですけど。  
しかも何故、笠原祐也。

おまけに何故、空き教室へ移動する。

「オレ、栗原と別れた。」

は？

全くもって訳がわからない。

全くもって興味が無い。

大体、何で普段しゃべったこともない俺に、そんな事を言う必要がある？

しかもこんな所で。

「だから、萌ちゃんのこと、オレ諦めてないから。」

は？

だから訳がわからないって。

だから興味ないって。

大体、何で椎名萌の話になるんだよ。  
こんな所で。

「オレ、萌ちゃんのことを好きだから。」

は？

俺に言われても・・・

ってか、何で俺？

大体、そんな大事な事は本人に言えば・・・

結局、俺は何もせず。

俺は何も話さず。

祐也は去って行きました。  
何だったんだ。いつたい。

栗原と別れた？

椎名萌が好きだ？

だから何？

ん？

待てよ。

椎名萌が好きだって言ってたな。

まじかよ。

なんだ、祐也も椎名萌の事好きだったのか。

なんだ、あいつも祐也が好きだったじゃねーか。

なんだ、あいつ等両想いだったんじゃないか。

ばかみてー。

やっぱばかだな。

ばか女。

朝から無駄な時間を使ったな。

なんか体だるいし。

授業出んの面倒くさい。

朝から無駄なことに頭を使ったせいで。  
まっただ。

「おーっす、あつきらくんおっはー。」

また騒がしいのが来た。

早く教室に入ってしまったえば良かった。  
一歩手前の廊下でつかまった。

健太もいるし、仕方ない付き合うか。  
亮と北山もいる。

タケの姿は無かったが。  
相変わらず朝からよく喋る二宮。

その後ろに・・・  
あいつはいないか。

って俺、何探してんだよ。  
自分が自分で情けなくなる。  
もうあいつとはかかわらないと決めた。  
かわるのを辞めた俺。

祐也の事だって知るか。  
今更あいつのことが好きだとか、俺には関係が無い。

「そうだ、あきちゃんてさー、ドラクエどこまで進んでる？宝島  
もうクリアしちゃった？」

あきちゃんと、未だに男から呼ばれるのは慣れない。  
あいつが勝手につけたあだ名。  
面白がって、周りにいた男子が呼び続けた。

北山、そういえば。  
ふと思い出した。

北山と上手くゲームの会話を、表面上はしながら思いついたこと。  
こいつも確か椎名萌の事好きだったよな。  
あからさまな態度、見てればわかる。

それから・・・

教室の中を見渡すと、見つけた。

河野ヒロアキ。

椎名萌と一年二年同じクラス、同じ部活。

そんでもって、こいつも椎名萌のことが好きはず。

うるさい三人組やつてるけど、実は好きな奴がずっと側にいるのに気がつかないばか女。

そのばか女とはもうかかわらないと決めた。

なのに、簡単に揺らいでしまう俺の弱さ。

そんな自分に苛々する。

椎名萌を好きだという奴を見ていると苛々する。

だから・・・

いつそのこと、あいつか誰かと付き合えば、

そうだ、

そうか、

そうだよ、ちょうどいいじゃないか。

あいつが誰かと付き合えば、俺はかかわらなくて済む。

あいつが誰かと付き合えば、俺は気にしなくて済む。

あいつが誰かと付き合えば、俺は苛々しなくて済む。

ただ、それだけのこと。

九月最後の週。

受験生だが、そんな事関係なく行事はやってくる。

二学期はやたらと行事が多く、面倒くさい。

体育祭。

体育祭委員会の奴らがはりきるだけ。

生徒会の奴らが最後の行事としてはりきるだけ。

運動部の奴らが一年に一度の見せ場としてはりきるだけ。

三回目となるが、毎年無難にこなして来た。

今年も同じ。

朝は直接、市の陸上競技場に集合して。

クラス毎の応援席に座って。

一般公開となるから見に来たい保護者は来ていて。

熱心なご両親はビデオカメラを回して。

思い出作り。

修学旅行の写真も面倒くさかったが、

体育祭の写真も面倒くさい。

スタンド席から見える景色は悪くはなかった。

秋晴れ。

秋の澄み切った空。

白い雲。

周りに高い建物が無いので、スタンド席からはきれいな空が見渡せた。

ふと、下を見る。

オレンジ色の競技トラック。

四百メートルトラックの白いラインが眩しい。



そして、運ばれてくる旗。  
競技用具。

その中に、見つけてしまった。  
見てしまった。

目で追ってしまった。  
あいつの姿を。

旗を運んでいる。

隣には・・・

ああ。

なんだ。

祐也。

何を話しているのかは聞こえないし、  
ここからは表情もわからない。

祐也、言ったのか？

好きだって、言ったのか？

って、何言ってるんだ俺。

俺には関係無いだろう。

そう、もうかかわらないと決めたんだから。

そうだよ。

俺にとってはあいつ等がうまくいってくれた方が・・・

あいつらが付き合えば、もうかかわらなくて済む。

あいつらが付き合えば、気にしなくて済む。

あいつらが付き合えば、苛々しなくて済む。

そう思っ て見て いると、目 が合っ てしまっ た。  
慌てて 逸らした が。

勘違 いかもし れない が。

だいた い、こ こ、ス タンド 席だ しな。

隣 の席 はあ いっ のク ラス 席だ し。

そっ ちを 見て いた のだ ろう。

そ う。

目 で追っ てい るか ら、目 が合 う。

目 で追っ てし まう か ら、目 が合 う。

逸ら せば いだ け。

た だ、そ れだ けの こ と。

午 前 の競 技 の最 後 はク ラス 対 抗 女 子 リレ ーだ っ た。

リレ ー の選 手 に選 ば れ る の は 四 名。

元 陸 上 部 や ら、運 動 系 部 活 動 の 奴 ら が 選 ば れ る。

「お っ、し ー な トッ プ ラン ナ ー じゃ ん。」

いっ の 間 に か 隣 に ヒロ ア キ が いた。

ま あ、同 じ ク ラス な の だ か ら 当 然 だ が。

競 技 ト ラ ッ ク、第 一 走 者 の 所 へ 視 線 を 移 す。

五 レ ー ン の と こ ろ に 椎 名 萌 が いた。

ス タ ー タ ー で 足 合 わ せ を し て い る よ う だ っ た。

ま た あ い つ を 見 て し ま っ た。

「 晃 くん 知 っ て た ？ し ー な、三 年 連 続 リレ ー の 選 手。」  
「 へ え。」

あいつ、足速かったんだ。

テニス部なのに。

いつもうるさくて、無駄に元気で、明るくて。

二宮の周りをちよろちよろしてるだけのばか女だと思っていたが。そういえば、テニス部の練習、見たこと無かったな。

朝練しているのは見たことあったけど、ランニングだったし。

そんな時も走りながら無駄に喋ってたっけ。

テニスしてるあいつを見たことはなかった。

そんなこと、考えたこともなかった。

あいつは・・・

見に来たんだっけ。

俺の試合。

最後のバレー。

負けたけど。

何で見に来たのかなんて聞くことも無かった。

別にどうでもよかった。

椎名萌が来ようが、きまいが。

俺にとっては関係が無かった。

あの時は。

いや、今も。

そう、関係ない。

もう、かわらないと決めたのだから。

あいつのことは見ないと決めたのだから。

「位置について。用意」

? パーンツ!?

放たれるスタートの合図。

湧き上がる歓声。

「しーなー！行けー！！」

おいおい。

応援する相手間違えてんぞ。

ヒロアキは自分のクラスではなく椎名萌を応援していた。  
ばかな奴。

やっぱり、ばかな女の友達はばかな奴か。

オレンジ色の競技トラック。

白いラインを走るあいつ。

椎名萌。

まるで別人のように見えた。

俺が見ていたあいつとは違って見えた。

だから、今だけあいつを見ていようと思った。  
百メートルの間だけ。

昼休みに入った。

「めぐちゃんお疲れー！」

「おめでとうー！！」

「乾杯ー！！」

隣のクラス席から否応無しに聞こえてくる。

あいつらの声。

「しーな、女子リレー、ぶっちぎりだったな。」

「ふふふ。一位取っちゃった。」

「午後はしーなのクラスには負けねーからな。」

おいおい。

だからクラス違うつて。

ばかな奴らはクラス域を超えて、盛り上がっていた。

昼休みが終わろうとしていた。

関君があいつを連れてやって来た。

今度は大丈夫だ。

見ない。

気にしない。

もうかかわらない。

関君と、健太と、いつもと変わりの無い

他愛も無い話をするだけ。

そう、いつもと同じ。

それでいい。

これでいい。

俺があいつを見なければ。

俺があいつを気にしなければ。

ただ、それだけのこと。

スタンド席から見上げた秋の空には、もう夏の常に照りつけるような太陽はいなかった。

どこか控えめに照らす太陽。

秋晴れの空とは裏腹に、どこかすつきりしない心模様で体育祭が終わった。

放課後、珍しく居残りなんぞしてしまった。  
選択授業の課題が終わらなかった。

適当に描いて適当に終わらせて  
それでいいやと思っていたのに。

選択授業なんて、成績評価の対象になんねーし。  
好きに自由に使う時間のはずだし。  
課題の一つや二つ、別に・・・

面倒くさい。  
なんか体だるいし。  
やる気でねーし。

こんな時、選択授業に美術を選んでしまったことを後悔する。  
普段の選択授業中は自由に好きに過ごしていたけど、  
課題の提出となると面倒くさい。  
しかも絵だし。

適当に描いて適当に終わらせてが出来ない俺も美術バカだよな。

タケみたく家で出来ればいいのだが。

今の俺に家で絵を描く余裕なんぞ一ミリも無い。  
課題といえど、家で絵を描く勇氣なんて無い。

「よっしゃー完成！」

隣の作業台からは陽気な声。

「ヒロアキー、終わった？鞆持ってきたよー。」

「おー、サンキューしーな。今完成した！」

そしてタイムリーに入ってきたのはばか女。  
ばかなお友達を迎えに来たらしい。

思わず見ちゃったし、俺。

早めに視線逸らさないとな。

「げ、元気？」

話しかけられたが、下を向いたまま筆を止めなかった。  
元気って・・・

そんな会ってなかったか？  
体育祭以来か。  
一週間は経ってないぞ。

「しーな、片付けてくるから待ってて。」  
「うん。」

ヒロアキがパタパタと足音を立てて水道へ向かったのがわかった。  
帰るのか。

ちょうど良い。

これ以上ここに居ても何も無いぞ。  
俺はもう、おまえにはかかわらないと決めたのだから。

「誕生日、近いね。」

いきなり、何を言い出すかと思えば。

いつの間にか、すぐ隣まで近づいていた椎名萌に気付かなかった俺も悪いのだが。

こいつが見ている視線の先に。  
一枚のプリントがあつた。

自己紹介カード。

名前、誕生日、部活動、趣味等々・・・

クラスの暇な奴らの提案で書かされることになった用紙だった。  
これを見て言ったのか。

「あ、ご、ごめん。邪魔だね。」

さすがに課題の邪魔になると思つたのだろう。  
ばかな女でもそれくらいは考えるのだろう。

慌てた様子でこの場から立ち去ろうとした時、  
ふと、見て気付いた。

「髪、切つたのか。」

「あ、うん。揃える程度にだけど。」

「しーな。お待たせ！帰ろうぜー。」

「うん。」

そう言つて、うるさい二人が美術室からいなくなった。  
俺の前から消えてくれれば、それでよかった。

あいつが髪を切ろうが、切りまいが、  
俺には関係が無いこと。



なのに、どうして。  
気付いてしまった。

この間まで所々肩にかかっていた髪が、  
肩上できれいに揃えられていたことに。  
ただ、それだけのこと。

十月七日。

忘れられない日。

一年で最も忘れたと思う日。  
俺にとっては憎い日でもある。

それでも、ばあちゃんは毎年決まって言う。

「晃も十五歳か。大きくなったのーおめでとう。」

朝食を食べていると一枚の封筒が差し出された。  
裏の差出欄には父親の名前が。  
毎年出張先から送ってくるらしい。  
父親にとっても忘れられない日だろうから。

中身は図書カードだった。

父親らしい。

さて、何を買おうか。

それだけのこと。

あとはいつもと変わらない朝。

いつもと変わらない学校生活。

変えられるのは、決まってあいつの言動。

「お誕生日、おめでとう。」

選択授業で美術室に入った途端、言われた。  
全くもって理解できない奴だ。

「え？ 晃くん今日誕生日なの？」

「マジで？」

近くにいた北山、亮一が後に続く。

「なんだよー、言ってくれば良かったのにー。」

「おめでとうー。」

拍手なんかなくていいから。

いくら少人数の授業といえど、周りの奴等全員に聞こえてんじや  
ねーかよ。

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

誕生日なんて。

授業が始まった。

ふと、横の列に座るあいつが視界に入った。

すつきりしました。って顔しやがって。

誕生日を知られるなんて面倒なこと、今まで避けてきたのに。  
あいつのせいだ。

また、あいつのせいで俺は。  
かわらないと決めたのに。  
あいつの方からかわってくる。  
どうしたものか。

だいたい、残念ながら、俺の誕生日は御めでたくも何でもないんだよ。

俺の誕生日イコール母親の命日だからな。

そう言ったら、あいつはどうするだろうか。  
泣くか？

謝ってくるか？

どうでもいい。

別にどうでもいい。

誕生日なんて。

家族の誰もが忘れたくても忘れられない日。  
それが事実なのだから。  
ただ、それだけのこと。

決して特別な日ではないのに。  
特別な日にしたいだなんてこれっぽっちも思っていないのに。  
どうして悉く崩れていくんだ。

俺は静かに過ごしたいだけなのに。

放課後。

また訳のわからないことに巻き込まれた。

関君に呼び出された。

五組の廊下前。

俺、帰りたいんだけど。

関君が連れてきたのは椎名萌だった。

おいおい。

またこいつかよ。

もういいだろう。

今日はもう勘弁してくれよ。

「はい、手出して。」

「は？」

「いいから、いいから。出す出す。」

「え、手？」

「はい。」

半ば諦めかけて関君の言う通りにしてやった。  
椎名萌も関君の指示を受けていた。

「はい握手。」

おい。

おいおいおい。

「おいつ、関君。」

一目散に逃げる関。

訳もわからず追いかけた。

夢中で走っていて気付かなかった。  
体育館まで来ていた。

「はあはあ・・・やっぱキツイね。全力疾走は。」

おいおい。

こんなとこまで走らせといて・・・

確かに俺の呼吸も相当乱れていた。

久しぶりに全速力で走った。

部活以来。

いや、部活でも手を抜いていた。

真剣に、取り組んだことなんてなかった。

誰もいない体育館の床に、寝転んだ。

乱れた呼吸を整える。

天井が高い。

体育館特有の臭い。

なんだか懐かしさを覚える。

たった三ヶ月。

三ヶ月前まで、確かにここにいた。

暑期中、この体育館で汗を流し、ボールを追っていた。  
ひたすら。

暑いのに。

ばかみたいに。

そんなこと、思い出すこともなかった。

「椎名さんがさ、俺らの最後の試合、見に来たじゃん。」

まだ少し苦しそうに息を吐きながら、関君が言った。  
誰もいない体育館に響く声。

「おれ、あん時ほんと嬉しかったんだよね。」

「まあ、誰を見に来ていたのかは置いて。」

ふーっと、一つ大きく息を吐く。

「三年になってさ、椎名さんと同じクラスになって。修学旅行も一緒でさ。」

「すげーいい子だなんて思った。」

仰向けに寝転んだまま。

見えるのは高い天井。

「あきちゃんもさー、好きになっちゃえばいいのにー。」

「って、思ったから、誕生日プレゼント。受け取ってもらっちゃった。」

おいおい。

ちゃったーじゃねーよ。

っーか、なんだよそれ。

隣に寝そべる関君を見た。

いい顔してた。

部活の時に良く見た顔。

ポイント獲った時、サーブが決まった時、ブロックポイント獲った時。

あの顔と同じ。

コートの中で、チームメイトだった関君。

なんか、拍子抜けした。

別に怒るようなことをされたわけでもないのだけど。

俺にとってタケが友達であるように、  
関君にとってはただの部活のチームメイトとしてではなく、  
俺のことを想ってくれているんだろう、ということだけは伝わってきたから。

なんか、とんでもない一日だった。

それだけははっきり言える。

今まで過ごしてきた誕生日の中で、

もっとも騒がしい一日で。

もっとも迷惑な一日で。

忘れたくても忘れられない憎い日であることを  
少しだけ忘れることができた日でもあった。

特別でない。

いつもの学校生活の中の、一日。

ただ、それだけのこと。

時計を見ると一時を過ぎていた。  
気がつけば、長い一日も終わっていた。  
もう明日だった。  
寝る前に、ふと思い出した。

確かに手と手が触れ合っていた。  
握手。

そう言われればそうだけれど。

手の感触。  
覚えているはずがないのに。

あの夏の日、つないだ手。  
小さくて、  
細くて。

女の手。  
母親の手。  
あんな手で絵を描いたらどんな絵になるのだろうか。  
母親の描いた絵はもう、覚えていない。

6 .

朝目が覚めて。  
それが平日ならば  
学校へ行くのは当たり前前の事で。



中学生なのだから。  
受験生なのだから。

時間割という名の表の上で  
駒を一つずつこなししていく。  
—コマ—コマ。

そしてコマの間にある休憩時間。

ただただ、繰り返される。  
ただ、それだけのこと。

そして、繰り返される朝。  
下駄箱で。

あいつと会う朝。  
これもいつものことである。

「あ、あきちゃん。おはよう。」

そう言って、いつものように勝手に喋り始めた。  
俺は何も言わないのに。

ただ、違っていた。  
うるさく騒ぐ椎名萌の表情が。  
うるさいように見えるだけ。  
うるさく見えるように見せているだけ。

俺が見たあいつの顔。  
泣いたのか？

一時間目は教室で授業だった。  
さすがに三年のこの時期。  
さすがに受験生。

皆静かに授業を受けている。

静か過ぎて怖いくらいだ。  
静けさが、俺を惑わす。

泣きそうな顔。  
作っている笑顔。

椎名萌が泣こうが、泣きまいが、  
俺には関係が無いこと。

椎名萌が笑おうが、笑うまいが、  
俺には関係が無いこと。

そう。

俺はもうかわらないと決めたのに。  
かわらるのを辞めたはずなのに。

なのに。  
どうして。

どうして気になる。  
どうして気にさせる。

この問題を頭から消し去るには・・・  
この問題はどうかやったら解けるのか。

この問題、試験とどっちが難しいのか。

翌朝。

いつもより早く目が覚めたので学校へ行った。

最近、勉強時間と睡眠時間のバランスが崩れてきているのは自分でもわかってる。

その上、余計な事を考えてしまう無駄な時間が多過ぎることも。

そう、余計な事を考えさせられる原因。

その、原因。

祐也が尋ねて来た。

朝から・・・

早く着てみればろくな事が無い。

「最近、萌ちゃん元気無いんだよね。」

そんなこと知るか。

だいたい、何で俺にそんなこと聞くんだよ。

「廊下ですれ違う時とかさ、全然笑ってないし。」

そんなこと知らねーよ。

だいたい、俺あいつのこと見てねーし。

「晃君なら何か知ってるかと思ってさ。」

おいおい。

何故に俺？

「知らないけど。」

「そうかな？」

即答で返され、

表情を変えられた。

何？

なんで睨む？

俺か？

「晃君が萌ちゃんに冷たい態度取ってるからじゃないか？」

顔も口調も充分怖いんですけど。

つか、何？

何が言いたいんだ？

そんな怒りをむき出しにされても俺は何の反応もしないんで、  
困るんですけど。

「オレの見る限り、晃君も萌ちゃんの事好きだと思っから言っ  
ただけど。」

は？

もう少しで思わず口に出してしまうところだった。

飲み込んだが。

怒ってらっしゃるようなので。

でも俺にはさっぱりわからないので。

俺には関係の無いことなので。

べつに何か言う必要はないと思った。

そもそも、何で怒りの矛先を俺に向ける？  
俺、祐也の怒りを買ったような事したのか？

全然わからん。

考えたって、思い出そうとしたって、無駄無駄。

前回、祐也に栗原と別れたとかなんちゃら言われてから数週間。  
べつに何もしてないぞ。  
べつに何もなかったぞ。  
そもそも。  
俺と祐也は何の関係も無いじゃないか。  
ばからしい。

「オッス。」

「はよ。」

そう言って教室に入って来たのはヒロアキ。  
祐也はヒロアキと挨拶を交わすと、そのまま教室を出て行った。

「あきちゃん、おはよう。」

後ろにいたのは椎名萌。

なんだいたのかよ。

しかも、また作り笑顔かよ。

おいおい。祐也、

本人いるんだし、当事者同士で話せよ。

俺には関係が無いのだから。

まただ。

苛々する。

椎名萌を見ている俺に。

苛々する。

椎名萌が好きだという奴らに。

ただ、それだけのこと。

7 .

行事続きの二学期。

体育祭に続いて写生大会。

題材に選んだ場所は、三年連続。

人気の無い、静かなあの場所を選んだ。

が、三年目の今年は生憎の雨。

雨天決行。

教室で色付けとなった。

事前の授業で下絵は完成している。

だから雨でも問題は無いのだが。

問題は・・・

無いはずだったのだが。

雨のせいとか、教室だからとか、  
一人で描けない環境だからとか、

そんな言い訳は通用しないだろう。

問題大有り。

全然筆が進まない。

なんだ。

なんなんだ。俺。

どうした？

たかが、写生大会。

たかが、学校行事。

何も難しく考えることはない。

賞を獲得するための絵ではないのだから。

賞を獲得するために描くはずがないのだから。

なのに・・・

なんで・・・

筆が止まる。

手が止まる。

頭が止まる。

描けない。

“ キーンコーンカーンコーン ”

無常にも教室内に鳴り響く終了の鐘。

「おつしゃー終わったー。」

「無理無理。終わんねー。」

「疲れたー。」

「帰ろうぜー。」

教室に缶詰状態で行われた本日の写生大会。

午前中だけと言えど、皆の表情にも疲労が見える。

「今日終わらなかった者は、家に持ち帰るも良し、各自で提出期限までに終わらせるように。」

担任の話が終わると、教室内には一層のざわめきが広がった。  
バケツの水を捨てに行く者、片付け始める者。

冗談じゃない。

家になんて持ち帰れるか。

写生大会の絵といえど、

家でなんて描けるか。

描ける訳が無い。

描ける勇気が無い。

「あきちゃん、この後ヒマ？」

いつの間にか教室に関くんが入ってきていて、隣から話しかけられていた。

「どうせ雨だしさ、ボーリングでも行かないかってにのが。」

俺は何と答えたのか。



曖昧に頷いたのか。  
適当に頷いたのか。  
まあ、そんなところだろう。

絵が描けなかった。  
家になど持ち帰れる訳がない。  
気分的にモヤモヤと苛々がある。

「あ、椎名さんも誘ってみるね。じゃあ、時間決めたらまた知らせに来るから。」

気付いたら、関くんは居なくなっていた。

気付いたら、あいつの事を考えていた。  
今日はまだあいつの顔を見ていなかった。  
別に毎日見ている訳ではないし、  
っていうか、

あいつのことはもうどうでもよくて。  
あいつのこと考えたりするから・・・集中できなかったのでは。  
あいつのこと気にしたりするから・・・絵が描けなかったのでは。

あいつのこと・・・  
苛々する。

あいつの事を考えている自分に。  
苛々する。

あいつの事を気にしている自分に。  
苛々する。

あいつの事が・・・  
好きだという奴を見ると。

そう、笠原祐也。

バケツの水を捨てに行った水道で。  
明らかに違った向きで立っている。  
明らかに違った視線の奴がいる。

そいつは俺の足が自分の方へと向かってくるのを確認すると  
距離を縮めて言った。

「晃君、嘘ついてたな。」

は？

何が？

「そうやって・・・人を騙して楽しかったか？」

は？

何が？

「オレの事、心ん中では笑ってたんだろ？」

は？

だから何が？

「何とか言えよ。」

「何の話だ？」

いい加減、黙っているのに疲れた。

訳のわからない奴から、訳のわからない話をされて。

もう充分怒ってらっしゃる表情がヒシヒシと伝わってきて。  
「いったい、何の話だ。」

「惚けんの？まだ嘘つく気？」

「だから何の事か・・・」

「いい加減にしろよ！」

おいおい。

だから何でおまえがキレル？

おまえの怒りを買うようなこと、俺したのか？  
だいたい、元々俺とおまえは関係が無い・・・

「萌ちゃんと付き合ってるんだろ。」

は？

何が？

「オレが萌ちゃんのこと好きだって言った時、本当は心の中で笑ってたんだろ？」

は？

何が？

「オレが一人で馬鹿な事言ってるって思ってたんだろ。」

は？

だから何が？

「そりゃー余裕な訳だよな。いつもいつも黙ってて。自分は関係無いような顔してさ。」

「ヒロアキもかわいそーな奴。あれだけ近くに居んのにさ。晃君少しは悪いとは思わないの？」

おいおい。

何故そこでヒロアキの話が出てくる。

「そーやってオレらのこと見下して楽しいか？」

「晃君にはがっかりだよ。話せば解る奴だと思ってたのに。」

「付き合ってたのに、自分には関係無いって顔して、平気で萌ちゃんも泣かせて。」

「もう一度言っけど、オレ諦めるつもりないから。っーか、負けねーから。」

立ち去る祐也。

おいおい。

ちよつと待てよ。

俺はまだ何も言ってねーし。

俺はまだ何もしてねーし。

っーか、なんだよ。

何なんだよ、これ。

何なんだよ、一体。

怒りと皮肉たっぷりぶつけてきた祐也。

俺が卑怯者だって言いたかったらしい。

黙って聞いていたが。

苛々する。

好き放題言いやがって。

苛々する。

言うだけ言って消えやがって。  
苛々する。

最初は意味わかんなかったけど。

俺には関係が無いと思っていただけ。

この苛々と

このムカムカと

この怒り・・・

俺に関係大有りじゃねーかよ！！

「あ、あきちゃん、ボーリングの時間だけど・・・」

関くんの声は耳に入っていなかった。

あいつの顔も目に入っていなかった。

見えていたのは・・・ヒロアキの顔。

抱えていたのは・・・怒りという感情。

抑えていたのは・・・力の込めた拳。

抑えきれなかったのは・・・俺の右手。

「す、ストップ！ストップ！」

関くんの声は耳に入っていなかった。

あいつの顔も目に入っていなかった。

気がついたら、ヒロアキの胸倉を掴んでいた。  
俺の左手。

見えていたのは・・・ヒロアキの顔。  
抱えていたのは・・・怒りという感情。  
抑えていた気持ちはどっかに吹っ飛んだ。  
抑えられていたのは俺の両手。

そう、関くんが止めに入っていないければ  
俺はヒロアキを殴っていただろう。

何故ヒロアキだったのか。

何故ヒロアキに向けたのか。

最初は自分に苛々していた。

そう、最初は。

写生大会なのに、絵が描けなくて。

思うように筆が動かなくて。

家に持ち帰る訳にはいかなかった。

次に、あいつを思い出して苛々した。

あいつのことを考える自分に苛々した。

あいつのことを気にする自分に苛々した。

そして・・・

あいつのことが好きだという奴に苛々した。

祐也の話は全部は覚えていなかった。

ただ、いつものようにはいかなかった。

いつものように出来なかった。

いつものようには済まなかった。

そう、いつものように・・・

何を言われても

何を言われようが

何を言われたとしても

俺は関係の無い事。

俺には関係の無い事。

そう、処理できなかったんだ。

教室へは戻れず、

廊下をただただ、歩いていった。

歩きながら、必死に頭を回転させて考えていた。

少し冷静になってきた自分に気付く。

いや、まだだ。

まだ自分じゃない。

まだ俺じゃない。

どこかで抑えが利かなくなっている。

どこかでまだ消化しきれていない。

まだだ。まだ。

そう・・・

まだ・・・

会ってはいけなかった。

見てはいけなかった。

会いたくはなかった。

見たくはなかった。

笠原祐也なんて。

椎名萌なんて。

あいつらがどうなろうと、俺には・・・

祐也はあいつを抱きしめていた。  
祐也と椎名萌が抱き合っていた。

人目に止まらない場所。

階段の下。

俺がなぜそこに向かっていたのか。

俺がなぜそこに居合わせてしまったのか。

それは数秒の事だったのだろう。

だが、俺には

まるでそれが永遠に続くかのように残った。

たった数秒が、

ものすごく長く感じた。

そして振り返ったあいつの顔は・・・

ああ、ほら。

また、泣いている。

会いたくなかった奴に会ってしまった。

見たくなかったことを見てしまった。

ただ、それだけのこと。

その後の事。

どうやって家に帰ったのか。

ばあちゃんと何を話したのか。

夕飯、何を食べたのか。

自室で何を考え、どう過ごしたのか。

考えられなかった。



覚えていなかった。  
記憶に無かった。

何処だろう。

何処か知らないが、広い草原。  
心地良い風が吹いていて。

上を見上げれば俺の好きな空。

青空。

ああ。

夢だ。

夢の中だ。

そして・・・

見えてくるのは女性。

立っているのは髪の長い女性。

その後ろ姿。

もう何度も見た。

近づいて来る。

腕を掴んで

振り向かせる

ほら。

あいつは・・・

泣いていた。

白い。

白いのは天井。

俺の部屋。

目が覚めた。

布団から手を出す。

夢の中で

あいつの腕を掴んだ手。

現実で

ヒロアキに向けられた拳。

今は開かれた指の間から白い天井が見える。

夢も現実も・・・

この手で・・・

そして思い出す。

あの感情。

怒り。

抱えきれなかったもの。

抑えきれなかったもの。

あの感情。

あの感触。

この頭の中で

抱えきれなくなった

この手の中で

抑えきれなかった

俺にもまだあつたんだな。

怒りという感情。

誰かに向ける感情。  
誰かにぶつける拳。

物心ついた頃には兄達から嫌われていた。  
一緒に遊んだ記憶は無い。

幼稚園に入ると気付いた。  
普通の兄弟関係というやつに。  
なんでうちは違うのか。  
どうしてうちだけ違うのか。

答えはすぐにわかった。  
母親がいないから。

だからうちは他とは違う。  
だからうちは皆とは違う。  
違う。

違うつてなんだ？  
違うつて思うのは、違わなかったと感じたことがあるから。  
違いに気付かなければいい。  
違いを知らなければいい。

そうやって俺は周りと距離をおくようになった。  
幼くても悟ることはできた。  
歳を重ねる毎に、上手くなった。  
物分りの良い子供になっていった。

期待は持つから裏切られる。  
希望は持つから失望がある。

だったらはじめから期待なんてしなければ良い。  
望なんて持たなければ良い。

俺は利口な生き方をしてきた。

俺は利口な生き方をしてきたつもりだった。

でも・・・

それって本当に利口なのか？

そうやってうまくやっているつもりなのか？

そう思う自分がいなかった訳でもない。

感情を押さえ込んで

何も感じなくなつた訳ではない。

感情を表に出さなくなつて

出ていなかった訳ではない。

一年の時、いじめに合うタケを見ていて苛々しなかつた訳ではない。  
い。

二年の時、特別扱いされている由利を見ていて感情が表に出なかつた訳ではない。

誰かがいるからとか、

誰かが止めてくれたからとか

誰かに救われてきた訳でもない。

泉くんが居ない時だつて・・・

にのが居ない時だつて・・・

俺は・・・

もう自分で何とかしないとイケないのに、  
自分でどうにかしないとイケなかったのに。

苛々するのは原因があるから。

苛々するのは解決していない事があるから。

怒りの感情は苛々の積み重なり。

怒りの感情は・・・

もう発散してしまったではないか。

ぶつけて。

ぶちまけて。

原因を解決しようとししないで。

その怒りをぶつけたのはヒロアキ。

怒りを向ける先を間違えて。

ヒロアキに謝ろう。

朝の教室。

いつものおしゃべり。

いつものうるさい三人組・・・

ではなく、四組にいたのはヒロアキと北川千夏だった。

「ヒロアキ、昨日は悪かった。」

ふと、頭を下げた時思い出した。

こんな風に人に謝るのも数える程しかない。

去年、由利に謝る時は二宮の合否が必要だった事。

「ああ、いいよ。」

いつものヒロアキ。

ばかな女の友達。

「あのさ、晃君、祐也となんかあった？」

ばかな女の友達も馬鹿ではない様だった。

北川千夏が席を外すのが見えた。

気を利かせたつもりなのだろう。

「そんな有名な話？」

「いや、晃君と祐也が話してるの見て。」

「ああ。」

「二人の接点って言うたら・・・椎名かなって。」

どこまで話したらいいのか。

どこまで話していいのか。

そんな躊躇が伝わってくる。

「おれは祐也には協力できないって言った。」

「そう。」

「すんげー機嫌損ねたみたいだったけど。」

「ああ。」

想像はできる。

予想もつく。

多分、ヒロアキは間違っていないだろう。

勘違い。

伝え違い。

そんなところだろう。

でも、俺は間違えた。

怒りを向ける先を。

怒りを向ける相手を。

怒りの先にあるもの・・・

それは祐也の言葉。

怒りを向けるところ・・・

それは自分自身にだ。

祐也は俺と椎名萌が付き合ってたと言った。

そう言ったのはヒロアキだと思った。

ばか女の友達で勘違いしているヒロアキだと思った。

俺の勘違い。

祐也は俺と椎名萌が付き合ってたと言った。

黙っていた。

嘘をついていた。

騙していた。

卑怯者。

偽善者。

そんなところだろう。

怒りに怒りをぶつけても意味は無いのに。

人の感情を力でどうにかしようと考えるのは無意味なのに。

ちょっと考えればわかること。  
少し考えれば気づけること。

出来なかったのは自分のせい。  
感情をコントロールできなかった自分のせい。

積み重なる苛々感と  
込み上げてきていた感情を  
処理できなかった

処理できない状態だったってことが。  
俺が。

いつからだったか。  
どこからだったのか。

どこからはじまっていたのか。

浮かんだのはあいつの顔。  
あいつと出会った時からなのか。  
あいつが俺を知った時からなのか。  
あいつが俺を見た時からなのか。  
俺があいつを見た時からなのか。  
俺があいつを気になった時からなのか。

今日は来ないのか。  
朝の教室。  
いつものおしゃべり。  
うるさい三人組。

中三なのに。



部活も引退して朝練もないのに。  
わざわざ朝の教室に集まる三人組。

いつもばかな話をしていて  
いつも無駄に笑っていて

自分の教室じゃないのに、そんな違和感を感じさせない奴ら。  
いつの間にか、目で追っていた俺。

朝の教室で。

一時間目の授業が終わった。

次の授業は教室で英語。

訳を確認しようとノートを取り出した。

ふと、渡り廊下を歩く奴らを見た。

移動教室だったのだろう。

その中に、祐也の姿を見つけた。

いつもなら、祐也が居ようが居まいが  
気にかけることなんてなかったのに。

ただの、人の群れ。

その中の一人。

今は、それがはつきり祐也だと認めてしまっ。

昨日、俺に向けられていた祐也の感情。  
怒り。

俺はそれを真に受けてしまった。

いつものように受け流す事が出来なかった。

誰かから聞いたのか。

俺と椎名萌が付き合っていると。

「付き合っていない」そう答えれば良かった。

そう答えれば済んだ話。

簡単な話だったはずだ。

そう、簡単な話だった。

面倒くさいことが嫌いな俺がどうして。

人とかかわりなんてもっと面倒くさい。

なのに・・・

冷静になれなかった。

上手く処理できなかった。

祐也は椎名萌が好き。

それでいいじゃないか。

俺には関係が無い。

もうかかわらないと決めたのだし。

俺はいいんだ。

かかわらなくて済むならそれで。

あいつ等が付き合おうが、付き合わなかつが。

どうでもいい。

いや、むしろ、付き合ってくれた方が

俺はかかわらなくて済むのだから。

そして、祐也の怒りも納まるだろう。

そうすればあいつの事を気にしなくて済む。

あいつの顔を気にしなくて済む。

あいつの泣き顔・・・

祐也の背後に。

振り返ったあいつの泣き顔を思い出す。

なんで泣いたんだ？

祐也に抱きしめられて・・・

なんで泣くんだ？

祐也に好きだって言われて・・・

なんで泣くんだ？

って、結局またそこに戻る訳で。

どうかしてるよ、俺。

頭ん中、ぐちゃぐちゃ。

授業も全然頭に入ってこない。

英語だったはずなのに、数学で難解な問題にずっと取り組んでいた気分だ。

休み時間。

次の授業も教室。

移動は無し。

結局、何にも頭に入らなかった英語の教科書を引き出しにしまい、代りに次の社会の教科書を取り出した。

長い二時間目だった。

まだ、二時間目なのに。

どっと疲れが出た。

すっきりしなかった。

顔を見てすっきりしなかった。

いつもの、うるさくて無駄に明るいか女の顔を。

そう思ってわざわざ五組へ行った。  
わざわざ行ったのに。

いなかった。

後はいつもの五組だった。

クラスのムードメーカー的存在の二宮を中心に人が集まっていて、  
男子も女子も、二宮を見ていた。

二宮の話に笑っていた。

そしてその後ろに・・・

金魚のフンの存在でいる椎名萌がいなかった。  
珍しい事もあるもんだ。

10分間という短い時間。

このクラスは、笑い声の絶えない休み時間だった。

三時間目。

教室で社会の授業だった。

グループワークだった。

机を合わせて四人の班を作らされた。

面倒くさい授業だった。

が、誰かが常に話しかけてくるので  
課題を進める為にも無駄な事を考える暇は無かった。

割と早く45分間の授業が終わった。

休み時間になる。

足が廊下へと向かっていた。

行き先は・・・五組だろう。

「あ、穂高君、ちょっと持ってくれる？」

廊下に出たところでクラスの女子に声をかけられた。

さっきまで使っていたグループワークの資料。

資料と言っても紙だけでなく模型もあった。

かなりの重さだろう。

仕方なく、手を貸した。

「今、台車持つて来るところだからもうちょっと付き合ってね。」

だったら台車が来るまで大人しく待っていれば良かったものの。

一人で持てると思ったのか。

面倒くさい。

人とかかわるだなんて。

女子だなんてもっと面倒くさい。

「良かったー。穂高君に声かけて。無視されたらどうしようかと思っただけど。」

おいおい。

半ば強制的に持たされたようなもんなんですけど。

どう見ても、廊下に俺しかいなかったし。

無視したくてもできない状況な時もある訳で。

「穂高君最近雰囲気変わったよね。前はちょっと話しかけづらかったよ。」

おいおい。

ずいぶんなこと言ってくれるじゃねーか。

まあ、当たってるけどな。

人とかかわりを避けてきたし。

面倒くさいことは避けてきたし。

「お待たせー。台車到着。」

「穂高君ありがとね。助かったわ。」

そう言つと、女子二人、台車を押して歩いて行つた。

途中、台車を取りに行つていた方の女子がこう言つた。

「穂高に頼んだの？よく声かけれたね。」

おいおい。

聞こえてるんですけど。

確かに。

こんな風に女子から何か頼まれることなんて無かつたな。

人とかかわりが面倒くさかつたし。

特に女子なんて。

そついう雰囲気つて時間と共に伝わっていく訳で。

新学期の自己紹介から始まつて、修学旅行、体育祭、合唱コンクールとクラス行事をこなす毎に全体周知事項になつていつて。

クラスの中の俺の位置。

適材適所。

クラスを仕切りたい奴、目立ちたい奴、リーダーシップを発揮する奴。

一人でいたい奴、目立ちたくない奴、平凡でいたい奴。

女子から雰囲気が変わつたなんて言われたこと無かつた。

女子の方から俺に話しかけてくることが無かった。  
委員会の仕事や日直、学校生活の中で最低限のかかりしかして  
こなかった。

だけど・・・

あいつはそんな俺に話しかけてきた。  
変なあだ名まで付けやがって。

俺が無視しても

平気な顔して話しかけてきた。

俺が相手にしなくても  
懲りずに話しかけてきた。

いつもうるさくて

いつも騒がしくて

無駄に元気で

無駄に笑っていて

気がつくと・・・

人とかかわりが面倒だった俺の

女子とかかわりなんてもつと面倒だった俺の

俺の中にあいつはずかずかと入ってきていた。

そしていつの間にか俺を変えていた。

クラス的女子から声をかけられるようになるとは。

これだけのことで休み時間が終わってしまった。

四時間目が始まる。

あいつの顔を見に行く時間が無かった。

四時間目は数学。

数学は得意科目だ。

塾へ通っていない俺にとって

家での勉強は予習が中心だった。

だから出来て当たり前で。

教科書通りの問題なら問題無かった。

定期試験も教科書の問題から出されることが多かった。

しかし、受験となるとそうはいかない。

教科書から問題が出ることもまず無い。

教科書通りにはいかない。

応用問題に慣れておく必要がある。

週末、本屋へ問題集の買い足しに行こうか。

そんなことを思った。

授業ではヒロアキが指名されて黒板の前に出ていた。

チョークを持つ手が進まない。

解答が出ないらしい。

ばか女の友達はやりばかだったか。

川野ヒロアキ。

同じ小学校の出身だがこれまでに接点はない。

同じクラスになったのは今年が初めて。

おそらく、あまり勉強は得意な方ではない様子。

朝のうるさいおしゃべりを聞いていれば分かること。

椎名萌とは一年二年と同じクラス。

同じテニス部で意気投合した同士というところか。

男女の友情なんて在るわけが無いのに。



そう。

あるわけが無い。

実際。

ヒロアキは椎名萌の事が好きだろう。

本人が気付いていなくても、

椎名萌が気付いていなくても、

見ていればわかる。

いつも一緒にいて。

いつも騒いでいて。

いつものおしゃべり。

これが当り前で

これを壊したくなくて

これを壊してまで手に入れようとは思わない

恋より友情を選びましたってところだろう。

そこまでヒロアキが考えているかは知らないが。

そこまで相手に配慮する奴なのかも知らないが。

そして配慮が足りないのがもう一人。

ずっと一緒にいて

ずっと一緒にいるのに

相手の気持ちに気付かない奴。

相手の気持ちを考えたことのない奴。

今の関係がこの先もずっと続くと信じているばかな女。

昔から借り物が多くて

人の教室に来ては騒いで帰って行く

無駄に明るくて

無駄に元気で

無駄に笑顔

でも最近・・・

いや、もつと前から

あいつは無駄に笑わなくなった

最初に泣き顔を見たのはいつだったか。

夕日が差し込む教室で

オレンジ色の光の中にあいつはいた。

すげー綺麗な夕日色の教室で

あいつは泣いていた

女子からいじめのターゲットにされた時は

朝から泣きましたって顔してた

それでも笑ってた

ばかみたいに笑ってたな

泣きそうな顔はしてたけど

泣き顔を人前で見せない奴だった。

泣きそうな顔

泣いた後の顔

そんなんばつかじゃないか、ここんとこは。

今日は・・・

泣いたのか？

今日も・・・

泣いたのか？

今日はどんな顔をしているのか

何を考えているのか  
何を想っているのか

祐也のこと考えてるか？

当り前だろうな。

祐也に抱きしめられて・・・

祐也に好きだと言われて・・・

どう思った？

って、またあいつのこと考えてるし。

今は数学。

数学の授業。

問題問題。

どんどん解かなきゃ。

そう、どんどん。

数学に解けない問題なんて無い。

数式に当てはめさえすれば答えは導き出せる  
でも・・・

あいつの事となると解けない問題が多過ぎる。

数式は勿論通用しない

あいつが祐也の事をどう思っているかなんて  
あいつにしか解けない問題。

あれ？

まてよ？

解けない問題？

数式が使えない？

解けないのは原因があるからで・・・

解けないのは数式が通用しないからで・・・

その原因を考えないから俺はまた同じところを廻ってしまっわけ  
で・・・

あいつがどう思っているのか

解けない問題

数式は使えない

あいつがどう思っているのか

あれ？あれ？

なんだ？

何か一個足りない

頭の中で一箇所繋がっていない

なんだこれ？

なんの数式？

どの数式？

あいつがどう思っているのかを知りたくて・・・

そう・・・

あいつが・・・

おい？おい？

おいおい。

あいつがどう思っているかなんてとづくに解けてた問題だろうが。

はあ。

俺は何でこんなに時間をかけてしまったのか。

何故これ程時間をかけなければならなかったのか。

頭悪りー奴みたいじゃん。

あいつがどう思っているか

そんなの答えは出ていたじゃないか。  
数式なんて使わなくても

あいつがどう思っているのか  
数式なんて必要ない

あいつが好きなのは俺だった。

“ キーンコーンカーンコーン ”

タイミング良く授業終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。  
俺の頭の中にも、鳴り響いた。  
ゴーンと。

ガッーンと。

痛いくらい重い音が。

おかげで頭がすっきりした。  
もうどんな難問でも解けるくらい。

すっきりした頭で食べる昼食はなかなか美味かった。  
今日の献立はカレーにサラダ。  
サラダの中にミニトマト。  
トマト嫌いなあいつを思い出させた。  
今頃、二宮に食べてもらってるだろうか。

椎名萌に甘い二宮。

なんだかんだでタケも甘い。  
友達にも厳しいのは斉藤恵子。  
四人の関係を見て笑っているのは関くんだろう。

そんなあいつ等の賑やかな食事風景が目には浮かぶようだ。  
見なくてもわかる。

一つだけ、すっかりした頭の状態で確かめたいことがあった。

昼休み中の五組。

相変わらず中心にいるのは二宮。  
いつものことだ。

そしてその後ろに・・・

あれ？

二宮の後ろ

金魚のフンが

またいない。

午前の休み時間もいなかったよな。

珍しいというか・・・

なんというか・・・

なんだ？これ。

「めぐなら今日は休みだけど。」

廊下側の窓から斉藤恵子が言った。

「タケに・・・」と俺も繕えば良かったものの。  
機転が利かなかった。

「はあ。」

溜め息。

その一言で充分だった。

斉藤恵子の溜息一つで。  
怒ってらっしゃるのが。

その怒りは俺に対して向けられていることが。  
はいはい。

大人しく退散しますよ。

人とかかわりが面倒くさかった  
女子とだなんてもつと面倒くさい  
斉藤恵子だなんて特に面倒くさい  
友達想いで勝気な奴。

斉藤恵子とは二年で同じクラスだった。  
タケと同じ小学校出身。

そのタケも斉藤には一目置いているのがわかった。

三年になって、椎名萌といつも一緒にいる。

その椎名萌に怒鳴りつけていることも何度か有。

男女問わず誰に対しても間違っていることは違うと言う奴。

クラスを仕切るわけではないが、その一言でクラスの雰囲気を変  
えるだけの力は持っている。

そして俺のことを良くは思っていないだろう。

いや、相当嫌われているだろう。

俺も苦手なタイプなので、かわりたくない。

「晃君ー、次実験室移動ー。」

「ああ。」

健太に声をかけられ、時計を見ると昼休みが終わりかけていた。  
今日初めての移動教室。

実験室へは五組の前を通って行く。  
いつもの事。

毎週同じ授業のコマを繰り返しているのだから。  
移動教室への経路も同じ。

当たり前的事。

ただそれだけのこと。

なのに。

なのに・・・

違うのは・・・

五組はいつもと変わらない。

違うのは・・・

二宮のいる五組はいつもと変わらない。

違うのは・・・

あいつがいないこと。

あいつの姿が無いこと。

椎名萌が居ないこと。

「火の取り扱いには十分気をつけて実験を始めて。」

「穂高君、私が温度測って記録するから温度計よろしくね。」

「ああ。」

「じゃあ、オレ火ーつける。いくぞー」

アルコール、温度計、マッチ、ビーカー、フラスコ、試験管と教科書通りの実験道具が準備され  
教科書通りに実験が進められていく。



そう。

あいつが居なくても

あいつが休みだろうと

学校は時間通りに始まるし

授業は時間表通りに進むし

教科書通りの解答が待っている

うるさい女がいなくても

朝のおしゃべりがなくても

何も変わらないじゃないか

ただ、あいつが居ないだけ

ただ、あいつが休んでいるだけ

朝から顔を合わせないことだってあったじゃないか。

昼休みまで顔を合わせないことだってあったじゃないか。

一日顔を見ないことだってあったじゃないか。

一言も会話をしない日だってあったじゃないか。

特にここんとこ、あいつとはかかわらないようにしていたのだから。

あいつを見ない日だって・・・

あいつを気にしない日だって・・・

ほんとにそうか？

本当に？

それでも俺はどこかを感じていた。

朝の教室

いつものおしゃべり三人組

移動教室

渡り廊下

五組から聞こえてくる声

「あきちゃんおはよう」

そう言っ　て始まる学校。

あいつの声で始まる。

俺は返事をしないけど

俺が返事をしなくても

あいつはいつも笑って・・・

懲りずに俺に話しかけてきた

二宮達と大人数でしゃべっていても

一人で五人分は喋る二宮がいても

その後ろに金魚のフンのようにくっついてるあいつの声を聞いている

あいつの声に耳を傾けている

あいつの声を聞いている

そこにいるのが当り前で・・・

俺の近くにいるのが当り前で・・・

考えたこともなかった

俺が見ればいつもそこにいて

俺が目で追えるところにいて

だから考えたこともなかった

俺があいつを見ていたのは

あいつも俺を見ていたから

あいつが俺を見ていたのは  
俺があいつを見ていたから

だから目が合う

だから目が離せなくなる  
だから・・・

「アチッ。」

小さい声だったつもりだが。  
周りのせいで大事に変わってしまった。

「キヤー！穂高君ー！！」

「水！水で冷やして！！」

「先生ー、穂高君が火傷しましたー。」

「落ち着いてー。皆はそのまま続けて。火から目を離さないで。」  
「その班は一度火を消して。実験を中断。穂高君は十分冷やしてから保健室へ行きなさい。」

「いえ、平気です。」

「駄目よ。今は平気でも後から痛みが出てくるかもしれないから。」

「保健委員誰だっけ？」

「香月君と涼子ちゃん。」

「あ、じゃあ一緒に行こうか？」

「いい。冷やせば治る。」

「はいはいー、皆は火から目を離さないでって言ったでしょ。実験  
続けて。」

「穂高君は一人で保健室行けるわね？」

「はい。」

面倒くさかった。

理科の先生も。

クラスの奴らも。

保健室も。

面倒くさいからその場は返事をしただけ。

わかったフリをしただけ。

そうすることが模範解答だと知っているから。

ちょっとビーカーに触れただけ。

ちょっと熱かっただけ。

ちょっと考え事をしていただけ。

ちょっと上の空だっただけ。

いや、十分上の空だった。

十分、考え事をしていた。

何やってんだ、俺。

いちおう・・・

面倒くさいが

後々面倒くさいことになるのはもっと面倒なので

保健室へ寄った。

これで模範解答は完璧だろう。

「どこか具合悪いの？」

「指を少し火傷しました。」

「あらあら。見せて。」

保健室。

中学三年の間で最も足を踏み入れなかった場所だろう。

保健委員なんてやるはずもなく。

消毒液の匂いと白衣。

保健校医。

教師になるという勝兄と

医者になるという亘兄を

続けて連想してしまった。

「十分冷やしたみたいだけど、腫れてきてるから薬塗って処置するわね。」

それから保健医は、いつ、どこで、どんな風にと尋ねてきた。

答えるのが面倒くさかったが、

保健日誌とやらに書かなければならない項目なのだろう。

仕方ない。

余計なことは言わず、聞かれたことだけを答えた。

「実験中に火傷だなんて。何か別のことでも考えていたの？」

おいおい。

そんな余計なこと俺が喋る訳がないだろう。

そんな面倒くさいこと俺がする訳がないだろう。

「それとも・・・好きな子の方でも見て見惚れちゃったとか?！」

おいおい。

俺はそういうキャラじゃないってば。

残念だけどそういう話にのる男子ではないってば。

「まあ・・・中三の秋だしね。好きな子と高校別々になるかもって  
思う不安定な時期でもあるわよね。」

おいおい。

だからなんでそんな話に・・・

しかもあんたずいぶんと楽しそうに話すな。

「私が中学の時はねー・・・」

おいおい。

だから聞いてないんだけど。

あんたの恋愛話なんて。

保険医ってこんな感じなのか?

こんな感じでいいのか?

中学の教師っていえば生徒になめられないように厳しいオーラが  
出てんのに。

この保険医はまるで無し。

だいたい、生徒に自分の恋愛話をするか?

しかも楽しそーに。

いつになったら終わる話なんだ?

そもそも、俺、相槌も打ってなければ聞く気も全く無いんですけ  
ど。

こっちの気も知らないで勝手に話を・・・

一人で勝手に喋って・・・

ああ。

あいつもそうだったな。

俺が何も言わなくても

俺が聞いていなくても

あいつは話しかけてきた

こっちの気も知らないで勝手に・・・

一人で喋って

一人で騒いで

一人で笑って

一人で泣いて・・・

あいつが一日学校を休んだ。

それだけのことなのに。

ただそれだけのことなのに・・・

どうしてこんなドジを踏んだのか

ちよっとの火傷くらいどうってことない

「はい、処置終わりー。これから気をつけるのよ。」

「受験生って言ったって、部活は辞めても恋は辞める必要ないのよ。後で気付いたって遅いことだってあるんだからね。今は、今日は一度しかないんだから。」

「失礼しました。」

まだ続きそうな話に別れを告げて。

保健室を出た。

どっと疲れた。

もう来たくはない。

もう来ないだろう。

もうこんなドジは踏まない。

あいつが一日学校を休んだ。

それだけのことで火傷なんて・・・

あいつがいたら何て言うか。

あいつがいたらどんな顔をするか。

あいつが居たら・・・

「今日は一度しかないんだから」

さっき保険医が言っていた言葉が頭に聞こえた。

今日あいつが学校を休んだ。

今日あいつは居なかった。

今日・・・

あいつが居ないことに何故こんなにも引つかかる？

うるさい女がいなくてせーせーするだろう。

あいつがいなければ、気になることもないし。

あいつがいなければ、目で追うこともないし。

あいつが居なければ・・・

椎名萌を気にすること

椎名萌を目で追うことも

椎名萌の顔を見ることが出来ないってことか。



「後で気付いたって遅いことだってあるんだからね」  
保険医の言葉 聞いてないフリしてたのに  
聞く気なんて全くなかったのに  
十分影響受けてんじゃない、俺。

そう、今気付いた。  
今更気付いた。

そこにあるべきことがあたりまえで  
そこにあるべきかたちあるものが

失くなったことに気づくだなんて  
失くなって初めて気づくだなんて

居ない日を知ったから  
居る日との違いを知る  
違うと感ずるのは・・・  
違わなかったことがあるから。

そう。知っているから。  
この気持ち。  
この感情を。

思い出したから。  
この気持ち  
この感情を。

あいつから教わった気になるという気持ち。  
そしてそれは・・・

俺もあいつのことが好きだったということ。

今日は長い一日だった。

一時間目から五時間目までのいつもの時間表。  
単なる一コマ授業のはずだったのに。

「おかえりー、晃。」

玄関先を掃いていたばあちゃんに会った。  
この時間にしては珍しい。

「どうしたん？その指。」

面倒くさいことは避けたかった。

家に入る前に、取ろうと思っていた人差し指の包帯。  
家に入る前ではあちゃんに気づかれてしまった。

「ちょっと擦り剥いた。でももう平気。」

「びつくりしたでえ。」

「保健医が大袈裟に巻いたんだよ。」

「晃が指に怪我するなんて何年振りじゃろなー。」

そう言つと箒と塵取を片付けながら家の中へ入るばあちゃん。  
静かに後に続いた。

「小さい頃はよくクレヨンやら絵の具やら指に塗つてなー。」  
「お風呂入っても落ちんで、爪との間に色んな色付けてなー。」

独り言と受け流すこともできただろう。  
小さい頃の話だ。

別に変に気にする話でもない。  
ただ・・・

「晃は絵の勉強をしたいと思わんのかい？」

ばあんの口から・・・

ばあちゃんの言葉から・・・

「したいならしたいでいいんよ。晃は晃のしたいことをすればいいんじゃ。」

「大丈夫だよ。俺はM校を受けるから。」

なるべく間を空けないで言った。

悩んでいると、迷っていると、  
思われなくなかったから。

夕食の席で、ばあちゃんの顔は見れなかった。

あいつのことが好きだと気付いた。

だからといって、俺がM校を受験することには変わらない。  
変わらないよ、ばあちゃん。

俺はM校に・・・

亘兄が受からなかったM校に受かってみせる。

俺がM校に・・・

ばあちゃんも喜んでくれるだろう

俺がM校に受かったら

俺が絵を描くと家族を悲しませる

俺が絵を描くとばあちゃんが悲しむ

悲しませてばかりだったばあちゃん。  
大丈夫だよ。

俺がM校を受ければ家族は喜ぶ  
俺がM校を受ければあちゃんが喜ぶ

大丈夫だよ。  
俺はM校を受験するから。

その夜、見た夢はいつもと違っていた。  
知らない風景、  
俺の好きな空。  
でも今回は白黒。

そして見えてくる女性の姿  
が・・・  
後姿でなかった

最初からこっちを向いていた

いつもは俺が振り向かせたところで目が覚めていた  
だが正面を向いている  
こっちを見ている  
白黒の夢だから  
表情まではわからない

だが、あいつだということはわかる

泣いてるのか？

泣いたのか？

どうした？

俺は近づこうとするのだけれど

距離は縮まらない

あいつはこっちを向いているのに

距離が縮まらない

どうしたら・・・

どうしたらいいのだろうか

そんなことを考えていたら、朝になっていた。

朝の教室。

椎名萌の姿は無かったが。

代わりにヒロアキが来た。

「ずる休み女、来たよ。」

「そうか。」

「おれもさ、しばらく祐也とは口聞いてねーんだけど。」

四組の教室で。

俺とヒロアキが喋っているというのも

クラスの奴らからしたら珍しい光景なのだろう  
そんな客観的なことを考えながら会話していた。

「今は祐也よりもしーなの気持ちの方を大事にしてやりたいって思う。」

「祐也はさ、ド真面目な奴だし、生徒会とか部長とかさ、そういう完璧主義なところあるからさ、」

「おれみたいな奴から反する意見言われんのム力つくんだろうよ。」

「でもさ、おれもばかじゃないからしーなの気持ちくらいわかってるしさ。」

なんだ、こいつちゃんと喋れるんじゃないか。  
そんな風に思ってしまった。

こんな風にヒロアキと喋れるとは思っていなかった。  
ヒロアキとこんな話をするとも思っていなかったが。

「おれ今日放課後しーなと話つけるから。もんじゃ食べに。」

「あ、河野君と穂高君、これ貼るの手伝ってー。」  
「おっけー。」

おいおい。

なんで俺まで・・・

クラスの女子が掲示板の張替えをしているところだった。  
椅子の上に乗っているが、どうやら届かないらしく。

たまたま近くにいた俺とヒロアキに声をかけたようだ。  
偶々。

ヒロアキはお安い御用と言わんばかりにさつと椅子に立った。

そして俺は画鋏を渡された。

椅子に立つヒロアキに、一つずつ手渡していく。

「助かったー。河野君も穂高君も背高いから便利よね。」

おいおい。

便利って・・・

そういう言葉の使い方するか？

「おれより晃君の方が背高いよね。」

「そうか？」

「おれ百七十二。晃君は？」

「さあ・・・最近測ってねーからな。」

そんな他愛もない会話をしながら画鋏を渡していった。  
貼っているのはこの間書かされた自己紹介カードだった。  
二学期も半ばだというのに。

何故今更・・・

こんな面倒くさいことを。

考えた奴がいるのかが不思議だ。

「河野君、穂高君ありがとうー。」

嬉しそうにお礼を言う女子。

満足そうなヒロアキの表情。

迷惑そうな表情の俺。

気付かれてはいないのだろうけど。

人とかかわるだなんて。

何かを手伝うだなんて。

面倒くさい。

特に女子とかかわるだなんて。

女子から頼まれごとをするだなんて。

面倒くさい。

その面倒くさいことをやり始めたのが・・・

あいつとかかわってからだっとな。

今日は学校に来たのか。

今日は学校に居るのか。

居ると聞いただけで

居ると言う言葉だけで

ホッとしている俺がいる。

好きな奴が学校に居る。

それだけのことなのに。

あいつのことを好きだと自覚した。

認めてしまえば後は楽だった。

あれだけ苛々していたのも

怒りという感情を表に出してしまったのも  
今となっては良かったのかもしれない。

人間、落ちるところまで落ちたら  
後は上るだけ。



全部のもやもやと  
小さな苛立ちの積み重なりが  
全て消え去った後には  
冷静さだけが残った。

すつきり片付いた頭の中には  
どんどん新しい事を詰めることができる

もうすぐ中間試験が始まる。  
昨日の事が嘘のように、  
今日は授業に身が入っている。  
いつも通りの時間割を  
いつも通りの教科書で  
いつも通りにこなしていく。

移動教室があった。  
五組の前を通る。  
いつも通りだ。

そう。  
いつも通り。  
ほら。  
いつも通り。

二宮の後ろ。  
金魚のフン。  
椎名萌の声。  
見なくても。  
聞こえてくる。

あいつの声。  
あいつが居る。

帰りのHRが始まる前だった。  
廊下から視線を感じた。

ヒロアキか、とも思ったが。

一日振りに見る椎名萌は何か違って見えた。

「体調悪かったのか？」

「え、あ、うん。」

はつきりしないのは言葉だけでなく  
表情もはつきりしていなかった。

ヒロアキが言っていたはずの休みというのも満更嘘ではないのか。

「私がいらないのわかったの？」

「ああ。」

「そっかあ。」

目を合わせようとはしないのか。

俺は見えていた。

そして気付いた。

最初に感じた違うは、雰囲気だった。

髪を縛っていた。

「変だった。」

「え？」

「おまえがいないとなんか変だった。」

二つに束ねられたその髪に・・・  
いつもうるさいばかりの  
無駄に元気で走り回っている  
その捕まえようのない髪に・・・  
この手で触れてみたかった

「ちっちゃいな。」

「そ、そうかな。」

「身長いくつ？」

「ひゃ、百五十五。」

「ちっせー。」

「ふ、普通だよあ。」

百五十五。

そんなちっさかったのか。  
こいつの頭に手を乗せたまま、  
改めて比べてみたが、  
目線が合うことは無かった。

「あきちゃんは？」

「百七十・・・五とか？たぶん。最近測ってねーな。」

「まだ伸びてるの？」

「ああ、成長期だな。節々が痛む。」

「じゃあもつと大きくなるんだね。高校生になったら・・・」

とそこまで言っただけ話を止める。  
急に俯いた。

「なんだよ？」

「うつん、なんでもない。」

「途中で止めるなよ。なんだ？」

こいつに目線を合わせるには  
こいつの顔を見るのには  
俺が屈まないといけないことに今気付いた

「ほんとに何でもないの。」

屈んで覗き込んだ顔。

何でもないっていう顔じゃねーじゃねーかよ。

嘘つくの下手だな。

顔に髪がかかっていない分、表情がはっきりとわかる。

昨日何故休んだ？

どうしてそんな顔をしている？

泣いたのか？

何かあったのか？

俺は何も言わないし

俺は何も聞かない

廊下に教師が見えた。

HRが始まるだろう。

「じゃあね、あきちゃん。」

そう言つと、小走りに自分の教室へと戻っていった。  
その後姿を見ていたら・・・  
一つの視線と交わった。  
たまたまだろう。

偶々。

五組の学級委員をしている奴と。

中間試験が始まった。

前回の定期試験の結果は散々だった。  
今回で挽回しなければ。

この試験の結果で来月三者面談を行うという。  
この試験の結果さえ良ければ・・・  
M校受験を担当に言うことができる。

試験は五科目二日間で行われる。  
調子は良かった。

気持ちの整理  
頭の整理

そんなの今までの俺には必要の無いことだと思っていた。  
でも・・・

あいつと出会ってから

あいつのペースに乱されて

あいつのことを考える自分を認めたくなかった

あいつのことを見ている俺

あいつのことを気にしている俺

あいつのことが好きな俺

全部認めてしまえば次に進める。

次・・・

そう。

俺は次に進まなければならない。

M校に合格して。

亘兄が受からなかったM校に合格して

亘兄を越えて・・・

ばあちゃんの喜ぶ顔が見たい。

ただ、それだけのこと。

8 .

あいつのことを好きだと認めた途端  
見えてくるものがある

「おはよう、あきちゃん。」

いつもの朝。

下駄箱での挨拶。

いつものうるさい女・・・の、後ろに。

芳沢？だっけか？

体育祭の後、

後期の委員会を決めた。

面倒くさいが毎年、前期と後期の二回委員会決めが行われる。

それで椎名萌は後期の学級委員になったんだっけか。  
確か、芳沢というやつと一緒に。

椎名萌は学級委員タイプには見えなかったが。

お祭り好きな委員会ばかりをやっている二宮の金魚のフン。

二宮の後ろにいるイメージだったが。

そういえば、生活委員はやっていたか。

一年の時も、二年の時も。

こんなうるさい女が生活委員？と思っていたが。

副学級委員的な存在である生活委員をやっていたら、そのまま学級委員を押し付けられるケースもあるか。

押し付けられたら断れないタイプだろうしな。

「昨日にのがねー」

またいつものように。

そう、いつものように椎名萌は一人で喋り始めた。

俺が何も言わなくても

一人で勝手に話しかけてくる。

それで良かった。

声が聞けるなら。

俺の隣に居るなら。

「じゃあね、あきちゃん。」

今朝は四組には寄らずに自分の教室へと入っていった。

芳沢と一緒に。

芳沢とは話したことはなかった。

椎名萌やタケと同じ小学校の出身。

芳沢は見るからに学級委員タイプだな。

中間試験が終わって。

関くんは誘われて、部活に顔を出した。

面倒くさかったが。

久しぶりに体を動かした。

十月の体育館に

湧き上がる汗。

「やべー明日絶対筋肉痛ー！」

倒れこむように床に寝転んだ。

「先輩お先です。」

「おおー、気をつけて帰れなー」

関くんは今でもしつかり先輩だった。  
俺は・・・

元々部活動に興味がなかった。

勝兄の活躍のせいで、陸上部から、運動系部活動からの勧誘を受けた。

どれもこれも面倒くさいだけだった。  
陸上なんて。スポーツなんて。

県大会の記録を持つ勝兄。

未だ誰にも破られていない記録。

誰かに破られない限り、続く記録。



輝き続ける栄光・・・

そんな優秀な兄を持った弟の苦勞が  
誰にわかるもんか。  
誰がわかるもんか。

たまたま・・・

そう、偶々。

バレエ部には勝兄のことを知る先輩がいなかった。  
それだけのこと。

それだけのことで入部した。

だから部活には真剣に取り組んだ記憶はない。  
適当に。

「まだ絵を描いてたのか」

勝兄のことを考えていたからか。

急に頭の中で再生を始めた台詞。

もう何度リピート再生したことが。

いい加減・・・

「最近どうよ？あきちゃん。」

横で寝そべっていた関くんの声が誰もいない体育館に響く。

「べつに。」

「でた！あきちゃんのべつに。」

「試験は上手くいったのー？ってオレに言われなくても完璧か。」

「そうでもないよ。」

「またまたあー。」

体を休めていたら

だんだんと汗が引いてきた。

そろそろ着替えないと体冷えるな。

「あきちゃん、高校はどこ受けんの？」

「考え中……」

関くんには悪いが、まだ人に話せる段階ではない。

M校なんて、言えるわけがない。

起き上がって、更衣室へと向かった。

「俺さー、高校行ってもバレー続けようかと思って。」

「いいんじゃない。」

「だからあきちゃんと同じ高校行けないかなーって。」

おいおい。

俺はバレーはやらんぞ。

「スポーツ推薦狙うのか？」

「まあ、そんなところ。」

関くんらしい……と思った。

進路……か。

そついうの考える時期だもんな。

誰だって。

「皆高校バラバラになっちゃうねー。」

ふと、思い出してしまった。

何で思い出したのかは考えたくはないが。  
先日、保健室で。  
保健医も同じような事言ってたな。

「椎名さんとも高校離れちゃうねー。」

おいおい。関くん。

明らかにワザと言ってるだろう。それ。

「あ、先のことよりも今。まず今だねー。早くしないと誰かさんに取られちゃうよー。」

なるべく無表情で着替えた。

やはり動きを止めた体は冷え始めていた。

「ここ、べつに。って言うところじゃないの??ん?ん?」

やっぱり。

何か企んでいるな。関くん。

そういえば、誕生日の日、関くんの策略にハマって  
体育館まで全力疾走したよな。

「ふーん。いいけどねー、別に。」

俺が話に乗ってこないとわかってか  
関君も自分の着替えを始めた

「でも知らないよー、椎名さんてああ見えてけっこうモテるんだから。少なくとも、オレの知る限りでは3人!」

おいおい。

着替え始めたんじゃないかったのかよ。

おいおい。

三人つて……

その話……

北山、ヒロアキ、芳沢……もか？

祐也もか。

あ、俺もか。

関君が何を企んでいるのかはわからないが。

関君はいつたどこまで知っているのか……

あいつを好きだという奴がいるのは知っている。

前回体育館で、関くんに「好きになっちゃえばいいのに」とか言われたな。

あの時は……

あいつとはかかわらないと決めていた。

あいつといると、大事な事を忘れてしまうから。

絵を描くこと。

ばあちゃんを悲しませること。

家族で俺の立場が悪くなること。

でも……

あいつのことが好きだと気付いてしまった。

認めてしまえば次に進めた。

それでいいじゃないか。

関君が思う通りになつたじゃないか。

でも……

俺があいつのことを好きだとしても

俺がM校を受けることには変わらないんだ

M校に受かって

亘兄の受からなかったM校に受かって

「まだ絵を描いてたのか」そう言った勝兄のことも  
教師になつてばあちゃん孝行をする勝兄のことも

越えたい

そう思っている

だから・・・

そのためには・・・

俺がM校に受かるためには・・・

やっぱりあいつとはかかわらない方がいいのかもしれない  
そう思った。

俺があいつのことを好きでも

あいつが俺のことを好きだとしても

両方は無理なんだ。

わかつている。

M校に受かること

あいつを好きでいること

ただ、それだけのこと。

9 .

中間試験の結果が出た。

相変わらず一位を独占し続けているのは松岡聡一。

タケは三位に入った。  
俺は四位。

なんとか元に戻せたってところか。  
これでM校受験を担任に切り出せるか。  
来週、いよいよ三者面談。  
あの父親と。

掲示板に群がる人ごみの中に  
あいつの後姿を見つけた  
今日は一つに縛っているのか。

最近あいつの雰囲気が変わった  
肩に付いた髪を結ぶようになって  
二つに結ぶ日もあれば  
一つの日もある  
かと思えば、結んでいない日もある

べつに椎名萌が髪を縛ろうが縛らなくても  
俺には関係がないのだけれど  
そう・・・

関係はないが  
気にはなる

あいつのことは気になるんだ。

でも・・・  
両方は無理なんだ  
俺にはやらなければいけないことがある  
忘れていた大事な事

だからおまえのことは・・・

そう、頭ではわかつているのに

理屈は理解しているのに

体が・・・

手が・・・

あいつに向かっている

あいつに触れたくなる

あいつに・・・

手を伸ばしてしまうんだ

首に手をかけようとしたが、

一つに結んだ髪が首筋をきれいに見せていた

だからその髪をひっぱってみた

「わっ！・・・誰？」

振り向いた。

髪を縛っていると顔が良く見える。

「あきちゃん・・・やめてよー、ほどけちゃうでしょ。」

緩んだ結び目を直そうと両手を後ろに回すその仕草を見るのも初めてだった。

そしてその顔。

顎のラインがくつきり見えて。

すつきりした様に見えたのは気のせいだろうか。

少し痩せたのか？

「あーあきちゃん見たよー。すごいね。」

急に顔中に笑みが広がった。

最近見ていた表情の中で一番良い表情をしていると思った。

「やっぱあきちゃんが描くのは違うね。」

え？

描く？何を言ってるんだ？

成績のことじゃないのか？

「次元が違うっていうのかな、空間が深いっていうか・・・」

「何のことだ？」

「あれ？もしかして見てないの？」

「何を？」

「あきちゃんの絵。」

「は？」

思わず口に出してしまった。

いつもなら呑み込む台詞を。

「美術室の前だよ。見てないの？」

「見てない。」

美術室？

俺の絵？

何のことだ？

「私ね、あきちゃんの空の絵、感動した。」

おいおい。



その顔で言うなよ

おいおい。

その台詞で言うなよ

思い出してしまうだろ

忘れていたこと

忘れなきゃいけないこと

忘れなきゃならなかったこと

あのコンクールのことを

あの転入生のことを

空の絵。

小四の時描いた絵で賞をとった

中二の写生大会で描いた絵が入選した

中三の選択授業で描いた絵が選ばれた

それだけのことなのに・・・

「あれ？晃君次教室だよ？」

健太に呼び止められたが

そのまま進んだ。

今は進まなければならない気がした。

この目で・・・

確かめたかった

あいつの笑顔。

あいつの言葉。

その答えを・・・

適当に描くつもりだったのに  
適当にかけなかった絵

居残りまでして仕上げたのは

選択授業の単なる絵

選択授業は成績評価に関係無し

関係ないのに・・・

適当が出来なかった俺。

夏休みに描いていた絵

夏が終わって・・・

勝兄に絵を描いていたことが知られて

夏は終わった。

秋になつて

忘れていた大事なことに気づいて

あいつから離れて・・・

そんな時期に仕上げた絵

少し歪んだ空の絵。

美術室の前で足を止めた。

時間割の中に一コマだけ。

週に一度だけある美術の授業。

それはあいつも同じなのに。

わざわざこんな校舎の一番隅にある美術室まで  
来たのか

偶々。

偶然だろう。

見に来るわけがない。

こんなところに。

誰も気づかない場所。

誰にも気づかれない掲示板。

誰も頼んでいないのに。

勝手に先生が貼ったのだろう。

誰も気づいていないのに

誰にも気づかれていなかっただろうに

あいつは・・・

あいつだけは・・・

俺の絵を見ている

昼休みだった。

職員室の前を通り過ぎたところで視線を感じた。

「その男子ー。」

俺か？

周りを見渡したが他に誰もいない。

「君だよ、キミ。」

俺か？

やっぱり俺なのか？

「カムカムー。」

手招きをされた。

招かれた先は・・・

職員室の隣の・・・

保健室。

まさにあの保健医。

「穂高って、あの穂高の弟君だったのね。」

“あの”というのはどっちのことだか。

県大会記録保持者の勝兄のことか

成績優秀者の亘兄のことか

どっちでもいいけど。

どっちでも同じだけど。

どうせ、兄達が凄いと言っのだろう。

保健室に呼び止めて。

昼休みに・・・

貴重な休み時間に・・・

こんな保健医から・・・

その優秀な兄達の弟なのだからと

その優秀な兄達の弟なのにと

言っのだろう。

もう聞き飽きたよ。その話は。

「お兄さんここの常連客だったのよ。」

「よく体育の授業で怪我してねー。」

は？

何の話を始めたんだ？

この保健医は。

「スポーツに対して変なプライドかけてた子でね、頑張り過ぎて力が入りすぎちゃうから怪我するのよね。」

「その上にお堅い頭でさ、勉強でも一位とらなきゃって根詰めてたタイプ。」

思い出し笑いをしながら話す保健医。

一位・・・

亘兄のことを言ってるのか？

「なんでそんなに一位に拘るのか聞いたの。そしたらさー。」

「なんでも優秀なお兄さんがいるとかで。その人を越えるんだって。」

亘兄のことだ。

保健室に通っていたことも

勝兄を越えたいと思っていたことも  
知らなかった。

「この間あんたが来た時に、どっかで見たことある顔だとは思っただけど。」

「その顔、同じね。人に知られないように、悟られないように、自分の感情を抑えて。あんたのお兄さんとそっくり。」

似ていると言われるのは心外だった。  
だから顔に出してしまったのだろう。

思わず。

「その顔。あんたもお兄さんを越えたいって思ってるの？」

ひどく気分が悪くなった。

体調ではなく、気持ちだ。

この場から去りたかった。

「そうやってすぐに逃げ出すところもお兄さんとそっくり。」

床を蹴り上げた足を踏みとどめた。

似ていると言われるのが心外だった。

だから似せないことが必要だった。

保健室から出ることは簡単だったが……

「で？あんたは何と戦うの？」

心理戦に負けたのは俺。

勝ったのは保健医。

始めから勝負は決まっていたのかもしれない。

先日、この保健医に会って。

もうここへは来たくないと思っていたのに。

足を踏み入れてしまった俺の負け。

「上のお兄さんにはスポーツで敵わないから、真ん中のお兄さんには勉強で敵わないから、そうやって理由を付けるのは簡単だけど。」

「いつまでも甘ったれてないで、あんたはあんたの生き方を見つけ

なさいよ。自分にしか出来ないこと。」

そう言うのと保健医は俺から視線を外した。  
そして何事も無かったかのように、保健日誌を書き始めた。  
もう帰っていいわよ。  
そんな合図だった。

変な保健医。

この間も変わっていると思った。

教師とは思えない言動。

一人で勝手に喋り続けて

一人で勝手に終わる。

かわりたくないと思った。

なのに・・・

あいつも同じ。

変な女で

一人で勝手に喋って。

うるさい女。

かわりたくないと思った。

なのに・・・

保健医も椎名萌も・・・

兄達の事を・・・

知っていて

知っているのに・・・

誉め讃えることはしなかった。

スポーツ万能の勝兄

成績優秀者の亘兄

俺は・・・

教師になるという勝兄

医者になるという亘兄

俺は・・・

M校を受ける

それだけか？

M校に受かる

それだけか？

俺は・・・

俺は・・・

M校を受けて

M校に受かって

どうするつもりだったのだろう

M校を受けて

M校に受かって

亘兄の受からなかったM校に受かって

どうするつもりだったのだろう

亘兄の受からなかったM校で高校生活を送って・・・

その後は・・・

どうするつもりだったのだろう

亘兄の受からなかったM校で高校生活を送って

次は亘兄より上の大学を目指すのか？

次は・・・



亘兄より上の大学に合格して  
次は・・・

亘兄より優秀な医者になるのか？

亘兄より優秀な医者になって・・・

次は・・・

その次は・・・？

そうやって俺はどこまで兄を追い続けられ  
そうやって俺はいつまで兄を追い続けなければならない

いったいどこまで・・・

いったいいつまで・・・

わかっていたことではないか。

勝兄は教師になる。

亘兄は医者になる。

社会に出れば一人の大人として、社会人として、  
一人。

そう、一人だ。

一人の教師として

一人の医師として

別々の道を歩む

別々の道を進む

どっちが走るのが速いか  
どっちが上の大学だとか  
そんなの無くなる

兄弟でどつちが上とか下とか  
兄弟で越えるとか見返すとか  
そんなの無くなる

そんなの無くなる  
そんなの無くなるんだよ

それなのに・・・

俺は・・・

俺が進もうとしている道は・・・

「あきちゃん？」

目の前にあいつの顔があつた。

「帰らないの？」

辺りを見回すと教室に残っているのは数人だった。

「体調悪いの？」

前の席の椅子に座って俺の顔を覗き込んでいた。  
椎名萌に表情を読まれるだなんて。

ありえない。  
在り得ない。

「いや、帰る。」

昼休み、保健室から教室に戻って・・・

一時間授業を受けて。

掃除にHR。

いったいどうやって過ごしていたのか覚えていない。

長い間一人でいた気分だった。

「おまえは？帰らないのか？」

「委員会の仕事が残ってるの。四組覗いたらあきちゃん居たから、寄り道しちゃった。」

そついうと笑顔を見せた。

椎名萌とは同じクラスになったことは無いから

当然、教室でこんな風に前後の席で座ることも無かった

席替えて、クラスの女子が隣になることも、前後になることも当たり前のことだったが。

椎名萌が目の前に座っているというのは

なんだか不思議な感じがした。

「じゃあ行くね。」

そつ言つて席を立ち

俺の横を通るあいつが

俺の横を通り過ぎるのが

まるでスロー再生をしているかのように

ゆっくり流れる絵に見えた

だから思わず手を出してしまったんだ。

「なあに？」

掴んだのは左腕だった  
振り返ったのはあいつの顔

なんだ。

何なんだ。

この感情。

どうしたんだ、俺。

「あきちゃん？」

気になるという感情も  
好きという感情も  
こいつが教えてくれた

じゃあこの感情は何だ？

何なんだ、これ。

どうしたんだ、俺。

「何でもない。」

そう言っ て手を離れた。

「変なあきちゃん。じゃあ、また明日。」

変といわれたことよりも、

また明日という言葉が耳に残った。

いつものこと。

そう、いつものことじゃないか。

朝はあいつのおはようから始まって  
帰りはあいつのばいばいで終わる

いつの間にか、学校生活の始まりと終わりにあいつがいて  
それが当たり前で  
それが当たり前になっ  
ていて  
気がづけば・・・

あいつの存在がどんどん大きくなっていた。

今日も一日が長く感じた。

そんな日は、決まって何か起こる日。

もう最近はそんなこと尽くしで慣れてきたが。

ニアミス。

珍しく帰宅時間が一緒になってしまった。

亘兄と。

ふと、今日保健医から聞いた亘兄の事を思い出してしまった。

「おまえ、本気でM校受ける気あんのか？」

もちろん目線は合わせない。

相手がどう出てくるか次第で返事も決まる。

「俺は先に行くぜ。おまえになんか構ってる暇ねーからな。」

俺の返事がイエスかノーか  
それを聞きたかった訳では  
それが聞きたい訳ではないらしい。

高校三年の秋。

大学受験に向けて勉強の真っ只中だろう。

中学三年の秋。

高校受験・・・はまだ志望校を決める段階。

「おかえりー。」

居間からばあちゃんの声が聞こえた。

巨兄は先に階段へと向かっていた。

俺は居間に顔を出した。

「あ、晁。焼きまんじゅうあるんよ。おいしーで。」

ばあちゃんはお茶を煎れているところだった。

穂のかな香りのする緑茶。

つい先月までは秋といえど、夏のように暑かったので  
麦茶を飲んでいたのに。

十月も終わりとなると、熱い緑茶が美味しく感じる。

「食べながら聞кинしゃいね。」

そういうと、ばあちゃんが話し始めた。

まるでこの為にお茶菓子を用意されていたかのように。

「巨が志望大学を決めたそうだな、なんでも千葉の方にある大学へ  
行きたいそうな。」

ふーん。千葉か。

通えない範囲じゃないか。

「それでな、東京の郊外におまえの母さんの実家があるんよ。」

へー。そんなの初耳だな。

でもなるべく表情を変えないで聞いていた。

「亘に向こうのばあちゃんちに下宿させてもらう話をしたんだがね、

「何でも自分一人で生活したいとな。断ったんよ。」

亘兄らしいな。

正直、そう思った。

「疎遠になつとるが、あちらさんもずいぶん心配して下さつてのー、

「晃の絵の話したらぜひ一度遊びに来ないかって仰つての。」

ぶほつ。

おいおい。

お茶で咽たぞ。

「母さんと同じ、晃が絵を描くことそれは喜んでくれるのー、」

「なんでも近くに美大の付属高校があるらしくてな、」

おいおい。

ばあちゃん。

いったいどうしたんだ？

「晃にまだ絵を描く気持ちが残っているなら、ばあちゃんはな・・・

」

おいおい、  
ばあちゃん、  
どうした、どうした。

「晃は昔から何も言わないが、そんな風に育ててしまって・・・」  
「ばあちゃんな、申し訳ないと思っとんよ。」

「そんなことないよ。」

そう言うのが精一杯だった。  
どうしようかと思った。

この場を、どうしようかと思った。  
止めることもできただろう。  
交わすこともできただろう。  
適当に。

受け流すこともできただろう。

でも・・・

ばあちゃんの目に涙が浮かんでいたから  
ばあちゃんが悲しむ姿を見てしまったから  
また、ばあちゃんが絵のことで

俺が絵を描くことではあちゃんを悲しませてしまったから・・・

「勝が帰ってくるのはな、自分と戦った結果なんよ。」  
「教師になると決めたのも、よー自分と戦って決めた結果なんよ。」

急に勝兄の話が始まった。  
あれ。



「亘が一人で生活すると決めたのも、自分と向き合った結果なんよ。」  
「もし大学受験に失敗しても、千葉で一人暮らししながら頑張りたいんで。」

おいおい。

今度は亘兄の話・・・

ばあちゃん？どうした？

「勝は自分の体力の限界と戦って、亘は自分のプライドと戦ってるんよ。」

「晃は何と戦ってるんじゃない？」

ばあちゃんを悲しませたのは俺。

俺が絵を描くことではあちゃんが・・・

あれ、

あれ？

なんだ？

何なんだ？

ばあちゃんが言っているのはそういうことではない。

ばあちゃんが悲しい顔をしているのはそういうことではない。

そう。

そうだろう。

目の前で話すばあちゃんが・・・

俺を見ている。

俺は・・・

どうしようかと思った。

この場を、どうしようかと思った。

止めることもできただろう。

交わすこともできただろう。

適当に。

受け流すこともできただろう。

でも・・・

俺は・・・

逃げる訳にはいかない。

もう・・・

こんなところまで来ていたのか。

もう・・・

いつの間にか来ていたのか。

夏が終わって

秋の始めに勝兄が帰ってきて

そこから既に始まっていたのかもしれない

教師になると言った勝兄。

中学生で県大会記録保持者。

高校ではタイムが伸び悩んだそう。

自分の輝かしい記録と戦う気持ちって一体どんな苦勞があった  
だろうか

東北の有名な大学へスポーツ推薦で特待生入学。

さらに押し掛かる周囲からの期待とプレッシャー。

輝かしい記録と、有名な大学のネームバリュー。

そんな中で過ごしている勝兄の苦惱。

考えたこともなかった。

医師になると言った亘兄。

中学に入り、すぐに勝兄の弟と注目を浴びせられたことだろう。

あの勝兄の弟なのだから

あの勝兄の弟なのにと。

勝兄というスポーツ万能な兄をもった苦労。

スポーツがあまり得意ではない亘兄。

だから勉強を頑張るしかなかったのだろう。

一位でなければならなかったのだろう。

兄にスポーツで敵わないのなら、勉強で兄を越えようとしたのだらう。

一位を取る苦労、一位を取ってからの苦労、一位で在り続けることの苦労。

そして、M校合格への期待とプレッシャー！。

考えたこともなかった。

二人とも常に自分と戦ってたんだ。

いつまで？

どこまで？

見えないゴール。

見えたのは、目標が出来た時だろう。

教師という職業。

医者という職業。

社会人という具体的な自分を目標に掲げた時、解放されたのかも  
しれない。

自分との戦いから。

いつまで追い続ければ

どこまで追いかけ続ければ・・・

いつまで追い続けても  
どこまで追いかけて続けても・・・

やがて別々の岐を進むのだ。

社会に出れば

兄弟で上も下もない。

社会に出てしまえば

兄弟を越えるとか見返すとかそんなのは必要ない。

亘兄がさっき言っていた。

「俺は先に行く。」と。

兄の栄光の下、やっと自分の進むべき道を見つけたのだろう。

自分との戦いが終わり、次の戦いへと進むのだろう。

それに気づいたから。

そのことに気づいた者にしか分からない。

勝兄と亘兄が、

俺にも早く気付けよと知らせてくれたのかもしれない。

そうか。

そうなのか。

そうなのかもしれないな。

ふーっと

大きく一つ息を吐いた。

「ばあちゃん、俺絵を描きたい。絵を描くのが好きだよ。」

「そうかい、そうかい。」

ばあちゃんは涙を流した。

ばあちゃんは笑っていた。

ばあちゃんを悲しませたのは俺。

ばあちゃんを喜ばせたのは俺。

ばあちゃんを悲しませたのは俺だった。

絵を描くことがばあちゃんを悲しませていたのではなかった。  
ばあちゃんを悲しませていたのは俺自身だった。

小四の時に賞をとった絵。

その絵がばあちゃんを悲しませた。

絵を描くことはばあちゃんを悲しませる。

そう思い込んでしまうのも仕方がない。

まだ小学生の俺。

絵を描く描かないではない。

ばあちゃんに対して俺の態度が変わってしまったのだろう。

いつからか・・・

いつの間にか・・・

物心ついたときから母親がいなくて

物心ついたときから兄達から嫌われていて

子供心に他の家と自分の家は違うことに気がついて

自分の立場を悟った

何かを期待するから裏切られる

何かを望むから失望がある

だったら最初から期待しなければいい  
だったら最初から望まなければいい

小五で転入生が来ると言った。

コンクールの時絵を誉めてくれた女の子。

でも転入生は男だった。

翌年も転入生は来なかった。

期待するから裏切られる

望を持つから失望する

そうやって俺は・・・

周りに対する程良い距離感を掴んでいった。

うまくやっているつもりだった。

うまく立ち回ってきたつもりだった。

でも・・・

ばあちゃんに対してもいつの間にか安全な距離を保っていた。

うまく付き合っているつもりだった。

うまく立ち回ってきたつもりだった。

それが・・・

ばあちゃんにとって一番悲しい事だとも気づかずに。

絵を描くことがばあちゃんを悲しませていたのではなかった。

ばあちゃんを悲しませていたのは俺が変わってしまったから。

そんな大事なことに今更気づくだなんて。

絵と向き合えなかった自分。

絵と向き合ってこなかった自分。

ばあちゃんと向き合ってこなかった自分に。

もう十分だろう。

母親のことも  
兄達のことも  
変えられない事実。

事実ならそこから逃げずに  
変えられないなら変わればいいじゃないか  
自分で。  
自分が。

そうだろう。  
ただ、それだけのこと。

10 .

「晃、待たせたな。」

十一月に入って最初の日曜日。  
塾帰りのタケに時間をもらった。

「悪いな、疲れてるとこ。」  
「何言ってるんだよー。晃ここんとこ俺んち控えてただろー。気ー使  
い過ぎだっつーの。」

午前から塾に缶詰状態だっただろう。  
やっと開放されて疲れが溜まっているであろうに、タケは笑顔で  
やって来た。

「ここじゃ何だからどつか入ろうぜ。あー、腹減ったー。」  
「ああ。」

俺達はタケの塾から近いファーストフード店に入った。  
塾と勉強のストレスからか、タケの注文商品は多かった。  
そういえば、秋になってタケがふつくらしてきた。  
元々ぽっちゃり系だったが。

「オレに話しあんだろ？」

Ｌサイズのポテトを口へ運びながらタケが言った。  
さすが。

俺が何も言わなくてもわかってくれている。

タケは俺の変化に気付いていたけれど  
何も聞こうとはしなかった

俺の口から話されることを、ただ待っていてくれた。

だから今日は話す。  
一番に、タケに伝える。

二学期が始まって  
勝兄が一時帰省をし  
絵を描いていたことが家族にバレた。  
おまけに成績を落として、自分も見失いかけた。  
椎名萌とかかわってからだと、あいつのせいにした。  
だから椎名萌とかかわることを辞めた。

目標が持てない俺の存在は、二番目の兄に不快感を与えていた。  
俺はこれまで築いてきた自分の感情が歪み始めていたことに気づくのが遅かった。



父さんと亘兄の前でM校受験を宣言した。

全てをM校受験の為に捧げるつもりだった。  
でも、受験勉強どころか授業にも集中できず  
小さな苛々が積み重なってもう自分では抑えきれない程にまで膨  
らんでいたことに気づかなかった。

爆発させて気づいた。

椎名萌のことが好きだったこと。

兄貴達が戦っていたもの

ばあちゃんが抱えていた想い

そして・・・

ようやく自分自身と向き合えたこと

「そっか、良かったじゃん。」

俺が話している間にタケは注文した商品全てを食べ終え、  
最後に一気にジュースを飲み干した。

「晃ともうずいぶん長い間話してなかった気がする。」

「なんだよそれ。」

俺は注文したコーラを一口飲んだ。

タケは紙ナプキンで食事を終えた口元を拭いていた。

「一年のとき、初めて晃が話しかけてきた時、あれ以来かな・・・」  
「おいおい。」

「まっ、それは冗談として。いや、あながち冗談でもないんだけど。」

「タケ・・・」

「だって晃全然家のこととか話してくれなかったじゃん。出身校違

うからさ、オレ健太とかに聞いたりしてたんよ。」

「それでなんとなく、訳アリなんだろうなーとは思っていたけど。まあ、いつか話してくれるだろうと思ってたら、三年の秋かよ。みたいなの。」

食事を摂って満足したからか

さっきまでの塾の疲れが吹き飛んだ表情をしているタケ

「でも良かったな。うん、うん。俺も良かった。晃の絵、俺好きだからさ。また見れると思うと。」

おいおい。

どっかで聞いた台詞だな。

ああ。

あいつが・・・

「あいつさ、最近髪型違うじゃん。」

「ん？椎名か？」

「髪縛ってたり縛ってなかったり。」

「・・・そうか？気づかなかった。あいつ元々縛ってなかったか？」

「夏ん時は縛ってなかった。」

「そうだったか。覚えてねーな。」

タケは椎名萌を見ていなかったってことが。

タケは椎名萌を気にはならなかったってことが。

そんなことを思った。

「俺、元々あいつとはかかわりたくねーと思ってたのに。うるさいし、にののフンだし。」

「あははー、にののフンだな、確かに。」

「なのに、髪縛ったり縛ってなかったり。うるさかったのに、うるさくなくなったり。無駄に元気で馬鹿みたいに笑っていたのに、泣きましたって顔しやがってさ。」

「へー。」

「いったいなんなんだあいつは。」

「ブハッ！」

タケが嘖き出して笑っていた。

俺の方を見て、悪い悪いと合図をしてきたが、笑いは止まらないようだった。

「晃からそんな風に思われてる椎名って・・・やばい、笑いのツボにハマッたー。」

一年の頃からタケに辞書だの教科書だのを借りに来ていた女。そいつの後姿をタケがいつも見ていたから・・・

俺はてつきりタケは椎名萌が好きなのだと思っていた。

でも、タケと過ごす時間が増す毎に違うのだと気づいた。

気になるとか、好きという感情をあいつから教わって。

俺も気付いた。

タケはそうゆうのではなく、異性とかではなく、人として椎名萌のことが好きなのだろうと。

「俺、椎名のこと好きだって認めた。」

さっきまで遠慮なく笑っていたタケの表情から

一瞬笑みが消え・・・

「知ってたよ。」

タケの、歳に合わない表情を見た。  
大人びたというか、少しハニカム感じの笑顔。  
初めて見る表情が印象に残った。

それから俺達はいつものように他愛もない話をして別れた。

帰り道。

見上げた空は夕日色。

オレンジが茶色がかっていて。

秋の終わりを告げるかのように。

冬の始まりが近づいていること知らせていた。

中学に入ってから三度目の秋。

タケと初めて話したのも秋だった。

今日タケが言っていたつけ。

もうずいぶん長い間話してなかった気がする。

一年の秋、初めて本音で話せる友達に会った。

共通の趣味、共感できる芸術感覚。

家庭環境から、自分のやりたい道をあきらめなければならぬ境遇。

でも、本音で話せたのも絵のことまでだったのかもしれない。

家庭環境や境遇は似ていただけで、本来全く別物だった。

そのことに気づいてしまったから。

絵の事は話せても、母親の事、兄貴達の事は話せなかった。

だから、タケが言ったこともあながち冗談ではないだろう。

全てを話せるまでに丸二年もかかったのだから。

タケにしか・・・話せない。  
タケにしか、話せなかったよ。  
タケに、話せて良かった。  
ただ、それだけのこと。

翌朝は月曜日。

また一週間が始まる。

「あきちゃん、おはよう。」

いつも通りの朝。

そう、いつも通り。

あいつの挨拶で始まる学校。

そしてその横には・・・

芳沢。

椎名萌のことを好きだと認めたから  
見えてくるものがある

相変わらず無駄に笑顔で元気なうるさい女。  
それに応える芳沢。

その対応から、丁寧さと親切さと・・・

ああ、ほら。

見えてくる。

芳沢が椎名萌を想う気持ちが。

べつに。

特に俺には関係のないことなのだけど。  
そう、関係が無いと思っていただけ。  
気になるし、好きなのだから仕方のないことなのだけど。  
なんか変につつかかるんだよな。  
曖昧というか、あやふやというか、苛々とは違うんだか違和感  
を感じるこの気持ち。  
これ、なんだっけ？

一時間目が終わり、二時間目は移動教室。  
月曜日の時間をいつも通りにこなすだけ。  
移動教室への経路も同じ。  
いつもの廊下。  
すれ違う生徒達。  
その中に・・・  
ほら、いつも通り。  
あいつもいる。

そして、いつも通り。  
一人で喋っている二宮。  
距離が離れていても聞こえてくる二宮の声。  
その後ろ。  
二宮の金魚のフン。  
ほら、いる。

徐々に距離が詰まってきた。  
あいつの顔が・・・  
見える。  
だが下を向いていた。  
二宮の話に賛同することもなく。

ただ、一人、俯いていた。

また泣いたのか？

どんな表情をしているのか・・・  
振り向かせたくなる。

気づかせたくなる。

俺とすれ違うこと。

俺が居ることを。

「あつきらくーん、チャーオー！」

いつも通り、二宮のふざけた挨拶。

すれ違うだけなのに、無駄に明るくて元気印な奴。  
この明るさに救われる奴もいるだろうが。

二宮の声でようやく気がついたか、  
顔を上げた椎名萌と目が合った。

今日は髪を縛っていなかった。

肩まで付いたミディアムヘア・・・とすれ違う。

縛っていなかったたので髪を引っ張ることが出来ず、

軽く額を叩いてやった。

叩く・・・といよりは

俺が触れたかったのだろう。

あいつに。

俺が触りたかったのだろう。

あいつの髪に。

昼休み。

タケを訪ねて五組で過ごしていた。

椎名萌のいる五組。

毎日が祭りモードの二宮のいる五組。  
相変わらずの昼休みだった。

そこへ響く奇妙な声・・・

「ひゃあああー @ @ @」

聞き覚えのある声と現象。

タケと話しながら横目で見ると

北山が椎名萌の首をくすぐっていた。

以前やっていた俺が言うのもなんだが。

椎名萌の弱点でもある首。

懲りない奴。

両者共にな。

こうして客観的に見てみると  
より分かり易い。

「クククツ・・・。」

横のタケが小声で笑ったので俺は視線を戻した。

「キタも懲りないねー。マジですかねー。」

タケの言いたいことはわかった。

北山が椎名萌を好きだと知ったのは夏前から。



だから今更・・・

べつに・・・

どうだっていいのだけれど。

それにほら。

いつも通りの光景。

好きな女を困らせて楽しむ幼稚な男子。

そうすることではか好意を伝える手段がわからない幼稚な男子。

そしてそれを庇うのが二宮。

困った時に二宮に助けを求める椎名萌。

いつもの絵図。

五組らしい昼休み。

ただ、それだけのこと。

11.

十一月上旬。

いよいよ、三者面談の日となった。

約束の時間5分前に父親がやって来た。

前の面談者が終わるまで、廊下の待機椅子に座った。

学校で、こうして父親と会うのは初めてではないか。

中学は授業参観が無かった。

入学式はあちゃんが来てたつけ。  
学校行事の体育祭も合唱コンクールも来たい保護者だけが来ていた。

小学生のように、誰の父さんだとか、母さんだとか、そんなのに関心が無くなるのが中学生でもある。

逆に、両親揃って行事を見に来ていたら、その生徒が恥ずかしい思いをする位。

そういう年頃。

だから母親がいなくても、父親がいなくても、  
中学では俺には関係がなかった。

「ご苦労様です。」

「晃がお世話になっております。」

そんな会話から三者面談が始まった。

「晃君は成績も良く問題行動も無い真面目な生徒です。優秀なお兄さん達と同じ位。」

でた。

余計な一言。

誉め言葉と勘違いして使っているのだろうかと突っ込みたくなる。

「そうですか。」

父親がハンカチを取り出した。  
十一月なのに額に薄っすらと汗をかいていた。  
父親なりに緊張しているのか。

「ご家庭では何か学校のことについて晃君から相談はありますか？」

おいおい。

お世辞の後はお決まりの家庭での様子かよ。  
マニユアル通りな担任だな。

「お恥ずかしい話ですが、私は仕事でほとんど家におりませんので  
晃の祖母から学校のことは聞いております。」

おいおい。

そんな余計な話はいらねーよ。

「あ、お父さん確かご出張が多いと聞いておりました。失礼しまし  
た。」

おいおい。

だから言っただろ。

余計な話の展開は気まずさ全開になるだけだつて。  
家庭の事情は事前に把握しておけよ、担任。

「えー、では、進路希望調査では第一志望をK校とされていますが、  
その後お変わりはありますか？」

きたきた。

やっと本題。

「その事ですが、晃と祖母と十分に話し合った結果・・・」

先月までの俺は、この場でM校受験を切り出そうとしていた。  
県内有名の進学校、M校。

亘兄が受験に失敗したM校。

「晃の意思を尊重して、東京の私立高校を受験します。」  
「えっ?!」

おいおい。

そんなお決まりに驚かなくても。

まあ、三年になって二回提出した進路希望調査にはそんなこと書いてなかったからな。

驚くのも無理ないか。

「S美大の付属高校を第一志望校に。第二志望校は県内のK校を考えています。」

今度は俺の口から伝えた。

M校の名前を伝えるのではなく。

「そうだったのか、穂高。先生は驚いたぞ。」

「ご迷惑をおかけするかもしれませんが、すみません。」

なぜそこで父親が謝る？

相変わらずハンカチで額を押さえている。

「県外の私立高校となると受験日程も異なりますし、美術という専門の学科は私詳しくないので、今度美術の先生にアドバイスをお願いしておきます。」

「お世話かけます。」

「いえいえ、晃君の力になれるよう、情報収集に努めさせて頂きます。」

「お願いします。」

中学三年間、特に目立つた行動も起こさなければ  
良い意味でも悪い意味でも地味な生徒で。

印象に残らせないようしてきたのは俺自身だけど。

そんな無難でどちらかと言えば受け持っていて楽な生徒が  
急に進路を変更した。

しかも、普通科の高校ではなく専門科の高校。

おまけに県外。東京。

田舎の中学からしたら驚きな話だろうに。

ひよっとすると、M校受験を宣言するよりも驚かせたかもしれな  
いな。

「県内の高校、K校に関しては晃君の成績でしたら十分受験可能と  
思われます。」

「ありがとうございます。」

そんな会話で三者面談は締められた。

あつという間の二十分間が終わった。

進路を決める二十分間。

進路が決まる二十分間。

それぞれの生徒の

それぞれの家庭の

成績と進路。

「父さん明日から大阪だから今晚発つ。」

「うん。」

「晃も高校生か・・・早いな。冬休みに入ったら、一度母さんの実  
家へ行っておいで。」

「うん。」

来賓者玄関口で父親と別れた。

同じ時間に面談だったのだろう、

他のクラスの女子が母親と一緒に帰宅するところだった。腕を組んで仲の良い親子関係を象徴していた。

それぞれの家庭の

それぞれの生徒の

進路相談。

ふいに、タケの家は大丈夫だろうかと心配になった。

父親が来るのか、あの母親が来るのか。

タケは第一志望校をM校にしたのか・・・？

タケのやりたい事と、親に決められた進路。

両方は無理なのだ。

自由に出来るのは高校までだと言っていた。

両立・・・か。

M校受験と絵の勉強。

高校生活と趣味で続ける絵。

俺にも両方は無理だった。

そう、両方は・・・

あいつのこと。

M校受験を決めていた時期、あいつのことにも気になっていて。

かわるのを辞めたけど

離れようと決めたけど

駄目だった。

絵の事も兄貴達の事もあいつの事も  
かわるのを辞めればそれで済むと思っていた。  
それで終われると思っていた。

でも違った。

そこに終わりは無く、  
離れようと避ければ避ける程  
どんどん悪い方向に進むだけだった。

認めることで次に進むことが出来た。  
認めてしまえば次に進むことは出来た。  
でも・・・

次に進む道にはあいつはいない。

絵を描くことはあいつと離れることになる。  
俺がS美大付属校の受験に合格すれば・・・  
あいつとは離れることになる。

あいつは泣くだろうか？  
あいつを泣かせてしまっただろうか？

あいつを泣かせるとわかっていて、  
このまま卒業までの時間を過ごすのか？  
だったら今のうちに・・・

あいつとは・・・  
あいつの為にも・・・  
やっぱりかわらない方がいいのかもしれない。

「三番目のほっだくーん。」

一番奥の美術室へ寄ろうと思って  
職員室の前を通ると

その隣の保健室から奇妙な声が聞こえた。

「あれが穂高父か。渋いねー。」

できれば聞き流したかった。  
できることなら無視したかった。

「穂高父、何やってる人？」

職員室の前の廊下といえは当然ながら静かな場所。  
そこに響き渡る保健医の声。

絶対に止めたかった。

止めるためには仕方なく保健室に入るしかなかった。

「普通のサラリーマンですけど。」

入ってきた俺に満足そうな保健医。

更に質問に答えた俺に嬉しそうに笑顔を向ける保健医。  
うざい。帰りたい。

「普通のつていうのが引つかかるー。」

「出張の多い大きな企業のサラリーマンです。」

半ばやけくそ状態で答えた。

この保健医に適当な返事は通用しないと知っているから。



「わお！大企業！さっすが穂高父ね！」

校庭に面した一階の保健室の窓からは  
オレンジ色の夕焼け空が見えた。

サッカー部に陸上部、野球部とここからはグラウンドが見渡せる。  
運動部に怪我はつきもの。

グラウンドからすぐに上がってこれるようと、保健室には外階段もあつた。

体育館競技のバレー部。

擦り傷切り傷程度なら、救急箱で対応していた。

保健室とは無縁だった俺。

いや、無縁で良かった。

こんな保健医のいる保健室にお世話にならずに良かった……。

「父は大企業勤務、兄は体育教師と……医学部だったか？」

おいおい。

なぜに保健医が知っている。

いったいどっからの情報だよ。

「で？三番目君は決めたの？進路。」

「はい。」

「ふーん。」

そこは聞いてこないのですか。  
興味なしですか？

「あんた好きな子いるでしょ？」  
「は？」

おいおい、思わず声に出たさ。  
なんでいきなりそんな話し・・・  
ってか、俺の進路は？  
進路の話はどうでもいいのか？

「はい、当たり前ー！」

おいおい。

だからなんだだよ。

この保健医は普通の会話できねーのか？

「認めちゃえば案外納得のいくことばかりで自分が好きになれるわよ。」

おいおい、だから何で・・・  
って、終わりかよ。

前回と同じ。

この保健医は自分の言いたい事が終わると  
忙しそうに仕事をしてみせる。  
もう、帰っていいわよという合図。

まったく調子の狂う。  
毎回毎回思うけど  
こんな教師、いいのか？  
こんな保健医でいいのか？

勝手に一人で喋って。  
勝手に一人で盛り上がって。

勝手に一人で終わる。

やっぱりあいつと似ている。

俺が無視できないのも

俺の調子を狂すのも

あいつの存在なんだ。

美術室は鍵が掛けられていた。

珍しいな。

もうそんな時間なのかと時計を見ると5時を過ぎていた。  
図書室ならまだ開いているかとUターンすると

「あれ、あきちゃん。」

会ってしまった。

椎名萌と。

「帰らないのか？」

三者面談の話を出されるのが面倒くさかったので  
先に質問を出した。

「あ、委員会の仕事が残ってて・・・」

作戦勝ち。

先に質問を出せば、ばか女も勝手に喋りかけてきたりはしない。

「寄り道しに来たの。あきちゃんの絵、見に。」

絵？

ああ、美術室の前に貼ってある絵のことか。

校舎で一番奥にある美術室。

わざわざ遠回りするだなんてやっぱり馬鹿な女。

「あ、じゃあ行くね。」

掴んだのは右腕だった。

左にノートとペンケースを抱えていたから。

俺の横を通るあいつが

俺の横を通り過ぎるのを

止めたかったんだ。

「あきちゃん？」

ああ。

そうか。

なんだ。

認めてしまえば簡単じゃないか。

俺が行かせたくなかったんだ。

俺が？まえていたかったんだ。

俺が・・・

この手で・・・

両方は無理だとわかっていても

絵の方に進むことはこいつと離れるとわかっていても  
今、離したくないんだ。

絵の方に進むことはこいつを泣かせてしまつとわかっていても  
今、泣かせたくない。  
俺が泣かせなたくない。

ほら、その顔。

おまえのその表情を見ているとたまらない。  
この気持ちは何だ？

この間、こいつの腕を掴んだ時と同じ。

同じ感情。

同じ気持ち。

この気持ちは何だ？

「椎名さん、居た居た。」

廊下の向こうから聞こえてきた声。  
見えてきた二つの影。

「職員室行つたらいないから探したよ。」

「ごめんなさい。」

くるつと振り返って小走りに走り去る。

椎名萌の後ろ姿。

正面に見えたのは芳沢と元生徒会長の松岡聡一。  
迎えに来たのか。

やがて三つの影が遠くに見えた。

放課後の静まり返った廊下に響く三つの足音。

それらの影と音とは別の方向に向かおうとした時だった。

足元に。

目に入った物。

生徒手帳が落ちていた。

あいつのか？

片手にノートとペンケースを抱えていた。

落としたことにも気づかないだなんて馬鹿な女。

追いかけるだなんて面倒くさいことどうして俺がするか。

拾ってやっただけでも有り難く思え。

明日渡すか。

あ、五組へ行けばまだ居るか？

図書室へ行くのを止め、

一応五組へ行くことにした。

頭の中で経路を確認したが遠かった。

このまま玄関へ向かって帰る方が余程楽だった。

美術室経路で行くと大分遠回り。

三年間通った校舎なら当たり前にわかっていること。

なのに、あいつは寄り道をしたと言っていた。

わざわざ美術室に。

俺の絵を見る為に・・・か。

「認めちゃえば案外納得のいくことばかりで自分が好きになれるわよ。」

保健医の言った事を思い出した。

こんな時に。

こんな時だからか。

あいつは俺の絵を見ていた。

俺の知らないところで。

俺の知らない間に。

いつの間にか・・・

俺の中に入ってきて

俺に絵を描くきっかけを与えてくれた

認めるさ。

あいつが俺に絵の大切さを気付かせてくれたんだ。

なるほど。

納得はいくな。

俺があいつを行かせたくなかったんだ。

そういう自分もいるんだと。

認めるさ。

そんなことを考えていたら

五組の前に着いた。

三者面談は三時から五時の一日八組。

計四日間で行われる。

五時を過ぎた教室にはもう誰も残っていなかった。

あいつ等もいなかった。

人の気配も足音も聞こえない廊下。

帰ったのだろうか。

同じ経路を通ってこなかったの  
ですれ違うことも出来なかったか。

まあ、明日渡せばいいだろう。

五時半か。

時折聞こえてくるのは部活動に励む後輩達の声。

グラウンドからか、体育館からか。

誰もいない校舎に聞こえてくるのは外からの音だけ。  
四組に戻ってロッカーの荷物を持ち帰ろうと思った。

ふと、あいつの生徒手帳を開いてみた。

一年毎に更新される生徒手帳。

毎年四月に撮影される顔写真。

今よりもずっと髪の毛の長い椎名萌の写真。

中二の終わり、中三の始まり。

そんな時の写真だからか。

少しだけ幼く見えた。

俺の知っている椎名萌。

俺を知らない頃の椎名萌。

あいつが俺を知ったのはいつだろうか。

四月、タケのクラスを覗きに行くと椎名萌がいた。

五月、挨拶をされるようになった。

六月、修学旅行でも騒がしかった。

七月、引退試合を見に来た。

八月、夏祭りで迷子になった馬鹿女。

九月、表情がくるくる変わった。

十月・・・

生徒手帳のスケジュールページを捲っていくと

十月から委員会の予定がびっしり書き込まれていた。



後期から学級委員になったんだっけ。

初めての委員長に選ばれて。

あいつ元々学級委員タイプじゃないしな。

馬鹿な女。

副学級委員的な生活委員をやっていたからといって、次は学級委員を・・・

てな感じで押し付けられたのだろう。

馬鹿みたいに人がいいから、断れなかったのだろう。

雰囲気流されて・・・

まあ、頭の悪い奴ではないから、引き受けたからには場の雰囲気を読み取って責任を持ってやってきたのだろう。

あいつなりに。

ばか女なりに努力もしてたのだろう。

元々学級委員タイプの芳沢と組むプレッシャーとか。

学級委員なのだからとかいう訳のわからん責任感を勝手に感じて成績落とさないようにとか。

規則を守ろうとか。

頑張ってたのか。

あいつなりに。

落ち込んだり、泣きそうな顔したり、俯きがちだったり、暗い表情していたのも

あいつも自分と戦っていたんだよな。

十月の沢山の書き込みの中に・・・

二重丸印を見つけた。

BDという文字と共に。

その印が付けられていたのは六日だった。

ふと、ロッカーの上の掲示板を見上げる。

自己紹介カード。

二学期の中途半端な時期に物好きなクラスの奴らによって書かされた物。

先月、偶々居合わせた時に女子に頼まれて後ろの掲示板に貼った物。

あいつ、これを見て俺の誕生日知ったんだっけか。

確か下書きの時点で持っていた時。

誕生日を知られるだなんて面倒くさいこと。

俺の誕生日はめでたくも無く母親の命日なのに。

あいつはわざわざ皆の前で言いやがった。

おめでとうと暢気に。

いつも無駄に元気で無駄に笑顔で。

何の悩みも無さそうなばか女だと。

一人で勝手に喋ってうるさい女だと。

かわりたくない。

思っていたのに・・・

いつの間にか、かわりを求めているのは俺の方になっていた。

いつの間にか、居なくてはならない存在になっていた。

大事だと思う。

あいつのこと、大事なんだと思う。

次の朝だった。

久しぶりに・・・

あの夢を見た。

色は黄色。

黄色いじゅうたんのような丘の上に  
立っていた。

あいつが立っていた。

もう見ないと思っていたのに。  
今更・・・この夢？

夢だとわかっていても  
覚めるまでは付き合わなければならない

そこまで意識ができていても  
覚めないのだから仕方ない

だんだんと近付いてくる  
俺が近づいているのか  
あいつの方が俺に近付いて来ているのか  
いつもわからなかった

二人の距離が縮まって  
手を伸ばせば届く距離

さあ、どうする？  
振り向かせるか？

振り向かせてどうする？  
その先は？

次の瞬間だった  
あっという間に  
景色が変わった  
夢なのに  
夢なのだから

教室で

俺の席で

あいつを振り向かせた

その顔は・・・

夢に出てきたあいつだった

“ピピピピピピピー”

夢の終わりを告げたのは意外にも目覚まし時計の音だった。  
いつもは目覚まし時計が鳴る前に目が覚めるのに。

おいおい。

学校が出てくるなんて初めてじゃねーか。

しかも教室だし。

リアルに俺の席だし。

デジャブ？

“コンコン”

「晃起きとるかい？」

「うん。」

「ならいいんよ。朝ご飯おいで。」

寝坊も遅刻も滅多にしたことがない。

さすがにばあちゃんも心配して見に来たのだろう。

変な夢を見たから・・・

目覚ましを止めてからだいぶ時間が経っていたことに気づかなかった。

一階に下りて顔を洗う。

洗面所を使っている時、玄関で声がする。

「行ってきます。」

亘兄だ。

毎朝、いつも通りの事。

生活時間帯をずらして。

朝食も別々に摂る。

ずっとそうしてきた。

「いただきます。」

朝食を食べ始めるとばあちゃんが向かいに座った。

この時間のばあちゃんはいつもなら洗濯機を回すのに。

「父さん今日から大阪じゃて。」

「うん、聞いた。」

「そうかい。」

毎朝早起きなばあちゃんは先に食事を済ませている。  
それなのにわざわざ食卓に座ったということは何か話したい  
のだろうと思った。

「父さんな、亘が一人暮らしを始めたら一緒に暮らす言つてたよ。」  
「へー。」

味噌汁を飲みながらそう答えた。

「出張多いさ、こげな田舎まで毎回帰つて来んと亘と住んだら便利  
じゃて。」  
「そうだね。」

確かに。

父親は全国の大都市に支店を構える企業で働いていて。  
こんな田舎から出張ばかり行っていて。  
単身赴任にすれば良かったのに。  
と思うことは何度もあった。

べつに父親が家にいてもいなくても  
関係が無かつたし、  
ばあちゃんがいたし。

でも子供ながらに思っていたこと。  
父親の帰ってくる家はここなのだと。  
どんなに短い滞在時間でも  
荷物を詰め替えるだけでまた出かけてしまうことでも  
決まって父親はこの家に帰ってきた。

特別何かを話すわけでもなく  
食事を一緒にするわけでも無いけれど  
父親にとつてはこの家に帰ることが何か意味を持っていたのかも  
しれない。

それが何かは俺にはわからないし、  
俺には関係がないのだけれど。  
ただ、そんな風な考えもあるのだと。  
今までは考えたこともなかった。  
ただ、それだけのこと。

朝の支度から少しずつ時間がズレて。  
家を出る時間も遅かったらしい。  
八時に家を出れば十分間に合う距離なのだが。  
登校時間のちょうどピークにあたっただけ。  
いつもより下駄箱が込み合っていた。

喋りながら靴を履き替える奴。  
履き替え終わったのに友達を待っている女子。

人の多さと比例して  
聞こえてくるのは飛び交う複数の会話  
その中から・・・

「五組の椎名さんと芳沢君が付き合ってるらしいよ。」  
「えー、ほんと？」  
「あ、私もその噂聞いたことあるー。」

おいおい。

聞こえるって。

いくらザワザワした中だからって・・・

「学級委員一緒にやってるもんねー。」

「一緒に帰つてるところ見た子いるって！」

「えー、じゃあ噂は本当なんだー。」

おいおい。

聞こえているのは俺だけか？

噂ね・・・。

そっけんの好きな年頃なのだろう。

誰と誰が付き合っているとか、

誰と誰と一緒に帰っていたとか。

一年の頃からあったじゃないか。

人の噂。

良い噂も、悪い噂も。

噂なんて誰が最初に立たせるのか。

噂好きがあつという間に広げる。

そして噂話に拍車がかかる。

当事者の知らないところで。

当事者の知らない間に・・・

椎名萌と芳沢か。

だいたい前から朝一緒に学校来てんじゃん。  
それだけで噂が立つのか。



それだけ・・・？

生徒手帳に書いてあった委員会の予定。  
委員会の仕事量。

それだけ一緒にいるってことか。

まただ。

また、変な気持ち。

この前も感じた。

曖昧というか、あやふやというか、苛々とは違うんだか違和感を感じるこの気持ち。

昼休み。

生徒手帳を返そうと思って五組へ行った。

「おー、晃。」

教室の入り口の所でタケに呼び止められた。  
関君と立ち話をしていたようだ。

「あ、あきちゃんだ。」

後ろから椎名萌が出てきた。

いや、元々関君の後ろにいたのだろう。  
小さくて見えなかった。

そこに珍しく二宮がいない。

教室の中を覗いてみると

中央で二宮がちよこんと大人しく席に座っているのが見えた。

そして横には斉藤恵子。  
なんとなく事態を理解できた。

「斉藤さんの怒りに触れて反省中。」

「あははー。」

「にの気の毒にな。」

二宮、今度は何を仕出かしたんだ。  
どうせまたばかな事をやって  
斉藤恵子の目に留まったのだろう。

五組の奴には慣れた光景のようで  
皆、笑っていた。

隣に来た椎名萌に生徒手帳を渡そうとした時だった。

「ひゃあああー @ @ @」

おいおい。  
俺じゃないぞ。

「よーすっ！椎名ちゃん今日もかわいいね！」

椎名萌の首をくすぐったのは北山。  
こいつも昼休みになると五組へ通ってくる。  
マメというか暇な奴。

「ねーねー、今度皆でボーリング行こうよー、ねー、椎名ちゃんも  
さー。」

「おっ、いいねー、ボーリング。」

「だろっ、はい、関君参加ね！」

そう言って、関君の肩を組む北山。

「あれ？にのは？いつも一番参加ののがないじゃん。あ、じゃあ椎名ちゃんさー・・・」

その流れにさすがにばか女も勘付いたのだろう。

関君と肩を組んでいる左腕。

その北山の右腕が伸びてきていることに。

半歩。

少しずつ・・・

後ずさりをしているのが見えた。

廊下から急に現れ

首をくすぐった北山から

少しずつ離れる・・・

横に居たのは俺。

あいつの隣にいたのは俺だった。

「椎名ちゃんは？いつなら空いてる？」

「ど、土日は塾があるから・・・。」

「えー、そうなのー？」

「タケは？タケも塾とか言わないよね？」

「キタ、この時期受験生なら塾は当たり前だぞ。おまえも行ってるだろ？」

「そりゃ行ってるけど、勉強に息抜きだって必要じゃーん。遊ばーぜー。」

二宮を見たが、まだ斉藤恵子に捕まっていた。  
こちらの様子には気づいていない……か。

いつもなら、こんな時。

椎名萌が困った時、庇う二宮。

困った時に二宮に助けを求める椎名萌。

「ねーね、いつにする？椎名ちゃんは？塾終わった後は？」

二宮がいないから。

止めに入る奴も、話題を変える奴もいない。

キタの誘いをどう交わすのか……

ああ、ほら。困った顔してる。

「あれ、椎名ちゃん今日髪二つに縛ってるんだー。今気づいたけどかわいいねー。」

え？

おいおい。

なんだそれ。

「キタ、とりあえず集まれる奴で行こうぜ。俺声かけてくるよ。」

「おお、関君頼んだー。」

北山に髪型を誉められ、触ろうと手が伸びていたのに気づいた。

あいつも気付いたのだろう。

とっさに？

偶々？

椎名萌が隠れたのは俺の後ろだった。

掴んでいたのは制服の袖。  
意外と強く握られていた。  
べつにいいけど。

生地が伸びる心配なんてしないけど。

そして俯いていた表情。

でも俺にはそれが見えたんだ。

俺にはそれが・・・

可愛く見えた。

なんだ、この気持ち。

最近わからない感情が多すぎて。

あれとそれとこれと・・・

どれが同じ感情だっけ？

どこが同じ気持ちだっけ？

考えるより先に

頭よりも先に

体が反応した

体が答えた

答えは・・・

俺がこいつのことを好きだから

俺がこいつのことが好きだから

可愛いつて思うんだ。

可愛いと思っただ。

「いやー、参った参ったーのいの登場！さすがに昼休み中喋るなはきついわー。」

「あははー。にの、皆笑ってたぞー。」

「ひどいよー、皆、助けてくれないんだもん。にのショック。」  
「あははー。斉藤さんを怒らせたにのが悪いんだぜ。」

教室の中央から、聞こえてきた声は

一気に教室中に広まり、笑いが起こった。

「おっ、もえ、どうした？下向いて。」

その声に、皆の視線が椎名萌に注がれた。  
そして、慌てて顔を上げる。

「な、なんでもないよ。」

作り笑い。

俺にはそう見えた。  
かわいくねー。

「そっか、もえちゃんの大好きなのにがいなくて寂しかったのね。  
ヨシヨシ。」

「ち、違うよ。」

「だはははー。」

「にの、調子良すぎー。」

沸き起こる笑い声。

クラスを中心に再び戻った二宮。

こうして五組はいつもの昼休みを取り戻した。

一人を除いて・・・

二宮が隣に戻ってきて

椎名萌の表情は暗かった。

さっきの作り笑い、二宮は気づいていないのだろうか。  
見ているようで・・・  
見えていないのか。

二宮は上手く騙せたつもりでも  
俺は騙されないぜ。  
その表情。

何かあったのか？  
そんなに北山の事、苦手なのか？  
それとも・・・  
芳沢との噂の事・・・か？

そんなことを考えていたら  
昼休みが終わってしまった。  
生徒手帳を返しそびれた。

放課後、再び五組へ行った。

「あきちゃんだ。」

気づいたのは椎名萌。  
昼休みとは違う表情で出てきた。

「タケヤン待っているの？呼ばうか？」  
「いや、おまえ。」  
「え？私？」

驚いた表情。

その顔の前に生徒手帳を差し出した。

「あつ。」

更に表情が変わる。

やっぱり見ていて面白い。

「あきちゃんが拾ってくれてたんだー。良かったー。ありが……」

手渡す瞬間に腕を上にあげた。

「えっ？ちよつ……」

素直に渡されると思ったら大間違い。

あいつの届かないところへ……

「あきちゃん、返してよ！」

「もー、ずるいよ、届かないってば。」

そう言いながら、ぴよんぴよん跳ね上がる。

ジャンプをしても届かない。

「あきちゃん、あきちゃんってばー。」

前にもあつたな。

同じこと。

修学旅行で。



こいつが落としたテレカ拾って。  
返す時にこんな風にして・・・

ムキになって取り返そうとしてたっけか。  
届かないのに無駄な努力して。

ばかな女。

そう思ってた。

でも・・・

いつの間にかその馬鹿真っ直ぐなところに惹かれて。  
いつの間にかうるさいお喋りが聞きたくなって。  
いつの間にか・・・

「落書きしといたから。」

「えっ？」

頭の上に乗せてやった。

ついでに・・・

というか、俺が触りたかったのだろう。

頭に。

触れたかったのだろう。

髪に。

二宮みたいに、頭を撫でてやることはできない。

二宮みたいに、助けてやることもできない。

それでも・・・

俺はこいつの傍にいたい  
俺がこいつの傍にいたい

「あきちゃん、中見たの？」

「ねえ、ねえってばー、あきちゃん？」

そう言いながら後をついてくる。

振り返らない俺を振り返させようと必死に。

「もー、あきちゃんてばー、何か言ってよー。」

掴んだのは制服の袖。

触れているのはあいつの手。

「別に減るもんじゃねーだろ。」

「えーっ、そういう問題じゃないよー。」

振り返ったのは俺。

立ち止まったのは椎名萌。

「人に見られたら困るもんでも入ってたのか？」

「そおじゃないけど・・・」

「ならいーだろ。だいたい落としたことに気づかない方が悪い。」

「えーっ、そんなあー。」

「拾ってやっただけでも有り難く思え。」

「・・・う。」

不服そうな顔をしているのが面白い。

こいつの素直な表情。

椎名萌の今の表情。

俺が見ている今。

「おまえ意外と字汚いな。」

「ええーっ！」

「あと平仮名多過ぎ。」

「ひつどーい！メモだもん！字なんて適当に書いてるよーだっ。」

意表を突かれてか、

恥ずかしさと怒りを込めてボコボコと叩いてくる。

「もーあきちゃん意地悪ー。」

「イテ・・・痛いって。」

ちよつとからかってやるつもりが、  
大分怒りを買ってしまったようで、  
結構本気で叩かれた。

「おまえなー、グーで叩くなよ。」

「どうせ私は字も汚いし、グーで殴る乱暴者ですよーだっ。」

力の強さとかではなく、ただ単純に

椎名萌が俺の腕をたたいていることが変な感じだった。

いつの間に・・・

こんな風にかかわるようになったのか。

「だから痛いって。」

「あきちゃんみたいに絵も上手くないし、頭も良くないし、敵いませんよー。」

おいおい。

絵も頭も関係ないだろ。

ってか、俺に敵うって何だよ。

やっぱおもしれー奴。

「にのみたいに気が配れないし、けいちゃんみたいに物事ハッキリ

言えないし・・・」

なんだよ。

何泣きそうな声になってんだよ。

さっきまでの俺を殴る勢いはどうした・・・？

「おまえはおまえだろ。」

「え？」

「五組に、にのも斉藤も二人はいらねーだろ。」

ばーか。

らしくねーつつーの。

こんなこと言う俺も。

落ち込んでるおまえも。

「そのまんまのおまえでいいんじゃないん。」

椎名萌だから選ばれたんだろ。

椎名萌が選ばれたんだろ。学級委員。

押し付けられたら断れないタイプだろうけど、

一度引き受けたら最後まで責任もってやる奴だから。

「いーじゃん字ー汚くても。黒板は書かないだろ。」

「もー、そういうことじゃないもんっ。あきちゃんの意地悪ー。」

「結局それかよ。」

「意地悪、意地悪、意地悪、意地悪」

「ひゃあああー @ @ @」

「もー、首くすぐるのはやめてよー。」

こいつといると調子が狂う。  
ずっと前から思っていたこと。

こいつといると自分じゃない俺がいる。  
それが向き合いたくなかった自分。

認めてしまえば自分が好きになれる。  
保健医がそんな事言ってたっけか。

こんな面倒くさい奴とかかわりたくなかった。  
しかも女子とだなんて。

でも・・・  
認めるよ。

こいつは特別なんだ。

椎名萌は俺にとって特別なのだと。

「あ、いけない。芳沢くん待たせてるんだった。」

ほんと、表情がくるくる変わって忙しい奴。

「行かなきゃ。あきちゃん、また明日ね。」

慌てて走り出した後姿を・・・  
ずっと見ていた。

さっきまでこの手で触れていたあいつの髪。  
あいつに叩かれていた俺の腕。

ふと、今朝の夢を思い出した。

夢なのに

学校で

教室で

あいつを・・・

掴んだのは俺

振り返させたのは俺

夢の中で

学校で

現実で

あいつを・・・

掴んだのは俺

振り返させたのは俺

あの夏、人ごみに紛れたあいつを見つけた俺。

あいつの腕を掴んで

あいつを振り向かせた

夏が終わって秋になって・・・

その手を振りほどいたのも俺。

あいつを人ごみの中へ突き放したのも俺。

あの時に、戻ろう

もう一度、見つけに行こう

人ごみの中へ

迎えに行こう

あの夏の夜に

置いてきたあいつを  
置いてきた自分を

もう一度・・・

あいつを振り向かせたい

もう一度・・・

あいつを振り向かせることが出来たら  
今度はもう離さない

今日もあいつの挨拶で学校が終わる。

また明日。から、おはよう。までの時間が始まる。

帰宅途中で見上げた空は  
もうすっかり冬の夕暮れ。

いつの間にか秋空と変わっていた。

夏の終わりと冬の始まり。

その間でしかない秋という短いはずの時期が・・・

俺にとっては長い長い秋だった。

終わりの見えない秋だった。

終わりが見えた秋だった。

冬の始まり。

それは自分の道を歩む始まり。

それは自分の道と戦いの始まり。  
いざたて戦人よ。

## 6・冬の空

1.

「おばーちゃん、見てみて。」

「はいはい。」

「おばーちゃんてば、早く早く。」

「はいはい。」

「どう？おいしそうでしょ。」

「ふふふ。上手だねー晃。」

「じょうずじゃなくて、おいしそうかって聞いているのー。」

「はいはい。そうだねー、美味しそうなミカンね。」

小さい頃、絵が描けるとばーちゃんに一番に見せていた。

冬は寒くて外で遊ばなかったから、

家の中で絵ばかりを描いていた。

家の中の物は大抵描いた。

テレビに電話、ストーブに炬燵。

炬燵の上のみかん。

一つだけ、描かなかったものがある。

ばーちゃんの顔。

ばーちゃんはどれも上手いと誉めてくれた。

子供ながらに怖かったのだろう。

ばーちゃんの顔を描くことが。

ばーちゃんに誉められなかったらどうしようという不安。



「うーん・・・人物画のデッサン、来週までに描き直しね。」  
「はい。」

「それから歴史の勉強も。忘れずに。」

「はい。」

「期末試験の勉強と重なって大変だと思うけど・・・」

「大丈夫です。」

「そう。じゃあ頑張つて。」

十二月に入った。

受験科目の見直しに追われていた。

普通科高校ではなく、美術科に変更した為、  
今までの受験勉強とは違う準備を始めた。

美術担当の先生に、直接受験の指導を受けている。

受験内容は・・・

基礎科目プラス美術科目に実技試験。

作品に関する理解力

作者の描いた歴史的背景等。

美術の授業では教わらない事も。

そして、今最も苦戦しているのが・・・

実技試験。

デッサン力。

課題に対する理解力と見合った技術が試される。  
中でも・・・

人物画が苦手だった。

小さい頃から、縁側で絵を描くのが好きだった。

庭の風景や遊びに来る鳥達を。  
大きな空を。

風景画が好きだった。  
尊敬している雅画伯も風景画が専門だった。

人物画を描く機会が無かった。  
描きたい人物がいなかった。  
ただ、それだけのこと。

「晃ー、終わったか？」

美術室を覗くタケの姿。

放課後に、校舎の一番奥の美術室までわざわざ足を運ぶ奴は少ない。

「どう？順調？」

「いや、書き直しだつて。」

「マジですか！厳しーっ。」

片づけを済ませ、タケと一緒に美術室を後にした。

「晃、期末試験と重なつてて大変じゃね？」

「いや、準備期間ギリギリだし。」

「そっかー、もう来月試験なんだもんな。」

来月。

そう、一月の下旬にS美大附属高校の試験が行われる。  
県外でしかも私立高校の受験なので試験時期が早まる。

「オレも二月だからってのんびりしてらんねーな。」

「タケはM校受けるのか？」

「まさか！」

「親父さん達大丈夫だったのか？」

「まーね。三者面談で泣かれて恥ずかしかったけど、K校で納得してもらった。」

「そっか。」

タケはK校に決めたのか。

俺の第二志望もK校。

S美大附属の試験に失敗したら・・・

二月にはタケと同じK校を受験する。

本当はM校・・・と言いたいところだが、

今も、今までも、

俺の成績では届かないことはわかっている。

亘兄の受からなかったM校。

いつまでもこだわっていたのは俺だけだったのだから。

俺は自分の道を見つけた。

俺は自分の道を進む。

けれど、妥協はしたくない。

今回の期末試験も。

美術科へ進むとしても、定期試験の順位は妥協したくない。

「まあ、期末試験もあと一日だしな。明日は晃の得意な数学と美術だし。この後俺んち来るか？」

「いいのか？」

「もち！最近晃が全然来ねーからさ、カヨさんが寂しがっちゃって。」

「

平日は必ずいるお手伝いのおばさん。

二学期に入ってから色々あって、タケの家に遊びに行く日は確かに減っていた。

さすがに受験生だし。

土日は親父さん達も気にするだろうし。

俺も最近は自分の事で手一杯だったし。

タケの家に最初に行ったのは中学一年の秋だった。

雅画伯やKEIGOと好きな美術感覚が合う奴と初めて会った。

それから毎月、定期購読をしている雑誌を見せてもらいに行くようになった。

中二の冬にはクラスの男子とタケの家でクリスマス会なんてやったっけか。

「晃君久しぶりねー。しばらく見ない間にまた大きくなってー。若いわねー。成長期かしらー？」

「はいはい、カヨさん、また後でゆっくりね。」

久しぶりにお邪魔するタケの家だったが  
相変わらずお手伝いさんのカヨさんの出迎えはテンションが高かった。

そして変わらずふくやかな体系だった。

タケの家にこうして遊びに来ることも

あと何回・・・とか思ってしまった。

当たり前のことなのだけど。

来月の試験に合格したら、俺は地元を離れる。

田舎から・・・東京の母方の家でお世話になる。

タケはK校に合格するだろう。

学年三位の成績ならM校も見えていたかもしれない。

俺がもし来月の試験に失敗したら・・・

タケと同じ高校に通うことになるのかもしれない。

タケのいる高校生活。

タケの家にこうして遊びに来ることも。

楽しいだろう。

でも、俺は・・・

自分の道に行く

そう決めたんだ。

「はい、お待たせー。」

タケがジュースを運んできた。

「カヨさん久しぶりだからって張り切っちゃって。菓子焼き始めた。」

「悪いな。」

「いーんだよ。嬉しくて焼いてんだから。」

広い部屋に十分な大きさのテーブル。

ジュースを置いて、菓子を置いて、まだ余裕がある。

「カヨさんに晃が県外の高校受験する話したらすんげー残念がってた。友達、晃しかいないと思ひ込んでるから、あの人。」

そうだな。

中学に入ってからタケも色々あったから・・・

今は友達も多いけど、塾が忙しくて遊ぶ時間も無いのだろう。

「そういえばさ、晃が東京行く話して四組ではけっこう知られてんの？」

「ああ、美術の課題で。個人授業みたいなもんだからな。」  
「そっかー。」

タケがジュースを一気に半分飲んだ。  
なんとなく、本題に入りたいという気持ちが伝わってきた。

「椎名にさ、聞かれたんだけど・・・まずかったか？」  
「べつに。」

「そっか、そうだよなー・・・。」

タケにそこまで気をつかせてしまうのがなんだか悪い気がした。  
そろそろ・・・  
自分でなんとかしないと。

「絵の勉強を選んだ時点であいつとは離れることになるってわかってさ、」

「おお。」

「だったら今のうちに離れようって思ったんだけど。」

「後々面倒になるの晃嫌いだな。」

「出来なかった。」

「おー、意外な答え。」

「結局さ、あいつのこと考えちゃうし。気にしないようにしても気になるなら、もう面倒だから気にしとこうと思って。」

「あははー。晃らしい考え方。割り切れてるねー。」

タケが笑った。

割り切れてる。そうタケが言ってくれたのに救われた。

「あいつのことは好きだけど、好きだと言うつもりはねーし。卒業までこのままでいいと思ってる。」

「へー。」

「あいつを泣かせることになるとはわかってるけど、そんな時はそんな時で、にのにでも怒られればいいかなーって。」

「あははー。そりや当たってるかもな。」

「タケは？」

「は？」

「タケは・・・いいのか？」

前から気になっていたこと。

前から思っていたこと。

今なら聞ける気がして。

「はは。そーだなー・・・」

そう言つとタケは残り半分のジュースを飲み干した。  
さつきまでの笑顔とは別の顔を用意して。

「なんつーか、おれは小学校の時から椎名と一緒にだし。異性とか、恋愛感情とか思ったことは無いんだけど、ほっとけないっつーか。」

「だからにのという椎名を見ている時は安心なんだけど、にのと付き合うとかは違う感じ。」

「おれんとこに辞書借りに来てたのも、半分は忘れてるんだろっけど、半分はおれの様子見に来てたこととかさ。」

「同士つてわけじゃねーけど、お互いの事確かめ合つて試し合いながら過ごしてきた感じ。」

「だから、椎名が好きになった奴のことは気になるし、椎名を好きになる奴も気になる。」

「まさか晃が・・・とは思ってなかったからさ、最初はどう反応したらいいのかわからなかっただけで。」

「今は・・・晃で良かったと思うし、晃が椎名のことちゃんと考えてたってことがわかって安心したっつーか。まあ・・・そんなところだ。」

“コンコン”

「まーくん、お菓子持ってきましたよ。」

「はいはい。」

タイミング良く・・・というか、悪く？

カヨさんの菓子が運ばれてきた。

焼きたてのマドレーヌ。

部屋中が一気に甘い香りに包まれる。

「晃はさ、せっかく掴んだ道、諦めんなよ。」

「え？」

「椎名のことには気にしなくていいから。卒業した後のこととか。」

「ああ。」

「それくらいはおれが面倒見るからさ。」

マドレーヌを口に運びながら

俺達は明日の試験、数学の教科書を開いた。

タケの想い・・・

聞けなかったこれまでと

聞いてしまったこれからとで

何か変わるかといったら

何も変わらないかもしれない



それでも・・・  
聞いてよかった。  
聞けてよかった。  
また、納得して次へ進めるから。  
ただ、それだけのこと。

2 .

期末試験が終わった。  
二学期の試験はこれで終わり。  
終業式までの二週間、あとは普通の授業に戻るだけ。  
いつもの時間割がまた始まる。

教室移動で  
渡り廊下で  
あいつとすれ違う  
毎週繰り返される時間割の中の「コマ」。

「クリスマス会しよーよ。ねーねー。」  
「めんどくさい。」  
「おれら一応受験生だし？」  
「えーっ、またそれー？」

昼休み。  
珍しくうちのクラスに人が集まってきた。  
北山、市井、健太、他男子数名。

どうやら隣の五組は五時間目が移動教室らしく空っぽのようだ。

当然、二宮に関君といった常連がいない中で北山が粘っている。

「クリスマス会ー。絶対椎名ちゃん誘いたいし。」

「いや、無理だから。」

「椎名さんは無理っしょ。」

相変わらず北山は椎名萌がお気に入りか。懲りない奴。

どう見ても、あいつは北山の事苦手だぞ。

「だって最後だよ？中学最後のクリスマス。椎名ちゃんとは絶対同じ高校行けないし。」

「それは当たってるな、キタ。」

「椎名さんてどこ志望？」

「T校とか言ってたな。」

「げっ、マジで?!」

「あの子頭良かったんだ。」

俺も同感。

T校、県内ではM校K校に次いで三番目の進学校だ。でもあいつの成績なら十分合格圏内か。

「晃君知ってた？」

突然話を振られた。

おいおい。

俺は別に何も言っていないんですけど。

「いや。」

「へー意外。」

「椎名さんのことで、晃君が知らなかったただなんてな。」

おいおい。

なんだその反応は。

俺が知らないで何が悪い？

「あ、良い事思いついた！キタ、晃君に頼めば椎名さん来てくれるんじゃない？」

「そっか、晃君が誘えば確かに。」

「キタが誘うより確実だな。」

「それじゃ意味ないじゃん。つか、あきちゃんズルくない？」

おいおい。

なぜそんな話になる・・・

いつ俺がズルをしたんだよ。

「あきちゃんだって椎名ちゃんのこと好きなくせして一人だけ余裕な感じ？」

おいおい、北山。

それどっかで聞いた台詞だぞ。

俺、また怒りを買うのか？？

「キタ、それを言ったらおしまいだろー。」

「あははー、確かに。晃君と椎名さんて噂になってるし。」

おいおい。

どんな噂だよ。

っーか、笑って流せるような話なのか？

「おれは絶対認めーん！決めた！椎名ちゃんに告る！！」

「無理、無理ー。」

「クリスマスの悲劇！」

「あははー。」

まあ・・・

北山が椎名萌を好きなのは夏前からけっこう有名な話だしな。  
本人も皆知っててオープンだったし。

周りもその事で椎名萌をからかうよりも、  
北山の方に注目が集まっていたから良かったのだけど。

「よし！あきちゃん、勝負だ！！一緒に椎名ちゃんに告ろう！！」

おいおい。

あり得ねーっつーの。

「何で晃君と一緒に訳？」

「キター人で告ればいーじゃん。」

「やだ！おれだけ振られるの嫌だし。あきちゃんが何もしないで勝つのもむかつくし！」

「理由になってねーし。」

「あははー。キタまじウケる。」

「さあ、あきちゃん、この勝負、勿論受けてくれるよね？」

おいおい。

だからあり得ねーし。

だいたい俺にはあいつに告る気はねーし・・・

「あー、いたいた。ねー、今日化学？使った人いない？」

「椎名ちゃん！」

「おっ、噂をすれば本人登場！」

「化学？に入っただけからもう？は使わないかと思ってたのに。？持つてない？」

おいおい。

なんでこんな時に教室に入っただけ来るんだよ、ばか女。時計を見ると予鈴が鳴りそうだった。

化学実験室から走ってきたのか。

「ほら、キタ、言っちゃえよー。」

「今がチャンス！」

「ねえ、？だよ？？じゃなくて？、持つてる？」

慌てているばかりにこの状況は読めねーか。

会話が噛み合っていないことにも気づいてねーし。

「椎名ちゃん！化学よりも・・・おれ、ずっと前から・・・」

ばーか。

「えっ？あきちゃん？」

椎名萌の腕を引っ張って

教室から出た。

こいつがどんな顔をしてても今は俺のせいじゃねーからな。

「あきちゃん、どこ行くの？ねえ、私、化学？借りない・・・」

「泉君呼んで。」

「桐谷君ー、お客さーん。」

「はい、あら珍しい。」

「化学の？貸して。」

「？ね。待ってねー。」

「あきちゃん、一組に知り合いいたの？」

隣できょんとしている椎名萌。

四組から一気に一組に連れてこられたのだから無理も無いか。

「ほい、化学？。？じゃなくていいの？」

「ああ。有り難う。そんで、こいつに貸すけどいい？」

借りた教科書を椎名萌の頭に乗せてやった。

「おっけー。」

「ほら、予鈴鳴るぞ。」

「わっ、ほんと！急がなきゃ！」

「あ、ありがとう・・・ございますっ！」

“キーンコーンカーンコーン”

チャイムと共に、走り去った嵐・・・のような女。  
騒がしい問題に巻き込みやがって。

・・・と、もう一つ。

新たな嵐が吹き荒れる予感・・・の男が一人。  
ああ、面倒くさい。

「あつきらくん、今の子だあれ？」

思いつきり笑顔の泉くん。

視線が痛いし、面倒くさい。

「珍しいねー、晃君が借り物なんて。しかもそれを女の子に股貸し。」

「ねっ、何さん？何ちゃん？」

「ちっちゃくて、かわいかったねー。」

まるで子供のような無邪気な目で見つめてくる泉くん。

おいおい。

新しいおもちゃを見つけて喜んでるガキと一緒にじゃねーかよ。

「後で返しに来るから。」

「あの子と一緒に来てねー。」

背中に聞いた声。

聞こえなかったことにしよう。

聞かなかったことにしよう。

さて、一組まで来て。

四組まで戻るか。

北山は自分のクラスに戻っただろうか。

あの後どうなったか・・・

面倒くさいな。

なんでこんな面倒くさいこと

自分で引き起こしてしまったのか

自分が引き受けてしまったのか

あの時の・・・

あいつを見ていたら

いてもたってもいられなくなつて。

気づいたら・・・

頭で考えるよりも先に

体が動いていた。

あいつをあの場合から離れたかった

あいつを北山から離れたかった

ただ、それだけのこと。

五時間目が終わった。

HRまでの時間に・・・

あいつは来るだろうか。

と思つて、廊下で待っていてやった。

予想通り。

走ってきた。

一人で。

「あきちゃん、さつきは・・・」

「走るとコケるぞ。」

「わあっー」

ほんとにこけた。



馬鹿だ。

絶対ばかだ。

「ほら。」

笑いをこらえきれずに噴出しながら  
手を貸してやった。

「ありがとう。」

廊下に座り込んだのを  
立ち上がらせるのにそんなに力はいらなかった。

「あ、教科書。」

「ん。返しとく。」

「えっ、でもお礼……」

「いーよ。」

急いで走ってきたのはやっぱり  
一緒に返しに行こうとしてたか。

「HR始まるし。髪、解けてる。」

「えっ？うそ？」

「ほんと。」

走ってきたのとさっきコケたので  
一つに結んでいた髪が解けかかっていた。  
荷物を片手に持ったまま、もう片方の手を後ろに回したが届かな  
かったらしい。

「と、届かない。どうなってるの？」

「とれそう。」

「えー、じゃあとっちゃって。」

言われるまま。

結んであつたゴムを解いてやった。

久しぶりに見る。

おろした髪。

その髪に・・・

触りたくて・・・

つい手が伸びる・・・

「一組って今日化学あつたんだね。知らなかった。」

「いや。俺も知らない。」

「えっ?! だつて・・・」

「彼は一年の教科書も貸せると思う。」

「ええっ!?! ずっと持ち帰ってないの?」

泉くんの話に驚いていて・・・

俺がこいつの髪を触っていることは

別にどうでもいい・・・のか?

「おまえみたいな借り物の多い奴には教えたくなかったけどな。」

「あ、ひっどーい。私のこと、忘れ物の多い子だっと思ってる?」

「よくタケんとこ借りに来てたし。」

「えー、やっぱりそのイメージ?」

「違うのか?」

「ちがつ・・・う時もあるもの。忘れる時もあるけど。」

「ふーん。」

「あきちゃんそれ、HR終わったら返しに行くの？やっぱり私も・・・」

「いーって。」

タイミングよく、廊下に担任の姿が見えたので教科書を持って教室へ入った。

どちらかというと・・・

泉くに会わせなくなかったんじゃないくて。

三組の前を通させなくなかったんだ。

あいつを。

教室塔のある校舎は、真ん中に大階段があつて。

その階段を挟んで、

一組から三組の教室

四組から六組の教室

と分かれている。

普段、大階段を共有することはあっても、

一番奥の一組までわざわざ行くことは無い。

しかも、一組まで行くには・・・

三組の前を通るわけで。

さっきは夢中であいつの腕を引っ張って行っただけ、  
今思い返してみれば、三組の前を通った時、

祐也に見られたかと。

祐也とはあれ以来・・・

その三組寄りの大階段下の人目のつかない場所で

祐也が椎名萌に告白したであろう場面に遭遇して以来。

あいつも思い出すのだろうか。

あの階段下を見ると。

三組の前を通ると。

祐也のことを・・・

あれから何も言ってこないな。

祐也も。

あいつも。

放課後になって一人で、一組へ。

泉くんのところへ行った。

「晃君、久々に一緒帰ろうぜー。」

万遍の笑みとはこういう時に使うのだろう。

「えー、泉君今日カラオケ行く約束はー？」

「悪い、ナナちゃん、また今度ねー。」

「もー、しょうがないなー。」

「じゃあ、皆また明日ー。ばいばーい。」

「バイバイ。」

「桐谷君、バイバイー。」

「泉君また明日ー。」

教室で、廊下で。

次々に挨拶を受ける泉くん。

相変わらず・・・

というか、以前より女子からモテてないか？

一組でも人気者なのだろう。

泉くんがいるクラス。

見なくてもわかる。

泉くんの人柄なら当然。

「晃君向こう側になってから全然会わなかったし。」

向こう側とは、一組三組と四組六組とを  
分けて呼ぶ以前からある呼び方。

「元気してた？」

「まあ。」

「好きな子できたんだね！」

おいおい。

いきなりですか。

「第二小の子？」

「ああ。」

「オレにも知らない女の子がまだいたんだな！」

おいおい。

そういう風に捉えるのか？

「で？付き合ってるの？ね？どうなの？」

歩きながら肩を寄せてくる泉くん。

男同士気持ち悪いんですけど。  
あれ。

中一で、並んだ時、泉くんの方が大きかったのに。  
俺の背が伸びたのか。

「付き合ってない。」

「えー、なんでー??好きなんでしょー??」

相変わらず。

俺の一言に対して、倍・・・いや、倍以上に返してくる。

「俺、来月私立校の受験するんだ。受かったら・・・東京。」

「へー。」

「だから付き合うとかは無い。」

「えー、なんで付き合わないのー??そんなの変だよー。」

おいおい。

俺の県外受験のことには触れないのかよ。  
驚かねーのかよ。

「どうせ卒業したら離れるだろ。」

「晃君、その考え方、そんなのおかしいー。」

「そうか?」

「卒業まで付き合えばいいじゃん!思い出作ればいいじゃん!」

いやいや・・・

なんというポジティブ感。

「俺の話はいいよ。泉くんは?」

「もち!割り切って先に進むことが大切!」

いやいや・・・

恋愛感を聞いたんじゃないくて・・・

進路とか・・・をだな。

「一人の女の子を大切にするのもいいけど、沢山の女の子に喜んでもらえることも大事な訳。うん、うん。」

「へー・・・。」

「なんつーか、今はまだ義務教育だし？守られた環境の中で出来ることをする？」

おいおい。

話の展開についていけねー。

義務教育？なんの話をしてるんだか。

「人からどう思われようとかさ、良く思われようとか、そういうのって考えちゃう訳。」

「でもさ、結局は自分の好きな子一人から良く思われていればいいって訳。」

「でもでも、いつか来るその日の為に、皆から好かれる人であればさ、その時は好いてもらえるんじゃないかって。OK？」

いやいや、

全然わからん。

そう、顔に書いてあっただろう。

「じゃあ次ね。ここは田舎だから、卒業したら出て行くよ。地元の高校行っても、その先の大学は県外を目指すつしよ。」

「そしたらさ、三年後には皆バラバラな訳。だから晃君は三年早いだけ。たった三年だよ。」

「だからそんな難しく考えねーでさ、今できること、今やりたいことをやればいいんだよ。ここで出来ること。ここでやりたいこと。OK？」

なんとなく。

おっけー・・・か？

偉い真面目な話をしたかと思えば

急にぶっ飛んだ話をはじめ。

ふざけているように見えて

話す内容のところどころに妙な説得力がある。

泉くんとは不思議と幼稚園から小学校六年間、中学一年までずっと同じクラスだった。

それだけ一緒にいるから、うちの事情も少し知っている。

それが楽で泉くんといった。

クラスのムードメーカー的存在で、頼りになる泉くんに目をかけてもらっていた数年間、平和な学校生活を送っていた俺。

泉くんのおかげで。

二年三年と泉くんとは別々のクラスになり・・・

俺も別々の道を歩むことになった

今度は泉くんを守られた学校生活ではなく

自分で過ごしてきたつもりだ。

今は・・・

あいつがいる学校が当たり前で

あいつという学校生活が当たり前になった

この生活も卒業したら終わる。



あと三ヶ月・・・  
そしたらまた新しい生活が始まる。  
あいつのいない生活が。  
ただ、それだけのこと。

3 .

週明けの朝。  
なんとなく嫌な予感はしていたが。  
こういう時の予感は的中することがほとんど。

キタに呼び出された。  
先週の事が・・・  
面倒くさい。

「この際だからはっきり言っけど、あきちゃんは椎名ちゃんのこと  
どう思ってるの?」

おいおい。  
いきなりですか。  
しかも、この際って、どの際だよ。

「いやさ、あきちゃんの意見を聞かなくてもオレはオレのやり方で  
告ろうと思ったださ。」

おいおい。  
だったら俺に聞く必要ないんじゃない・・・

「一応・・・あきちゃんの見聞も聞いてやろうかと思って。」

おいおい。

朝から呼び出しなんかして

何言ってるのかと思えば・・・

キタなりに考えてきたことなのだろう。

言葉の節々に無理をしている感じが伝わってきた。

素直じゃないというか・・・

認めたくないという気持ちか・・・

キタの表情は硬かった。

怒っているかのようにも見えるが、緊張しているようにも捉えられた。

複雑なのだろう。

以前の俺だったら、椎名萌を好きだという奴を見ると苛しかった。

好きな子に対して困らせるような幼稚な態度で接しているキタを見ていて。

中二の頃俺も同じように幼稚な行動をしていたことも思い出して。

でも・・・

今は・・・

「悪いなキタ、俺、椎名のこと好きだから。」

「おっと！ここって、「べつに」って言うところじゃねーの??」

キタの表情がガラッと変わった。

「あきちゃんが・・・あきちゃんの口からそんな台詞が出るなんて・

・・」

信じられないか？

だろうな。

俺も信じられん。

そう思ったら、ちょっと笑ってしまった。

「しかも、笑ってるし。なんだよー。」

「あ、悪い。」

以前の俺だったら、

人とかかわりが面倒くさいから、適当に答えていただろう。

なるべく物事を大きくしないように

なるべく穏便に済ませられるように

適度な距離感と

安全での確な答えで。

「オレも薄々気づいてはいたけど認めたくなかったんだよね。二人とも両想いなくせに付き合わないし。」

「だったら・・・オレにもチャンスあるんじゃないかって。あきちやんがのんびりしている間に椎名ちゃん獲っちまえるんじゃないかって。」

「でもなんか、ハッキリ言われたら・・・逆にスッキリっつーか。しかも笑ってるし。あきちゃんも椎名ちゃんのことでは笑うのな。」

昔から。

無表情とか、無反応とか言われてたっけ。

男子からしたら、そこがム力つくとか生意気だとか言われたこともあったっけ。

でも・・・

泉くんや二宮といると俺が何もしなくても、俺は何も言わなくてもいつもそこには人が集まってきていた。

そしてその中にあいつを見つけた。

無駄に元気で無駄に笑う騒がしい女。

やがて気づく。

あいつを見ていると俺も少しだけ無駄に元気になること  
あいつを見ていると俺も少しだけ無駄に笑っていること

「あきちゃんに一つ、聞いてもいい？」

「何だ？」

キタの表情は解れていた。

いつも通りの雰囲気と感じをすっかり取り戻していた。

「なんで椎名ちゃんと付き合わないの？」

「オレだったら、椎名ちゃんと手つないで休日デートしたいとか、色んなこと想像するぞ。」

キタの表情は既に好奇心旺盛で  
ただ単に質問したいだけに変わっていた

「俺はあいつのこと泣かせたくないから。」

「は？」

「あいつが何で泣いてるかとかわかんねーし。」

「え？椎名ちゃんの泣いたの？いつ？いつ？」

おいおい。

椎名萌のことが好きだとかいっておいてそれはないだろう。  
あいつけっこう泣いてるぞ。

「だから今はなかせないように、なるべく笑っててもらえようにするだけでいいじゃないっつーか。」

「オレの知ってる椎名ちゃんはいつとも笑顔だけだなー。その笑顔がかわいいし。からかうと反応面白いし。」

だからそれはキタが幼稚な態度で接するから・・・  
いや、それはおいといて。

キタは何を見ているんだ？

キタにはあいつが毎日笑顔に見えるのか？

「椎名ちゃんのどこが好きなのかって聞かれたら、オレだったら間違いない笑顔！って答えるね。」

「あとはねー、タケとか周りの男子がゲームの話ししても隣でニコニコ聞いててくれるとことか？ほらさー、よくいるじゃん、ゲームの話を嫌う女子とかってー・・・」

キタの話しはまだまだ続くようだった。

今度は適当に話を聞きながら・・・

キタはあいつの笑顔が好きだという。

確かに無駄に笑顔で騒いでいるが・・・

あれは作りモノだろ。

笑ってるふりして、

元気なふりして、

皆をうまく騙しているつもりなのだろう。

うまく騙せているつもりなのだろう。

でも俺は・・・

騙されない。

気づいてしまったから。

あいつの作り笑いに。

だから思うんだ。

あいつのことを見てやりたいうて。

あいつのことを見てやりたいうて。

そして・・・

できるなら、他の奴らにもあいつを見てやってくれと思うんだ。

あいつのことを好きだという奴は・・・

あいつの笑顔の裏のサインに気付いてやってほしい。

あいつの悩みにも気付いてやってほしい。

あいつを見守ってやってほしい。

「じゃあ、あきちゃん、そういうことで椎名ちゃんのこととは諦めるから、アレ、来週には持ってきてねー。よろしく!」

え？

おいおい。

なんだっけか？

時計を見ると朝のHRが始まろうとしていた。

キタと急ぎ足で校舎の方へと戻った。

ふと、前を歩く人山の中に、

祐也の姿を見つけた。

数人の男子の中から、特定できてしまうというのも男同士でなんだか気持ち悪いが。

そのまま後ろを歩き、キタとも祐也とも、大階段の曲がり角で別々の方向へと別れた。

笠原祐也。

あれ以来特にかかわり無し。

祐也はあいつに告って・・・どうだったのだろうか。

あいつを好きだという奴には・・・

あいつのことを見守ってやってくれって・・・

それが祐也であつても。

そう思っていた矢先の事だった。

放課後、受験の課題で残っていた。

美術室から教室へ戻った頃にはすっかり下校時間を過ぎていた。

日直も、最後の戸締りを確認する生活委員も、当番を終え、帰っ

た後だった。

誰もいない廊下に響く足音。

嫌いじゃなかった。

誰もいない教室に響く時計の針音。

嫌いじゃなかった。

誰もいない校舎に響く部活動の掛け声。

どれも嫌いじゃなかった。

一人でいたい時、

部活をさぼった時、

図書室で過ごしていた時、

これらの要素はどれもが俺を落ち着かせた。

が、一変して崩れた。

教室の扉が少し開いた。

足音なんて聞こえなかったのに。

なんだ、誰かまだいたのか？

おそらく数センチだろう。

開けられた扉から聞こえてきた声と共に・・・

「あきちゃん？」

入ってきたのはあいつだった。  
人が通れるだけの扉を開けて。

「あきちゃんだ。まだ居たの？」

胸に突き刺さる感情。

その声を聞いた瞬間。

胸の辺りがちぎれそうに痛かった。

泣いた跡

泣いた顔

じゃなくて

泣いている顔

今、泣いている

「どうした？」

声をかけた途端

その目から涙が落ちた

その涙。

その泣き顔。



流れる涙に流されるようにして・・・  
俺の手が伸ばされた。

無意識だった。

無意識にあいつに触れていた。

あいつを腕で引き寄せて。

抱きしめていた。

「どうした？」

「なんでもない・・・」

「なに泣いてる？」

「泣いてないよ。」

「泣いてるだろ。」

いつもとは違う声で  
いつもとは違ったところから聞こえてくる  
俺のすぐ横にある顔。

「泣いてないよ。」

そう言うと、椎名萌の方から離れていった。  
今はもう、別のところから声が聞こえる。

今度はあいつの声がすぐ横に聞こえないことで自分のしていた行動に気づいた。

驚かせたか・・・。

「どうした？」

「ごめんね、なんでもないよ。」

涙は止まったようだ。  
やはり驚かせたか。  
空いていた椅子に腰をかけた。

「どうした？」

「なんでもない・・・」

座ったまま俯いている。

隣の椅子に座り、横から顔を覗き込むことにした。

「なんで泣いてる？」

「泣いてない。」

「泣いただろ。」

「泣いてないよ。」

「おまえな」

「あ、あのねっ、席替え、席替えしたの。」

急に話を変えた。

急に顔を上げた。

「それでねっ、隣はけいちゃんなんだよー。すごいでしょー。斜め前にはにのもいてねー。授業始まる度にけいちゃんがにので黒板が見えないーってね、」

「それでね」

急に溢れ出したおしゃべり

急に溢れ出した笑顔

なんなんだこいつは  
とも思ったが。

今は見ていることにした。  
今は。

目が合った。

逸らさなかった。

逸らされなかった。

もう大丈夫なのか。

隣の席に座った状態で

楽しそうに喋っていた。

うるさいくらいに。

もう大丈夫なんだな。

「ほんと忙しい奴だな。」

そう言って、隣で笑う笑顔に触れた。

「泣いたり、笑ったり。」

さっきまで流れていた涙。

頬はまだ湿っていた。

俺の手が冷たかったのか

椎名萌の頬が熱を持っていたのか

わからなかったが・・・

このままこうしていたかった。

このまま触れていたかった。

このまま・・・

「あ、あきちゃん・・・あのね・・・私

」

“キーンコーンカーンコーン”

突然鳴り響いたチャイムの音で最後まで聞き取れなかった。  
静かな教室に響き渡るチャイムは最終下校を知らせる合図だった。

「か、帰らなきゃね。」

これ以上残っていては問題の対象になるだろう。  
受験生の立場上、良くないことぐらい誰だってわかる。

校門まで駆け足に歩いた。

ここから先は別々の方向になる。  
当たり前的事。

帰宅経路が真逆なのだから。

「あきちゃん、あの・・・もう少し話せないかな？」

まただ。

胸に突き刺さるような感情。  
さつき最初こいつを見た時から感じていた。  
なんだこれ？

今度は俯いたままの椎名萌。  
だから表情はわからなかった。

でも確かなことがあった。  
おまえがそんな顔をしていると  
おまえがそんな震えた声でいると  
俺は無意識に触れたくなっていることに。

よくわからない感情が多すぎて  
今は自分をコントロールできないことに。  
だから・・・

「今日はもう遅いから帰れ。明日の朝早く来ればいいだろう？」  
「う、うん。」  
「じゃあな。」

そう言うので精一杯だった。  
あいつが帰ったか、振り返って見てやることもしなかった。  
あいつのことを見ててやりたいって思っていたのに・・・。  
出来なかった。

言いかけて消された言葉。  
言おうとして言わせてもらえなかった言葉。  
何を言おうとしていたのか・・・  
何を言うつもりだったのか・・・

俺は何を言おうとしていたのか  
俺は何を言うつもりだったのか  
あいつに・・・  
言わないつもりだったのに  
言うことはないと思っていたのに

言ってしまいそうだった。  
あいつがあんな風に泣くから  
言ってしまいそうだった。  
あいつがあんな風に笑うから

おまえのことが好きだって。

泣かせたくないのに  
見ていてやりたいのに  
俺は・・・

今日、なんであいつが泣いていたのかはわからなかった。  
けれど、

俺のところへ来て泣いて  
俺のそばで笑いに変わったのなら  
それでいいかとも思う。

ああ。

そうか。

わからなかった感情。  
痛かった胸。

今ならわかる気がする。

あいつが何で泣いていたのかはわからなかったけど。  
泣いているあいつを見て・・・

触れたかったんだ。  
見てるだけじゃなくて。  
抱きしめたかったんだ。  
見てるだけじゃなくて。

そして・・・

伝えたかったんだ。

ただ、それだけのこと。

翌朝。

朝食を食べているとばあちゃんに話しかけられた。

「今日は早いんねー。」

「美術の先生に受験課題見てもらってるから。」

「そうかい。」

ばあちゃんは豪く笑顔だった。

本当はあいつと約束したから早く行くんだけど。

「晃は昔から絵が上手かってん。合格間違いないとよ。」

「ばーちゃん変なプレッシャーかけないでよ。」

「そんなことないばい。」

ばあちゃんが食卓にカレンダーを持ってきた。

「学校は二十五日までじゃろ。」

「うん。」

「じゃあ二十六日から東京さ、行ってみるかい？」

「うん。」

「ならあちらさんに連絡入れとこーな。」

これまた嬉しそうにカレンダーに印を書いていた。

日付のところに丸印。

それだけのことなのに、ばあちゃんがはしゃいで見えるのは気のせいだろうか。

居間の壁に掛けられたカレンダー。

そつえば、印をつける事なんて滅多に無かった。

父さんは不規則に勝手に帰宅していたし。

勝兄の帰省の時もカレンダーに印は無かった。

俺の修学旅行の時以来か？

まあ、来年のカレンダーにはびっしり印が付けられるのだろうが。  
俺の試験日に亘兄のセンター試験日。

来年の一月は受験カレンダーと化すだろうに。

ふと、カレンダーに目を戻す。

二学期の終業式まであと一週間か。

あいつと過ごす学校生活もあと一週間。

俺は大丈夫だろうか。

一週間。

言わないでいられるだろうか。

あいつに・・・

学校に着いた。

部活動の朝練並に早い時間。

十二月の冷え込む校庭にも数人の後輩達がランニングに励んでいる。

当然、校舎の中は人が無い。

俺はまた、一人で歩く廊下の響きを味わっていた。

そして開ける教室の扉。

なんだかいつもよりも重たく感じた。

昨日、ここで泣いていたあいつ。

昨日、ここで笑っていたあいつ。

昨日、何かを言いかけたあいつ。



今日、ここにどんな顔で来るのだろうか。  
今日、ここで何を言うのだろうか。

そして俺は・・・  
何を言っただげれるのだろうか。

俺には伝えたい気持ちがある。  
でも今は言えない。  
言わない方があいつの為なんだ。

人気の無い朝の教室は冷え込む。  
脱いだコートをまた羽織った。  
小説を捲る手が悴んで。  
手袋もはめたいくらいだった。

しばらくして  
一つ足音が聞こえた。  
短い間隔。  
小刻みに。  
女の小走り。  
そして・・・  
元気に扉が開かれた。

「あきちゃん、おはよう。」

おいおい。  
なんだよそれ。  
いつも通りの笑顔  
いつも通りの喋り声

「ほんとに早く来てくれたのだね。」

昨日まで泣いていた奴とは思えないほどの回復力。  
ほんとに笑ってんのか？

また作り笑いなんじゃ・・・

「ここ座っていい？」

前の席に腰掛ける。

目が合う。

やっぱりな。

「寝れなかったのか？」

「あ・・・えつと・・・うーんと・・・」

作り笑いではないようだが、

万全な回復を見せたわけではないのがわかった。

目の下にクマ。

答えづらそうな顔をしていたので話を変えてやることにした。

「話って？」

「あ、うん。」

表情が変わった。

あ、いいの？みたいな。

やっぱおもしろー奴。

みるみる表情が変わっていく。

「あ、あのね、あの・・・」

「私があきちゃんを好きでいるの、迷惑？」

は？

おいおい。

何を言うのかと思えば・・・

「べつに。」

「迷惑じゃないの？」

「ああ。」

おいおい。

それはそうだろう。

今更・・・

迷惑って言葉、使い間違えてんぞ。

「ほ、ほんと？」

「ああ。」

「本当？」

「本当。」

そして表情が変わる。

ああ。

ほら、笑顔になる。

「おまえ、この会話になるとしつこいからな。先に言つぞ、本当だ。」

「良かった。」

その表情。

その笑顔。

俺が見たかった顔。

俺が見たかったのはこいつ。

そして・・・

そんな顔で笑っていると触れたくなくなる。

その頭に、髪に、頬に。

触れたくて・・・

捕まえたくて・・・

「あとね、あきちゃん昨日あんな遅くまで残っていたのって・・・」

さつきまで晴れていた空に

雲がかかる・・・

そんな表情。

雲の色は不安色・・・ってどこか。

こいつなりに・・・

色々考えたんだろうな。

昨日おまえが何で泣いていたのかわからない分、  
わかってあげられなかった分、

俺は今日おまえの不安に答えることにするか。

「先生と進路についての話。」

「高校のこと？」

「ああ。」

複数の足音が聞こえてきた。

そろそろタイムアップか。

さすがに人前では泣かないだろうし。

だが、不安を消してやることはできなかったか。

「あきちゃん、と、東京に行くってほんと？」

教室内に人が入ってきたというのに  
珍しく粘ってきたな。

いや、始めから知っていたのか。

そういうば、前にタケが言っていたか。

だから・・・

今度は自分の口から聞いて、俺からの答えを聞きたいってところか。

それで一つの不安が消えて

笑ってくれるなら

それでいい。

「ああ。」

「そ、そうなんだ。」

やっぱり泣くか？

やはり泣かせてしまうのか？

「あきちゃんの夢、叶うといいね。」

そう言って教室から出て行った。

なんだろう。

作り笑いとは違って

笑顔なんだけど、

笑ってくれていたのだけど、

どこか解り急いでいるというか・・・

絵の勉強に進むと決めた時からわかってたことじゃないか。  
両方は無理なんだって。

中学を卒業したら皆別々の高校になって  
高校を卒業したら皆別々の進路に向かう・・・  
いずれ社会人として、一人の大人として、向き合う日の為に。

そうやって来たじゃないか。

そう思ってここまでこれたじゃないか。

そしてこれからも・・・

だから無理なんだ。

俺には無理なんだよ。

あいつに伝えられる訳がない。

あいつに告る権利が無い。

ただ、それだけのこと。

4 .

帰りのHRで一枚のプリントが配られた。

行事の多い二学期最後を飾るもの。

行事という程大袈裟なものではないが。

校外学習。

地域の保育園・幼稚園・高齢者施設・病院を訪問する半日体験学習。

面倒くさいことに班毎に訪問するらしく。

面倒くさいことに班が編成される訳で。

もっと面倒くさいのはクラスランダム編成ということ。

一組から三組までの前半クラスと  
四組から六組までの後半クラスとで  
訪問日を分け。

更に、前半クラス後半クラス単位で  
四人一つの班を作りそれぞれの訪問先へと向かう。  
といった内容が書かれたプリント。

興味は無かった。

それよりも終業式までに仕上げなければならない受験課題のこ  
とで頭がいっぱいだっただけ。  
あと五日か……。

「晃君は明日どこ行くの？オレ老人ホーム班だったー。」

健太がやって来た。

いつの間にかHRが終わっていた。

帰る者、お喋りを続けている者、教室中が騒がしかった。

「よーすっ、あきちゃん、アレ持ってきてくれた？」

騒がしい奴がもう一人。

キタが教室に入ってきた。

「アレって何？」

「さあ……？」

健太に聞かれ、そう答えた。

「終業式までには持ってきてくれないとー。冬休みは入ったらやり

「たいんだからー。」

「何だっけ？」

「えー！ひどっ。忘れたとは言わせねー。」

キタに首をしめられそうになって思い出した。

ああ。

確か・・・

椎名萌のことを諦めるからとかなんちゃら言ってた時のことか。

「明日持つてくる。」

「明日ね！了解！」

「何の話？」

健太だけが状況が読めていなかった。

俺も・・・たぶんゲームを貸す話しだろう位にしか覚えていないが。

「あ！でも明日って・・・」

「校外学習。キタはどこ行くの？オレ老人ホームだったー。」

「オレは歩いて10分の幼稚園！近くていいだろー。」

「確かに、それいいー。」

「あきちゃんはどこ行くの？」

「見てない。」

「えー、なんていうか、あきちゃんて周りに興味なさすぎだし。」

「オレまず、訪問先よりも誰と一緒にの班かの方が気になったし。」

「だよーねー。健太、それ普通だし。まずは班の女の子チェックからだよー。どこぞのクラスのかわいい子と一緒にかもしれないじゃん！」

そう言うと、机の上に置いたままだったプリントを持ち上げた。

健太も一緒になって覗いている。



何が楽しいんだか。

誰と一緒にどこへ行くのが同じだろ。  
たかが校外学習。

「うつそー！！ショーっク！！」

「確かに。」

俺のプリントを見た二人の言葉。

おいおい。

勝手に人のプリント見ておいてその反応・・・  
なんだよ。変な奴とでも一緒の班だったのか？

「や、破きたい。破いてしまいたい！」

「あはは。確かにキタからしたらそうだろうな。」

おいおい。

だから人のプリントを勝手に見といて破くとかありえねーから。  
だいたい、名前入りで個別に配られたプリントなんだから誰が誰  
と一緒にの班とかの一覧は載ってねーだろう。

俺のプリントには俺の班員の名前と訪問先しか・・・

「ありえない！あきちゃんと椎名ちゃんが一緒の班だなんて！神様の意地悪！」

「すっげー偶然。一緒になる確率とか低そうなのに。」

おいおい。

今何て言った？

二人とも・・・勝手に・・・  
っておいおい。

自分のプリントを見た。

確かに。

そこに書いてある名前は

『四組 穂高 晃』

『五組 椎名 萌』

と、

『六組 知らない奴二名』

「でさ、あきちゃん、椎名ちゃんとはどこまで進んだ？」

「えっ？進むって何？」

さっきまでのテンションはどこへいったのか。

キタの意味深な質問に、すっかり健太まで食いついてきた。

面倒くさい。

「告った？ねえ、言ったの？」

「え、何、マジだったの、晃君、椎名萌のこと……」

面倒くさい。

それどころじゃねーし。

「つか、俺告白なんてする気ねーって言ったよな？」

「勿論、約束は守ってくれるんだよね？あきちゃん。」

「キタ、約束って？何？何？」

「オレが椎名ちゃんに告るの辞める代わりに……あきちゃんは椎名ちゃんと付き合うこと。そんで、傷心のオレに、ソフト一本くれるって話。」

「なんじゃそりゃー。そんなんでゲームソフト一本？え？え？」

そうだったのか。

あの時の話はよく覚えてなかったし。  
貸す位・・・じゃなくてあげることになっていたとは。

「ねー、あきちゃん、で、どうなってるの？」

「べつに。」

「でた！あきちゃんのべつに。発言。」

「あははー。キタ、真似まですることねーから。」

「いやいや、健太、これはマズイ展開なんだぜ。あきちゃんのべつに発言は興味関心がゼロの状態を指す。このままではマズイのだー！」

おいおい。

なにがマズイんだか知らねーが。

ゲームなら明日持つてくるからもう面倒な事はやめてくれ。

「あきちゃんが言わないなら、オレが言ってやろうか？うまくやるよー。オレ。」

「とか言っちゃってー、キタがうまくやるとは思えんが。」

「オレはやる時はやる！うん！オレはソフトをゲット。あきちゃんは椎名ちゃんをゲット。どう？いいでしょ？」

おいおい。

勘弁してくれよ。

だいたいあいつは物じゃねーし。

一緒にするなって。

そう思っただけの為、教室内を見渡した。

あいつが居ないか、じゃなくて。

こんな会話、聞かれたら面倒くさい奴がいるだろ。

斉藤恵子に聞かれたら・・・

「ゲームと一緒にすんな！」って怒るだろうしな。

そこまで考えたら思わず笑ってしまったが。

「あ、あきちゃん笑ったし。やっぱり椎名ちゃんのこととなると笑うんだよねー。」

「そうなの？」

「この間もさー・・・。」

椎名萌と同じ班か。

訪問先は保育園。

ただの校外学習だろう。

どこへ行ってもあいつはあいつだろうし。

明日はいつも通りの時間割じゃないだけ。

半日で終われるラッキーな日程。

ただ、それだけのこと。

話に盛り上がっている健太とキタを残し教室を後にした。  
受験課題を提出しに美術室へ行った。

すると、意外な人物と遭遇した。

「晃君。」

美術室の前に立っていたのは咲良だった。

「これ、晃君の絵だね。」

「ああ。」

美術室の前に張り出された俺の絵。

先生に剥がしてもらおうよう伝えてあったのに。  
まだ剥がされていなかったのか。

「一年の時から晃君の描く絵、上手いとは思っていたけど。」

咲良は絵に目を向けたまま話し始めた。

俺は正直言つてどこに視線を落とせばいいのかわからなかった。

咲良と会うのも話すのも一年の時以来だったから。

まだ俺が泉くんの影にいた頃。

泉くんの光のおかげで安全な学校生活を送っていた頃。

「晃君、高校から絵の方に進むんだってね。」

知ってたのか。

泉くんから聞いたのか。

いや、でも確か泉くんと咲良はもう別れてだいぶ経つはず……。

まあ、余計なお世話か。

「すごいね。ちゃんと自分の進む道決めていて。なんか置いてくれた気分ー。」

そう言つて、初めて笑顔を見せた。

変わらない。

咲良のサバサバした気持ちのよい笑顔。

「晃君つて……めぐちゃんと付き合ってるの？」

「えっ？」

思わず。

思わず言葉に出た。

「あら。珍しい。晃君でもそんな反応するんだ。」

そう言つて咲良は笑つた。

さつきまでとは違う笑顔で。

「誰に聞いた？」

思わずそう聞き返してしまつた。

いつもの俺ならこれ以上話を広げることなんてしないだろうが。

「噂よ。噂。そんな噂があるのー。」

またそれが。

噂ね・・・

「でも、否定しないということはそうなのね。」  
「・・・・・・・・・・」

噂ねー。

咲良の口から聞くことになるとは思つてもいなかったが。

しかも、咲良と椎名萌が知り合いだったとは。

同じ小学校出身だったか。

「ふーん。晃君がねー。」

「べつに」とか、「違う」とか、  
そんな言葉を選べばよかったのに。  
いつも通り・・・。

なんだろう。

咲良の前では適当が出来なかった。  
適当に受け流すことも、否定することも、肯定することも。

「女子になんて興味なかったのにねー。そっかぁー。」

確かに。

一年の時の俺は人とかかわりが面倒くさかったから。  
特に女子だなんて。

でも咲良は割りとサバサバしていて、一緒にいても苦ではなかった。

「まあ、どっちみち、一年の時の晃君に告白してもダメだったってことね。」

「えっ？」

思わず聞き返してしまった。

思わず。

「あ、三年になった今もダメかー。残念。」

言葉が出なかった。

思いつきり。

「やーね。そんな顔しないでよ、っていうか、晃君もそんな顔するのね。昔は表情一つ変えなかったのに。」

咲良に表情を読まれる程、  
俺動揺してるのか？

「私の知っている晃君と違っってことは、違う風に誰かが変えてくれたのかもね。大事にしてね、その子。じゃあね。」

そう言うとき背中を向けた。

校舎の一番奥の美術室から。

咲良の後姿だけが見えていた。

一年の頃は・・・

同じ位の身長だった咲良。

細身の体系は変わらず。

でもいつの間にか俺は咲良の背を軽く追い抜いていた。

告白？

誰が？

誰を？

誰に・・・？

あの時はわからなかったけど、

気づかなかったけれど、

俺、一年の時・・・咲良のこと好きだったんだ。きっと。

美術感覚が合うタケとの出会いに、

初めて出来た友達に、

嬉しすぎて忘れていたけど。

それまでは、咲良のこといいなって感じていたと思うんだ。

でも・・・

「はい、そのキミ。」



聞き覚えのある声。

美術室から帰ろうと廊下を歩いていたはずなのに・・・  
気がついたら保健室の前で呼び止められていた。

「見ーちゃった。」

またこの保健医かよ。  
今度は何だよ。

「あなたの好きな子、見つけちゃったー。さっき一緒にいたでしょー？」

また嬉しそうな顔して話しかけてくるし。  
何が見ーちゃっただよ。

「違いますよ。あの子じゃないです。」  
「あら、ずいぶんとはつきり言うのねー。つまんなーい。」

おいおい。  
つまらないって・・・

白衣の裾が保健室に消えるのが見えた。

おいおい。  
それだけ？

それだけで充分俺を保健室へ引き寄せたが。  
廊下で話されるのが嫌いなことを知ってたか。  
保健室へ足を入れると満足そうな表情で迎えていた。

「じゃあ、さっきの子は・・・」

また嬉しそうに一人で喋り始めた。  
この保健医は・・・いつもそうだ。

「わかった！告白でもされた？」  
「ゲホッ。」

思わず咳き込んでしまった。  
ほんとなんだこの保健医は。

「あつたりー！！そーかそーか。」  
「いーねー、放課後の誰もいない廊下に呼び出し。あー懐かしい。」

そう言っただけで一人で勝手に自分の青春時代の思い出話を始めた。  
これを聞かされる為に俺はここに来たのかと思うとなんだか情け  
なくなつたが。

「まー、あんただって告白されるの初めてじゃないでしょ？そのポ  
ーカーフェイスを崩せる女の子も珍しいだろうねー。」

ポーカーフェイス。

無表情。

無反応。

何考えてるのかわからない。  
とか言われたこともあったか。

昔は表情一つ変えなかったのに。  
さっき咲良にそう言われたことを思い出した。

あれが告白だったのかはわからないが・・・  
告白というものを受けるのは確かに咲良が初めてじゃなかった。

「で？穂高の末っ子は今どうなの？」

「俺、べつに告る気ありませんから。」

「おや。おやおや、あらあら。」

即答で返したことが意外だったのか。

自分の意見を言ったのが意外だったのか。

保健医は自ら仕掛けるゲームの運びが意外な方向へ進んだことに驚いたような、

それを楽しんでいるかのような表情を見せた。

俺は俺なりに・・・

この保健医という調子が狂うし。

適当にとか、考えていると余計に面倒くさいことになる  
とここ数回のかかわりでわかったことだし。

「中学時代なんてね、クラス替え毎に毎年好きな子が変わったって、  
同じ委員会になったとか、そんなんでもいいんだから。」

急に声のトーンを抑えて喋り始めた。

さっきまでのハイテンションとはまるで違って。

「恋なんて、実っても実らなくても、告白してもしなくても、人を  
好きになるっていう過程が大事なんだから。適当でいいのよ。」

そついうと、仕事机に目を向け  
椅子に腰をかけた。

これ、帰っていいわよの合図。

黙って保健室を後にした。

その夜、自室でスケッチブックを開いた。

進路が決まって・・・

受験科目の見直しをして・・・

美術の先生からの課題をこなして・・・

スケッチブックをパラパラめくった。

デッサン力をつける練習。

ここ数週間は人物画ばかりを描いていた。

女性は柔らかいタッチで

優しさが溢れるように。

男性はシャープに

筋肉を表現して力強く。

技法と

想像力の

練習。

模写なら得意だった。

風景でもそこにある物も人物もそう変わらないと思っていた。

やがて訪れる白紙のページ。

めくる手を止めた。

白い紙が好きだった。  
何にも書いていない白い紙。

そこに描くのが好きだった。  
自分だけの世界を。

“バサバサッ！！”

思わず手が滑った。  
机の上に積んであった資料本が音を立てて崩れた。

白昼夢か？！  
まさか・・・

今一瞬、白い紙の上に  
あいつの顔が浮かんだ。  
浮かんだんだ・・・

おいおい。  
勘弁してくれよ。

絵を描いている時は  
絵を描いている時だけは  
誰にも邪魔されないのに  
誰にも邪魔されたくないのに・・・

なぜあいつの顔が浮かんだのか。  
だいたいわかるけど。  
だいたい予想はつくけど。

あれが告白だったのかはわからないが  
あいつの好きな奴は俺だった。

気になるという気持ち

好きという感情も

好きになるという想いも

あいつが教えてくれたもの

あの夏からずっと、あいつはそれを伝え続けてくれた。  
秋になって俺の態度が冷たくなっても

でも・・・

ふと思うんだ。

あいつは変わらず好きでいてくれたのだろうか。

今日咲良と会って。

一年の時の想いに今頃気づいた。

あいつとかかわっていなければ、

あいつを好きにならなければ、

この先もずっと気がつかなかったかもしれない。

咲良があの時俺を好きだったとしても、

咲良は泉くんとつき合っただじゃないが。

それが事実。

俺が好きだというあいつも

他の奴とつき合ったりするのだろうか

今、告白されたら・・・

誰かに告白されたら・・・

誰かが告白したら。

あいつはつき合うのだろうか。

祐也に・・・

芳沢に・・・

キタに・・・

ヒロアキに・・・

そしたらあいつはどうするのだろうか。

翌日。

校外学習の日。

面倒くさいが二学期もあと四日で終わるのだから。

それに今日は授業も無いし。

適当に校外学習の時間を過ごして

午前中で帰れるラッキーな日。

のはずなのだが。

「おはよう、あきちゃん。」

朝、下駄箱で会った。

今日の校外学習が椎名萌と同じ班だったことを思い出した。

「晴れて良かったねー。歩いて五分の所だしねー。」

外靴から上履きに履き替えながら  
いつものように元気に喋っていた。

「お早う。」

と、すぐ後からもう一つの声。  
芳沢だった。

「おはよう。」

靴を替え終えて  
普通に挨拶を返す椎名萌。

ふつう・・・か？

「今日も寒いね。」

「ねー。風が吹いていないだけいいかも。」  
「そうだね。」

おいおい。

なんだよこの時間差。

明らかに、後ろを歩いてましたっていう差だろう。  
同じ通学経路なのに。

何で一緒に来なかったんだ？

なんかあったのか・・・？

「校外学習、感想文書かされるって知ってた？」

「えー、知らなかったー。」

「だよ。前半組みの奴に聞いたんだ。」

「ただ行けばいいのかと思ってたのにー。」



三人で教室まで歩くことになった。

すぐ横に椎名萌。

その隣に芳沢。

会話上は普通に見えるが・・・

二人の距離感が微妙に見えた。

「あきちゃんは感想文書くって知ってた？」

「いや。」

「きつと知らない人の方が多いよねー。」

本当は朝一で美術室へ行こうとしていたのだが。

芳沢とこいつを見ていたらほっとけなかった。

というよりは。

芳沢と椎名萌を二人にさせたくなかったのかもしれないな。

四組の前に差し掛かったところで、

「じゃあまた後でね。」

そう言っつて芳沢は五組へと向かった。

「おはよー。」

「めぐちゃん、おはよん。」

相変わらず椎名萌は朝のおしゃべりに  
自分の教室でもない四組に寄るのが日課。

「ちなつちゃん、校外学習の感想文あるって本当？」

「あったわね。」

「げ！北川、それマジで？！」

待っていたのは北川千夏と河野ヒロアキ。

クラスが離れても仲の良いうるさい三人組。

「どれくらい？」

「四百字詰三枚だったかな。」

「千二百字！！そんなに書けるかよー。」

「あら、ヒロアキ計算できてるじゃないー。」

「そこかよっ！」

「あははー。」

椎名萌が笑っている。

いつもの朝の風景。

三年になって、こいつらが朝四組に集まって。

他愛も無いバカ話をしている。

会話が丸聞こえなのを知ってか知らずか・・・

聞かれてもいい話か。

うるさい三人組の朝のこの時間につきあうのも最近の日課になっていた。

そして、三人組でいる時のあいつの笑顔を見るのも悪くなかった。

HRで今日の校外学習の説明を受けると、各自でそれぞれの訪問先へ向かった。

行きは引率の先生を先頭に

近い訪問先から回りながら、生徒達は次々に送り出された。

訪問先の保育園に着いた。

保育士から今日の説明を受ける。

気がついたら、横に椎名萌がいた。

何の偶然かは知らないが、ランダム編成の班に

こうして椎名萌と一緒にになるとは思ってもみなかったが。

保育士より、ニクラスある為二人ずつに分かれて実習を行って欲しいとの説明がある。

横にいた椎名萌と一緒にになった。

今日は四人で来ているが、六組からの二人とは特別親しいわけはなかった。

それは椎名萌も一緒だったのだろうか。

人見知りだなんて無縁そうな、無駄に明るいうるさい女も、さすがに六組の奴とは喋っていなかった。

そういえば。

一年の時から借り物が多く、無駄に元気でうるさい女だったが、その周りにはいつも誰かがいた。

北川千夏に河野ヒロアキ、

二宮、斉藤恵子、関くんにタケ。

そのおなじみのメンバーと一緒にいないというのも不思議な感じがするな。

こいつはこいつなんだけど。

なんつーか。

今は俺といるんだなーっていうか。

「ねえねえ、お絵かきしよ。」

「こっちきてレゴやろー！レゴー！」

「ねーおにいちちゃん絵本読んでー。」

「でけーにいちちゃんだなー。ぐるぐる遊びしてー。」

いつの間にか、園児達に囲まれていた。

おいおい。

面倒くさいぞ。

「だめだめ。今からまみとお絵かきするんだもん。」

「レゴーでお城作りしよーぜ。」

「本読んでもらうのー。」

「ぐるぐる遊びー。」

おいおい。

だから俺はそんな真剣に遊ぶつもりは無いから。

「お絵かきー！」

「レゴー！」

「絵本ー！」

「ぐるぐる遊びー！やりたいー！」

おいおい。

そんなに引つ張っても俺の体は一つしかないんで。

そもそも、ぐるぐる遊びって何だ？

「ほらほら、みんなで色々な事言ったらおにいさん困っちゃうでしょ。みんなで相談して何で遊ぶか決めてもらん。」

「はい。」

「じゃんけんで決めよう。」

「そうなんだよ。」

「話し合って決めるんだよ。」

助かった。

保育士の一言で、体にくっついていた園児達が離れた。  
さすが保育士。

子供の扱いに慣れている。

ふーっと大きく息を吐いた。  
ため息というやつだろう。

それを椎名萌が笑って見ていた。

「うるさい。どうにかしろあれ。」

「あれ、もしかしてあきちゃん子供苦手？」

「嫌い。」

隣に立つと目が合った。

まだ笑っている椎名萌。

「なんで笑う？」

「だって。あきちゃんだって小さい頃はああやってはしゃいでいた  
と思うよ。」

「俺は静かな子だった。」

「あはは。自分で言うかな。」

隣で笑っている。

こいつの笑顔。

いつもと同じ。

学校でも訪問先でも、こいつはこいつ。

知らないんだもんな。

俺がどんな子供だったか。

俺に母親がいない事も

俺が兄達に嫌われていたことも

こいつは・・・

知らない。

知らなくていい。

俺の隣で笑っていてくれれば

俺の隣にいてくれれば

それでいい。

「じゃあぐるぐる遊びに決まりー!」

「おにいちゃん、ぐるぐるやってー。」

「やってー。」

「ぐるぐるー!」

話し合いとやらは終わったようで

一番意味不明だったぐるぐる遊びとやらに決まっていた

おいおい。

だからぐるぐる遊びって何だよ。

「きゃー! たのしー。」

「わーい!」

「目ーまわるー。」

どうやら。

ぐるぐる遊びとは、園児を抱き上げて回転する遊びだった。

つまり、目が回るのは俺の方。

「ボクもやってー。」

「あたしもー。」

「次ボクの番だよ。」

「順番ね。」

おいおい。

あとどれだけ回させるつもりだよ。

教室の中央で園児を持ち上げて回しながら・・・  
自分も回転していた。

教室中を見渡せて

あいつを見てみると

数人の園児とピアノを囲んで遊んでいた。

そういえばあいつ、ピアノ弾けたんだったか。

合唱コンクールで伴奏してたか。

毎年クラスの女子の中で数人ピアノが弾ける子がいた。  
音楽の授業で、合唱コンクールで、伴奏者に選ばれていた。  
きつと子供の頃から習っていたのだろう。

子供の頃の習い事。

勝兄はスイミングスクール。

巨兄は学習塾に書道と英会話教室だったか。

俺は習い事はしなかった。

特に興味が無かった。

行く必要が無かった。

絵を描いていたから。

中学に入る前の椎名萌。

今まで考えたことなかったが。

以前タケの家で蓮田第二小の卒業アルバムを見たことがあった。

小六の椎名萌の顔。

小五の時の転入生だと言った。

椎名萌がどんな子供だったのか。

ピアノを習っていたのか。

そして・・・

小四の時の絵のコンクールには・・・

「ねーおにいちゃんは好きな人いるの？」

「いるのー？」

「ねー、いるのー？」

ぐるぐる遊びには想像以上の体力を使ったので  
休むことになった。

「だあれー？」

「おしえてー。」

おいおい。

休憩時間くらい静かに休ませてくれよ。

「わかった！あのおねえちゃんだ！」

おいおい。

どのおねえちゃんだよ。

「えー？ほんと？」

「あのおねえちゃん？」



園児達が指差した方を見ると・・・

教室の隅っこで椎名萌が絵本を読み聞かせているところだった。

「ほんと？」

「おにいちゃん、おねえちゃんのことが好きなの？」

「すきなのおー？」

おいおい。

マセたガキだな。

面倒くさい。

「じゃあ、まみがおねえちゃんに言ってきてあげるー。」

「ボクも言うー！」

「おねえちゃん、このおにいちゃんね・・・」

おいおい。

どうしてこう面倒くさいんだ。

「はい、ストップ。」

小さい子供の足を追いかける位大したことではない。

教室の端から端まで走っても

たかが子供の足。

歩幅が違う。

簡単に追いついて止めることができた。

「えー？言わないの？」

「どうして？」

両脇に園児二人を抱えて戻った。

簡単に片手で抱えられた。  
子供って小さい。軽い。

「どおしてー？」

「ねえねえ、何でー？」

でたでた。

やたらと質問したがる子供。

やたらと訳を知りたがる時期。

俺は小さい頃から自分の家が他の子の家とは違うことがわかって  
いた。

ばあちゃんに育てられていることも知っていた。

子供ながらに色々と悟っていた分、大人しかっただろう。

ここにいる子供達のように、思ったことを素直に口にして

無邪気にはしゃいで、動き回って・・・

そういう子供ではなかったただけのこと。

「一番大事なことは、一番大事な人にしか言わない。」

「一番？」

「ああ。」

「一番？」

連れ戻した園児達にしゃがんで話しかけた。  
同じ目線で。

「一番だつてー。」

「一番。」

子供の好きそうな言葉。

場面の切り替えに使うのが有効的だろう。

子供の世界だけでなく、俺達の世界でもそうだ。

場面の切り替え、雰囲気の切り替えが上手い二宮を見てきたからな。

これくらいは俺にもできる。

「おまえらにも一番あるだろ。」

「一番。」

「あるー！」

「まみの一番ね、ママー。」

「ボクもー。」

だろうな。

「おにいちゃんぐるぐるの続きやってー。」

「次、あたしからだよー。」

「その次ボクー。」

「順番ー。」

おいおい。

まだやるのか？

そろそろ腕筋、攣りそうなんだけど。

帰り道。

「楽しかったね。」

「そうか？」

「可愛かった。」

「どこが？あんなチヨロチヨロしてうるさいのか？」

「うん。」

そう言って横で笑う椎名萌。  
俺の隣を歩いている。

「あきちゃんだって人気者だったじゃない。」

「べつに。」

「ぐるぐる遊びだっけ？長蛇の列ー。」

「腕痛いし。」

「あははー。」

保育園から学校までの帰り道。  
五分とかからない距離。  
隣には椎名萌。

「でも子供苦手って言っていた割には懐かれてたねー。」

「苦手じゃなくて嫌い。」

「あははー、またそんなこと言ってー。」

さっきまで同じ保育園にいた。  
こいつが俺の横にいた時間。  
クラスが同じになったことはないから、  
一緒に授業を受けているという感覚をもったことがなかった。  
当たり前だけどこいつとは学校では会っけど、  
互いの教室で会ってはいはいるけど、  
同じ教室にはいなくて。  
同じ授業時間は過ごしていなくて。

でも、毎朝続く仲良し三人組うるさいお喋りからはじまって、  
移動教室の途中、廊下で遭遇したり、  
ふらっと昼休みに顔を出したり、

放課後にも会ったりする。  
そうして過ごしてきた時間が当たり前で。  
でも今は・・・

「なんか自分の子供の頃の記憶ってあんまり無いのだけど。私もあーやって元気だったのかなーって。」

「うるさかっただろうな。」

「あ、ひっどーい。」

「本当の事だろ。」

「そんなことないもん。」

こうして一緒にいる。

会話して。

ちよつと怒らせてみたり。

笑わせてみたり。

「おまえの園児姿って相当うるさそう。言うこと聞かなそうだし。」  
「えー、私ってそんなイメージなの？」

学校までの道。

一緒に歩く。

ただそれだけのことなのに。

ああ。

こいつと休日に来てデートしたいとかキタが言ってたか。

こんな感じなのか。

これをするために告白するってどうなんだろう。

これをしたのならべつに告白しなくても、

つきあわなくてもできるんじゃないか。

そもそも付き合ってたんだよ。

告白して、付き合ってくださいって定番。

告白しなくても好きな想いはあるし、  
好きだって想い合ってる奴らだっているだろう。  
両想いだからって必ずしも付き合わなくても・・・

前から自転車が来ていた。

そっぽを向いているこいつは気づいていないのか。  
避けようとしていないので

「あぶねーぞ。」

そう言って、腕を引き寄せた。

歩道の隅に避けて自転車をやり過ぐす。

「あ、ありがと。」

掴んだ腕を・・・

離したくなかった。

離してはいけない気がしたんだ。

あの夏の日に

この手で離れた

こいつのことを・・・

「あきちゃん？」

「手、冷たいな。」

「あ、手袋してこなかった。」

そのまま歩いた。

手の感覚はひんやりしていた。

「ピアノ。」

「え？」

「習ってたのか？」

「うん、小六の頃までね。」

小さい手。

あの夏の日につないだ手。

外で手をつなぐなら

告白しなくても

付き合わなくてもできるだろう

つなぎたいときにつなげばいい。  
ただそれだけのこと。

校門が見えてきた

この手を離さなければいけない。  
わかつているが  
離したくなかった

離さないで済む方法なんて・・・  
あった。

告白？

いやいや、俺相当混乱してるし。

今日、園児達に言われた言葉。

「おねえちゃんに言ってきてあげる」

誰かから、俺の気持ちを言われてしまったなんて  
考えたこと無かった。

でも・・・

だから思った。

だから気づいた。

俺がこいつを好きなこと、

知っている誰かが言うかもしれない  
学校に居る誰かが言うかもしれない

今日かもしれない

明日かもしれない

明後日かもしれない

園児達に言われて気づいたこと。

誰かからこいつに言われてしまうこと。

それなら・・・

いつその事・・・

自分の口から・・・

伝える方が・・・

伝わる方が・・・

「クシユン！」

「風が出てきたね。早く教室戻ろつ。マフラーも置いてきちゃった  
し・・・」

そう言っ

て俺の手から

離れていくのが

やるせなかった

なんだこの気持ち。



まだ捕まえていたい  
まだこいつを離したくない  
今度こそ・・・  
離したくない

「やっぱおまえのこと好きだ。」

後姿が

足が

ピタッと止まった。

俺の思考も止まった。

気持ちと感情の整理がつかないまま・・・  
頭で考えるより先に勝手に行動した結果。

すぐに後悔する

その表情

俺が見たかったのとは違う  
俺が見たかったのと違った

その顔に

マフラーを巻いてやった。

その顔を

隠してやりたかった。

なんつー顔、

させてんだよ、俺。

その表情。

俺がさせたのか。

ばーか。

なかったことにしてやるよ

俺の身勝手だよな

おまえを困らせて。

悪かった。

オレは大丈夫だから

そんな顔するな。

今日は午前で終わりだった。

校外学習だけで。

終わりのはずだったのに・・・

美術室に一人残っていた。

受験課題の指導を受ける為に。

三年の授業は午前で終わりだが、  
一、二年生の授業は続いている。

校舎の一番隅っこにある美術室。  
締め切った教室。

一人の教室は嫌いではなかった。  
静けさが、頭の中を軽くしてくれたから。

「穂高君、遅くなってごめんなさいね。」

扉が開き、美術教師が入ってきた。

「一人で寒くない？ストーブつけようか？」

「いえ。平気です。」

「受験生なんだから体調には気をつけないとね。二学期もあと三日だし。」

あと三日。

そう。

今日を入れてあと四日だった。

四日後には冬休みに入る。

それまでに・・・

「うん、よく仕上げてきたわね。人物画の方も良くなってきたわ。」

スケッチブックをめくりながら美術教師は評価を続けた。

「特に女性像のタッチが柔らかくなったわね。捉え方も変わってきてるし。うん、うん。調子上がってきたわね。」

「そうですか。」

「何か変化でもあった？」

「え？」

美術教師らしくない質問に驚いた。

美大の付属高校の受験が決まってから、選択授業でもお世話になっていたこの美術教師が受験指導を引き受けてくれることになり、急な進路変更で短期間だったこともあり、割と厳しく指導されてきたのだが。

「あ、別にね、生徒のプライベートに立ち入るつもりはないのよ。気を悪くしたらごめんなさいね。」

「いえ。」

美術教師も慌てて繕っていた。

自分でも意外な質問をしてしまったと思ったのだろうか。

「でもね、美術感覚って、生まれ持った才能もあるのだけど、それ以上に美術感覚を磨くことも大事なのよ。普段の生活から、色々なことに触れて、見て、感じて。それは物や風景だけじゃなくて、人とかかわりだったりもするのね。だから、これから色々な人とかかわって、穂高君の美術感覚がどんどん変化していくのも楽しみね。」

人とかかわり・・・か。

一番俺が面倒くさいと思ってきたことが

一番大事なことだったなんて。

なんだか皮肉なもんだな。

人とかかわりが面倒くさくて

人とかかわりを避けてきた

そんな俺の中に・・・

あいつはいつの間にか入ってきていて

面倒くさかったけど

避けてもみたけど

それでもあいつは・・・

懲りずに俺のそばにいた。

気がつけば・・・

俺が目で追う大事な存在になっていた。

なのに・・・

それなのに・・・

あいつを困らせた。

見ていようと

見守っていようと

決めていたのに・・・

ほっとけなくて

触れなくて

引き止めていたくて

大事にしてやりたいと思う反面、

離したくないと自分勝手にあいつを巻き込んだ。

あいつの気持ちも考えずに・・・

自分の想いを優先させた結果だ。

どうしてあと四日、

我慢できなかったのか。

我慢しなかったのか。

伝えてしまった今となつては

俺自身はすっかりしている。

でもあいつは・・・？

迷惑だっただろうか。

困らせてしまっただろうか。  
泣かせてしまっただろうか。

今頃・・・

泣いているだろうか。

翌朝。

家の玄関を出る際、後ろからはあちゃんの足跡が聞こえた。

「あ、晁、待ちんしゃい。」

「なに？」

「明後日の終業式が終わったら父さん迎えに来ると。一緒に母さんの実家に行きんしゃい。」

「うん。」

「学校気をつけて行つといで。」

「いつてきます。」

二学期もあと三日。

今日と明日と終業式で終わり。

今日、あいつはどんな顔で学校に来るだろうか。

気になって仕方がなかった。

あいつに気持ちを伝えてみて知った感情もある。  
自分勝手だと思いが。

気になるから好きなんだし

好きなのだから気になる

仕方ないじゃないか。

俺だつて自分がこんなにも椎名萌のことが好きだなんて知らなかったのだから。

早めに登校してみたが、

さすがに四組の教室には来ない・・・か。

いつもの三人組の朝のお喋り時間。

今日はヒロアキしか来ていなかった。

二学期最後の期末テストも終わり、

今日と明日の授業が終われば終業式。

そんな時期に授業に集中する方が難しかった。

横に視線を向けると・・・

授業とは関係のない教科の参考書を開いている奴、  
受験対策の文字の書かれた本で勉強している奴。

それでも授業は進んでいった。

時間表通りに。

二時間目が終わり、三時間目は移動教室だった。

いつもの時間割。

いつもの移動教室。

いつもの移動経路。

すれ違う廊下で・・・

今日初めて椎名萌と会った。

というか、避けられた。

おいおい。

明らかな態度。

二宮の後ろに隠れるあたり、絶対わかってやってるな。

そうきたか。

あいつのことだから・・・

また変なこと考えてるんだろうな。

また変なことで悩んでいるのだろうな。

俺に対してとった行動とか。

そんなの気にしてないのに。

俺が自分勝手に伝えただけなのに。

巻き込んで悪かったな。

だから大丈夫。

大丈夫だから、顔を見せてよ。

戻ってこいよ。

俺の隣に・・・

昼休みになった。

いつものように五組へ遊びに行くと

いつものように二宮の周りに人が集まっていた。

いつものように二宮のフンも健在。

タケの隣に行った。

椎名萌のところからも、俺は見えているだろう。

話しかけようか・・・



首をくすぐってやろうか・・・  
どうしようかと思っていたら

後ろからキタの声が聞こえた。

「あきちゃん見ーつけ。持ってきてくれた？」

「ああ。」

「わーい！じゃあ取り行く！」

キタと一緒に四組に戻るようになった。

振り返ってあいつの方を見たが、二宮の後ろで俯いたままだった。

「あきちゃんサンキュー。これでおいらの冬休みはゲーム三昧さっ  
！」

「攻略本も付けるか？」

「おお！なんて良い人！行き詰まった時には喉から手が出るほど欲しい攻略本！あきちゃんサンキュー！」

相変わらずテンションの高い奴。

キタはこの後五組に戻るのだろうか。

また椎名萌にちょっかいを出すのか・・・

「そういえば、あきちゃんと椎名ちゃんケンカでもした？」  
「は？」

思わず口に出してしまった。

「いや、今日なんか二人とも雰囲気違っただけだ。」  
「べつに。」

「でた！あきちゃんのべつに。」

おいおい。

今度はなんだよ。

「いやさ、こうしてソフトも貰った訳だし、あきちゃんって良い奴だと思っし、だから椎名ちゃんのこととはきっぱり諦めようと思っってたんだけどさ。」

「なんか二人がうまくいってないのかなーって思ったら、やっぱオレいける??みたいなー。」

おいおい。

だから面倒くさいって。

「なーんて、冗談だつて。そんな怖い顔しないで。何があつたか知らないけどさ、早く仲直りしちやいなよ。きつかけなんてなんでもいいんだからさ。椎名ちゃんは笑顔がかわいいんだから。」

俺の顔が怖いつて?

椎名萌の笑顔がかわいいいつて?

おいおい。

俺は何にも言ってないぞ。

「じゃーねー。」

そう言つと、キタは教室を左に出て行つた。

方向的には自分の教室へ戻つたのだろう。

五組へは戻らないか。

時計を見るともうすぐ昼休みが終わろうとしていた。

きっかけね・・・

確かに。

あいつのことだから色々悩んでいるのだろう。  
俺とどうやって話せばいいかとか。

昨日のことについてどうすればいいのかとか。

そんな風に悩ませているのは俺なのに。

困らせているのは俺の方なのに。

うまく言えたらいいのだろうけど。

大丈夫だつて安心させてやればいいのだけど。

どうやって言っているのかわからないし。

どうやって接したらいいのかわかっていない。

あいつのこと大事に思えば思うほど、実はどう接していいのかわからなかったりもする。

それでも・・・

どうにかしてやりたい。

今回は俺の身勝手さが引き起こしているのだから。

おまえは悪くないって言葉で伝えれば簡単だけど  
そんなこと言えるほど器用な人間じゃないんで。

せめて想いが伝わるように・・・

「あ、あきちゃん。」

五組へ向おうと廊下に出た時だった。

「あ、あのね。」

廊下に先に来ていたのは椎名萌だった。

「あの・・・」

俯いたまま・・・  
言葉に詰まっている。

「あの、昨日、昨日ね・・・」

その表情。

そんな顔するから・・・  
触れなくなる。

ああ。

この感情の答えは抱きしめたいだったのか。  
前にも何度か感じたことのある感情。

泣きそうで・・・  
でも一生懸命なこいつの顔を見ると。  
抱きしめてやりたくなる。

大丈夫だから。  
もう大丈夫だ。  
そう、言いながら。

「タケに理科の一分野貸してって言って。」  
「えっ？」  
「いいから、借りてきて。」  
「う、うん。」

きょんとした顔をしていた。  
それでいい。

すぐに戻ってきた椎名萌。  
それでいい。  
その表情。

「これタケの？」  
「そうだよ。」  
「おまえのかと思った。」  
「え？」

チャイムが鳴ったので、そこで会話は終わった。  
五組へ戻っていく後姿を見送って。

「あれ？晃君借り物？珍しー。」  
「いや。」  
「えっ？あれ？なんで二つ・・・？」

席に戻ると健太が机に二つ並んだ教科書を見比べながら不思議そうな顔をしていた。

同じ理科の教科書が二つ。

これでいい。  
これでいいんだ。

あいつが言おうとしていたこと  
聞いてやることもできたかもしれない。

でも・・・

言わなきゃいけないと必死になっている表情がわかったから。そんなに大変な思いをしなくていいんだと、そんなに抱え込まなくてもいいんだと、その緊張感から離してやりたかったんだ。

キタの言っていたきっかけとは違うかもしれない。それでも・・・

次また会う理由ができて、

今日もう一度会える理由ができて、そこでまた話せばいい。

今度こそ、

大丈夫だからって伝わるように。

五時間目が終わった。

掃除の時間になるのを待って、五組へ行った。

「これ、返しといて。」

箒を持った椎名萌の頭の上に乘せてやった。

「もうすぐタケヤン来るよ?」

「いや、返しといて。」

さつきよりも落ち着いた表情をしていた。きっかけになっただろうか。

「あ、あきちゃん、」

「ん？」

「あ、あのね、あの・・・」

片方に箸

片方に教科書

持つ手に力が入っているのがわかった。

「昨日ね、ごめんね、私・・・あの・・・ごめんなさい・・・」

「昨日？ああ、それで寝不足か？」

「え？」

「こじ。」

今日初めて目が合った。

顔をあげて。

向き合った。

目の下にクマ。

やっぱりな。

昨日のこと。

寝不足になるくらい考えたのか。

悪かったな。

俺の自分勝手な感情に巻き込んで・・・

今も俺、自分勝手な感情で

こいつに触れたと思って思った。

こいつを抱きしめてやりたいって思ってる。

でも・・・

感情を抑えて。

目の下のくまを指で触った。

ずっと目が合っていた。

今度は逃げずに・・・

正面からこいつと向き合いたい。  
そう思った。

好きだという想いを伝えたら  
何かが変わるのかと思っていた。

変わることを望んでいたのか。  
そうじゃないだろう。

俺達は。

例え好きだとしても

卒業したら別々の道を歩むのだから。

変わりたくて伝えたわけではない。

単に俺が我慢できなかっただけ。

感情を抑え切れなかっただけ。

人とのかわりを避けてきた俺が

初めて人とちゃんと向き合ったのだから

それくらいの反動は仕方のないことだ。

それくらい処理できなくてどうする。

俺が椎名萌のことが好きなだけ。

それでいいじゃないか。

何も変わらなくても。

自分の口から伝えただけ。

だから、返事を求めているわけではないんだ。  
答えが聞きたいわけではないんだ。



ただ、それだけのこと。

翌日。

終業式まであと一日。

今日で二学期の授業は最後となる。

一時間目から移動教室だった。

五組の前を通りかかった時、

中からタケに声をかけられた。

「おつす、晃。今日放課後な。」

「ああ。」

「おれ週番だから待たせるところだけど。」

「わかった。」

「おはよう、あきちゃん。」

タケの後ろから顔を出した。

目が合う。

ただ一言。

挨拶を交わすだけ。

それだけで十分だった。

いつもの椎名萌の顔に戻っていた。

大丈夫だ。

あと二日。

今日と明日。

泣かせないように  
笑っていられるように  
見守っていてやりたい。

給食が終わり  
昼休みになった。

タケのところへ行こうと教室を出ると、  
廊下で待っている奴と目が合った。

ヒロアキであって欲しかったが・・・  
どうやら俺を待っているようだった。

笠原祐也。

「昼休み、萌ちゃんのところ行く予定だった？」

「べつに。」

「そう。ならいいんだけど。邪魔しちゃったかなって。」

おいおい。

既に皮肉たつぷりな話しが伝わってくるんですけど。

歩きながら向かっている先は・・・  
人気の少ない体育館への渡り廊下。

「これ、萌ちゃんから貰った。」

校舎から離れた場所までやって来ると、  
振り返った祐也が手紙のような封筒を手にしていた。

「読む？」

「いや。」

「そう。」

おいおい。

椎名萌が祐也に宛てた手紙を何故に俺が読まねばならぬ。

「オレ、萌ちゃんに告白したんだけど。その返事がこれ。」

同じ小学校の出身だが、元々付き合いがないので笠原祐也の表情を読むのは難しかった。

目の前にいるが、何を考えているのかわからない分、落ち着かなかった。

「気にならない？」

「べつに。」

「へー。余裕だね。」

二学期も今日と明日で終わりという時期に・・・祐也はいつたい何をしたいのだろうか。

「でも、萌ちゃんとは付き合い合っていないんだってね。」

「ああ。」

「何で？」

おいおい。

それって、答えなきゃならねーのか？

正直に？

いやいや。

適当に？

「気持ちだけじゃどうしようもなんねーこともあるから。」

「ふーん。大人だねー。オレだったらどんな手使ってでも自分の方向にさせるけど。」

そう言うと、祐也は視線を外へ向けた。

その時、祐也の体格は割りとがちりしていることに気がついた。夏に部活を引退して・・・少しぼっちゃりしたのだろうか。

椎名萌と同じ部活動の部長か。

「オレ、萌ちゃんのことずっと好きだった。一年の時から。」

「でも、好きな子はいても、部活と勉強の両立が難しくてさ。必死で誰よりも上に立とうとしてきたら・・・」

変わらず体と視線を外に向けている。

おいおい。長い話しかよ。

「気がついたら萌ちゃんのこと好きな奴が周りにけっこういてさ。

オレ逃げたんだよね。ちょうどそんな時告白されて。逃げたんだ、自分から。その子と付き合うことで周りの奴らより優位に立って。」

「それでも萌ちゃんのことには気になって。ずっと見てた。そしたらさ、萌ちゃんの好きな奴がオレだったっていう噂を聞いて。それと、聡一と付き合ってるのかという噂もあったり。すんげー気になった。」

「でもさ、どんな噂があっても、萌ちゃんが誰を好きでも、片思いなら良かったんだ。誰とも付き合わなければ、それで良かったんだ。」

そこまで話して、

祐也が体をこっちへ向けた。

「でも今度は違った。晃君も萌ちゃんのこと好きだってわかったんだよね。」

俺は肯定も否定もしなかった。

おそらく、表情もうまくコントロールできていただろう。

「それなのに晃君は萌ちゃんを泣かせてばかりだった。許せなかった。オレだったら泣かせないのにつて思った。オレが萌ちゃんと付き合いたいつて思った。だから栗原とは別れた。」

「二人が付き合ってるつていうのは噂で、まだ付き合つてないつて知つた時、だったらオレにもチャンスがあると思つた。」

「萌ちゃんが傷ついている時に、萌ちゃんに告白して。奪つてやろうと思つた。いいタイミングで告れたと思つてたんだけど……。」

再び、祐也は視線を外した。

おそらく、今日は言いたい事を事前に考えてあつたのだろう。感情に任せて喋っているようには思えなかった。

「萌ちゃんはオレとは違つたよ。流されなかつた。逃げなかつた。それだけ想いが強かつたのだらうね。だから尚更晃君がムカついた。萌ちゃんにこんなにも想われているのに……さ。」

落ち着いた喋り方。

淡々と、でも大事なところは感情を込めて話す。

こつこつという話し方をすると、人に伝わりやすいのだらう。

テニス部の部長をして、

学級委員をして、

生徒会副会長を務め、人前で喋ることなんて慣れているのだらう。

人に何かを伝える。

あいつにも・・・

「晃君高校から県外出るんだって？」

「ああ。」

急に話の方向が変わった。

自分の話は終わったという意図だろうか。

「だったらオレは時間をかけようかと思って。今すぐ萌ちゃんと付き合うだけが結果じゃないし。高校生になってからでもいくらでもチャンスはあるしね。」

「晃君には冬休みに入る前に伝えときたかったただけだから。それだけ。」

おいおい。

それだけって・・・

けっこう喋ってたぞ。

もう昼休み終わるし。

俺の昼休みが・・・

祐也の長話で潰れたんですけど。

あいつ、手紙なんて書いていたのか。

喋るの苦手そうだしな。

無難な手段か？

じゃなくて。

やっぱり告白してたのか祐也。

返事は・・・

祐也の話からして断ったってことか。

なんだ。

情けなねーけど。

どっかで安心している俺がいる。  
だっせー。

「あれ、晃君タケが探しに来てたぜ。」  
「ああ。」

教室に戻ると予鈴ギリギリの時間だった。

「昼休みどっか行ってた？」  
「ちよつとな。」  
「椎名萌とデートですか？」  
「違うし。」

健太にまでからかわれるとは。  
いったい噂というのはどこからどうやって伝わっているのか。  
それがわからないようになっていいるから噂なのだろうけど。

椎名萌と松岡聡一、  
椎名萌と芳沢、  
椎名萌と俺・・・か。  
お騒がせな女。

放課後。

今日はタケと買い物に行く約束をしていた。

「あつ！椎名、何食ってる？！」

「ごめんなさい。生活委員の竹田くん。」

「おまえ悪いと思ってないだろ。」

「思ってます。思ってます。はい。」

鞆を持って五組へ向かうと

廊下まで聞こえてきたのはタケとお騒がせ女の会話。

「おいしい？」

「まあまあ。」

「はいこれで共犯。」

「椎名　！！！」

「あはは、怒らないでつて。ひゃあああー@@@」

タケに首をくすぐられ、悲鳴を上げていた。

「タケやん、首はやめてつってばっ！」

「早く日誌書けよ。戸締り見てくるから。」

「はいはい。書きます　ひゃあああー@@@」

今のは俺。

久しぶりにくすぐってみたが、

相変わらず首は弱点のようだった。

「ちょ、だ、誰？？」

「タケ、終わるか？」

「おう。もう少し。」

「あきちゃん？！」



タケが生活委員の当番で遅くなるというのは聞いていたが。  
椎名萌が今日日直だったとは知らなかった。

「あきちゃんも食べる?」

「おいっ、椎名!」

一人席に座って日誌を書いている椎名萌。  
どうやら菓子を食べていてタケに見つかったらしい。

「チョコか。甘いな。俺のガム食うか?」

「おいっ! 晃!」

戸締りチエックをしているタケ。

三人しか残っていない教室に響き渡る声。

「つたくおまえらは生活委員の俺の前で堂々と菓子を出すな!」

「あきちゃんありがとう。」

「そして食うな!」

「あきちゃんタケさん待ってるの?」

「ああ。」

「おまえら俺の話聞いてないだろ!」

「一緒に帰るの?」

「買い物。」

「おれは何も見えてないからな!」

なんだかんだいって、タケもこいつには甘い。

まだ時間がかかりそうなので、椎名萌の前の席に座ることにした。

「買い物って・・・参考書?」

「いや、ゲームの発売日。」

「えー、ゲーム？受験生なのにゲーム？」

「受験は関係ねーだろ。」

「余裕だね。」

同じクラスになったことがないから、

こいつの字を見る機会はあまりなかった。

学級日誌の半分位書き進められていた。

「椎名、早く日誌書けよ。晁とゲームが待ってる。」

「わかったよー。でも手が冷たくて思うように動かないのよ。」

「今日雪降ったもんね。」

タケが窓の外を見ながら言った。

椎名萌は持っていたシャーペンを置き、両手に息を吹きかけて暖めている。

目の前の、その手を握ってみた。

「冷たいな。」

そつえば、こいつの手は冷たいことが多い。

この間は手袋を忘れたとか言ってたか。

室内でもこんなに手が冷たいのか。

「隣行ってくるから戻って来るまでに書いとけよ。」

「は、はい。」

教室を出て行くタケ。

「おまえ手も小さいな。」

まだ冷たさの残る手を、自分の右手を広げ合せて比べてみた。

「第一関節より下だな。」

「そ、そう？」

小さい手が・・・

離れていった。

再びシャーペンを握り、日誌を書き始めた。

今日は二つに結んだ髪。

俯いた体勢からは、前髪が顔にかかっていて表情が見えない。

秋になって縛り始めた髪。

初めて手をつないだ夏は肩上で短かった髪。

三年になって髪をばつさり切った時、

失恋したとか噂になったか。

でも椎名萌が祐也を好きだったのって二年の話だろう。

べつに、何で髪を切ったのかなんて今更興味は無いのだけれど。

今日、祐也の話の中で思ったこと。

適当に聞いていたつもりだったが、

一つだけ覚えていることがあった。

自分の恋がうまくいかない時に

自分が一番自分を嫌いな時に

そんな自分を好きだという奴が現れたら

人は簡単にその人の手をとってしまうのだろうか

「な、なに？」

視線に気がついたのか  
椎名萌が顔を上げた。

「祐也と付き合うのか？」

「えっっ・・・な・・・」

言葉に詰まったその後に、  
出てきたのは涙だった。

やばいと思ったのは俺。  
やばいと思ったのは椎名萌。

「また泣いて・・・」

慌てて拭おうとしていたので  
その手を取った。  
落ち着かせてやりたかったから。

「だって・・・あきちゃんが変なこと言うから・・・」

まさか泣くとは思わなくて。  
ここで泣くとは思わなくて。  
また俺の言葉で傷つけたことを知る。

「違うのか？」

「違うよお。」

こいつの泣き顔はもう何度も見ていた。  
泣いた後の顔。

でも、目の前で泣いているのを見ると  
俺が泣かせたのだと思う反面、

俺の前で泣いていることに妙な安堵感を感じている自分がいる。

自分の言葉で傷つけておきながら

自分の目の前で泣いているのがたまらない

この感情はなんだ？

大事に思う反面、かわり方が曲がってしまう。

泣かせたのは俺なのに、

泣いているこいつを可愛いとさえ感じてしまう歪んだ心。

自分で泣かせておいて、

自分が慰めてやることで償っているつもりなのだろうか。

俺は・・・

「あきちゃん、何で祐也の事知っているの？」

ピタッと泣き止むということもあるのだろうか。

さっきまで、伝っていた涙を

頬を、

この手で触れていたのに・・・

もう、まっすぐに俺を見つめていた。

「知ってるの？」

「ああ。」

目を逸らさない。

逸らそうとしない。

「聞いたの？本人から？」

「ああ。」

まっすぐな目。

相槌を打つだけで一杯だった。

「そっか、知っていたのだね。」

そう言うと、再びシャーペンを持ち日誌を書き進める。  
今度は口を閉ざして。

こいつの涙はどこから来るのだろう。

この前もそうだった。

急に泣いたかと思えば、

次の展開では笑っている。

以前から表情がくるくる変わる忙しい奴だと思っていたけれど。

感情が不安定というか。

人を簡単に信じやすいというか。

無駄に元気で無駄に笑って無駄に喋って・・・

でも無駄だと思っていたことも、それは全部こいつな訳で。

感情が不安定なのは豊かな表現が出来る長所でもあって。

人を簡単に信じれるのは向き合ってやることが出来る長所でもあって。  
つて。

そういつの全部含めて椎名萌の良いところなんだろうなって思う。

シャーペンを片付け始めた。

日誌を書き終えたのだろう。  
口を閉ざしている間・・・  
何を考えていたのだろうか。

「なんで泣いた？」

「え？」

「なんで泣いた？」

「えっと、あきちゃんから祐也の事言われたから。」

「辛いのか？」

「う、うん。」

短時間で、表情を立て直していた。

俺からの質問には恐る恐る答えている様子だったが。

「辛いから泣くのか？」

「す、好きな人から言われたらショックだよ。」

「ふーん。」

好きな人・・・か。

あれが告白だったのかはわからないが

気になるという気持ち

好きという感情も

人を好きになるという想いも

こいつが教えてくれたもの

あの夏からずっと、それを伝え続けてくれていた。

秋になって俺の態度が冷たくなっても

それでも・・・

変わらず好きでいてくれたのだろうか

椎名萌のことが好きだと認めてから気づいたこと。

あの時は好きだったかもしれないが

今は違うかもしれない

昨日までは好きだったかもしれないが

今日からは違うかもしれない

人を好きになることを認めた途端、

人とのかわかりが怖くなった

あ。

限界だ。

自分の言動と行動と感情が

コントロールできなくなる感覚。

前にもあったから。

今度はわかる。

今度は抑える。

抑えなければ。

今は・・・

「俺は何でおまえが泣いているのかもわからないし、俺といて何でおまえが笑っているのかもわからない。だから俺より祐也と付き合う方がいいだろ。」

最低だな。

言葉で傷つけるとわかっていたのに。

言わなきゃ良かったのに。

言わなくても良かったのに。



「タケ、俺を殴れ。」

「え、いいの？？じゃあ遠慮なくっ。」

「やっぱいい。」

「おいおい、晃ー。頭冷やせー。」

「わかってる。」

あの後、タケと合流して。

ゲームを買ってタケの家に行った。

今日発売のゲームをやる為に。

そのはずだったのに・・・

「あいつ、泣いてたか？」

「いや。俺が日誌貰いに行った時は普通だったぞ。」

「普通か・・・。」

あいつの普通がそもそも理解できん。

タケから見る普通と俺の普通感覚が同じとも言えないし。

「おいおい晃、どーしたよ？おまえがゲームの封も開けずにここに居ることが信じられんよ。」

「だよな。」

「そんな、マジになっちゃったのか？」

「は？」

「ゲームに手がつかないほど、椎名のこと。」

「んー・・・距離感が掴めねー。」

「めっ、珍しい！雪降るか？大丈夫か？」

「タケ・・・。」

今気づいたのだけど。

この状況を楽しんでいるのはタケ一人だった。

「悪い悪い。つい・・・な。」

そう言いながらも、十分楽しそうで嬉しそうな表情をされてますけど。

それでも何にも言い返せねー。情けねー。

「まあ、あれだ。椎名は割りところなつて喜んでるかもだな。」

「えっ？」

全く意外な言葉に驚いた。

タケよ、今度は何を言い出すのかと・・・

「晃にさ、それだけ喋らせたのって、かわりが深くなってるってことじゃん。他人に関心の無かった晃がだぜ。一人の女に、それだけのこと言っただからさ。」

「晃が何言つてもさ、言葉で傷つくってよりも、まずはそこまで喋ってくれた、自分に興味を持ってもらえたってことが伝わってんじやねーの。晃が椎名を見る目、変わってんの周りも気づいてるし。」

「そうか？」

「おうよ。いくら付き合ってなかるうが、おまえらってけっこう周リから見ると両想いですっつーオーラ出てんぞ。」

「べつに・・・」

「おまえらの場合さ、付き合うとか付き合わないとかそんな問題じゃないだろうし。いーんじゃん、明日で学校終わりなんだから。変にこじれたまま冬休み入らねーようにだけすれば。」

「んー・・・」

「さっ、考えても答えの出ない面倒くさい問題はやめて、面倒くさ

くない晃の好きなゲームしよーぜ。」

真面目に聞いてくれてるのかと思えば  
タケの気持ちはやはりゲームに向いていたようで。  
せっかく買ってきたばかりのゲームをやりたくて仕方のないオ  
ラが出てるし。

「こんな調子グダグダの晃、もう二度と無いかもしれないからな。  
今のうちにオレが勝っておきたいしー。」

おいおい。  
そこかよ。

確かに。

こんなグダグダの俺、もう二度とあつて欲しくはないのだけど。

昔から人とかかわりを避けてきた俺にとって  
面倒くさいの一言では片付けられない面倒くさい問題とぶち当た  
ると

対処法がわからず  
処理する引き出しも足りず  
ここまで落ちてしまうものかと。

あいつと向き合つと決めたのは俺。  
向き合つたら今度は離さないと決めたのも俺。

一人・・・  
たった一人と向き合つのに  
これだけの労力が必要だっただなんて。

どうする？俺。

面倒くさい。

あと一日・・・

面倒くさい。

明日は終業式・・・

すんげー面倒くさい。

でも・・・

あいつとのかかわりだけは面倒くさいの一言で片付けられないんだ。

適当に思っけていても。

適当が出来ない。

あいつがいつの間にか俺の中に踏み込んできていたように・・・

俺も今、あいつの中に踏み込んでいるから。

もう後には引けない。

もう少しであいつを捕まえられるところまできているのだから。

あの夏の日・・・

俺の手で離れたあいつを

今度は離さないと決めたのだから

向き合おうと決めたのだから

ただ、それだけのこと。

翌朝。

二学期終業式。

いつもの朝のお喋り三人組・・・  
はさすがに今朝は揃っていなかった。

終業式だもんな。

登校してすぐに体育館へ移動した。

長い校長先生の話を聞きながら・・・

隣のクラスの女子列から椎名萌の姿を探した。

身長順に並んでいる列。

小さいと思っていたが、真ん中位にいた。

女子の平均身長ってそんなもんだったのかと。

後姿・・・

終業式中に後ろを振り向くことはないだろう。

あいつ真面目だな。

そう思うと、ずっと見ていられることに気づく。

壇上の校長先生を見ているよりもよっぽどマシだろう。

その校長先生の長い話が終わり、今度は生活指導担当から冬休みの諸注意が始まった。

今日は一つに結んでいる髪。

耳の上あたりで結んでいる髪は、ちょうど肩にかかる。

頭が動く揺れる髪束。

こんな風に今まで後姿を見ていたことなんてなかった。

最も、中一の時は前から数える方が早い位背の低かった俺。

中二になって伸び始めたが。

中三の今、クラスの男子の中では後ろから二番目。

だから、前を向いているだけで三年のほとんどの生徒を見渡すこ

とができている。

終業式なんて。

全員が話を聞いているわけがない。

俯いたままの奴も、キョロキョロと周りを見渡している奴も、あくびをしている奴も

立ったまま器用に居眠りをしている奴だっている。

こっそり隣の奴と、前後の奴と、小声で話をしている奴らだっている。

話を聞いているだけの退屈な時間を

皆それぞれに工夫して過ごしているのだろう。

俺があいつを見ているように。

今までも

これから

誰かをこんなにも見ていたことは無いだろう。

ただ、それだけのこと。

「晃君、この後暇？」

「バレー部寄ってかない？」

終業式が終わり、教室に戻る廊下で

奥井と梶原に話しかけられた。

「今日は用事あるから。」

「そっかー。残念ー。」

「たまには後輩君達に顔見せてやってよ。」

「ああ。」

奥井と梶原の間に入り肩を組まれる。

最初はこの二人との身長差に驚いていたが、  
今では三人並んでもそう変わらなくなった。

「そっぴゃさー、晃君って椎名ちゃんと付き合ってるんだって？」

「きゃー、おっくんたら、本人の前で直球ー。」

おいおい。

二人とも顔近いつてば。

小声で話してくれただけいーけどさ。

「いやー、意外だったなー、椎名ちゃんとは。」

「晃君ってああいう子がタイプだったんだなー。」

おいおい。

だから俺まだ何も言っていないんですけど。

「で、冬休みはデートですかい？」

「その前にクリスマス？！いーねー！」

「いや、冬休みは親戚の家で過ごす。」

「そうなの？」

「早速離れ離れー？！」

おいおい。

廊下でオーバーリアクションだけはやめてくれよ。

「あ、椎名ちゃん！」

「噂をすればなんとかだね。」

「あれ、おっくんかじくん。」

おいおい。

偶然にしてもタイミング悪いし。

教室に戻るところだったのだから、椎名萌が通りかかった。

「はい、椎名ちゃん元気してた？」

「あはは、元気だよー。二人とも背高いから目立つね。」

「待ち合わせには便利でしょ。」

「あははー、目印?!」

「そうそう。でもねー、今日みたいな全校生徒並んでる時は、目立ちたくないのに先生から目つけられちゃうんだぜ!。」

「あ、そうだね、背高いと大変なこともあるんだね。」

「うんうん。椎名ちゃんの好きな奴は背高いの?」

「えっ!?!」

おいおい。

なんちゅー質問をするんだよ。

「えつと・・・」

そしておまえもそこで言葉に詰まるなよ。

奥井と梶原の思うつぼだろ。

ほら、二人して嬉しそうな顔してるし。

「えつとー・・・」

だから困った顔するなつて。

だいたい真面目に答えなくてもいいし。

適当に流せよ。

困って固まっている椎名萌に対し



嬉しそくに笑っている奥井と梶原。

ふと思い出した。

確か一学期の終わりにも・・・

終業式の後、こうして奥井と梶原と椎名萌と話したこと。

あれからもう半年か。

バレーの試合を見に来て

引退試合で勝てなくてあっけなく終わった夏だったのに  
なのに・・・

あいつと行った夏祭りで

あいつのことが気になって。

好きだと言われて

俺も気になると答えて

気になるという気持ちを知って

好きだという想いを知って

好きだということを認めた。

かわらないと決めた時も

結局向き合うことで解決した

絵と離れると決めた時も

結局向き合うことで解決した。

そう。

椎名萌を好きにならなければ

絵の道に進んでいなかったかもしれない

椎名萌に好きになってもらえていなかったら

今も絵と向き合えていなかったかもしれない

そう考えると不思議だ。

いつの間にか質問が変わっていた。

「椎名ちゃん志望校は決めた？」

「・・・丁校。」

「おおー!!」

「すっげー、進学校じゃん。」

「おっくんとかじくんは？」

「俺らはK校だよん。」

「え？おっくんかじくん高校も同じところ受けるの？」

「もち！俺らゴールデンペアだからねー。」

「仲良くて羨ましいなー。」

「椎名ちゃん達には負けますわー。」

「ええっ？!・・・えっと・・・。」

再び言葉に詰まる椎名萌。

おいおい。

バレバレだぞ、その態度。

「あら、おっくんたら椎名ちゃんいじめると怒られちゃうわね。」

「あら、かじくんの言う通りね。そろそろ邪魔者は退散しましょうね。」

「じゃーまたねー。」

最後まで笑顔で去っていった二人。  
廊下に残されたのは椎名萌と俺。

「志望校、決めたのか？」

「あ、うん。」

前にキタから聞いたことがあったが。

T校というのは本当だったのか。

奥井と梶原も驚いていたが、正直な反応だろう。

実際、椎名萌が成績上位者なのは俺も未だに信じがたいし。  
隣に目線を移す。

「あ、あきちゃん。」

「あのね・・・あの・・・」

また言葉に詰まっている。

表情も何かを堪えているような・・・

「えっと・・・その・・・」

またそんな顔させたのは俺か

この場を変えてやろうか

このまま話を聞いてやろうか・・・

どちらがいいかと考えていると、

「でさー、やつは古いじゃん？」

「だよなー！」

後ろから数名の男子生徒が大声で喋りながら歩いてくるのが見え  
た。

話に盛り上がっているのか、四人で廊下を並走している。

すれ違う他の生徒も自らが避けている。

話に夢中で直進し続けている男子生徒達が横を通り過ぎようとし

た時だった。

リアクションを大きくとった一人の男子が  
弾みで列から飛び出して椎名萌とぶつかりそうになった

「えっ？」

突然肩を引き寄せられた椎名萌。  
驚いた顔をしていた。

「あっ・・・」

大声で通り過ぎた男子がぶつかってきたのを  
避ける為だったことを悟ったようだ。

「あ、ありがとう。」

椎名萌がそう言って。

俺が肩から手を離そうとした時だった。

「いーねー、ラブラブでえ。」

次に通り過ぎた男子生徒の集団。

その中の誰が言ったのかはわからない。

こいつにも聞こえただろうか。

噂のこと、知っているのだろうか。

「俺とおまえが付き合ってるって噂らしいな。」

「えっ?! あ・・・えっと・・・」

再び言葉に詰まる椎名萌。

その表情から・・・

困らせたか。

「あ・・・あのね・・・」

噂といえば・・・

三年になって噂話で誤解されたこともあったわけ。

また変な噂立てられて・・・困ってるか？

俯いたままのその表情を変えたくて・・・

目の前の後頭部を叩いてやった。

「あきちゃんやめてよー。崩さないでってば。」

軽く髪に触ったつもりだったが、

どうやら髪をぐしゃぐしゃにされたと思われたらしい。

まあそれでこの場が和むのならいいのだけど。

「あのね、私・・・」

あれ。

まだ続けるのか。

また言葉に詰まりながら話し始めようとしている。

「わ、私・・・ね・・・」

よく見たら・・・

噂のこととか、さっきひやかされたこととかを気にして言葉に詰

まっているのではない様子。

なんだ？

何か別の・・・

言いたい事があつて言葉に詰まっている・・・のか？

聞き出してやった方がいいのか

この場を終わらせてたやった方がいいのか  
判断に迷っていると・・・

「あつきらくーん。」

聞き覚えの・・・

馴染みのある声が後ろから降ってきた。

「あつ！」

と、言ったのは椎名萌。

やって来たその人物に見覚えがあつた様子。

「あらあら、いつぞの・・・」

顔を上げた椎名萌を見て、

彼も思い出したようだ。

「えっと、この間はこちらがとうございました。」

「いーえ。どういたしましてー。えーっと・・・？」

「あ、椎名です。」

「椎名・・・何ちゃん？」

「萌です。」

「萌ちゃんねー。オツケー覚えた。」

スマイル全開の泉くん。

女子と話す時はいつもそうだが、椎名萌にも同じだった。

「で、泉くんは何か用？」

大階段を挟んで別校舎の一組の泉くんが  
わざわざ別方向の四組に来るとは用事があるのだろう。

「いずみくんっていの？」

名前を聞いていた椎名萌。

おいおい。

また余計なことを・・・

「そう！桐谷泉。泉って呼んでね、萌ちゃん。」

「あ、はい・・・。」

おいおい。

いきなり名前で呼び合うのかよ。

まあ・・・いいけど。

俺には関係の無いこと。

「めぐー、ちよつと来てー。」

五組から呼ばれた。

声の主は勿論斉藤恵子。

「あ、じゃあ・・・また。」

「うん、またねー、萌ちゃん。」

笑顔で手を振り見送る泉くん。

萌ちゃん、萌ちゃんと連呼する泉くん。

おいおい。

俺には関係無いだろう。

「ふーん、晃くんが好きになる女の子ね・・・」

おいおい。

何の用事で来たんだよ、一体・・・。

「ちょっと意外だった。晃くんって、もっとう・・・大人しそうな感じの子？好きそうだから。」

「俺も同感。」

「え？そうなの？」

「あいつの第一印象はうるさくて騒がしい馬鹿女だしな。」

「え？え？そこまで言っちゃう??」

「無駄に笑って、無駄に喋って、無駄に元気。」

そう言う晃の表情に笑みが浮かんでいるのを泉は見た。

椎名萌のことを話す時の雰囲気柔らかいことにも気づいた。

「まあでも、ただの馬鹿女じゃないっつか。馬鹿は馬鹿なりに気を配って、自分も傷ついて・・・。俺も泣かせてばっかだし。」

「晃くん、確かに変わった。」

「は？」

「うん、うん。変わった変わった。聞いた通り。」

「何それ？」

「この間、咲良が言ってたのー。」



咲良？

この間の事って・・・

「まだ付き合ってたの？」

「いんやー。お友達。」

「ふーん。」

「あ！泉くんだー。」

「泉くん元気ー？」

「おー！カナちゃんに清美ちゃん。元気元気ー。」

女子生徒に話しかけられ

再びスマイル全開の泉くん。

別校舎の廊下だというのに、相変わらず女子からの人気。

「じゃあまたねー。」

「冬休み遊ぼうねー。」

そういえば、泉くんがわざわざ別校舎まで訪ねて来た理由をまだ聞いていなかった。

「で、用事は？」

「うん。咲良が晃くんにフラれたーっていつから、慰め会しようと思っ  
て。晃くんも参加しない？」

おいおい。

何の慰め会だ。

誰の慰め会だ。

何故に俺がそこに行くのか。

言いたいことは山ほどあったが、冗談にしては変な話だろう。

「じ、冗談です。」

俺の表情を読んでか、  
場面が違うことに気づいてか、再びスマイルを全開させてみた泉くん。

「でも、誘ってるのは本当。今日、一年時のメンバーでクリスマス会やるからさ、久しぶりに晃くんも誘おうってことになって。」

「悪い。夜から用事あるんだ。」

「デートですか？」

「違う。」

「なーんだ、つまんないのー。」

またひやかしに入るのかと思ったら  
泉くんの表情が急に変わった。

「慰め会つてのも本当。」

「え？」

「咲良、晃くんにカノジョできたのショックだったって。」

おいおい。

なんだ、その話。

だって・・・咲良は・・・

「晃くんは女の子になんて興味無いから、ぼくと付き合った方が楽しいよーって言ったのー。で、結局フラレちゃったのはそのぼく。」  
「中学三年間なんてさ、毎年クラス替えだってあるし、委員会とかさ、新しい出会いなんていくらでもあるのに。結局好きになった人は忘れられないみたいよー。」

ずしんと重たいものを感じた。  
なんだこれ。

心に突き刺さるこの感情。

いつか祐也が言っていた。

どこかで保健医が言っていた。

キタも・・・

タケも・・・

そして咲良も・・・

椎名萌が教えてくれた

人の想い・・・か。

人の想いの重さだ。

今更気づくなんて。

今更気づいても・・・

俺にはどうすることもできない。

「だから、晃くんには後悔して欲しくないんだってさー。あ、ぼくも同じ考えね。」

今更気づいても・・・

どうすることもできないだろう。

「泉くんは？まだ咲良のこと・・・」

「ぼくはもう進んだー。咲良にフラれた時にね。次に進めたー。だから咲良も、もう次に進んでるよー。それでいいのさ。」

そう言つと、泉くんは穏やかな表情を見せながら帰って行った。

廊下を歩く先々で、女子生徒達に声をかけられながら。

なんか・・・

豪く疲れた。

終業式さえ終われば今日はもう終わったも同然だったのに。

鞆を取りに教室へ入って

自分の席に腰掛けるともう、立つのが面倒くさかった

しばらく机に顔を伏せていると

徐々に教室のざわめきが消えていくのを感じた。

帰宅時間のピークには

混雑している廊下も、下駄箱も、玄関口も

きつと今なら空いているだろう

誰にも話しかけられずに

誰とも話さずに

学校を後にしようと思っていたその時だった。

「あきちゃん。」

教室に響く一つの声。

一つだけということは、残っている生徒は他に誰もいないということ。

「あの、少し話してもいいかな。」

「ああ。」

廊下にはまだ数人の生徒の声が木霊している。

近くは無い、でもそう遠くもない距離にいるのだろう。

「わ、私ね、あきちゃんとはちゃんと話したいから、今……えつと……」

「あの、でも言葉にするとうまく伝わるか……ちゃんと話を……」

緊張しているのか、文章が支離滅裂になっている。

そんな目の前で困っているこいつを……

今の俺にどうにかしてやることはできるのだろうか。

「て、手紙とか、じゃなくて……あきちゃんとはちゃんと話したいと思ってて……」

「だから……その……手紙は辞めたの。うん。ち、ちゃんと言うことにしたの。つ、伝わるかわからないけど……」

言葉に詰まりながら話しているのを、ただ、見ていることしかできなかつたが、

見ているうちに、だんだんと、困っている表情ではないことに気がついた。

一生懸命に何かを伝えたがっている？

手紙？手紙って何のことか……

「わ、私ね、祐也とは付き合わない。あきちゃんのことを好きだから。い、今は受験があるからお互い頑張らないとね。お、終わったら……また皆で遊ぼうね。」

まるで吐き出すかのように台詞を並べたような……ぐちゃぐちゃな文章だったけれど。充分だった。

俺には充分伝わってきた。

「ばーか。」

そう言つて、椎名萌の頭をぐしゃつと撫でてやった。  
俺の手の下に見えた椎名萌の表情。  
笑っていた。

手紙のこと、  
ちゃんと話すこと、  
祐也のこと、

祐也に手紙を書いたということはこの間本人から見せられて知っていた。

そのことは椎名萌は知らないだろう。  
手紙なら、読み返して修正が可能だから  
今のように支離滅裂な文章になることもなく伝えることが出来る  
だろう。

でも、そうじゃなくて、そうしなかったのは、  
俺とはちゃんと話したいから  
会つて話したいから今。  
だから手紙にしなかった  
逃げなかった  
逃げたくなかった  
そんな気持ち伝わってきた

またこいつに助けられたな  
大事な想いを。

昨日、言葉で傷つけたあいつに  
今日、言葉で助けられた  
そんなこともあるのだと。

ちゃんと向き合うとどうなるのか  
ちゃんと向き合った先には何があるのか

見慣れたはずの廊下から見える景色。  
雪をかぶった山々達。

その雪景色が解けて・・・

緑色の山々に景色が変わる頃・・・

春にはもう別々の路を歩むというのに

今はまだ、解けるはずもないと信じてやまない。  
解けるはずのない安心感。

まだ知らない

それが守られた中での安心感だということに  
まだ気づけない

それが当たり前でなくなるということに

雪解けまでは・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4115m/>

---

あの青い空のように

2011年10月4日14時23分発行